佐賀県文化財調査報告書第78集

肥前国府跡 III

昭和50年度～昭和59年度
発掘調査報告書

1985年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第78集

肥 前 国 府 跡 III

昭和50年度～昭和59年度
発 掘 調 査 報 告 書

１９８５年３月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

序

現在の佐賀県と，壱岐・対馬を除く長崎県のほとんどは，古代において肥前国と呼ばれ，基肄・養父・三根・神埼・佐嘉・小城・松浦・杵島・藤津・彼杵・高来の11郡からなっていました。これらの地名は現在まで郡名などとして伝えられていますが，諸郡には郡家（郡衙）が，国には国庁（国衙）が設置され，それぞれを管轄しています。

さて，肥前国の政治・経済・文化の中枢は国庁をはじめ，周辺の都市である国府であったことはいうまでもありません。しかし，肥前国府跡は以前から，佐賀郡大和町の大字久池井一帯にあるといわれながら実態については今日まで明らかにされることなく埋もれたままの状態でした。

ところが近年，この地域に九州横断自動車道およびそのインターチェンジの建設が計画され，またその関連諸開発，市街化区域の膨張による大規模住宅団地建設などの種々の開発が行なわれるようになったため，緊急に国府・国庁跡を明らかにし，保存あるいは諸開発と調整することを目的として，県では昭和50年度以来10年間にわたって，発掘調査を実施してまいりました。

国府という古代都市の広大な範囲内では，調査はほんの一部にすぎませんでしたが，調査の結果，国庁跡を明らかにし，周辺においても種々の官衙的な建物群などを検出するなど多大な成果を挙げたものと確信しております。肥前国はじめ九州の諸国・島はもちろん大宰府の管下にあったのですが，今回明らかになった肥前国庁の構造には特に大宰府政庁の影響が強く認められるところです。

昭和55年度までの調査結果についてはすでに２冊の報告書としてまとめたところですが，今回の報告書は，10か年計画の一応のまとめとしての性格をもつものであり，周辺で実施された国府関係の調査概要をも含めて刊行することになりました。

県では，調査結果に基づいて早急に史跡指定への準備を進めると同時に，更に周辺の発掘調査を計画的に実施し，国府の全貌を明らかにしてゆく所存ですので，今後とも大方の御意見・御指導をお願いいたす次第です。

なお，おわりになりましたが，調査にあたり適切な御指導をいただいた肥前国府跡発掘調査委員の諸先生はじめ文化庁，奈良国立文化財研究所，大和町などの関係各位，ならびに地権者の方々や酷寒・酷暑の下で発掘に従事いただいた作業員の方々には衷心から感謝を申し上げます。

昭和60年３月31日

佐賀県教育委員会
教育長　志　岐　常　文

例　　言

1．本書は佐賀県教育委員会が国庫補助事業として昭和56年度から昭和59年度にかけて実施した肥前国府跡の確認調査報告書（III）である。

2．昭和55年度以前に国庫補助事業として実施した肥前国府跡確認調査の概要は，すでに「肥前国府跡Ⅰ（第一～第三次発掘調査報告書）」，「肥前国府跡II（第四次～第六次発掘調査報告書）」としてそれぞれ昭和53年３月と昭和56年３月に刊行したが，本書は第７次～第10次調査の成果を記すのみでなく，10年間にわたる調査の一応の総括としての意図をもって作成した。

3．肥前国府跡周辺で実施され，また現在実施中の他の緊急発掘調査のうち，内容が特に肥前国府と関連深いと思われるものについては，その概要を本書に収録した。

4．調査によって検出された遺構・遺物のうち弥生時代を中心とする直接国府跡に関連しない資料の概要につについては別の機会にゆずることにして，本書では記述しなかった。

5．調査は肥前国府跡発掘調査委員会の指導により，佐賀県教育委員会が実施した。

6．本書の執筆分担は次のとおりである。

七田忠昭（Ⅰ，II，Ⅳ２(2)・(4)，Ⅴ１・２・４），樋渡敏暐（佐賀大学教育学部附属中学校教諭）（III），高瀬哲郎（Ⅳ１，Ⅵ１），田平徳栄（Ⅳ３・４），立石泰久（Ⅳ２(1)・(3)），船底聡一（Ⅳ５），本田秀樹（Ⅴ３），高島忠平（Ⅵ２）

なお，「Ⅳ．遺構」には既刊の報告書をそのまま引用した部分がある。

7．遺構の実測・写真撮影は調査員などがおこない，遺物の写真撮影は主として原口定がおこなった。

8．出土遺物の整理や調査記録類の整理は調査員の指導のもと，佐賀県文化財資料室でおこなった。担当したもの（昭和56年度～昭和59年度）は下記のとおりである。

遺物接合・復元……新井久美・高園ひろ子・高畠澄子・土井マサ子・古川万鶴代・宮崎礼子・村瀬邦子

遺物実測図・拓本作成……神田浩子・久米寿美子・野口百合子・武藤直子・平川朋子・山口成子

トレース……武藤直子・貞包洋子・青木瑞枝・増田庸子

写真現像・焼付……原口定・古賀栄子

9．本書の編集は，種浦加代子（文化課嘱託），堤圭子（同），原葉子（同）の協力により七田忠昭がおこなった。

凡　　例

1．遺構については一連番号を付し，その前にＳＡ（築地・柵列），ＳＢ（建物），ＳＤ（溝），ＳＥ（井戸），ＳＫ（土壙），ＳＸ（不明）などの分類記号を付した。

2．遺構の法量はｍ単位，遺物の法量はcm単位を原則として用いた。

3．遺構実測図中の北方位，本文中の北方位はすべて国土座標による。

4．遺物実測図は，遺構または地区別に分けて掲載した。遺物番号は挿図・図版とも共通である。なお，報告書ⅠおよびIIの遺物番号とは一致しない。

本 文 目 次

I　調査の経過……1
　1．調査の概要……1
　2．調査組織 ……9

II　位置と環境……13

III　肥前国府の研究について……21

IV　遺構……25
　1．政庁跡の遺構……25
　　(1)　庁域を示す遺構……26
　　(2)　南門跡……27
　　(3)　前殿跡……28
　　(4)　正殿跡……29
　　(5)　後殿跡……30
　　(6)　回廊跡……31
　　(7)　脇殿跡……31
　　(8)　その他の遺構……33
　2．政庁跡周辺の遺構……35
　　(1)　Q地区……35
　　(2)　D地区……37
　　(3)　R地区……39
　　(4)　C地区……43
　3．惣座遺跡……43
　4．久池井B遺跡……47
　5．東山田一本杉遺跡……51

V　遺物……57
　1．遺物の概要……57
　2．土器・陶磁器……64
　　(1)　政庁跡……64
　　(2)　久池井B遺跡……65
　　(3)　Q地区（政庁域外）……74
　　(4)　惣座遺跡とD地区……81
　　(5)　N地区……81
　　(6)　R地区……81
　　(7)　C地区……82
　3．瓦……85
　　(1)　軒丸瓦……85
　　(2)　軒平瓦……90
　　(3)　鬼瓦……93
　　(4)　丸瓦……94
　　(5)　平瓦……94
　　(6)　道具瓦……94
　4．その他の遺物……96
　　(1)　土製品……97
　　(2)　石製品……97
　　(3)　金属製品……98

VI　総括 ……100
　1．政庁跡について ……100
　2．肥前国府と肥前国の動き ……103

挿 図 目 次

Fig. 1　発掘調査地区区分図……2
Fig. 2　発掘区位置図……3
Fig. 3　肥前国府跡周辺地形分類図……13
Fig. 4　肥前国府跡周辺遺跡分布図……17
Fig. 5　肥前国古代地図……22
Fig. 6　政庁南東隅（ＱＣ61）平面図……26
Fig. 7　政庁北西隅（ＱＦ59）平面図……26
Fig. 8　南門跡（ＳＢ116）周辺平面図……28
Fig. 9　前殿跡（ＳＢ093）平面図……29
Fig.10　前殿跡（ＳＢ 093）雨落溝平面図……29
Fig.11　正殿跡（ＳＢ090）平面図……29
Fig.12　後殿跡（ＳＢ060）周辺平面図……30
Fig.13　西回廊跡（ＳＢ099掘立柱建物跡）平面図……32
Fig.14　西脇殿跡（ＳＢ095・125）平面図……33
Fig.15　ＳＢ104掘立柱建物跡平面図……34
Fig.16　ＱＡ地区11発掘区平面図……35
Fig.17　ＱＡ地区13発掘区平面図……35
Fig.18　ＱＢ地区12発掘区平面図……36
Fig.19　ＱＣ地区05発掘区平面図……36
Fig.20　ＤＢ地区07・09発掘区平面図……37
Fig.21　ＳＡ155築地跡土層断面図（北壁）……38
Fig.22　ＤＤ地区01発掘区平面図……39
Fig.23　ＲＡ地区37発掘区平面図……39
Fig.24　ＲＡ地区39発掘区平面図……40
Fig.25　ＲＢ地区25発掘区平面図……40
Fig.26　ＲＧ地区31発掘区平面図……41
Fig.27　ＲＧ地区33発掘区平面図……41
Fig.28　ＣＢ地区02発掘区平面図……43
Fig.29　ＣＢ地区03発掘区平面図……43
Fig.30　惣座遺跡遺構配置図……44
Fig.31　久池井Ｂ遺跡Ⅰ区遺構配置図……48
Fig.32　久池井Ｂ遺跡Ⅱ区遺構配置図……49

Fig.33　東山田一本杉遺跡遺構配置図……53
Fig.34　肥前国府跡出土須恵器・土師器（蓋・杯・高台付杯）形態分類図……59
Fig.35　土器・陶磁器実測図(1)……66
Fig.36　土器・陶磁器実測図(2)……67
Fig.37　土器・陶磁器実測図(3)……68
Fig.38　土器・陶磁器実測図(4)……69
Fig.39　土器・陶磁器実測図(5)……70
Fig.40　土器・陶磁器実測図(6)……71
Fig.41　土器・陶磁器実測図(7)……72
Fig.42　土器・陶磁器実測図(8)……73
Fig.43　土器・陶磁器実測図(9)……74
Fig.44　土器・陶磁器実測図(10)……75
Fig.45　土器・陶磁器実測図(11)……76
Fig.46　土器・陶磁器実測図(12)……77
Fig.47　土器・陶磁器実測図(13)……78
Fig.48　土器・陶磁器実測図(14)……79
Fig.49　土器・陶磁器実測図(15)……80
Fig.50　軒丸瓦実測図(1)……86
Fig.51　軒丸瓦実測図(2)……88
Fig.52　軒丸瓦実測図(3)……89
Fig.53　軒平瓦実測図(1)……91
Fig.54　軒平瓦(2)・鬼瓦実測図……92
Fig.55　丸瓦実測図……93
Fig.56　平瓦実測図……95
Fig.57　道具瓦実測図……96
Fig.58　土馬・土鏡実測図……97
Fig.59　鞴羽口・坩堝実測図……97
Fig.60　石銙実測図……97
Fig.61　石仏拓影……98
Fig.62　銅鏡実測図……98
Fig.63　肥前国政庁跡復元図……101
Fig.64　古代肥前国要図……103
Fig.65　諸国国府・多賀城・大宰府政庁跡平面図……105

表　目　次

Tab. 1　肥前国府跡周辺掘立柱建物跡一覧表 ……55
Tab. 2　肥前国府跡出土土器・陶磁器一覧表 ……108

巻末折り込み

1　肥前国政庁跡平面図（1／600）
2　肥前国府跡検出遺構配置図（1／1800）

図　版　目　次

PL.1　肥前国府跡空中写真
PL.2　政庁跡南東隅・北西隅
PL.3　政庁築地跡
PL.4　政庁築地跡
PL.5　政庁南門跡（SB116）
PL.6　政庁前殿跡（SB093）
PL.7　政庁正殿跡（SB090）・回廊跡（SB099）
PL.8　政庁後殿跡（SB060）・周辺
PL.9　政庁後殿跡（SB060）
PL.10　政庁西側脇殿（SB095・125）
PL.11　QF地区48・58・41・46発掘区
PL.12　QF地区51発掘区，QC地区04発掘区（瓦塚）
PL.13　QA地区11・13発掘区（SB075・076）
PL.14　QD地区01・03発掘区，QE地区63発掘区
PL.15　DB地区09発掘区（SB171・SA155他）
PL.16　DB地区03・07発掘区（SA139・SB138・SD141他）
PL.17　DB地区09・12発掘区（SA155・SE152）
PL.18　DD地区01発掘区（SB007他）
PL.19　RB地区25発掘区（SB006），RG地区31発掘区（SB001）
PL.20　RG地区33発掘区（SB004他）
PL.21　RG地区33発掘区（SB004・SD020・021他）
PL.22　RH地区44・45発掘区（SD158・161）
PL.23　CB地区02・03発掘区（SB168・SD166）
PL.24　RA地区37発掘区，IF地区07発掘区，O地区06～08発掘区
PL.25　惣座遺跡空中写真
PL.26　久池井B遺跡II区空中写真
PL.27　東山田一本杉遺跡空中写真
PL.28　QF地区06発掘区出土土器
PL.29　QF地区06・16・30・31・35・36発掘区出土土器
PL.30　QF地区41・59・60，QE地区57発掘区出土土器
PL.31　QE地区57発掘区出土土器
PL.32　QE地区57・49発掘区出土土器
PL.33　QE地区53・42・52，QC地区61発掘区出土土器
PL.34　QC地区61発掘区・久池井B遺跡出土土器
PL.35　久池井B遺跡出土土器
PL.36　久池井B遺跡出土土器
PL.37　久池井B遺跡出土土器
PL.38　久池井B遺跡出土土器
PL.39　久池井B遺跡出土土器
PL.40　久池井B遺跡出土土器
PL.41　QA地区10・13，QB地区12・15，DB地区07・09発掘区，惣座遺跡出土土器
PL.42　DD地区01，NC地区05・06，RG地区40・33，CB地区03発掘区出土土器
PL.43　軒丸瓦
PL.44　軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦
PL.45　平瓦・丸瓦・道具瓦
PL.46　土馬・鞴羽口，石鍔・石仏，銅鏡

Ⅰ 調 査 の 経 過

1．調査の概要

調査に至る経過

現在の佐賀・長崎両県の大部分を占める古代肥前国の政治・文化の中枢である国庁やその周辺地方都市である国府は，古くから佐賀県佐賀郡大和町大字久池井一帯に存在したというのが研究者の定説であった。それは背振山地南麓，嘉瀬川（川上川）が形成する扇状地であるこの一帯に，「印鑰社」「国分寺」「国分尼寺」などの寺院，「惣座」「国尺」「丁の坪」「佐熊」「納所」「宝満」「鍵尼」「館」などの地名，「高段土居」と呼ばれる土手や地割が残存し，また古瓦や古代の土器が広範囲に散布しているなどの理由によるものであった。

大和町の大字久池井，尼寺一帯は従来から佐賀市街地の近郊として宅地化が進んでいたが，九州横断自動車道並びにそのインターチェンジの建設が国府跡推定地周辺に計画されるに至り，各種の開発事業にも拍車がかかることが当然予想された。全貌が明らかにされないままの肥前国府跡にとっては重大な危機に直面したのであった。

そこで，佐賀県教育委員会では，九州横断自動車道をはじめとする各種の開発事業に先んじて，国庁ひいては国府域を確認し，今後の保存計画を進めるため，また開発事業の策定に資することも目的として昭和50年度から確認調査を実施する運びとなった。

それに先だち昭和49年６月には，大字久池井周辺の遺物散布状況を把握するために，佐賀大学考古研究会の協力を得て分布調査を実施した。その結果，土器は弥生時代から平安時代までのものが広範囲に分布しているが，古瓦については佐熊集落北方の通称「瓦塚」と呼ばれる地点一帯と，久池井集落の天神社を中心とする一帯に特に集中して分布していることが判明した。（Fig. 1）

昭和50年度から，県教育委員会は国庫補助を受け，10か年計画で肥前国府跡の確認調査を実施することになるが，調査は文化庁はじめ肥前国府跡発掘調査委員会や奈良国立文化財研究所の指導によるところが大きい。

第１次調査（昭和50年11月17日～昭和51年３月31日）

調査対象地域全体を地割などにより大地区割し，さらに小地区割し（Fig. 2）発掘調査に取り掛った。初年度は九州横断自動車道のインターチェンジが計画されている久池井の水田地帯を中心にして，主に国道263号線の東側（ＩＦ・ＮＣ・ＮＤ・ＮＥ・ＮＦ・Ｏ・ＲＣ・ＲＦ・Ｓ地区）にトレンチを設定し調査を実施した。この地域は米倉二郎がかつて推定した国庁域であった。東西方向に全長約400mのもの２本，南北方向に全長約200mのもの１本を基本トレンチと

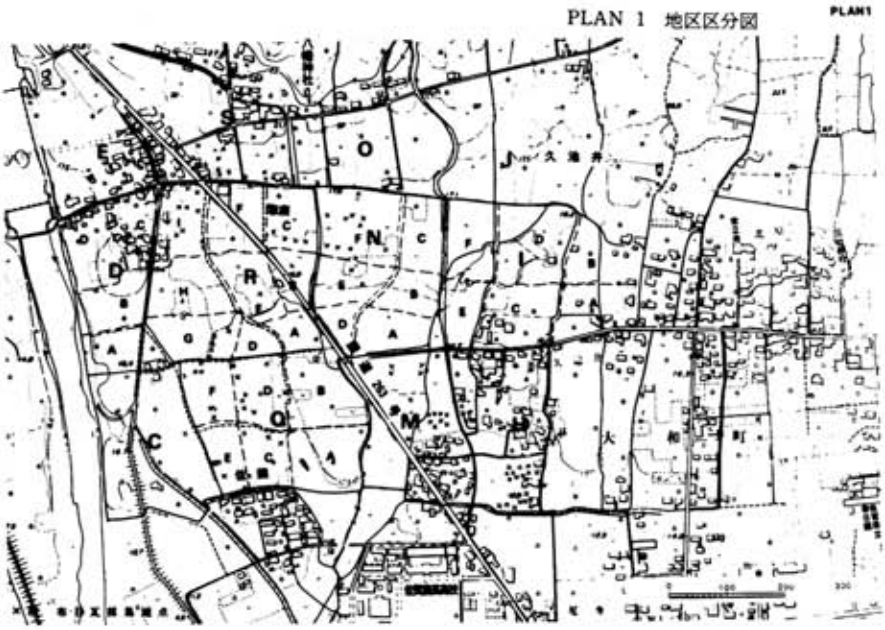


Fig. 1　発掘調査地区区分図

して設定し，それらの間隙を埋めるべく順次トレンチを設けて調査を進めた。トレンチの幅は３ｍを基準とした。

その結果，国道263号線東側の，甘南備神社（八幡社）南方の推定国庁域からは国庁関係の遺構は発見されず，一段高まった北側山際の水田中（Ｏ・Ｓ地区）から奈良時代の小掘立柱穴をもつ住居跡群が検出された。これらの住居跡群が国府とどういう関連を持つものか不詳である。また東部のＮＣ・ＩＦ地区の発掘区では数条の溝跡が検出され，ＲＣ地区10・16・17発掘区にかかって南北方向（Ｎ２°14′Ｅ）の両側を溝に囲まれた道路状遺構が検出された。

第２次調査（昭和51年４月１日～５月31日，昭和52年１月18日～３月31日）

第１次調査に引続いて第２次調査を実施した。調査は国道263号線西側の水田地と嘉瀬川左岸（ＱＤ・ＲＡ・ＲＢ・ＲＤ・ＲＧ・ＲＨ・ＲＩ地区）を対象とした。

各トレンチから小規模な溝や柱穴と考えられる小穴，土壙は検出されたが，まとまりを欠いていた。しかし惣座集落南方の蜜柑園に設定したＲＧ地区31発掘区からは７間×３間の東西棟建物跡（ＳＢ001）が検出され，初めて検出した本格的な掘立柱建物跡に，国庁の手掛りが摑めたと調査員一同色めき立った。他にも国道263号線西側に設定したＲＢ地区25発掘区から２間×２間の小規模な倉庫跡（ＳＢ006）が，ＲＡ地区37発掘区からは，前年度ＲＣ地区で検出された

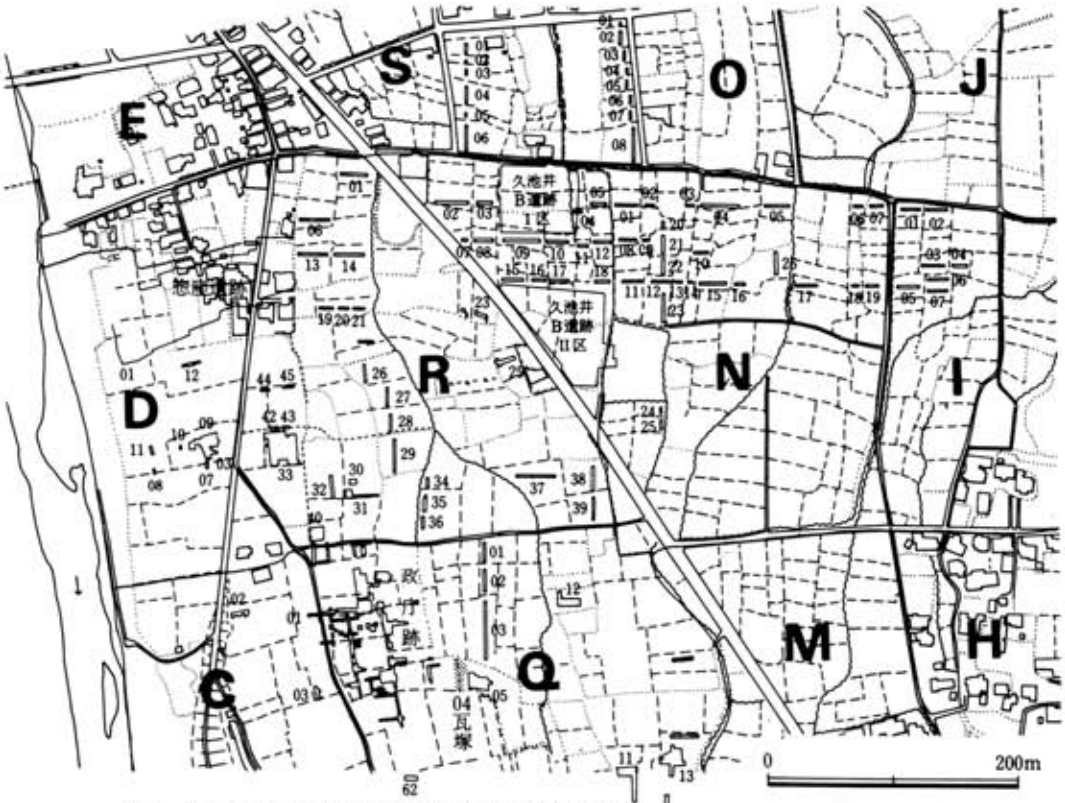


Fig. 2　発掘区位置図（政庁跡は番号を省く）

道路状遺構の南への続きと考えられる両側に溝を設けた部分が検出された。

また，先のＲＧ地区31発掘区の北西方約50mの栗園中にＲＧ地区33発掘区を設定し発掘を開始したが，溝跡や多数の柱穴を検出したものの，本格的な調査は次年度に持ち越した。

第３次調査（昭和52年４月１日～９月２日，昭和52年11月１日～昭和53年１月31日）

第２次調査に引続いてＲＧ地区33発掘区の調査を進めたが，この年の４月に惣座部落を横切って九州横断自動車の中心杭が打たれたためにわかにＲＧ地区33発掘区以北のＤＤ地区にもトレンチを設定して確認調査を進めた。佐熊集落北方の通称「瓦塚」の東に隣接してＱＣ地区05発掘区を設け調査を実施した。

調査の結果，ＲＧ地区33発掘区からは掘立柱建物跡４棟（ＳＢ002･003･004･005），溝跡（ＳＤ020・021・023・024）の他弥生時代の竪穴住居跡や溝跡が検出され，この一帯に掘立柱建物跡群が集中して存在することが予測された。さらに北西方のＤＤ地区01発掘区では５間×３間の東西棟倉庫跡（ＳＢ007），溝跡２条（ＳＤ017・018）の他弥生時代の竪穴住居跡，溝跡，甕棺墓・石蓋土壙墓が検出され，惣座集落付近まで国府関連の遺構が広がっていることが確認された。また，南方のＱＣ地区05発掘区では５間×３間の東西棟建物跡（ＳＢ008），溝跡２条（Ｓ

D025・026）の他弥生時代の竪穴住居跡などが検出された。特記されることとして，ＳＢ008建物跡周辺から瓦の出土量が多く，従来検出された建物跡が瓦を伴わなかったのに比べ，この建物が瓦葺きであったとみてよい点である。

３年次にわたる調査によって検出された掘立柱建物跡はいずれも国府と何らかの関わりをもつものと思われたが，これまで知られている諸国の国庁内部の定型的な配置をもった建物跡などと同質に扱えるものではなかった。また，これらの建物跡が国庁内に存在するとするには一辺が２町を越す庁域となり，建物の方位もまちまちで，同一域内の建物群とは推定し難いものであった。

第４次調査（昭和53年11月１日～11月30日，昭和54年１月８日～３月12日）

これまでの調査で，嘉瀬川左岸の佐熊集落と惣座集落の間の蜜柑園，栗園，野菜畑として現在利用されている地域を中心として掘立柱建物跡が検出されたことから，第４次調査ではＱＦ・ＱＣ地区を中心に，ＱＡ・ＱＢ・ＱＥ・ＲＧ地区にトレンチを設定して調査を実施した。

その結果，ＱＡ地区11発掘区から２間×４間以上の南北棟建物跡（ＳＢ075）や弥生時代の甕棺墓・土壙墓などが，ＱＢ地区12発掘区からは２条の東西溝跡（ＳＤ073・074）が，ＲＧ地区40発掘区からは東西溝跡（ＳＤ059）が検出された。そしてＱＦ地区06発掘区からは２条の東西溝跡（ＳＤ067・068）や廃棄壙と考えられる土器や瓦を包含する土壙（ＳＫ069・070）柵列跡（ＳＡ079）などとともに大規模な掘立柱建物跡（ＳＢ060）が検出され注目された。この建物跡は４間以上×２間の東西棟で，桁行柱間９尺，梁行柱間10尺，柱穴掘形も一辺約1.4mの方形の堂々たるものであった。柱の配列などから政庁内の主要な建物の一部である可能性が強まったといえる。

遺物としても特にＱＦ地区06発掘区から老司系軒丸軒や緑釉・灰釉陶器片，多量の須恵器，土師器が出土するなど，この地区の年代推定の手掛りをも提供してくれた。

第５次調査（昭和54年６月19日～８月10日，昭和55年２月８日～３月26日）

第４次調査で大規模な掘立柱建物跡が検出されたＱＦ地区を中心に第５次調査を実施した。また前回ＱＡ地区でも建物跡が検出されていたためＱＡ・ＱＢ地区にも新たにトレンチを設定した。

ＱＡ地区13発掘区では，３間×２間身舎に東側を除いた３面に廂がつくと考えられる東西棟建物跡（ＳＢ076），多量の土師器を包含する土壙（ＳＫ077）や弥生時代の溝跡などが検出された。さて，期待をもたれたＱＦ地区であるが，16～24発掘区を設けて調査を実施した。まず，前回ＳＢ060建物跡を検出したＱＦ地区06発掘区の東側に16発掘区を設定，ＳＢ060建物跡の東の続きと妻部分を検出し，７間×２間の建物跡であることを確認した。次いでＱＦ地区18～20・

23発掘区においても７間×２間とＳＢ060建物跡と全く同規模の東西棟建物（ＳＢ093）が検出され，この建物跡北側に併設された玉石造りの雨落溝も確認された。ＳＢ060建物跡とＳＢ093建物跡はともに１回の建替えが確かめられた。これらは政庁内の主要な建物（正殿あるいは後殿）であろうと推定されたが，桁行２間というのは規模の面でも不満が残り，この２棟の建物跡の距離が約32mと，他の政庁発掘例からみて，やや距離があり過ぎるように思われた。この空間に設けたＱＦ地区17発掘区と18発掘区北部とで検出された掘立柱穴の存在が気になるところであり，その実態が判明するのを待って各建物跡の性格づけができるものと期待された。

第６次調査（昭和55年４月９日～４月25日，昭和56年１月14日～２月28日）

第４次・５次調査で検出されたＳＢ060建物跡とＳＢ093建物跡の間を埋める建物跡の確認を主な目的として，ＱＦ地区に重点を絞り第６次調査を実施した。

その結果，ＱＦ地区26発掘区から７間×２間身舎に四面廂のつく堂々たる東西棟掘立柱建物跡（ＳＢ090）が検出され，先の南北２棟の建物跡の間が埋まった。またＱＦ地区28発掘区ではこのＳＢ090建物跡の西側に回廊（ＳＢ099）が取りつくことが確認され，肥前国政庁が大宰府政庁と建物配置の点で類似することが想像された。

第４次～６次調査の結果，四面廂のつく正殿を中心にして，後殿・前殿が配置される政庁の基本的建物群が確認されたのである。しかし政庁域の四至の確定は，ＱＦ地区24発掘区で東西溝跡（ＳＤ097）が一部検出されたのみで，脇殿跡など他の遺構の確認とあわせて，次回からの調査を待つことになった。

第７次調査（昭和57年１月20日～３月31日）

前回の調査に引続き，回廊（ＳＢ099）の西側への延長，脇殿，南門，政庁を区画する遺構の検出など政庁内の施設，庁域の確認を目的としてＱＦ・ＱＥ地区にトレンチを設定し第７次調査を実施した。

その結果、ＱＦ地区29発掘区では回廊の西端柱穴を検出，回廊は東西９間であることが判明，ＱＥ地区30発掘区では八脚門（ＳＢ116）が検出され，礎石も４個残存した。また，ＱＦ地区32・44・50発掘区では西側脇殿と考えられる南北方向の柱穴群（ＳＢ095）を検出したが，建替えが認められる。規模については次年度調査することになった。他にＱＦ地区29・36・37・38・39発掘区やＱＥ地区49・52・53発掘区などから政庁域を画するかと考えられる築地跡や溝跡が検出された。南門の南方約10mに設けたＱＥ地区55発掘区では，政庁の中軸線に沿って幅約４ｍの踏み締った部分が検出されたが，明確なものではなかった。

遺物としては溝跡や土壙などから多数の須恵器、土師器が出土したが，ＱＣ地区35発掘区のＳＤ128溝跡内からヒスイ製とみられる石錫（巡方）が出土したことが注目される。

第８次調査（昭和57年４月８日～５月18日，昭和58年２月14日～３月28日）

第７次調査に引続き政庁内の施設，南門南大路の確認，庁域四至の確定などを主な目的としてＱＦ・ＱＥ・ＱＣ地区にトレンチを設定し調査を実施した。

前回の調査で一部検出され北門ではないかと考えられていた掘立柱穴を確認するため設けたＱＦ地区58発掘区では，５間×３間の東西棟建物（ＳＢ104）が検出されたが，この建物跡を切って，２本の東西溝（ＳＤ097・098）に囲まれた築地跡が確認された。また脇殿と考えられる掘立柱建物（ＳＢ095）の規模を知るため設定したＱＦ地区60発掘区では南北に配置された２間×７間の南北棟建物跡が２棟（ＳＢ095・125）検出され，これらは脇殿と考えられた。これら２棟はそれぞれ建替えが認められるが，南側建物は新期には規模を縮小していた。国庁の四至を確定するため設定したＱＦ地区59発掘区とＱＣ地区61発掘区では溝跡や築地跡が検出され，それぞれのトレンチで政庁域の北西隅と南東隅が確定され，将来の保存計画にとっても貴重な資料を与えてくれた。また，南門南方に設けたＱＥ地区54・56発掘区において道路状の遺構を確認することはできなかった。

このように第８次調査によって，四面を築地により囲まれた東西77.2m，南北104.5mの国庁域が確定され，その南北中軸線上に，南から南門，前殿，正殿，後殿が並び，正殿妻部中央から東西築地まで回廊が設けられ，回廊のほぼ中央南には東西に２棟ずつの脇殿が南北に配置されていたことが判明し，出土した古瓦の形式と相俟って，大宰府政庁との類似性がかなり強く感じられた。

第９次調査（昭和59年１月10日～３月８日）

国府跡の確認調査も一応の終了まであと２年次の調査を残すのみとなり，史跡指定範囲の確定も重要視されてきたため第９次調査は政庁跡を離れて，これまでトレンチを設定していない地区を対象とした。政庁跡の西北方（ＤＡ・ＤＢ地区）及び南方（ＱＥ地区）にトレンチを設定した。

その結果，ＤＡ地区02発掘区では東部で弥生時代の竪穴住居跡や甕棺墓，箱式石棺墓などが検出されたが，西の大部分は惣座橋北方で嘉瀬川から取水し佐熊集落の西側へ抜ける地下用水路（大井手幹線水路）の埋設に伴って西方嘉瀬川までの間は地下深く掘削されていた。ＤＢ地区では03～08発掘区を設けて調査を実施した。一帯は竪穴住居跡をはじめとする弥生時代の遺構が多く検出されたが，ＤＢ03発掘区では南北方向から東方へ続く柵列と考えられる柱穴群（ＳＡ139）が検出された。政庁中軸線から西方約１町にあたるところから，国庁外郭を画する遺構かと期待された。また，ＤＢ地区07・08発掘区からは東西溝跡（ＳＤ141）が検出されたが，この溝跡はＲＧ地区33発掘区の東西溝跡（ＳＤ021）に連続するものであった。政庁跡南方に設け

たＱＥ地区62・63発掘区は作物の都合で政庁中軸線よりわずかに東へずれたが，62発掘区の西端には不明確ながら踏み締った部分が認められた。

第10次調査（昭和59年４月24日～５月31日）

前回ＤＢ地区03発掘区で検出した柵列かと思われる遺構を明らかにする目的などをもって第10次調査はＤＢ地区，ＲＨ地区を中心にトレンチを設定して実施した。また，これまでほとんど手がつけられていなかった政庁西方のＣＢ地区にも２か所のトレンチを設けた。

ＤＢ地区09発掘区では，前回検出された柵列と考えられた柱穴の東側は柱穴掘形が一辺約1.5mの方形をなす大形のもので，柱間も10尺と大規模であった。他にも整然と配置された柱穴群が検出されたが，調査区を拡張することができずそれらの規模や性格を明らかにすることができなかった。また，この09発掘区西端において，幅約1.8mの築地の基礎版築地業の跡（ＳＡ155）の南東コーナーが検出され，その西方約36mの位置に設定したＤＢ地区13発掘区でもその延長が確認されたが，その西方は地下水路のため破壊されている。しかし北方約65mの位置に設定したＤＢ地区12発掘区では明確には確認できなかった。ＲＨ地区では42・43発掘区で，以前ＲＧ地区33発掘区で検出されたＳＢ004建物跡の北妻部と考えられる柱穴が，また44・45発掘区では，ＲＧ地区33発掘区のＳＤ020・022溝跡の北方への延長と考えられる溝跡（ＳＤ158・161）がそれぞれ検出された。ＣＢ地区では，02発掘区で５間以上×２間以上の東西棟建物跡（ＳＢ168）が，03発掘区では溝跡（ＳＤ166）の南西コーナー部が検出された。

遺物としては，ＣＢ地区02発掘区から緑釉陶器片や越州窯青磁片などが出土したことが注目される。

第９次・10次調査によって，国府関係の遺構が，西は嘉瀬川左岸ぎりぎりまで遺存していたことが判明し，ＤＤ地区やＣＢ地区には築地や溝によって囲まれた一定区画が存在することが確認されたが，内部施設の確認までには至らなかった。

その他の調査

肥前国府跡推定地周辺部において，九州横断自動車道建設に伴って，いくつかの発掘調査が県教育委員会により実施されたが，国庁跡に深く関連する遺構を検出したものがいくつかある。

久池井Ｂ遺跡（昭和57年10月４日～12月24日）

政庁跡の北東方約300mに位置する。調査は国府跡確認調査のトレンチ方式とは違い，約8,000㎡と大規模なものであり，北部（Ｉ区）と南部（II区）に大きく分けて実施された。国府跡調査の地区割に従えば，Ｉ区とII区北半部および中間の東西トレンチはＲＣ地区，II区南半部はＲＢ地区にあたり，II区東部は一部ＮＥ地区にあたる。

調査の結果，掘立柱建物跡15棟，井戸跡２基，土壙墓６基をはじめ多数の土壙，溝跡などが検出された。Ⅰ区の建物群７棟は少規模であったが，Ⅱ区の建物群は規模が大きく整然と配置されたものであった。南部では６間×３間身舎に南廂がつく東西棟建物跡（ＳＢ358）と５間×３間の東西棟建物跡（ＳＢ357）が東西に並び，後者の西妻部南に２間×６間身舎に東廂がつく南北棟建物跡（ＳＢ367）が検出された。また，それらの北方では鍵形に配置された５棟の２間×２間の小規模な倉庫跡が検出された。他にもⅠ区では平面方形の井戸跡（ＳＥ302），Ⅱ区では土壙墓数基が検出された。この井戸跡の部分から南へ延びる溝（ＳＤ329・330）に囲まれた道路状遺構が検出されたが，これは以前ＲＣ地区10・16・17発掘区で検出されていたもので，ＳＥ302井戸跡から南方約215mのＲＡ地区37発掘区で検出された道路状遺構へ連続するものと考えられる。

遺物としては，特にⅠ区北端の土壙群から大量の須恵器・土師器が出土したのをはじめ，Ⅱ区南部の土壙墓から供献土器とともに宋代の銅鏡片や鉄製紡錘車も出土した。

このように，久池井Ｂ遺跡の調査は，未だ状況が不明な政庁跡周辺部において，これと関係すると思われる整然と配置された一区画の建物群を明らかにした点で意義深いものであった。

惣座遺跡（昭和58年４月28日～11月17日）

政庁跡の北方約200mに位置する。惣座遺跡は，政庁跡周辺を含む広大な範囲の弥生時代の集落，墳墓跡を主体とする遺跡であり，調査が実施された地区はその北部にあたる。調査は九州横断自動車道本線予定地に沿った東西に長い7,000m²が対象となった。国府跡調査の地区割に従えば，西からＤＤ・ＤＣ・ＲＩ地区にあたり，第３次調査で発掘を実施したＤＤ地区01発掘区の東に接する地域である。

調査の結果，掘立柱建物跡15棟以上の他溝跡や土壙が検出された。建物跡は棟方向の違い等により大きく３グループに分けられる。一つは建物南北軸が北から約10°西傾する３間×３間の倉庫群７棟（ＳＢ272・274・276・277・245・242・223）のグループで，これらは鍵形に配列されている。一つは南北軸が座標北をとるグループで，６間×３間の東西棟建物跡（ＳＢ275），２間×６間の南北棟建物跡（ＳＢ286），４間×４間の倉庫跡（ＳＢ267）などであるが，ＳＢ275建物跡の柱穴が先の倉庫群の一つ（ＳＢ276）の柱穴を切っており，新旧関係が判明している。もう一つは南北軸が北から約20°西傾する３棟の東西棟建物跡（ＳＢ290・291・287）のグループである。ＳＤ202・226溝跡は何らかの区画を示す遺構と考えられた。

遺物の出土量は概して少ないが，ＳＫ250土壙から須恵器を主体とする多数の土器群を出土したくらいである。

この発掘調査では，溝に囲まれた竪穴住居跡約40軒など弥生時代の遺構が確認され，多数の貴重な遺物を出土しているが，ここでは省く。

政庁跡北方において，正倉とも考えられる大規模な倉庫群をはじめ多数の掘立柱建物跡群を検出した点で意義深い調査であった。

東山田一本杉遺跡（昭和59年６月27日～現在調査中）

嘉瀬川西方で，政庁跡の西方約800mに位置する。九州横断自動車道本線予定地に沿った部分で，弥生時代の墳墓群，竪穴住居跡群を主体とする遺跡であり，現在調査中であるが，整然と配置された大規模な掘立柱建物跡群や，それらを囲むように設けられた築地跡などが検出され，国府跡との関係で注目されているところである。

現在までのところ，掘立柱建物跡４棟，築地跡と推定されるもの２条，溝５条，井戸跡３基，土壙数基が検出されている。時期は奈良時代から鎌倉時代である。

２．調査組織

第１次調査（昭和50年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　瀬戸口芳夫（県教育委員会教育長）

○委　　員　　鏡山　猛（九州歴史資料館長），米倉二郎（広島大学名誉教授），岡崎　敬（九州大学教授），田中　琢（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長），沢村　仁（九州芸術工科大学教授），七田忠志（神埼高等学校教諭），小田富士雄（北九州歴史博物館主幹），木下之治（県文化財調査監）

○特別調査員　　木下　良（神奈川大学助教授），日野尚志（佐賀大学助教授），高橋誠一（京都大学助手），木原武雄（基里中学校教諭）

○事　務　局　　田中寿義雄（県文化課長），武富雅道（同課長補佐），百武定弘（同庶務係長）

○調査指導　　田中　琢，松沢亜生（奈良国立文化財研究所考古計画研究室長），工楽善通（同遺物処理研究室長），木全敬蔵（同測量研究室長），伊東太作（同主任研究官），西村　康（同文部技官），岩本圭輔（同文部技官）

○調　査　員　　高島忠平（調査主任，県文化課文化財調査係長），樋渡敏銙（同指導主事），仏坂勝男（同），立石泰久（同嘱託）

○調査補助員　　中島直幸，藤原新子

○調査参加者　　久保伸洋（別府大学生），種浦　修（同），城野一郎（久留米大学生）

第２次調査（昭和51年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　池田武生（県教育委員会教育長）

○委　　員　　鏡山　猛，米倉二郎，岡崎　敬，田中　琢，沢村　仁，七田忠志，小田富士雄，木下之治

○特別調査員　　木下　良，日野尚志，木原武雄

○事　務　局　　田中寿義雄，武富雅道，片渕正美（文化課庶務係長）

○調 査 指 導　　田中　琢，松沢亜生，工楽善通，木全敬蔵，伊東太作，西村　康，岩本圭輔

○調　査　員　　高島忠平，樋渡敏暲，立石泰久

○調査補助員　　中島直幸，藤原新子

○調査参加者　　久保伸洋，種浦　修，城野　一郎

第3次調査（昭和52年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　池田武生

○委　　員　　鏡山　猛，米倉二郎，岡崎　敬，田中　琢，沢村　仁，七田忠志，小田富士雄，木下之治

○特別調査員　　木下　良，日野尚志，木原武雄

○事　務　局　　田中寿義雄，武富雅道，片渕正美

○調 査 指 導　　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

○調　査　員　　高島忠平，樋渡敏暲，杠　一義(県文化課指導主事)，立石泰久，高瀬哲郎(県嘱託)

○調査補助員　　松尾直子，川崎吉剛(駒沢大学生)，久保伸洋，種浦　修，城野一郎，林孝登史，藤原新子，山本タカ子

第4次調査（昭和53年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　古藤　浩（県教育委員会教育長）

○委　　員　　鏡山　猛，米倉二郎，岡崎　敬，田中　琢，沢村　仁，七田忠夫，小田富士雄，木下之治（県文化財保護審議委員），木下　良（富山大学教授），日野尚志

○事　務　局　　田中寿義雄，川久保松広（県文化課長補佐）

○調 査 指 導　　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

○調　査　員　　高島忠平，樋渡敏暲，田平徳栄（県文化課文化財保護主事），岩永政博（同指導主事），立石泰久

第5次調査（昭和54年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　古藤　浩

○委　　員　　鏡山　猛，米倉二郎，岡崎　敬，横山浩一(九州大学教授)，田中　琢，沢村仁，七田忠志，小田富士雄，木下之治，木下　良，日野尚志

○事　務　局　　田中寿義雄，藤山　厳（県文化課参事），川久保松広，片渕正美

○調査指導　　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

○調　査　員　　高島忠平，樋渡敏暲，田平徳栄，松尾吉高(県文化課文化財保護主事)，立石泰久，山田　正（県嘱託）

○調査補助員　　深川英典，杉山　洋，高橋勝広，

第6次調査（昭和55年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　古藤　浩

○委　　員　　鏡山　猛，米倉二郎，岡崎　敬，横山浩一，田中　琢，沢村　仁，七田忠志，小田富士雄，木下　良，日野尚志，高橋誠一（滋賀大学助教授）

○事　務　局　　田中寿義雄，藤山　厳（県文化課長），川久保松広，高島忠平（県文化課長補佐），広川　昇（同専門員）

○調査指導　　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

○調　査　員　　高島忠平，樋渡敏暲，田平徳栄，立石泰久，松尾吉高

第7次調査（昭和56年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　古藤　浩

○委　　員　　米倉二郎，岡崎　敬，横山浩一，田中　琢，沢村　仁，小田富士雄，木下良，日野尚志，高橋誠一

○事　務　局　　藤山　厳，川久保松広（県文化課長補佐），高島忠平，中野安正（県文化課庶務係長）

○調査指導　　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

○調　査　員　　高島忠平，樋渡敏暲(県文化課文化財調査第1係長)，高瀬哲郎(同指導主事)

第8次調査（昭和57年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　古藤　浩

○委　　員　　米倉二郎，岡崎　敬，横山浩一，田中　琢，沢村　仁，小田富士雄，木下良，日野尚志，高橋誠一

○事　務　局　　藤山　厳，山田陸三，高島忠平，中野安正

○調査指導　　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

○調　査　員　　高島忠平，樋渡敏暲，高瀬哲郎

第9次調査（昭和58年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　古藤　浩

○委　　員　　米倉二郎，岡崎　敬，横山浩一，田中　琢，沢村　仁，小田富士雄，木下　良（国学院大学教授），日野尚志，高橋誠一

○事　務　局　　中島信行（県文化課長），山田陸三，高島忠平，中野安正

○調査指導　　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

○調　査　員　　高島忠平，中牟田賢治（県文化課文化財調査第1係長），田平徳栄，七田忠昭（県文化課文化財保護主事），本田秀樹（県嘱託）

第10次調査（昭和59年度）

肥前国府跡発掘調査委員会

○委　員　長　　古藤　浩，志岐常文（県教育委員会教育長）

○委　　員　　米倉二郎，岡崎　敬，横山浩一，田中　琢，沢村　仁，小田富士雄，木下良，日野尚志（佐賀大学教授），高橋誠一

○事　務　局　　北村一義（県文化課長），山田陸三，高島忠平，菊池文夫

○調査指導　　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

○調　査　員　　高島忠平，中牟田賢治，田平徳栄（県文化課主査），立石泰久（同文化財保護主事），西田和己（同），七田忠昭（同），船底聡一（県文化課嘱託），原口　定（同）

作　業　員（昭和56年度～59年度）

大坪エイ・百武アサ子・大坪八重子・城　政子・内山ヒロエ・西原和子・指山千春・猶村美津子・北村博子・上滝清子・野田美智子・深町俊子・太田アサエ・納富みさお・広重さなえ・西久保ハルエ・野田せき子・藤井千枝子・石井和子・東島良子・西恵美子・執行カツヨ・原　京子・嬉野みつ代・野田美恵子　　太田鉄蔵・宮崎和博

II 位　置　と　環　境

肥前国政庁跡は，佐賀県佐賀郡大和町大字久池井字四本杉・五本杉の現在蜜柑園・畑地・水田として利用されている標高約14.5mの位置に所在する。また国府域は国庁跡周辺一帯の大字久池井・大字尼寺を含む地域に推定されている。

古代の肥前国域内で最も広大な面積を誇る佐賀平野は，筑後川下流部に広がる筑紫平野のうち右岸平野全体の呼称であるが，狭義には牛津川以東の地域を指す。背振山地南麓に広がるこの佐賀平野は，多くの洪積世段丘が発達しており，段丘に挟まれた谷底平野や扇状地，南部有明海沿岸の三角洲地帯は全国でも屈指の穀倉地帯として知られている。佐賀平野はさらに，地

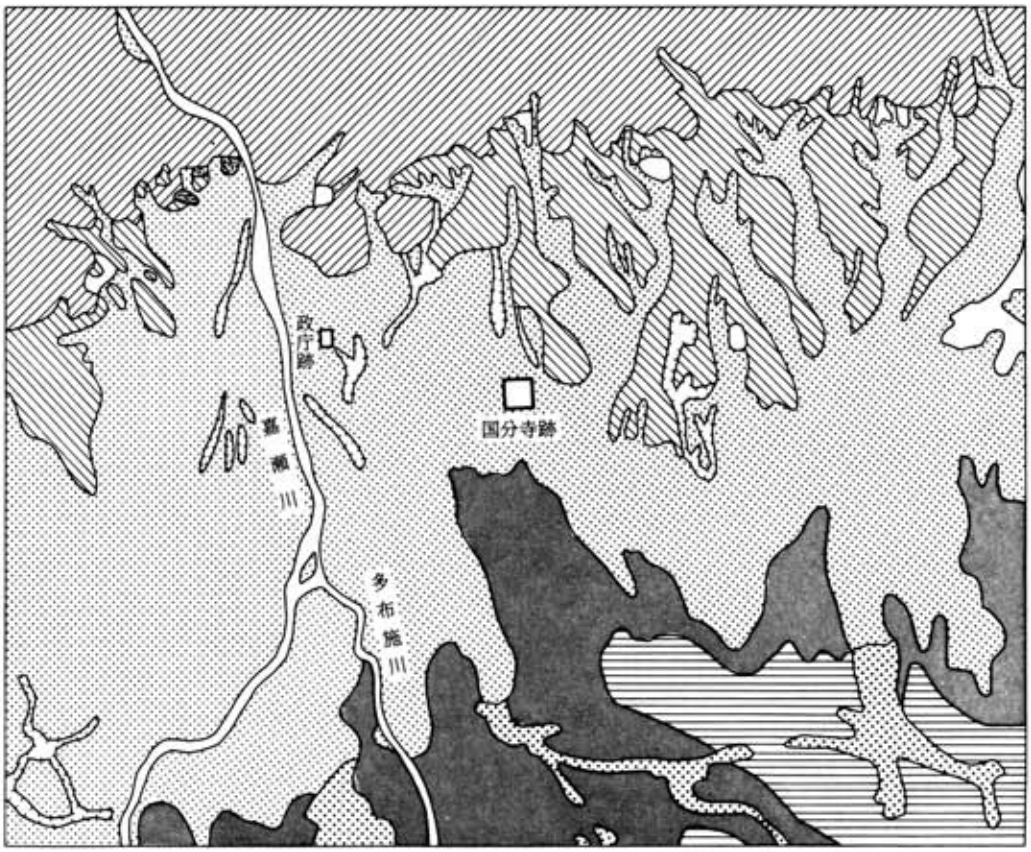
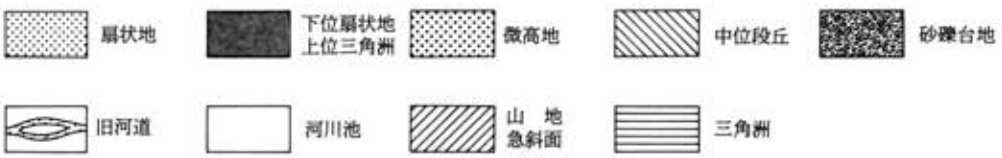


Fig. 3　肥前国府跡周辺地形分類図（1/50000）　500m　0　500　1000　1500



形など景観の違いにより，神埼郡三田川町を境にして東を三養基平坦，西を佐賀平坦に細分される場合もある。中位・低位の段丘が山麓から南の平野部へ〝舌状〟に発達して特異な景観をなす東部とは違い，西部では，背振山地に源をもつ田手川，城原川，多布施川，巨勢川，嘉瀬川などの河川が背振山地の花崗岩質の崩壊砂礫を運搬堆積して複合扇状地を形成している。これらの扇状地のうち最も大きいのは嘉瀬川が形成した扇状地であり，肥前国庁跡はこの扇状地の扇央付近，現在の嘉瀬川の左岸に位置している。

大和町は，春日村・川上村・松梅村が昭和30年に合併して成立した大和村が，さらに一部の地区を合併して昭和34年町制を敷いた町で，「大和」という町名は，合併時に，町民の調和の意志を表現したもので，古来の地名に因んで町名としたものではない。町域は面積55.13㎢で，北を佐賀郡富士町・神埼郡三瀬村，東を神埼郡脊振村・佐賀市，南を佐賀市，西を小城郡三日月町に接する南北に細長い町である。北部は町域の約⅔を占める山地で占められ，南部は河上神社付近を扇頂として半径約4㎞の弧をえがく嘉瀬川が形成した扇状地となっている。嘉瀬川は大和町内までは川上川と称される場合もあり，町を東西に二分して南流するが，佐賀市との境付近で，西の嘉瀬川と東の多布施川に分れ，それぞれ有明海へ注ぐ。嘉瀬川（川上川）は古来より河道変遷が激しかったらしく，溜池状に多数の放射状に分岐する旧流路が認められ，巨勢川や多布施川は嘉瀬川の旧流路と考えられている。

大和町の北部山麓部は柑橘類を主体とする果樹園・水田・畑地・住宅地・工場用地などとして，南部はほとんどが水田として利用されている。しかし，佐賀市のベッドタウンとしての大規模住宅団地建設や，一部開通を昭和60年3月に控えた九州横断自動車道に関連するバイパスなどの公共事業がさらに急速に進行しつつあり，肥前国府跡をはじめとする周辺の文化財にとっては重大な危機に直面したといわなければならず，これら文化財と開発との問題がクローズアップされようとしている。

佐賀平野の北部山麓一帯は県内において遺跡の分布が最も密なところで，特に弥生時代の遺跡や古墳時代の前方後円墳を主体とする古墳群が著名であり，特に弥生時代の墳墓からは漢式鏡を始めとする豊富な文物を出土するなど，この地域が肥沃な土地柄と相俟っていちはやく豊かな生産力を有する一つのまとまりを示すところとして知られる。古墳時代になっても鳥栖市や三田川町・神埼町・東脊振村や佐賀市・大和町を中心に前方後円墳群が出現し，いくつかの政治的なまとまりを示すかのようである。また，中世以降は北部山麓の小山塊には各所に山城跡が存在するなど，この地域の重要性が認められる。これらの概要についてはそれぞれの報告に譲り，ここでは大和町を中心として肥前国府跡をとりまく歴史的環境について概観したい。

大和町周辺の遺跡分布をみると，ほとんどが嘉瀬川が形成した扇状地上に密集しており，南部になるにつれて密度が小さくなる。北部山麓の緩斜面や，南へ派生する中位段丘上には主に古墳が数多く存在している。

先土器時代の遺跡は久池井一本松遺跡でナイフ形石器が出土したくらいで，まとまった遺物を出土した遺跡は今のところ確認されていない。周辺においても佐賀市梅ヶ谷遺跡，富士町地蔵平遺跡・同小ヶ倉遺跡，三日月町老松山遺跡・同岡本遺跡ほどしか存在しない。縄文時代になると町内でも48か所の遺跡が確認されている。いずれも小規模な散布地で，北部山麓の段丘上を中心に分布するが，遺物も少なく，本格的な発掘調査も実施されておらず詳細は不明である。主な遺跡として小隈遺跡，大願寺遺跡，今山遺跡，春日遺跡，出羽遺跡などがある。

弥生時代になると遺跡の規模，数ともに増大し，町内だけでも現在まで128遺跡確認されている。嘉瀬川左岸に惣座遺跡[1]，南小路支石墓[2]，右岸に東山田一本杉遺跡[3]，七ヶ瀬遺跡[4]，池上遺跡[5]，久留間カミ塚遺跡[6]，久留間遺跡[7]，楢田遺跡などがあり，遺跡は扇状地の末端部まで広がっている。ここに掲げた遺跡はすべてその一部が調査されたものである。集落としては惣座遺跡を中心とする大字久池井一帯，東山田一帯，久留間・楢田遺跡一帯に大集落が想定でき，山麓の段丘上や，低位の集落周辺に墳墓が営まれている。惣座遺跡では弥生時代後期の大環濠集落の一部が発掘され，竪穴住居跡から多数の鉄器をはじめ小形仿製鏡数面，ガラス製小玉多数を出土し，また七ヶ瀬遺跡では甕棺墓，土壙墓などから多数の鉄製利器を出土し，また嘉瀬川河床から弥生土器とともに方格規矩鏡片も採集[8]され，尼寺南小路から広形銅戈[9]，佐賀市高木瀬町から広形銅矛[10]が出土していることなどから，大和町を中心とした嘉瀬川流域一帯に有力な集団が存在したことを裏付けるかのようである。

古墳時代の遺跡（古墳・古墳群を含む）は現在までに約150遺跡が確認されている。山麓緩斜面や段丘頂部に位置する数百基と考えられる後期古墳をはじめ，いくつかの前方後円墳が存在し，集落遺跡はこれまで本格的に調査されたものがないものの，遺物の散布からみると，弥生時代集落とさほど変らない地域に存在していたものと考えられる。これまで確認されている県内約40基の前方後円墳のうちの10基が嘉瀬川流域一帯に分布しているのである。町内では船塚古墳，池の上古墳，風楽寺古墳，小隈山古墳，前隈山古墳，築山古墳などの前方後円墳[11]が存在するが，船塚古墳は全長114mで，周囲に７基以上の陪塚をもつ県内最大の古墳として知られている。他に琴柱形石製品を出土した森の上古墳[12]や高畠古墳[13]などの重要な古墳も知られている。さらに東方佐賀市の山麓部にも銚子塚前方後円墳[14]や西隈古墳[15]，西原古墳[16]，丸山古墳群[17]など著名な古墳が多い。大和町北部山麓一帯に分布する前方後円墳群は，しばしば三田川町を中心に分布し，米多国造の墳墓群に比定される目達原古墳群[18]と対比されるところである。また，政庁跡の東北東約5.5kmには帯隈山神籠石[19]が存在する。

奈良・平安時代の遺跡は町内で現在まで124か所確認されている。北部山麓裾部や扇状地の平坦部に分布するが，国庁跡を含む肥前国府跡[20]，国分寺[21]，国分尼寺跡，大願寺廃寺跡[22]，肥前国一の宮として名高い河上神社(淀姫神社)，神南備神社，印鑰神社などの寺社跡や官衙跡が著名であり，古代においてこの地域が肥前国の政治・文化の中枢であったことを裏付けている。

特に弥生時代後期集落や前方後円墳の集中などにみられる他地域に優越する土地柄は，政庁はじめ国府設置の下地として十分たるものであったことは想像に難くない。

中世以降の遺跡の分布は奈良・平安時代とほとんど変らない。春日山城跡，実相院遺跡，西山遺跡など寺院跡や山城跡[23]が主体をなしており，集落跡などの本格的な調査はまだ実施されていない。

以下，肥前国府に特に関連深いと考えられる周辺の古代遺跡の概要を述べる。

大願寺廃寺

肥前国府跡の西方約2km，大和町大字川上字大願寺に位置する。大願寺集落に現在鎮座する五社明神社の社殿柱座に柱座を造り出した礎石が9個利用されており，他にも燈籠台石などとして利用されているものなど，計27個の礎石が残存しており，うち20個には柱座造り出しが認められる。神社の部分は周囲の地盤より一段高くなっており，建物の基壇跡ではないかと思われる。発掘調査は現在まで行われておらず，伽藍配置や寺域などについては不明であるが，この五社明神社の東方の水田中に位置する2孔を穿った礎石を東門礎石と考えて，方2町の寺域が推定されている。

採集された瓦には，軒丸瓦では百済系の重圏文縁単弁八弁蓮華文・唐草文縁単弁八弁蓮華文や老司系の複弁蓮華文のものなどがあり，軒平瓦には重弧文や扁行唐草文のものがある。

大願寺廃寺は，千葉県成田市から昭和46年に発見された「以宝亀五年　二月十二日肥前国佐嘉　郡椅寺之鐘」という陽鋳銘をもつ銅鐘や，「日本霊異記」の中の宝亀7～8年（776～777）に安居会を催した肥前国佐賀郡の大領正七位上佐賀君児公などと関連づけて，佐賀郡司が建立した椅寺であろうとする説や，「肥前風土記」の佐嘉郡僧寺一所に比定する説などがあるが，いずれも推定の域を出ない。

肥前国分寺跡

政庁跡の東南東約1.3kmの大和町大字尼寺字真島に位置する。近世に建立された小堂宇とその周辺に散在する礎石などに国分寺の名残りをとどめているが，昭和49年から2年間発掘調査が実施され，寺域や中心伽藍の一部が検出された。それによると，寺域は方2町と推定され，南大門は未検出であるが西門は基壇の一部が検出されている。寺域南方約50mには「延喜道」と呼ばれる古代駅路跡が東西に横切っている。中心伽藍は，寺域の南と北のほぼ中央で中心よりやや西寄りに残存する基壇上に9間×4間の東西棟金堂が復元され，金堂北側に講堂，東南方に塔を配置したものと推定さている。塔跡と考えられる基壇は東西26m，南北25m，深さ2mの大規模な掘込み地業の版築が確認されている。金堂の中心から約60m南方で中門跡が検出されており，中心伽藍は中門に取り付く回廊により囲まれていたものとみられる。なお，伽藍の

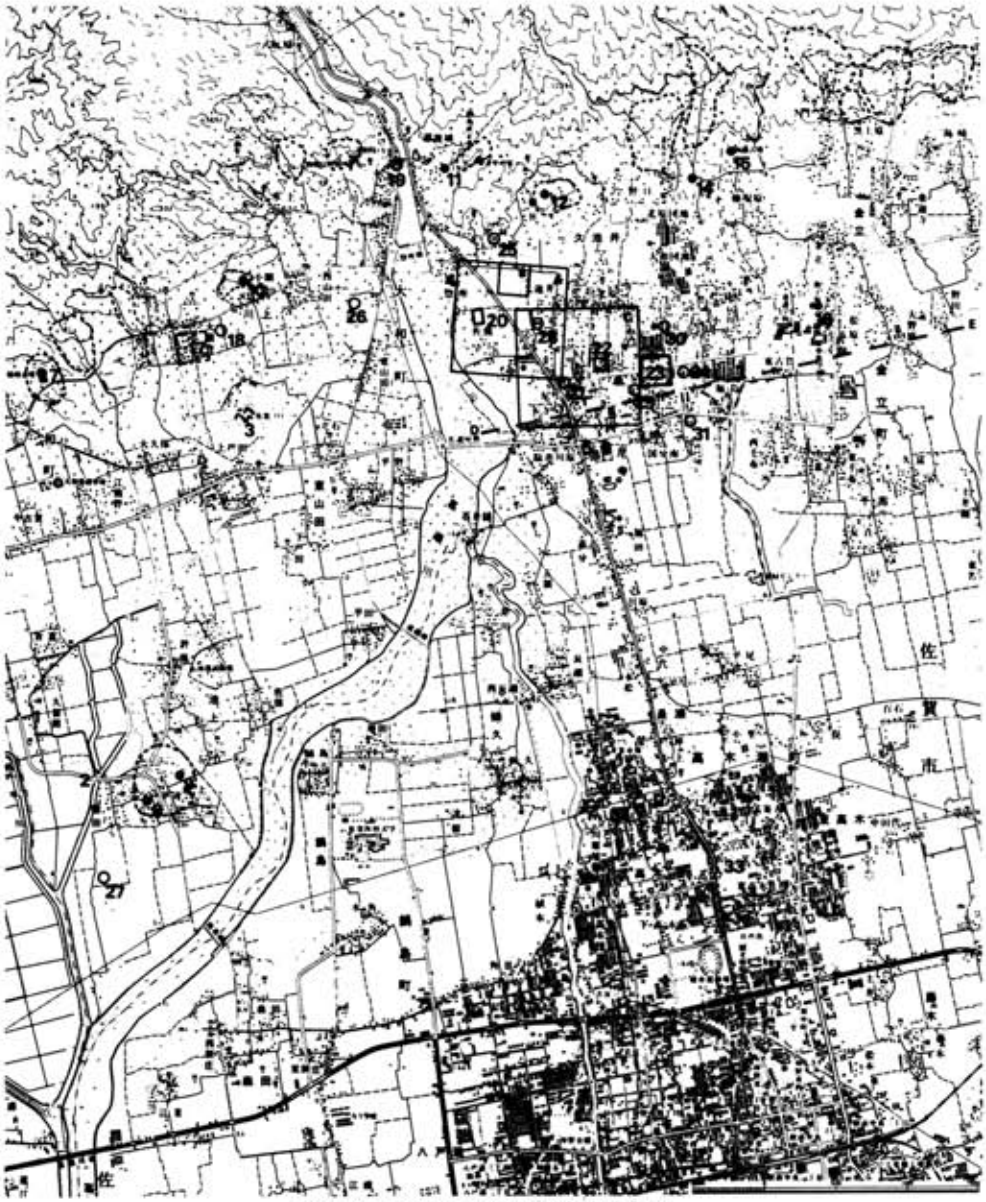


Fig. 4　肥前国府跡周辺遺跡分布図

1 久留間遺跡　2 久留間カミ塚遺跡　3 七ヶ瀬遺跡　4 惣座遺跡
5 尼寺銅戈出土地　6 南小路支石墓　7 船塚古墳　8 道善寺古墳
9 風楽寺古墳　10 小隈山古墳　11 高畠古墳　12 前隈山古墳
13 築山古墳　14 森の上古墳　15 西隈古墳　16 銚子塚古墳
17 大願寺廃寺(推定寺域)　18 大願寺一本松遺跡　19 河上神社　20 肥前国政庁跡
21 印鑰神社　22 肥前国分尼寺跡　23 肥前国分寺跡　24 国分寺瓦窯跡
25 甘南備神社　26 東山田一本杉遺跡　27 櫛田三本松遺跡　28 久池井遺跡
29 国分遺跡　30 久池井二本松遺跡　31 北畑遺跡　32 上高木銅矛出土地
33 高木城跡　A 米倉説国府　B 米倉説国庁　C 高橋説国府
D…Eは推定駅路(延喜道)　〇は古墳群　○は国府関連の遺跡・神社

南北中心軸の方位は北から4°28′西傾している。

遺物としては，少量の平安時代前期の土師器と，金堂跡を中心に出土した多量の瓦がある。軒丸瓦では鴻臚館系複弁八弁・複弁八弁・単弁九弁・唐草文縁単弁七弁・巴文のものなどがあり，軒平瓦には鴻臚館系均正唐草文・均正唐草文・菊花文などのものがある。その他，鬼瓦・熨斗瓦なども出土している。

肥前国分尼寺跡

政庁跡の東南東約1kmの大和町大字尼寺字宝満に位置する。肥前国分寺西門跡の西方約2町から西の方1町の寺域が推定されている。現在正覚寺という寺院周辺では墓標などに転用された礎石があり，周辺では瓦なども採集されている。昭和59年，正覚寺の北方が，住宅団地建設に伴って発掘調査が実施され，国分尼寺の寺域を示すと考えられる溝に囲まれた築地跡が検出された。この築地跡は東西約50mの部分が確認され，東端で南方へ折れ曲るところから，この部分が寺域の北東隅であろうと考えられるが，域内については調査は実施されていない。なお，この築地の南北方向は北から2°6′西傾する。

遺物としては築地外の溝その他から大量の須恵器，土師器，瓦をはじめ緑釉陶器，越州窯青磁多数が出土している。中には墨書土器が31点以上含まれる。「法」「法華」「悔過」「南」「高石」「大」などがある。瓦には鴻臚館系の複弁八弁蓮華文軒丸瓦や均正唐草文軒平瓦などがある。

肥前国分寺瓦窯跡

肥前国分寺の東方約150mの大和町大字尼寺字柿園に位置する。昭和35年に発見され，緊急発掘調査が実施された。破壊されていた1基を含む4基の瓦窯跡が確認された。すべてロストル式の平窯で，全長約4m，幅1.9mの平面長方形をなし，平地に塼を重ね，すさ入り粘土で窯体を築いたものであった。焼成室と燃焼室の境には2本の分炎柱があり，焼成室には丸瓦を用いた7条のロストルが設けられていた。

出土した瓦には軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦類で，軒瓦はすべて鴻臚館系のものであった。

大願寺一本松遺跡

大願寺廃寺の東に接する大和町大字川上字一本松(三)に位置する。昭和58年，木材センター建設に伴って発掘調査が実施され，多数の小掘立柱穴をはじめ，溝跡，竪穴住居跡などが検出された。すべて奈良時代のものと考えられるが，竪穴住居跡数基の中には内部から数点の瓦を出土するものもあった。

遺物としては，須恵器・土師器・瓦などがあり，瓦には扁行唐草文軒平瓦や，百済系と考えられる唐草文縁丸瓦の破片がある。

その他の関連遺跡

肥前国府跡周辺では道路新設や宅地造成，圃場整備など各種の開発事業に伴い，発掘調査や確認調査が実施され，奈良・平安時代の遺構や遺物を出土した遺跡もいくつかある。

栖田三本松遺跡（大字池上字三本松）では圃場整備事業に伴い発掘調査が実施され，明確な遺構は検出できなかったが，奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器などが出土している。**久池井遺跡**（大字久池井字一本杉）では天満宮周辺で，宅地造成に伴い小規模な確認調査が実施され，奈良・平安時代の竪穴住居跡・溝跡・小柱穴などが検出された。遺物としては土師器・須恵器・瓦片などが出土したが，以前この付近で百済系単弁軒丸瓦が採集されている。**国分遺跡**（大字尼寺字館）では確認調査の結果，井戸跡・小柱穴とともに幅６ｍ以上の大規模な東西溝跡が検出され，奈良～鎌倉時代の土師器・須恵器・陶磁器・瓦片などが出土した。**久池井二本松遺跡**（大字久池井字二本松）では，宅地造成に伴う確認調査で奈良・平安時代の井戸跡・小柱穴などが検出され，土師器・須恵器・瓦片などが出土しているが，「北」（２点）「九九」の３点の墨書土器がある。その他**北畑遺跡**（大字尼寺字北畑）でも奈良・平安時代の井戸跡・小柱穴・溝跡などが検出され，土師器・須恵器・瓦片などを出土している。

いずれも小規模な調査であり，遺構の性格を確認するまでには至っておらず，今後計画的な発掘調査が望まれる。

また肥前国府跡周辺には，国府と関連深い寺院もいくつか現存する。

河上神社（大字川上字馬場）は嘉瀬川扇状地の扇頂部に位置する延喜式内小社で，与止日女・淀姫神社とも呼ばれる。祭神は与止日女神で，少なくとも平安時代末期以来，肥前一の宮として崇敬を受けていたと思われる。また河上神社文書は特に中世の肥前国の行政研究上欠くことのできない史料である。他にも，国司甘南備真人浄野の名に因んだとみられる**甘南備神社**（大字久池井字城山）や，国衙の印や正倉の鍵を保管し祀ったとされる**印鑰神社**（大字尼寺字印鑰）がある。「三代実録」によれば，甘南備神社は貞観12年（870）に従五位下を加階され，朝廷は宇佐・香椎・宗像３神とともに甘南備神に，新羅撃退の告文を捧げていることからも，当神社の重要性が窺える。

（参考文献）

- 経済企画庁『土地分類基本調査 ── 佐賀 ──』　1966
- 佐賀県教育委員会『佐賀県遺跡地図（佐城地区）』　1980
- 佐賀県教育委員会『佐賀県の遺跡』　1964
- 大和町史編纂委員会『大和町史』　1975

（註）

(1) 本田秀樹『惣座遺跡』（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第７集）佐賀県教育委員会　1984

(2) 木下之治「背振山脈南麓で初めて発見された大和町南小路支石墓」（『新郷土』301号）　1974

(3) 本田秀樹「東山田一本杉遺跡」（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第７集）佐賀県教育委員会　1984

(4) 1980年大和町教育委員会調査

(5) 多々良友博「池上遺跡」（『久留間カミ塚遺跡Ｂ地点』佐賀県文化財調査報告書第64集）佐賀県教育委員会　1982

(6) 註(5)文献

(7) 松尾禎作・七田忠志「久留間遺蹟調査概報」（『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十集）　1951

(8) 高島忠平「漢式鏡」（『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第49集）佐賀県教育委員会　1979

(9) 松尾禎作「春日村尼寺のクリス型銅剣出土地に就て」（『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯）　1936

(10) 松尾禎作「高木瀬村上高木の銅鉾出土地に就て」同上所収

(11) 松尾禎作『佐賀県考古大観』祐徳博物館

(12) 松尾禎作「春日村森の上古墳」（『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第八輯）　1949

(13) 松尾禎作「都渡城高畠古墳」（『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第八輯）　1949

(14) 木下之治編『銚子塚』佐賀市教育委員会　1976　他に文献多数あり。

(15) 佐賀市教育委員会編『西隈古墳』　1975

(16) 松尾禎作「埴輪円筒を繞らせる西原古墳」（『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯）　1936

(17) (a)中島直幸編『丸山遺跡』佐賀県教育委員会　1979

(b)矢野佳代子「丸山遺跡」（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第６集）佐賀県教育委員会　1983

(18) 松尾禎作「目達原古墳群調査報告」（『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第九輯）　1950

(19) 鏡山猛「帯隈山神籠石」（『帯隈山神籠石とその周辺』佐賀県文化財調査報告書第16集）佐賀県教育委員会　1967

(20) (a)立石泰久編『肥前国府跡Ⅰ』佐賀県文化財調査報告書第39集　1978

(b)田平徳栄編『肥前国府跡Ⅱ』佐賀県文化財調査報告書第58集　1981

(21) 高島忠平他『肥前国分寺跡』大和町文化財調査報告書第１集　1976

(22) 松尾禎作「大願寺廃寺址」（『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯）　1940

(23) 『日本城郭史大系』新人物往来社　1981

III　肥前国府の研究について

肥前国の成立は，日本の古代律令国家の形成過程と無縁でないことは勿論である。日本の古代律令国家は，大陸の影響を強く受けており，その門戸であった九州地方は，きわめて重要な位置にあった。そのため，古くは「那ノ津官家」による支配，次には筑紫大宰が置かれ「大宰府」による西海道の一元支配がなされていく。このような状況の中で肥前国は，いつごろ，どのような形で成立していくのであろうか。現在までの各研究者の文献を中心に述べてみたい。

古来，九州は「ツクシ」つまり，釈日本紀にいう「筑紫洲」であり，古事記の「筑紫島」というように汎称されていた。それが4国に区画されてくるのであるが，古事記に「筑紫島，身一つにして面四つあり。面海に名有り。故れ，筑紫国を白日別と謂ひ，豊国を豊日別と謂ひ，肥国を建日向日豊久士比泥別と謂ひ，熊襲国は建日別と謂ふ。」とある。この区画された時期について井上辰雄[1]は，これらの国名が和風の「別」を名のっていることと，熊襲の第一次的討伐が行われた時代とから「5世紀代以後で，しかも熊襲討伐のことがいまだ朝廷の記憶にきわめて印象的に残っている時代で，5世紀末遅くとも6世紀初頭の所伝をもとにしているのではあるまいか」として，「もし，この推定に誤りがないとすると，国造制が漸次施行されていく時期に前後する」と述べている。

それでは「肥国」が「肥前国」と「肥後国」とに分かれたのはいつ頃であろうか。「肥前風土記」にも「肥前国者，本與肥後国合為一国」が「後分両国而為前後」となったことが記されているが，その時期については明らかにしていない。米倉二郎[2]は「常陸風土記」で坂東が分割されたり，国造領が併合されていくのが孝徳朝（645～654）であるので，肥前国の成立も同じ頃ではないかと推定している。井上辰雄[3]は「続日本紀」の大宝三年（702）の条に「筑紫七国」とあるので，この時期には七国がすでに置かれていることと，七国の国名が史料的に初見されるのが，肥後国（696年）「持統紀十年四月条」，筑前国（698年）「続日本紀」文武二年三月条，豊後国・日向国は築前国と同じ，豊前国（702年）豊前国戸籍，筑後国（707年）「続日本紀」慶雲四年五月条，肥前国（740年）「続日本紀」天平十二年十月条である。このことから，持統十年(696)ころから大宝令施行の時期ころには完成していた。もっと限定すれば，持統九年(695)の「造籍の年」が分国の年としてクローズアップされるとしている。そして，九国が完全にそろうのが，和銅六年（713）で，それ以後，壱岐・対馬・多禰の三島を加えて九国三島となったと論じている。

このように「筑紫洲」―「筑紫四国」―「筑紫七国」―「九国三島」の分割の経緯は，大和朝廷による行政権の九州地方への浸透を示し，熊襲や隼人などの内属化による中央国家の支配強化を意味している。井上辰雄[4]によれば，九州の豪族は，三世紀以来さほどの変動を経験せず身分は県主一国造一郡司と改められながらも一応順調に成長をとげてきたことをあげている。肥前

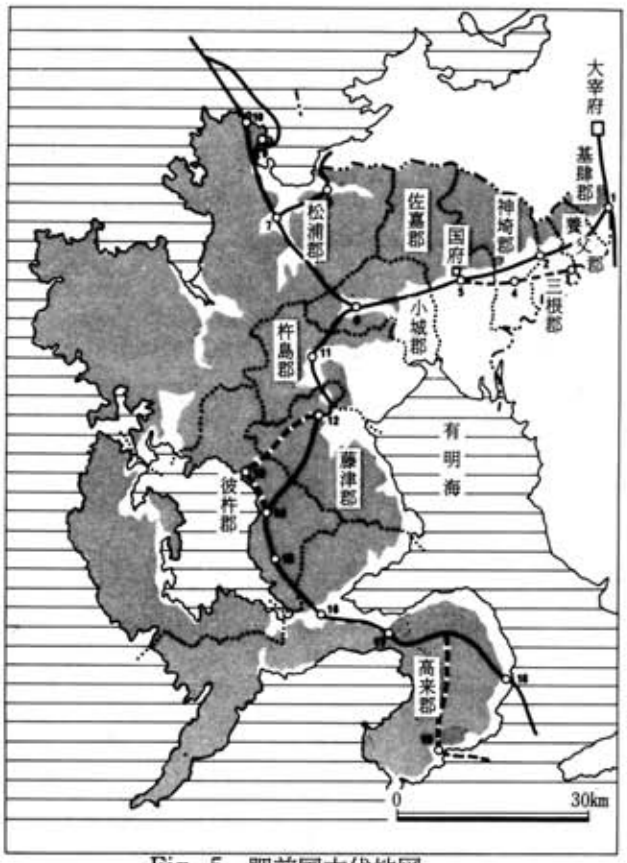


Fig. 5　肥前国古代地図

（○は駅推定地）

1 基肄駅	2 切山駅	3（？）	4（？）
5 佐嘉駅	6 高来駅	7 賀周駅	8 大村駅
9 逢鹿駅	10 登望駅	11 杵島駅	12 塩田駅
13（？）	14 新分駅	15（？）	16 船越駅
17 山田駅	18 野島駅		

国の国府が設置される以前の状況を知る上から湯口圭[5]が作成した「県主・国造一覧表」から肥前国の分だけを転記すると以下のようになる。

〈県主〉

○嶺県主泥麻呂（日本書紀）

○県主等祖大荒田（風土記）

○末羅県（古事記）○松浦県（日本書紀・日本紀略・風土記・寧楽遺文・万葉集）

○杵嶋県（風土記）

○高来県（日本書紀・日本紀略・類聚国史）

〈国造〉

○火国造弟市鹿文（日本書紀）

○火国造（釈日本紀）

○火国造遅男江命（先代旧事本紀）

○筑志米多国都紀女加（同上）

○末羅国造矢田稲吉（同上）

○松津国造金弓連（同上）

○葛津立国造若彦命（同上）の名前が散見される。次に，岡崎敬の資料にもとづいて秦源宏[6]が作成した「九世紀以前郡司一覧表」によって肥前国の郡司だけを抜き出してみると

○基肄郡　貞観八年（866）山春永（三代実録），○佐嘉郡　宝亀七年（776）佐賀君児公（日本霊異記下）　佐賀君（佐賀県主），○松浦郡　宝亀六年（775）川部酒麻呂（続日本紀）

○藤津郡　貞観八年（866）葛津貞津（三代実録）　○高来郡　貞観八年（866）大刀主（三代実録）の名が見られるだけである。

このような在地土豪たちの存在の上に律令制地方官として「国司」が派遣され，その国司が常駐する地方官庁として国庁・国衙（国庁と同義と解する）が作られ，国庁を包括する古代都市全体を「国府」と一応解する[7]。藤岡謙二郎[8]は，国府はわが国最初の人為的地方都市であったとしているが，肥前国府の場合も都市計画にもとづいた整然たる建物の配置をもった人為的な地方都市であったことが発掘調査の結果いえる。

肥前国府の所在については「和名抄」の20巻本の巻5，国郡部第12，西海郡第67の肥前国の11の郡名の中の小城に続けて和訓を「乎岐」とし並記して「国府」とある。このことについて吉田東伍[9]は「小城に絶えて府址を見ず，佐賀郡久池井に遺址ありて，其国分尼寺井に惣社も此れに在れば小城に作るは誤ならん」と述べており，これ以後「肥前国府」の所在は大和町久池井周辺に設定されてきた。木下良[10]は，初期の国府は水害を被るに及んで「和名抄」の編纂当時には小城郡に移転し平安末期までには再度佐嘉郡に移転したと推論している。日野尚志[11]はまったくの臆測であるがとしながらも，国府は移転されており，小城郡とすれば駅路と祇園川の交差する小城郡六条吉原里か七条布施里付近であろうとしている。

「和名抄」について池辺弥[12]は「郷名が源順が生存した十世紀よりむしろ一世紀さかのぼる九世紀，特にその前半の資料に基づいたものと見られる」と結論づけ，平安時代前期の国府の記事としては価値の高いものであるとしている。しかし，甲斐，相模，丹後，備前，豊後，肥前，肥後などのように現実の国府跡と思われるものとの不一致も指摘されている。肥前の場合のみを考えると①和名抄の誤記　②国府の移転　の二つが考えられていたが③小城郡の拡大で現在の大和町が佐嘉郡でなく「和名抄」の時期は小城郡であったとは考えられないだろうか。その推論の根拠は「和名抄」巻9の郷里部の肥前国第129を見れば，佐嘉郡に城崎，巨勢，深溝，小津，山田があり，小城郡に川上，甕調，高来，伴部があげてある。風土記の郷数は佐嘉が6で，小城が7であるのに比べれば郷名が不足しているが，正保2年（1645）の郷村台帳では，佐嘉郡上佐嘉上郷に入る「川上村」が「和名抄」では小城郡に属している。このことから，現在の大和町川上一帯が小城郡であったなら，現在の発掘調査で検出されている国府跡が小城郡であったか，または，小城郡と混同したかのいずれかは考えられないであろうか。そうであれば小城への大移動はなかったことになるが，今後の調査に待ちたい。

肥前国府跡の発掘調査が1975年から開始され国庁跡の建物跡が検出されるに伴い「国府域」についていくつかの論文が書かれた。米倉二郎[13]は「発掘された国庁址は佐嘉郡の十一条一里の三十四坪と三十三坪の坪界線にその中軸線が一致する」として「肥前国が始め中国であったようで，天平宝字元（757）年に介が任命され上国に昇格したであろう。従って，当初の肥前国府は方六町以下であったと思われるので，発掘された国庁址相当の府郭として推定した方五町域が初期の国府址とされるべきであろう。かくて上国昇格によって方八町の府郭に拡張された。」と述べている。日野尚志[14]も条里の十一条に国府域を比定している。高橋誠一[15]は，米倉新説の意義を認めながら，方位の違い，条里の施行，国庁址の時期などの点から否定的な見解にたって「地割復原図」にもとづく独自の府域を肥前国分寺跡に隣接した西側に方4～6町と考えている。しかし，発掘調査によって検出された国庁跡との完全に離れて存在していることについては，「推定国府域内に国庁が立地していたが何らかの要因（たとえば上国昇格や災害等）によって国庁のみが府域外へ移転し都市としての府域自体はそのまま原位置に存続した。初期

は国庁のみが建設され後に府域の建設と整備が国庁とは離れた地で実施された。あるいは2か所に国庁を含む国府が営まれた。」と様々な可能性を想定している。確かに高橋誠一の想定した府域内からは布目瓦が点々と採集されており考古学的遺跡の存在する可能性は高いといえる。

九州は大宰府によって一元支配されていたが，大宰府への古代官道が木下良[16]や日野尚志[17]によって復原され，駅路は国府と隣接していたであろうとしている。

国庁の人的構成などについては米倉二郎[18]の研究があり，中国から上国への昇格に伴う介1名の増加や，介や目が令制より高い位階をもっていたことの指摘がある。肥前国司の初見は，天平勝宝二年（750）の吉備真備であるが，出土した土器・瓦から推定した国庁の成立期を8世紀前半とすれば初期の守であるが，はたしてそうであろうか。「六国史」に見える国司が一覧表になっているが，それ以後も除目が行われ「肥前守」に任ぜられている。「肥前旧事」によれば弘安九年（1286）藤原實泰が肥前権守に任じられているのが最後のようである。しかし，国司の権限がいつまで存続し，国庁がいつまで政務をとっていたか，その廃絶を示す資料はあまりにも見あたらない。

(註)

(1) 井上辰雄「筑紫の大宰と九国三島の成立」(『古代の日本』3・九州) 1970
(2) 米倉二郎『佐賀県史』上巻 1968
(3) 註(1)と同
(4) 井上辰雄「筑・豊・有の豪族と大和朝廷」(『古代の日本』3・九州) 1970
(5) 湯口圭「県主・国造一覧表」(『古代日本』9・研究資料) 1970
(6) 秦源宏「九世紀以前郡司一覧表) 註(5)文献所収
(7) 「出雲国庁跡発掘調査概報」に「国府」「国庁」「国衙」の意義を述べているがここでは一応このように解することにする。
(8) 藤岡謙次郎『国府』 1969
(9) 吉田東伍『大日本地名辞書』上巻 1907
(10) 木下良「災害による国府の移転」(『歴史地理学紀要』) 1976
(11) 日野尚志「西海道国府考」(『大宰府古文化論叢』上巻) 1983
(12) 池辺弥「和名類聚抄」(『古代の日本』9・研究資料) 1970
(13) 米倉二郎「国の昇格と国府の変容」(『史林66―1) 1983
(14) 註(11)と同
(15) 高橋誠一「肥前国府に関する再検討」(『人文地理』第36巻第1号) 1984
(16) 木下良「西海道の古代官道について」 註(11)文献所収
(17) 日野尚志「駅路考 ── 西海道・南海道の場合 ──」(『九州文化史研究所紀要』5) 1979
(18) 米倉二郎「佐賀県史」・註(13)

Ⅳ 遺　　構

肥前国府跡の確認調査および九州横断自動車道路建設に伴う惣座遺跡・久池井Ｂ遺跡・東山田一本杉遺跡などの緊急発掘調査により，いわゆる律令時代と呼ばれる時代の遺構が多数検出された。中でも掘立柱建物跡は大規模なものだけでも60棟以上も数え，やはり大和町久池井一帯に推定されていた肥前国府跡の存在を裏付けるかのようであった。

各地区の遺構の概要については，「Ⅰ　調査の経過」で述べたので，ここでは，政庁跡，その他の地区に分け，検出した遺構について説明を加える。

１．政庁跡の遺構（折り込み１．Fig.63，PL２～11）

昭和53年11月～54年３月の第４次調査で，ＱＦ地区から，これまでで最大規模の建物ＳＢ090（10.8m×25.06m……４間×９間の四面廂建物跡）が確認された。以来，昭和57年の第８次調査までに，この地区と南のＱＥ地区にかけて，ひとつの区画のなかに整然と配置された建物群が検出されて，これが肥前国の国庁の主要なる区域，政庁跡と考えられている。

検出された遺構の概略[1]はFig.63に示すとおり，区画を示す築地跡，出入りの門跡，その内部に配置されている建物跡などである。その規模，構造，及び配置から，政庁跡のなかでの名称は，さきの四面廂建物跡ＳＢ090を正殿，その北側のものＳＢ060を後殿，南側のものＳＢ093を前殿，四面廂建物跡ＳＢ090から東西に延びた建物跡ＳＢ099を回廊，さらに南側前面に東西対称に存在するとみられるその南北棟ＳＢ095，ＳＢ125を脇殿，もっとも南の，築地に付くものＳＢ116を南門とした。

そこで，まず遺構の方位をみると，これらの建物跡は，すべて南北の軸線方向を一つにしており，北から６°54′西傾する。また，築地は東・西面のものは，この角度に平行に，南・北面のものは，直交にはしるという方向をとる。

つぎに，これらの規模・配置の関係をみると，前殿・正殿（身舎部）・後殿の三殿は，その妻部をそろえており，つまり，桁行の規模，南北の中軸線を同じにしている。また，正殿の西妻部のほぼ中央には回廊がとりついているが，この回廊の西端は西面築地のところまでのびる。脇殿は，西脇殿において南北二棟確認されているが，その北棟の北妻部は，正殿の南面廂とそろえている。南門は，八脚の門であるが，南面築地より北に入り込む。このため，築地も北に折れて南門にとりつくことになる。

また，これらの位置関係をみると，正殿と東・西面築地基底部との心心距離は同じで，38.6m，正殿と北面築地基底部との心心距離は48.3m，正殿と南面築地基底部との心心距離は56.2mである。また，正殿と前殿との心心距離は16.6m，間隔は8.5m，正殿と後殿との心心距離は21.3m，間隔は13.2mである。また，正殿の南前面と前殿の南前面との距離は13.9m，後殿の

南前面との距離は24.0mである。さらに，正殿と脇殿の中軸線間の平行距離は23.4mである

以上のようなことをふまえて，それらの遺構と，政庁域内で確認されたその他の遺構について，各々みてみる。

(1) 庁域を示す遺構（Fig. 6～8，PL. 2～4）

政庁跡で，庁域を示す遺構を検出した区域は，地域西のＱＦ36～38，ＱＦ41，ＱＦ43，Ｑ47，ＣＢ01，北西のＱＦ59，北のＱＦ24，ＱＦ48，ＱＦ58，南東のＱＣ61，南のＱＦ42，Ｑ49，ＱＥ53，ＱＦ57区である。西のトレンチでは西面築地を，北西では北西隅部の築地を，では北面築地を，南東では南東隅部の築地を，南では南面築地を，それぞれ確認している。

西面の築地　ＱＦ47区から南へ36，37，38，43区とみてみると，築地基底部の西端の線が南にはしる。また，ＱＦ41区と南のＱＦ45区では，東端の線が南北にはしる。このことから築基底部の幅は平均3.0mと考えられる。また築地の雨落ち溝は，ＱＦ37区とＱＦ41区に良く残しているが，その幅は約0.8mである。なお，ＱＦ36区のＳＫ113はこの雨落ち溝ＳＤ108を切

北西隅部の築地　ＱＦ59では，西面築地及びその雨落ち溝の延長が明瞭に検出されている。かし，北面築地の延長については，さほど明瞭ではないため，西面と北面の築地の隅部の確はやや困難であるが，南から延びた東側雨落ち溝が，トレンチの南東部で東方向へ折れるこそれにＱＦ24区，ＱＦ58区の北面築地の状況から，この位置が築地の北西隅部と考えられる

北面の築地　ＱＦ24区とＱＦ58区から，遺構の東西への延長が確定できる。築地基底部の幅

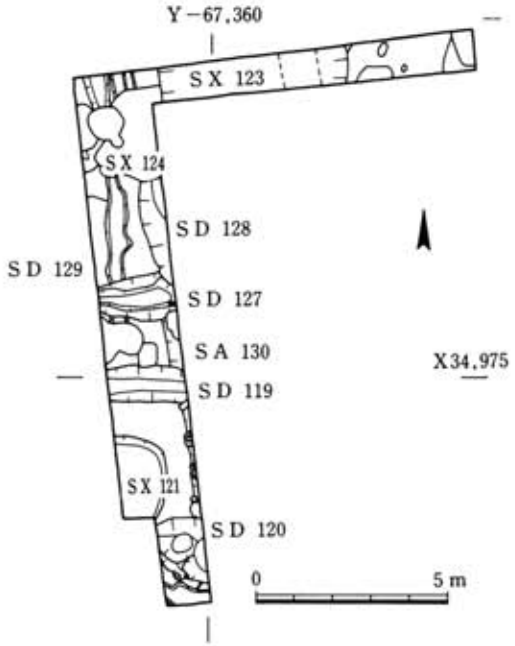


Fig. 6　国庁南東隅（ＱＣ61）平面図

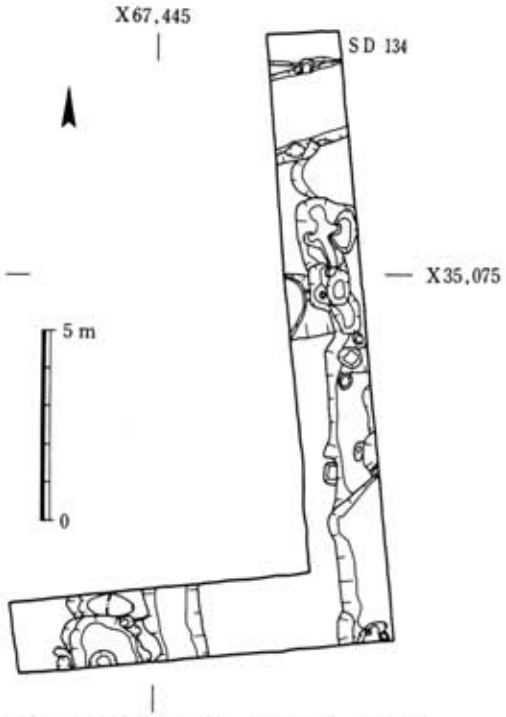


Fig. 7　国庁北西隅（ＱＦ59）平面図

3.3mである。南側雨落ち溝ＳＤ097の幅は2.5m、北側ＳＤ098のは1.5mである。また，この築地の位置においては，３間×５間の掘立柱建物跡ＳＢ104が検出されているが，溝ＳＤ097の溝底でその柱掘方の痕跡が確認されるので，この建物跡は溝よりも古い。つまり，北面築地よりも古いと考えられる。

南東隅部の築地　ＱＣ61区の東端で東面築地を，同じ区の南側中央付近で南面築地をそれぞれ確認しているので，それらの隅部の位置と考えられる。東面築地の基底部の幅は3.6m，西側雨落ち溝の幅は1.0mである。南面築地の基底部の幅は1.7m，北側雨落ち溝の幅は0.7m，南側のは0.8mである。なお東面築地の西側雨落ち溝はＳＸ123を切る。また，南面築地の心より6.0m南に溝ＳＤ120がはしる。

南面の築地　ＱＣ61区の遺構から，その規模は判断できるが，ＱＥ49にも遺構が残存しており，布掘りと築地の心を示す状況がみられる。ただ，ＱＣ61区のような雨落ち溝は検出できていない。この築地の心より6.0m南に溝ＳＤ120がはしる。その他　ＣＢ01区の溝ＳＤ115，ＱＦ59の溝ＳＤ134の２条の溝は，その延長を確認していないが，政庁域を示す築地の外側に，さらに区域が存在する可能性を考えさせるものである。今後の調査を待ちたい。

以上のことから，築地によって囲まれる政庁域の規模は，東西77.2m，南北104.5mと考えられる。

(2)　南門跡ＳＢ116（Fig.８，PL.　５）

ＱＥ52区で確認された南門跡は，後世の破壊が他の建物跡よりもひどい。特に西側部分では，掘方が残存していないものもあり，この南門跡については，主に残存状態の良好な東側部分から判断する。

Fig.63にみられるように，南門本柱は南面築地基底部の心より2.8m北へ入り込む。また，築地と門の取りつきは互いの心と心を合わせる方法をとるが，このために築地は門の南北中軸線より15.4mのところで北へ折れる。

門は２回の建て替えが行われているが，３期とも２間×３間の大きさで建物方位も南北の軸線は，北から６°54′西傾するものと考えられる。当初の第１期のものは掘立柱建物で，梁行4.5m，桁行6.9mである。また，柱間の平均寸法は梁行2.25m，桁行1.35mで，中央柱間のみ4.2mと広くなっている。柱掘方は一辺約1.0mの方形である。その埋土は黒色土が主で，黄色粘土が混じる。第２期のものも掘立柱建物で，梁行2.15m，桁行1.35mで，中央柱間は3.3mとやはり広くなっている。ただ，第１期のものと比べると，規模はやや小さくなっている。柱掘方は1.0mの円形である。その埋土は褐色土が主で，黄色粘土が混じる。第３期のものは礎石建物であるが，検出した礎石５個すべてが，後世に掘られた穴に落としこまれており，原位置を保つものはない。ただ，この区域の南東隅と中央北側に残る根石，それに掘立柱建物の掘方に重複して，やや不整形に広がる礎石据えつけの掘り込みから，２間×３間で，規模が5.4m×９mほ

どの建物が推定される。礎石に使われた石は花崗岩で，そのひとつの面に調整を加え，直径0.8m，高さ0.03mほどの円形柱座を造りだしている。

また，この区域の北西隅と南西隅に，花崗岩の玉石敷が部分的に残存している。北西隅のものは東西方向に，南西隅のものは南北方向に，それぞれ2列敷いているが，いずれもこの南門跡の建物方位と合うことから，この石敷は南門の基壇まわりの化粧と考えられる。これらの石敷はそれぞれ対称位置のものが確認されていないが，門の中軸線で折り返すとすれば，基壇の規模は，東西長14.0m，南北長9.8m，また高さは約1m（礎石の柱座面と根石から割り出す）が推定される。

(3) 前殿跡SB093（Fig. 9・10，PL. 6）

2間×7間（5.4m×20.86m）の掘立柱の東西棟で，柱間の平均寸法は，梁行2.7m，桁行2.98mである。建物方位は，南北の軸線が北から6°54′西傾する。柱掘方は一辺約1.3mの方形，柱痕径は約0.3mである。

確認された掘方には，一部を除いて，新旧の切り合いが認められることから，建て替えを行っている。建て替えは一度で，規模はほぼ同じであるが，建物推定の位置は，当初の第1期の建

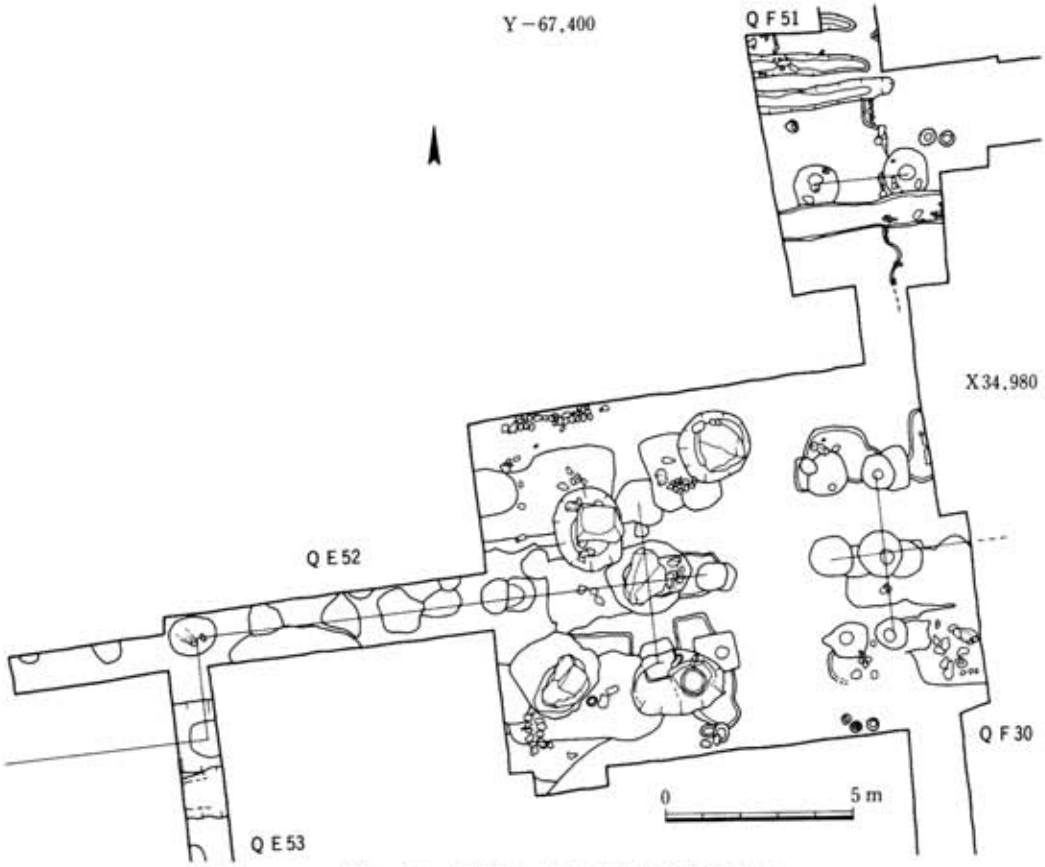


Fig. 8 南門跡（SB116）周辺平面図

物より0.5m北に第２期のものが建て替えられているようであり，わずかに移動させている。

また，この建物跡は礫組みの側溝をもっている。溝底に幅が同じ位で，表面が平らな石を１列並べ，それより一段高く，北側に２列，南側に１列の石を壁として配置したものである。溝幅は0.3m，深さ約0.1m。花崗岩の玉石を使う。建物跡の北側だけに明瞭に残るが，ＱＦ21区の痕跡の状況から，妻部の方にも折れて回る可能性がある。この溝と，第１期の建物跡の北側柱との心心距離は，約1.2mである。しかし，この側溝と第２期の建物跡との関係をみると，第１期において，溝は北側柱の掘方端から約0.4m離れていたが，第２期にはそれと一部重なるという状況がでてくる。しかも，その部分において掘方の埋戻し後，側溝を修復した形跡がない。このようなことから，この側溝は第１期に造られたが，第２期の際には機能していなかった可能性が考えられる[2]。

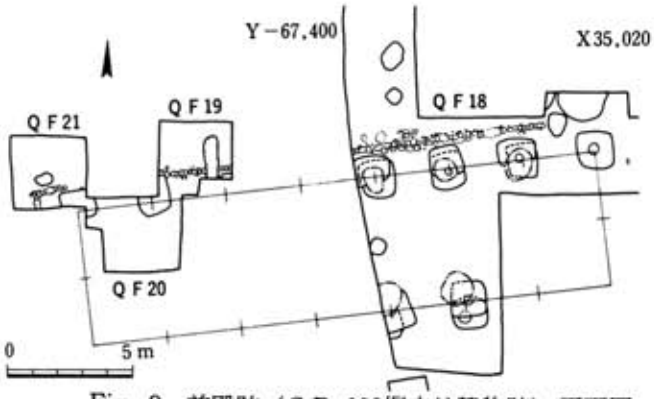


Fig. 9　前殿跡（ＳＢ 093掘立柱建物跡）平面図

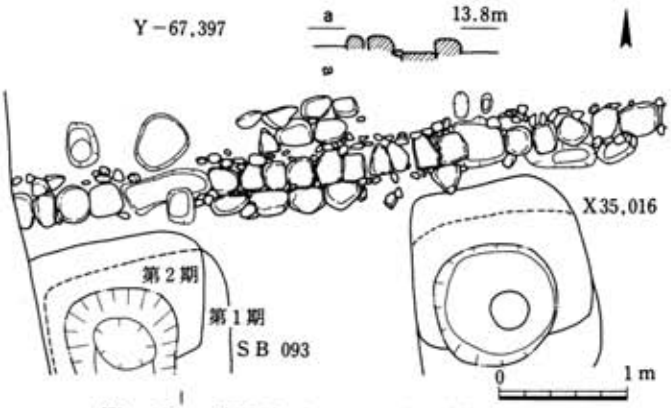


Fig. 10　前殿跡（ＳＢ 093）雨落溝平面図

(4)　正殿跡ＳＢ090（Fig.11，PL. 7）

この建物跡の東側妻部と廂の部分を確認していないが，検出した身舎部の西妻部が，北の後殿跡，南の前殿跡の西妻部とそろうことから，その構造は，４間×９間（10.8m×25.06m）の掘立柱の東西棟で，四面に１間ずつ廂がでるものと考えられる。身舎部は２間×７間（6.6m×20.86m）となる。この地区で唯一

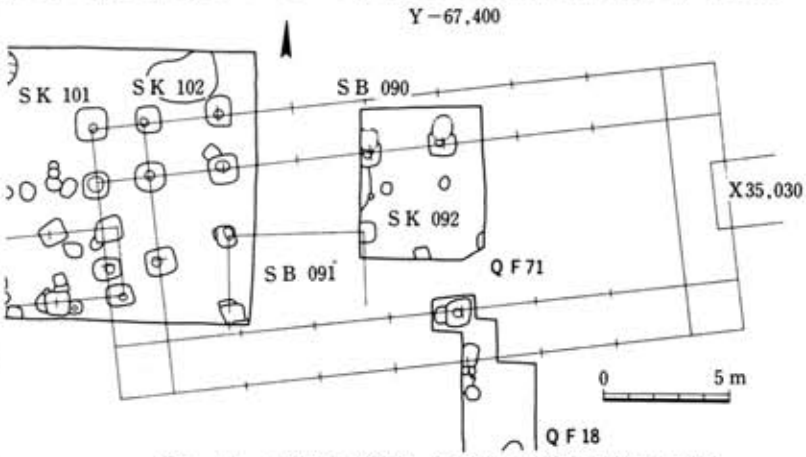


Fig. 11　正殿跡（ＳＢ 090掘立柱建物跡）平面図

の四面廂建物で，また最大規模のものである。身舎部の柱間の平均寸法は，梁行3.3m，桁行2.98m，また廂は2.1mである。建物方位は，南北の軸線が北から6°54′西傾する。柱掘方はともに，一辺約1.1mの方形で，前殿跡や後殿跡に比べるとやや小さい。しかし，柱痕径は約0.3mある。

検出した柱掘方には，ＱＦ17区でみられるように柱の抜き取り跡があるものがある。ただ，掘形の平面や断面をみるかぎりでは，その建て替えは認められないようである。

また，この正殿跡には，廂の中央部に単廊形式の回廊がつく[3]。

(5) 後殿跡ＳＢ060（Fig.12，PL. 8）

２間×７間（5.4m×20.86m）の掘立柱の東西棟で，柱間の平均寸法は，梁行2.7m，桁行2.98mである。建物方位は，南北の軸線が北から6°54′西傾する。柱掘方は一辺約1.3mの方形，柱痕径は約0.3mである。

ＱＦ16区では，ＳＫ080土壙などからかなり壊されているが，この建物跡の北側柱列の掘方において，壙底にさらに別の柱痕跡が観察されることから，この建物跡では，１度建て替えが行われている。それらの規模はほぼ同じであるが，建物推定の位置は，当初の第１期の建物より0.3m北に第２期のものが建て替えられており，わずかに移動させている。しかし，確認されたいずれの掘方にも建て替えを示す新旧の切り合いが認められないことから，第２期の建物を建てる際には，第１期の建物の掘方を拡張しているものの，ほぼ同じ位置に配置しようとしていたことが考えられる。

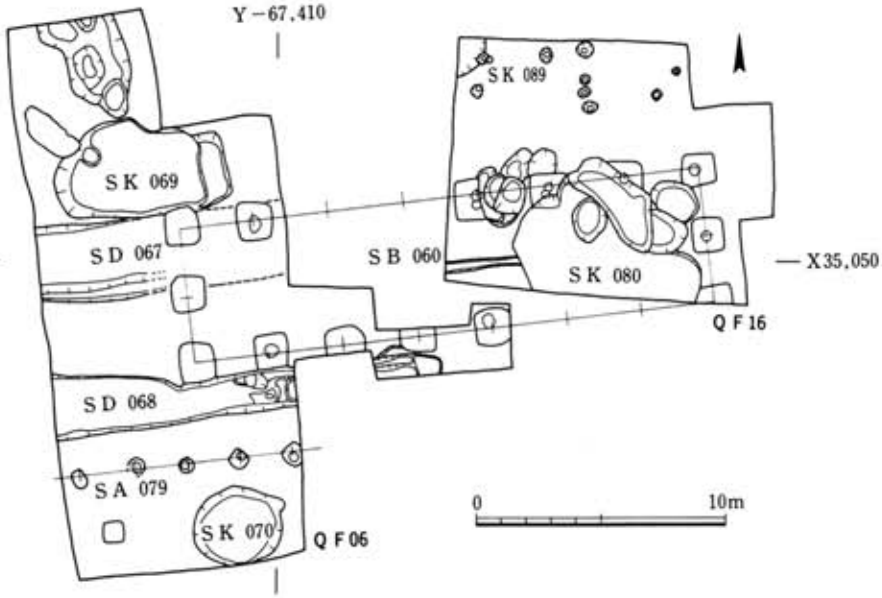


Fig. 12 後殿跡（ＳＢ060掘立柱建物跡）平面図

これらの掘方は，ＱＦ06区でＳＤ067，ＳＤ068を切り，ＱＦ16区でＳＫ080などの不整形土壙に切られる関係にある。

また，この建物跡から心心距離で6.7mの位置に，ＳＢ079がある[4]。

(6) 回廊跡ＳＢ099（Fig.13，PL.7）

昭和56年の第６次調査で，西へ８間（21.6m，柱間の平均寸法2.7m）まで確認していた[5]が，第７次調査でさらに西へ拡げると，2.7m間隔でのびる柱穴はひとつであったので，この掘立柱の建物跡の規模を１間×９間（2.7m×24.3m）とした。梁行の柱間の平均寸法は，桁行と同じ2.7mである。建物方位は，南北の軸線が北から６°54′西傾する。柱掘方は一辺約0.9mの方形，柱痕径は約0.3mである。建て替えは認められない。

この検出した建物跡の東側が正殿ＳＢ090の妻部に取りつくため，その回廊として考えられている。この回廊は単廊形式をとるが，その取りつけ位置は，正殿の東西中軸線よりも北へ0.6m回廊の心をずらせたところである。また，取りつき部である東妻部の柱掘方は，廂の柱掘方の線よりも0.6m内に入り，正殿の妻柱と交叉することになる。

また，逆に西面築地との関係であるが，ＱＦ28区にみられるように，回廊の西妻部は築地基底部の東端の位置で終っている。ただ，回廊の延長方向となるＱＦ36区において，築地基底部の西端の位置に掘立柱の掘方が並んでいることから，門のようなものの存在が考えられるが，現状では不明である。なお，これら掘方と築地の西溝との切り合いは明確ではない。

(7) 脇殿跡ＳＢ095，125（Fig.14，PL.10）

昭和55年度の第６次調査において，ＱＦ23区で確認された柱穴[6]から，６°54′西傾する方向で南北にトレンチを設定し，発掘した結果，南北に縦に並ぶ２棟の掘立柱の建物跡を検出した。

いずれも２間×７間の南北棟であるが，北棟と南棟では，建物跡の検出状況からみて，その規模や配置などに若干の相違が確認できる[7]。

北棟では１回の建て替えが行われている。しかし，第２期のものも，第１期のものとほぼ同じ位置で建て替えられており，規模は同じである。5.3m×17.5mで，柱間の平均寸法は梁行2.65m，桁行2.5mである。また，この建物跡では，南２間を仕切るためのものと思われる柱穴がみられる。直径0.4mの掘方で，小さい。

第１期の柱掘方は一辺約1.2mの方形に近い形である。その埋土は黒色土が主で，黄色土が混じる。第２期のものは直径1.0mのほぼ円形であるが，楕円形のものもある。その埋土は灰褐色であるが，柱穴のすべての埋土に炭化物が多く混じる。焼土らしき赤褐色の土もみられる。

南棟では，２間×７間の構造の建物跡は，北棟と同じように，やはり１回の建て替えが行われている。ただ，建て替えの位置は異なっており，第２期のものは，南西方向に0.5mほど，全体的に移動する。また，規模も梁行は広くなるが，桁行は逆に狭くなる。

第１期の建物は，5.0m×20.8mで，柱間の平均寸法は梁行2.5m，桁行2.97mである。柱掘方は一辺約1.2mの方形である。その埋土は黒色土が主で，黄色粘土が混じる。第２期のものは，5.3m×19.2mで，柱間の平均寸法は梁行2.65m，桁行2.74mである。柱掘方は直径0.7mの円形であるが，やや不整形である。埋土は灰褐色で，やはり炭化物が混じっており，北棟の

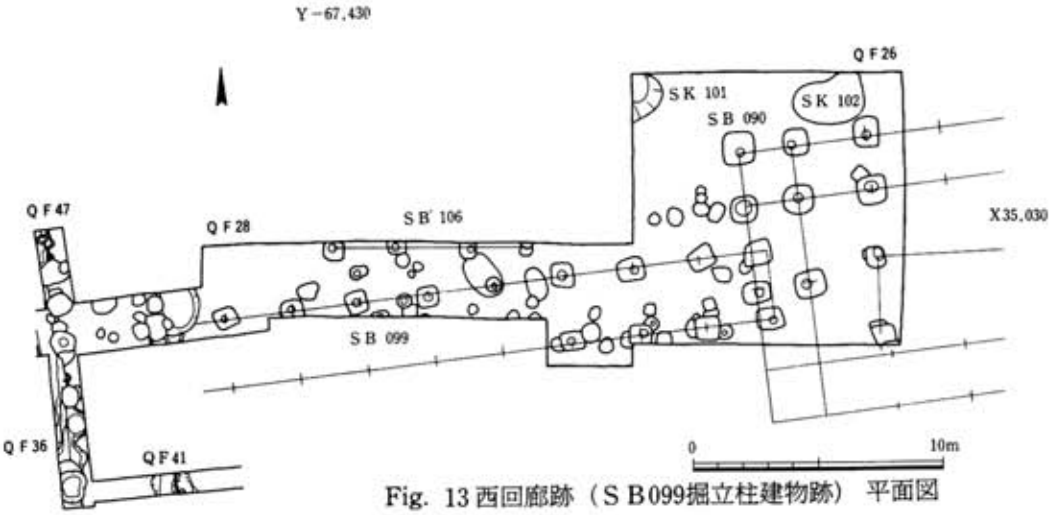


Fig. 13 西回廊跡（ＳＢ099掘立柱建物跡） 平面図

第２期建物跡と状況は似ている。

ところで，この南棟を発掘した区域のなかで，ＱＦ60区においては，これら脇殿（２間×７間の建物）とは構造的に異なる建物跡が２棟確認されている。

１棟はＳＢ136建物跡であり２間×３間（3.8m×5.0m）の東西棟で，柱間の平均寸法は梁行1.9m，桁行1.67mである。また，柱は総柱である。建物方位は，南北の軸線が北から６°54′西傾する。柱掘方は一辺約0.8mの方形であるが，中央の２個だけは，約1.2mで大きい。埋土は黒色土が主で，黄色粘土が混じる。

もう１棟はＳＢ135建物跡であるが，梁行の大きさを確認しておらず，今のところ２間？×４間以上（4.5m×8.4m以上）と推定される。建物方位は，南北の軸線が北から６°54′西傾する。柱掘方は不整形なものが多い。埋土は黒色土が主で，黄色土が混じる。

さて，これら建物跡と脇殿跡との関係であるが，前者の２棟の柱穴は，いずれもこの脇殿跡の第１期及び第２期のものに切られていることから，これらは脇殿跡よりも古いと考えられる。しかし，これらのＳＢ135と136との間には，柱穴の切り合いはなく，新旧関係は不明である。ただ，建物の位置からみて，同時期の存在も考えられないことから，この区域は４期の時期が想定されよう。

次に配置関係であるが，ＳＢ135，ＳＢ136，南棟第１期建物は，それぞれの東側柱列がそろう。さらに，ＳＢ136と南棟第１期建物は西側柱列もそろえ，両建物の東西長は同じである。また，南北両棟の第２期建物は，東・西両側の柱列を，南北一線にそろえている。以上のことから，これら４期にわかれる建物群において，その東側柱列はいつもほぼ同じ線上におかれるが，西側柱列は時期により，その位置が変わっていることがわかる。また，脇殿としては第２期に同一の計画性をもっていることも考えられる。

(8) その他の遺構

政庁跡一帯では，その他にも建物跡，遺跡，土壙，性格不明の遺構が多く検出されている。それらのなかには，政庁跡と同じ方位をもつものもあれば，まったく異なるものもある。以下，それらを抜粋してみる。

ＳＢ104掘立柱建物跡（Fig.15，PL．11）

北面築地と同じ位置で検出された，３間×５間（5.8m×11.6m）の東西棟で，その柱間の平均寸法は，梁行1.93m，桁行2.32mである。建物方位は，南北の軸線が西から６°54′西傾する。掘立柱で，その掘方は一辺約1.0mの方形で，柱痕径は約0.25mである。また，掘方には建て替えは認められない。

建物の東妻部が，政庁の南北中軸線より0.6m西であり，中心よりずれたところにこの建物跡は位置する。ただ，中軸線をはさんだ，対称位置の地点での調査は行っていない。

また，築地との新旧関係では，築地溝での状況[8]から，この建物の方が古い。

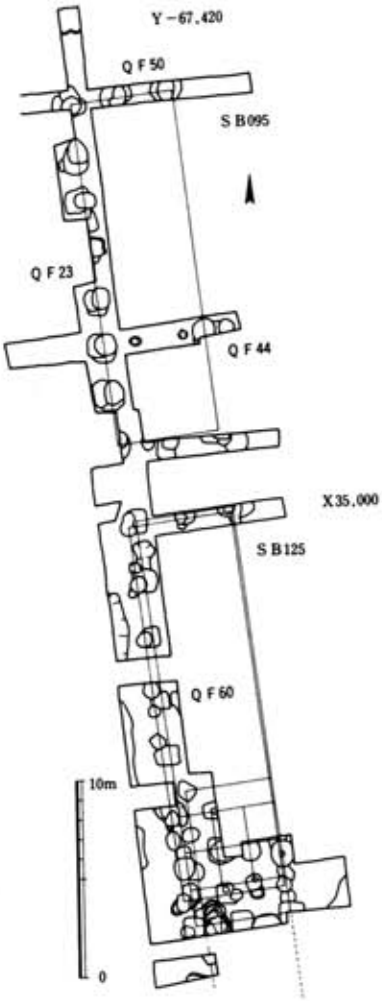


Fig. 14　政庁西側脇殿（ＳＢ095・125）平面図

ＳＡ079柱列

ＳＢ060後殿跡の南側柱列から，4.0m南に離れている東西方向の掘立柱列で，今のところ，４間まで確認されている。柱間は2.1mである。柱列の方位は，後殿跡の南・北側柱列と同じである。柱掘方は直径約0.6mの円形であるが，やや不整形である。また，柱痕径は約0.3mで，大きい。

方位の関係から，後殿と同時期のものと思われ，その目隠し的な遺構か[9]。

ＳＢ170柱列

ＳＢ116南門跡の本柱から，10.0m北に入ったところにある東西方向の掘立柱で，今のところ，柱穴は２個である。柱間は2.4mである。柱掘方は直径約1.1mの円形で，柱痕径は0.35mで大きい。

また，切り合いでは，南のＳＤ172溝には切られるが，鴻臚館式の軒瓦を用いたＳＸ173を切るという関係にある。

やはり，目隠し的な遺構であろうか。

ＳＢ091掘立柱建物跡

全体の規模は明らかでないが，掘立柱の建物跡である建物方位は，南北軸が北から２°15′西傾する。

ＳＢ106掘立柱建物跡

東西方向にはしる掘立柱で，今のところ３間は確認できる。柱間は，東から2.3m，3.0m，2.5mと異なる。方位は，座標北とほぼ直交する角度である。

ＳＤ120溝跡

南面築地の基底部中心から，6.0m南に位置する溝で，その東端は南門の基壇西端のところでとまる。溝の幅は約1.2m，深さは約0.6mで，西へむけてやや深くなる。

築地とこの溝の関係から，築地の南側には犬走り的な狭い広場が存在していたと思われる。

ＳＤ115溝跡

政庁跡の南北中軸線から，西へ66.2mのところで検出された南北溝である。調査面積が狭いため，走る方向を確定できていないが，政庁跡の外郭の遺構の可能性もある。

ＳＸ171遺構

ＳＢ170柱列，ＳＤ172溝跡にこわされている遺構で，鴻臚館式の軒平瓦や丸瓦を南北方向に立てて並べたものである。東側が約0.3m高い。また，並べた方向は，政庁跡の南北中軸線と同じである。中軸線から東へ4.0mのところにある。ただ，南北の境ははっきりしない。

ＳＸ173遺構

ＱＦ41で検出された大きな壙で，おびただしい量の土師器や瓦（丸瓦，平瓦，鬼瓦など）が出土した。埋土には炭化物や焼けた赤褐色の土もまじっていることから，廃棄壙であろうか。

ＳＸ123遺構

ＱＣ61で検出された大きな壙である。東面築地に切られる。土師器や須恵器が出土している。

ＳＸ114遺構

ＱＦ43区と46区で検出された礫敷の遺構である。その走る方向は，政庁跡の方位よりもやや西へ傾く。幅は0.7～1.1mで，礫は細かい。

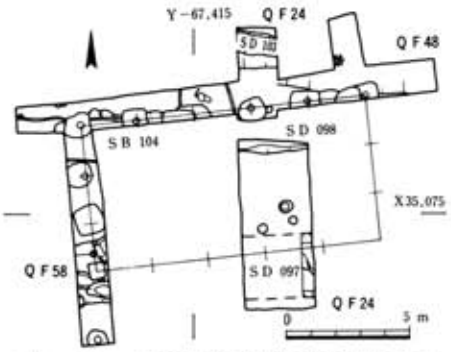


Fig. 15　ＳＢ104掘立柱建物跡平面図

（註）

(1)　「肥前国府跡の調査」『日本歴史』第424号（1983）において，一応の報告を行ったが，再検討すべき点が多く，本報告において，各々訂正したい。

(2)　田平徳栄『肥前国府跡Ⅱ』　佐賀県文化財調査報告書第58集　佐賀県教育委員会（1981）を参照

(3)～(6)・(9)　(2)に同じ

(7)　(1)に同じ

(8)　本報告書「(1)　庁域を示す遺構」

2．政庁跡周辺の遺構

(1) Q地区（政庁域外）の遺構

Q A地区11発掘区（Fig.16，P L.13）

検出した遺構には掘立柱建物跡1棟，溝2条，弥生時代後期の石蓋土壙墓・土壙墓など5基，住居跡2軒などがある。

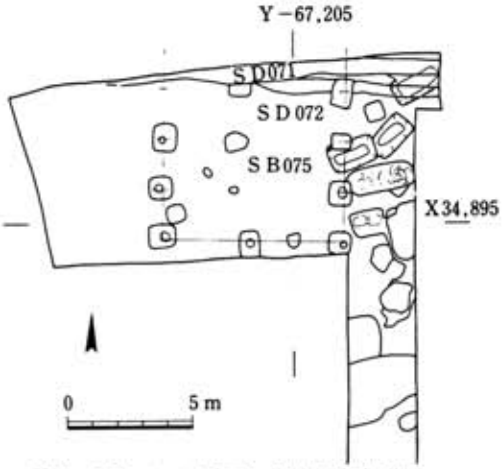


Fig. 16　Q A地区11発掘区平面図

S B075堀立柱建物跡

地区の中央に位置し，2間×4間以上（7.2m×8m以上）の南北棟の建物跡と思われるが，西側妻柱は不明である。建物方位の南地軸は北から1°7′東傾している。柱間は桁行2m，梁行3.6mと梁行の方が，桁行よりも最も長くなっている。柱掘方は各約1mの方形で，柱痕径は0.25mである。

S D071溝

幅0.6m，深さ0.2mの浅い東西溝で，ほぼ東西に走りS D072を切っている。時期は平安時代である。

S D072溝

幅約0.4m，深さ0.2mの浅い東西溝で，若干東に向かって南に傾く。時期は平安時代である。

Q A地区13発掘区（Fig.17，P L.13）

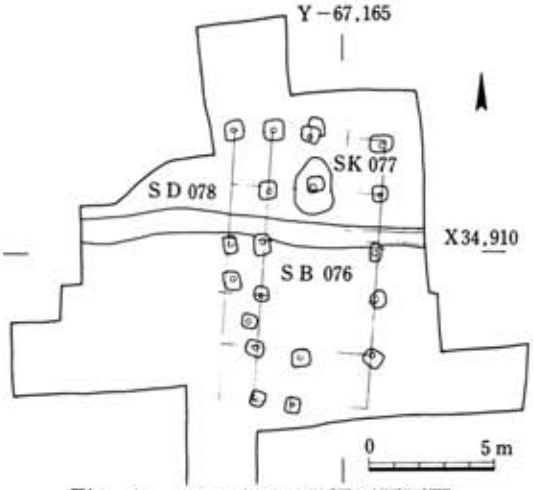


Fig. 17　Q A地区13発掘区平面図

S B076掘立柱建物跡

3間×5間（5.95m×10.5m）の南北棟で，南，北，西それぞれに廂をもつ。身舎2間×3間(4.5m×6.3m)，廂の出は3面とも各1間である。建物方位の南北軸は北から4°5′8″東傾する。柱間は身舎で梁行2.7mと1.8m，桁行2.1mである。廂は南側と北側で2.1m，西側では1.45m出ている。ただし，西側の廂柱列は北第1及び第3しか検出されなかった。柱掘方は1辺0.6m～0.8mの方形で深さ約0.25m，柱痕径は約0.15mである。

ＳＫ077土壙

ＳＢ076掘立柱建物跡を切っている。径2.3m×1.55mの楕円形で，深さ0.2mを測る。埋土中に多量の土師器片を包含していた。時期は平安時代前期と推定される。

ＳＤ078溝跡

幅約１m，深さ約0.15mの浅い東西溝である。弥生時代中期に属す。

ＱＢ地区12発掘区（Fig.18）

ＳＤ073溝跡

幅約1.7m，深さ約0.8mで，東に向かい北に約12°傾いて走る東西溝である。断面U字形の溝で時期は平安時代である。ＳＤ074を切っている。

ＳＤ074溝跡

幅約0.9m，深さ約0.2mと浅く，ＳＤ073に切られている東西溝である。

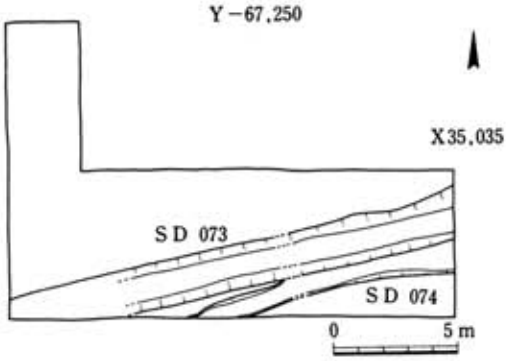


Fig. 18　ＱＢ地区12発掘区平面図

ＱＣ地区05発掘区（Fig.19）

通称「瓦塚」の東側に位置している。検出した主な遺構は掘立柱建物跡１棟，溝２条，弥生時代の竪穴住居跡１軒，江戸時代の溝２条である。

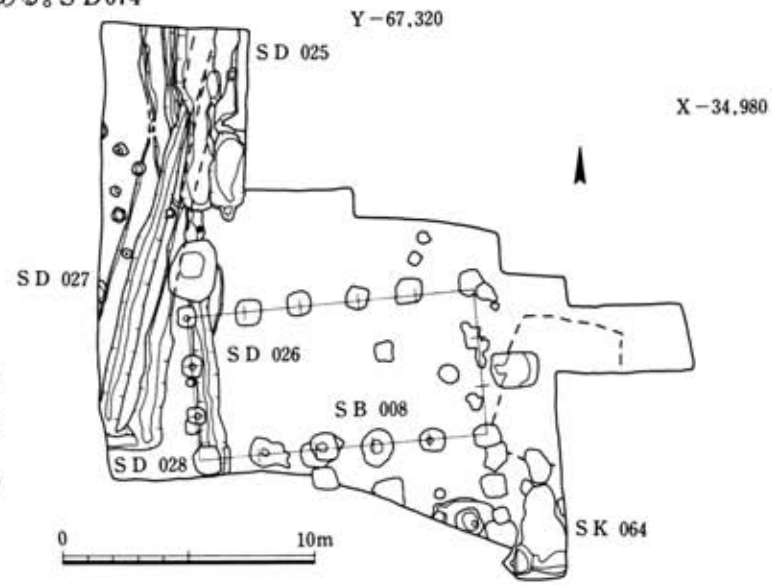


Fig. 19　ＱＣ地区05発掘区平面図

ＳＢ008掘立柱建物跡

地区のほぼ中央に位置し，５間×３間（11.5m×5.7m）の東西棟の建物跡である。東妻柱は不明で，西妻はＳＤ026を切っている。柱間は桁行の西端の１間が2.6m（8.7尺）で，他は各2.2m（7.3尺）である。梁行の柱間は各1.9m（6.3尺）である。柱掘方は各一辺約１mの方形プランで，深さは約0.8mあり，柱痕の直径は各約0.3mである。建物方位の南北軸は北から5°26′25″西傾する。

ＳＤ025溝跡

幅約1.5m，深さ0.5mで南北にのびる溝である。江戸時代の溝に破壊されているが，底面から「老司式」系の軒平瓦が出土した。ＳＤ026と切り合っている。

ＳＤ026溝跡

幅約0.8m，深さ0.7mの断面台形状で南北にのびる溝である。ＳＢ008の西妻で途中点々と切られている。またＳＤ025によって切られている。

(2)　Ｄ地区の遺構

ＤＢ地区03・09発掘区
（Fig.20，ＰＬ.15～17）

検出した遺構には掘立柱建物跡２棟以上，柵跡２条の他，築地跡，井戸跡，土壙などがある。また，弥生時代後期の竪穴住居跡も検出した。

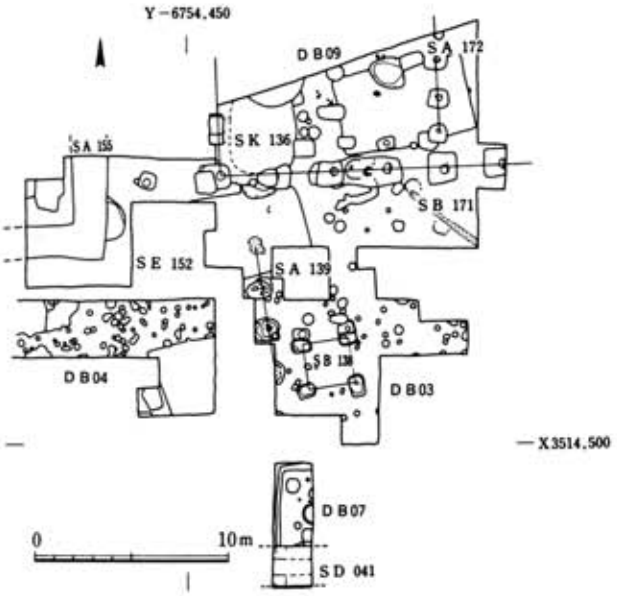


Fig. 20　ＤＢ地区07・09発掘区平面図

ＳＢ138掘立柱建物跡

１間×１間(2.4m×2.4m)の小規模な建物跡で，西方へ規模が大きくなる可能性もある。建物南北軸は北から８°45′西傾する。柱掘方は矩形をなし，柱痕は径15～20cmと小さい。

ＳＢ171掘立柱建物跡

桁行５間（14.5m）以上の大規模な東西棟建物跡の南桁通りと考えられる柱列を検出した。調査範囲を東および北へ拡張できなかったため全体の規模は確認できなかった。柱間は2.9mで，西妻柱と考えられる柱穴を１個検出したが柱間は2.6mである。柱穴は切り合いが多く，３回切り合っているところもあるが，建替えのためのものではなく別の遺構と考えられる。復元した建物の南北軸は北から２°10′西傾する。柱掘方は１辺約1.5mの方形の大規模なもので，国庁内の主要建物跡の柱穴に匹適する。柱痕も径約50cmと大きい。

ＳＡ139柵跡

南北に並ぶ柱列を３間（6.3m）分検出した。柱間は2.1mで，方位は北から８°45′西傾する。柱掘方は隅丸方形で根締めのための河原石の塊石や小礫がある。建物跡の東妻柱穴とも考えられるが西方では確認されない。南へ延びると考えれば，ＤＢ地区07発掘区の竪穴住居跡を切っている柱穴２個へ連なるが，柱間が一致しない。

ＳＡ172柵跡

南北に並ぶ柱列を２間（3.6m）分検出した。柱間は1.8mで，方位は北から２°10′西傾する。柱掘方は方形で，柱痕は径約30cmである。柱間を長くした桁柱が東方へのび，掘立柱建物跡となる可能性も残る。

ＳＡ155築地跡

ＤＢ地区09発掘区の西部で，築地跡の南東コーナー部を検出した。基礎の掘り込み地業の跡で，丁寧な版築を行っている。地表下約40cmの表土を除いて検出した。掘り込みはやや斜めではあるが垂直に近く掘り込まれる。検出面から約45cmの深さで，幅は1.9m，版築は厚さ２cm～５cmの黄褐色地山土と黒色または黒褐色土を交互に重ねている。

この築地跡の延長は，西方６mの10発掘区，西方30mの11発掘区で確認されたが，より西方は地下水路により破壊されている。北方約60mの12発掘区では明瞭な版築は認められないが，土が締っている部分があり，築地の延長線とも考えられる。方位は西から７°10′南傾しており，09発掘区北壁ではこの築地跡の東約１mには溝跡らしい土層がみられ，惣座遺跡で検出されたＳＤ226南北溝の延長とも考えられる。いずれにしても，この築地に囲まれた地区の調査が望まれる。ＳＥ152井戸跡を切っている。

ＳＥ152井戸跡

径2.0m前後，深さ1.0m以上の平面円形の井戸跡で，枠材は確認されなかった。ＳＡ155築地跡より古い。井戸内の埋土からは弥生時代後期の土器片が多数出土したが，最下部付近から奈良時代の土師器杯が出土し，築地の上限を知る手がかりになる。

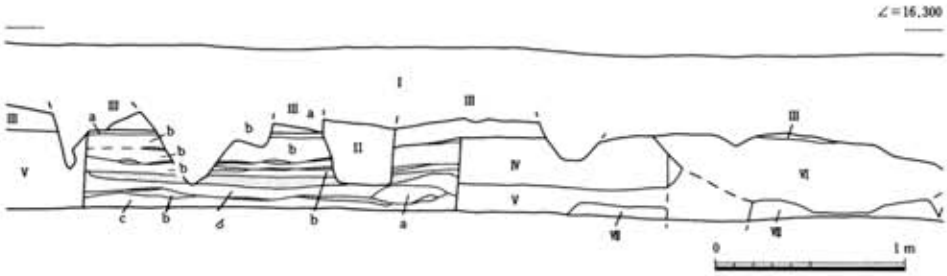
他にも多数の柱穴を検出したが，現在のところまとまらない。また東南部では北から約52°西傾する帯状の小礫敷きの部分が確認されたが，性格不明である。

ＤＢ地区07発掘区（Fig.20，ＰＬ.16）

弥生時代後期の竪穴住居跡２軒とともに，柱穴，溝跡を検出した。柱穴のうち２個は09発掘区のＳＡ139柵跡に続くかも知れない。

ＳＤ141溝跡

幅2.1m，深さ1.50mの東西溝である。断面は梯形で，底面は平坦となっている。西方約40mの11発掘区で，西方への延長が確認された。溝底のレベルは西方へ低くなっている。方位は西から０°50′南傾している。東方ではＲＧ地区33発掘区のＳＤ021溝へ続くものとみられる。



Ⅰ 表土
Ⅱ 暗褐色土（黄褐色粘質土小ブロック含）
Ⅲ 褐色土（黄褐色粘質土小ブロック若干含）
Ⅳ 暗褐色土（黄褐色粘質土大ブロック含）
Ⅴ 暗褐色土（暗黄褐色土ブロック含）
Ⅵ 暗褐色土（土器小片含）
Ⅶ 褐色土（やや粘質）
a 褐色土（黄褐色粘質土小ブロック若干含）
b 黒褐色土（黄褐色粘質土小ブロック含）
C 暗褐色土
アミ部分は暗黒褐色土

Fig. 21　ＳＡ155築地跡土層断面図（北壁）

ＤＤ地区01発掘区
（Fig.22，ＰＬ.18）

掘立柱建物跡１棟・溝２条を検出した。その他に弥生時代の竪穴住居跡２棟・溝１条・甕棺墓１基・石蓋土壙墓１基がある。

ＳＢ007掘立柱建物跡

５間×３間（8.3m×5.5m）の東西棟で，総柱の建物跡である。建物方位の南北軸は北から４°36′西傾している。柱間は桁行で各約1.65m（5.5尺），梁行で各約1.8m（６尺）である。柱掘方は方形プランで各辺約0.9m，柱痕跡の直径0.25mである。

ＳＤ017溝跡

調査区の中央から東南に走る溝で，ＳＤ018に接し切られている。幅約1.5m，北端と南端の比高差は0.7mあり南流する。

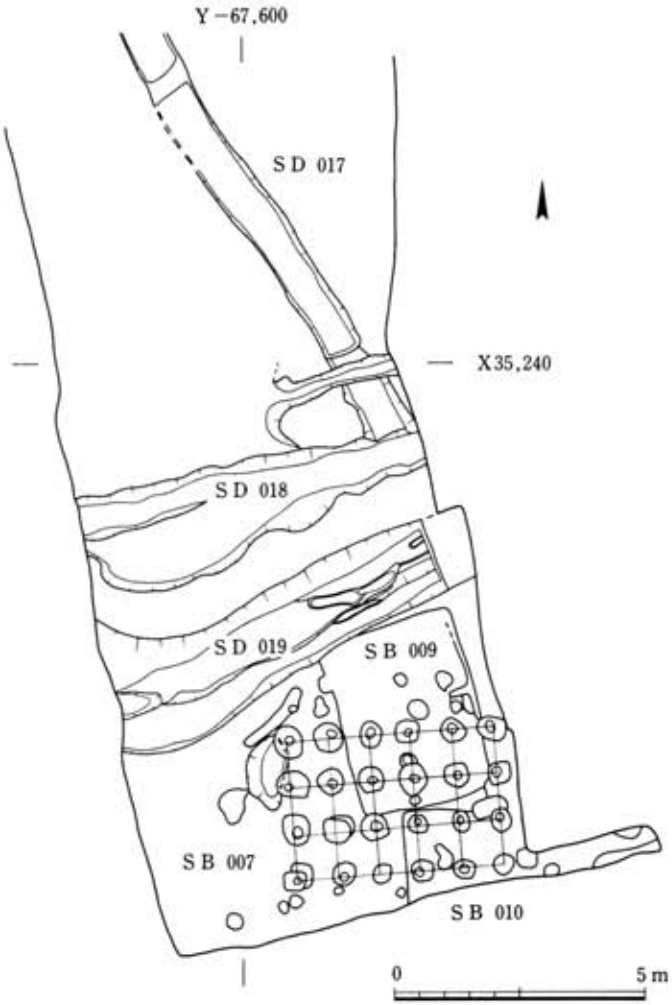


Fig. 22　ＤＤ地区01発掘区平面図

ＳＤ018溝跡

幅1.6m，深さは中央部で0.8m，断面台形をなす東西溝である。東端と西端の比高差が0.3mあり，西へ行くに従って深くなる。おそらく流出口は嘉瀬川に面していると考えられる。南壁の大部分は破壊を受けている。

(3)　Ｒ地区

ＲＡ地区37発掘区（Fig.23，ＰＬ.24）

ＳＤ033溝跡

東西３mの間隔をおいて，南北に走る２条の溝で，共に幅約0.7m，深さ0.3mである。この

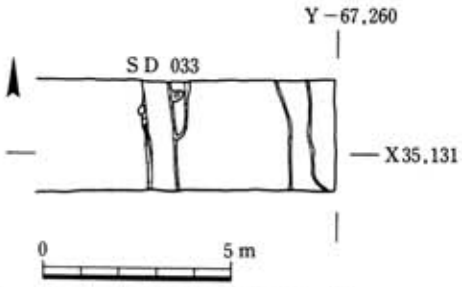


Fig. 23　ＲＡ地区37発掘区平面図

溝はＲＣ地区10・16・17発掘区の溝と連続するもので，したがって道路の側溝と思われる。

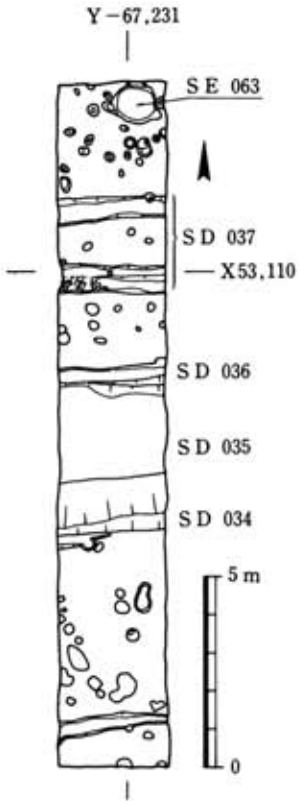


Fig. 24　ＲＡ地区39発掘区平面図

ＲＡ地区39発掘区（Fig.24）

検出した遺構は溝跡４条と，井戸跡１基である。

ＳＤ037溝跡

この溝は２条をなし東西に走る。北側の溝は幅0.6m，深さ0.25m。南側の溝は幅0.5m，深さ0.45mである。

ＳＤ036溝跡

幅0.4mの東西溝である。深さ0.2mで，ＳＤ035を切っている。

ＳＤ035溝跡

幅2.7mの大きな東西溝である。深さ0.4mで，ＳＤ036に切られ，ＳＤ034を切っている。

ＳＤ034溝跡

幅1.4mの東西溝である。深さ0.6mでＳＤ035に切られている。

ＳＥ063井戸跡

平面は円形の素掘りの井戸跡である。幅1.2m，深さ1.5mで，断面は逆台形をなしている。主な遺物として埋土下層から，淡緑黄釉のかかった蓋１点，青磁片２点，白磁片１点が出土した。

ＲＢ地区25発掘区（Fig.25，ＰＬ.19）

検出した遺構は，掘立柱建物跡１棟，溝跡１条である。掘立柱建物跡ＳＢ006は発掘区西端にあり，溝ＳＤ047は中央に位置している。

ＳＢ006掘立柱建物跡

建物の規模は，２間×２間（3.3m×3.3m）の総柱の建物跡と考えているが，調査の関係で西側を拡張することができず，決定することはできない。建物方位の南北軸は北から11°18′35″西傾いている。柱間は各1.65m（5.5尺）である。柱掘方は各一辺約0.7mの方形プランで深さは0.3mあり，柱痕の直径は各約0.23mである。

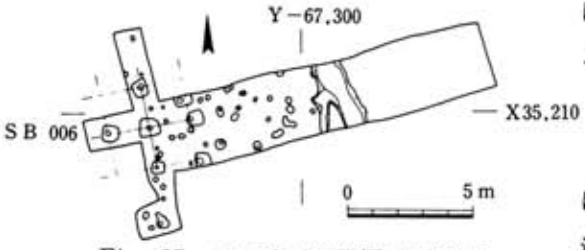


Fig. 25　ＲＢ地区25発掘区平面図

ＳＤ047溝跡

幅約0.8m，深さ約0.35mの断面台形状でほぼ南北に走る溝である。東壁の一部を最近の溝で破壊されている。ＳＢ006と方位が似てい

る関係上同時期のものであろう。

ＲＧ地区31発掘区（Fig.26，ＰＬ.19）

ＳＢ001掘立柱建物跡

この建物跡は調査区の関係から全掘できなかった。７間×３間（13.5m×4.2m）の東西棟の建物跡である。建物方位の南北軸は座標北に対して西へ２°27′27″傾いている。柱間は桁行各1.9m（6.4尺），梁行各2.1m（７尺）である。柱掘方は各辺約0.8mの方形プランである。深さは各約0.6mで，柱痕の直径は平均して0.3mである。

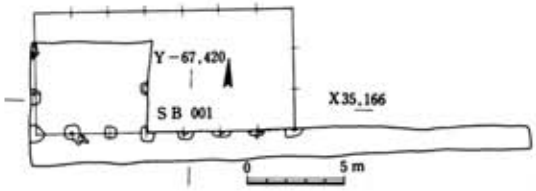


Fig. 26　RG地区31発掘区平面図

ＲＧ地区33発掘区（Fig.27，ＰＬ.20・21）

検出したおもな遺構は掘立柱建物跡４棟，溝３条，その他弥生時代の竪穴住居跡２棟，溝１条がある。建物跡は重複関係から三時期に大別できる。Ａ期の建物跡ＳＢ005，Ｂ期ＳＢ004，Ｃ期ＳＢ002・ＳＢ003になる。溝は３条がコ字形に検出され，重複関係から二時期，もしくは三時期に分かれる。二時期としては，Ａ期ＳＤ020・ＳＤ021，Ｂ期ＳＤ022の順で，三時期としてはＡ期ＳＤ020，Ｂ期ＳＤ021，Ｃ期ＳＤ022の順になる。

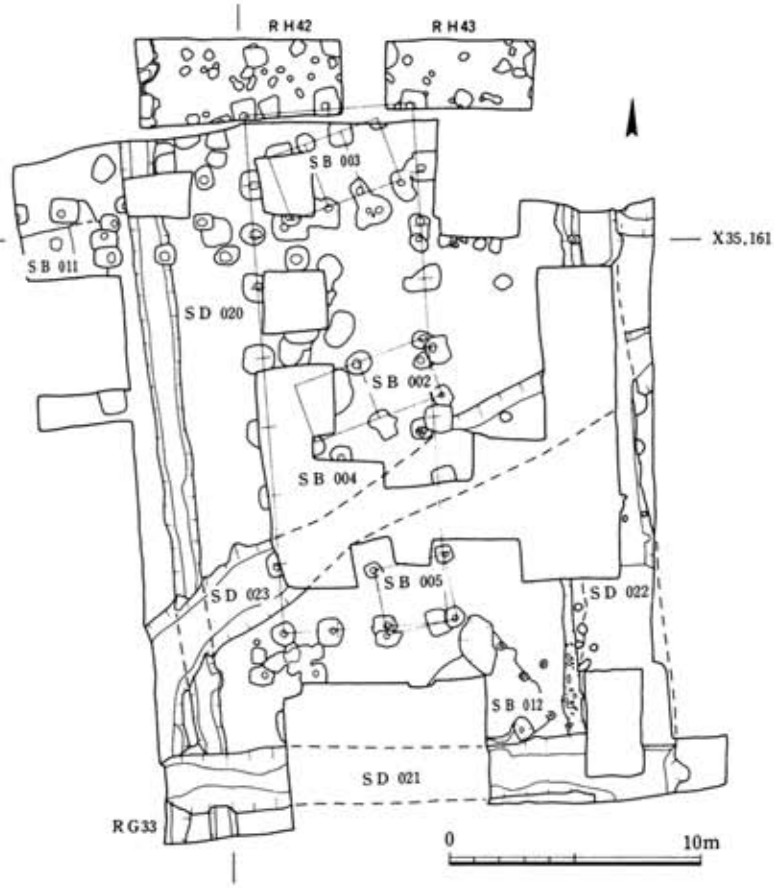


Fig. 27　ＲＧ地区33発掘区平面図

ＳＢ002掘立柱建物跡

２間×１間（5.35

m×2.4m)の建物跡である。建物方位の南北軸は北から20°22′35″西傾している。柱間は桁行各2.67m（9尺），梁行2.4m（8尺）である。柱痕径は約0.25mである。ＳＢ004の東側柱穴に切られている。

ＳＢ003掘立柱建物跡

3間×1間（4.6m×2.65m）の建物跡である。建物方位の南北軸は北から20°22′35″西傾している。柱間は桁行各1.5m（5尺）である。柱掘方は各辺約0.7mの方形プランで，深さ各約0.4mである。柱痕の直径は平均して0.25mである。ＳＢ004と切り合っており，この建物跡の方が古い。

ＳＢ004掘立柱建物跡

6間×2間（15.2m×6.6m）の東北棟の建物跡である。建物方位の南北軸は北から4°16′54″西傾している。柱間は梁行で各3.3m，桁行で北妻柱から2間・3間目が各2mで，その他は各2.8mである。柱掘方は各辺1.1mの方形で，深さ各約0.8m，柱痕径各0.25mである。

さて，この建物跡は前回の報告では7間×3間の建物跡と考えていたが，第10次の調査で北側妻柱が明確に検出された結果，6間×2間の建物跡と考えたが，南側の中央の妻柱が調査の関係で確認されていないこと，前回の南側妻柱の問題など残された課題があるため，なお検討を要することと思われる。

ＳＢ005掘立柱建物跡

1間×1間（2.85m×2.65m）の建物跡で建物方位の南北軸は北から11°58′33″西傾している。柱掘方は1辺約0.6mのほぼ正方形である。深さは約0.4m，柱痕は直径約0.3mになる。ＳＢ004と切り合い，この建物が新しい。

ＳＤ020溝跡

幅約1.3m，深さ約0.5mの断面台形で，北端の底面と南端の底面との比高差が約1mあり，南流する溝である。なおＲＨ地区44発掘区で検出されたＳＤ158溝跡と続く可能性が強い。ＳＤ023を切り，ＳＤ021に切られている。

ＳＤ021溝跡

幅約2.3m，深さ約1mの断面台形の東西溝である。調査区東南隅でＳＤ022溝跡と切り合って終了している。ＳＤ022溝跡に切られているが，規模，構造が似ているところから，共存していた時期もあると考えられる。なお，ＤＢ地区07発掘区のＳＤ141溝跡に続くものと思われる。

ＳＤ022溝跡

幅約2.3m，深さ約1mの断面台形の東西溝である。北端の溝底より南端の溝底が約0.7m低くなっており，南流する溝である。西壁上端と東壁上端では約0.7m西壁が低くなっている。なお惣座遺跡から検出された，ＳＤ202溝跡とＲＨ地区45発掘区のＳＤ161に続くものと思われる。

(4) C地区の遺構

CB地区02発掘区

(Fig.28, PL.23)

掘立柱建物跡1棟，土壙，弥生時代の溝を検出した。また埋土からは平安時代の土師器片に伴って緑釉陶器や越州窯青磁片が出土した。

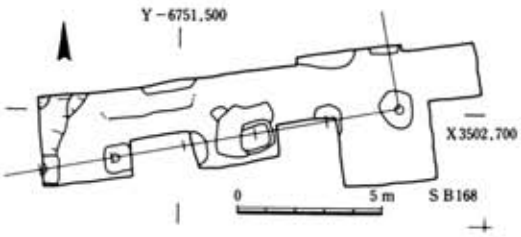


Fig. 28 CB地区02発掘区平面図

SB168掘立柱建物跡

5間（12.5m）以上×1間以上の東西棟建物跡である。建物南北軸は北から10°16′西傾する。柱掘方は方形のものが多く，柱痕は径約30cm。西方へ規模が大きくなる可能性がつよい。調査区北西隅では柱穴確認と同レベルの位置で小塊石群を検出したが，あるいは西妻柱かも知れない。

CB地区03発掘区（Fig.29, PL.23）

政庁跡のすぐ西方にあたる地区である。溝跡と柱穴を検出した。

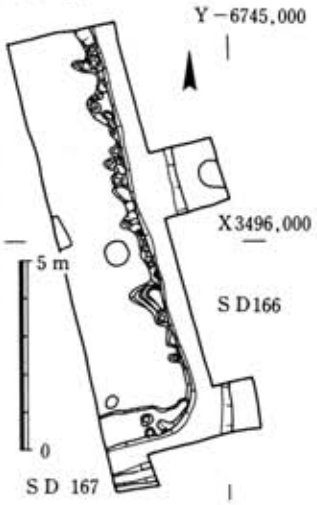


Fig. 29 CB地区03発掘区平面図

SD166溝跡

幅1.4m，深さ0.6mの溝跡で，断面梯形で，底面は平坦となっている。ある区域を限る溝の南東コーナー部と考えられる。底面の高低差はあまりない。溝跡の西上端に沿って不規則に柵状の小穴群が並ぶ。南部ではSD167溝跡（東西溝）が新しく掘り込まれている。

3．惣座遺跡（Fig.30, PL.25）

嘉瀬川の東岸にあたる標高約15mの自然堤防上に位置する。昭和52年に遺跡西端の一部が調査された際，3間×5間の総柱建物跡が検出されたことから，国府の正倉群が置かれていたことが予想されていた地区である[1]。南南東約200mには肥前国府政庁跡がある。

昭和58年に九州横断自動車道路線にあたる当該地約5,000m²の調査で，弥生後期のいわゆる環濠集落と複合して予想どおり掘建柱建物群が検出された[2]。ただし，そのうちには倉庫とみられる総柱構造のものだけでなく，かなりの規模の長棟が含まれており，また数時期に分かれることが知られた。同地区はこれまで国府関係の建物跡が検出された地区としては，最も嘉瀬川寄りの最西端，かつ最北辺、国府跡調査の地区割ではDC・DD・RI地区にあたる。

検出された遺構は掘立柱建物跡15棟，溝4条，土壙2基，その他である。

建物跡の場合，小形円形柱掘方の2棟を除く13棟の構造は，倉庫とみられる総柱の9棟と長

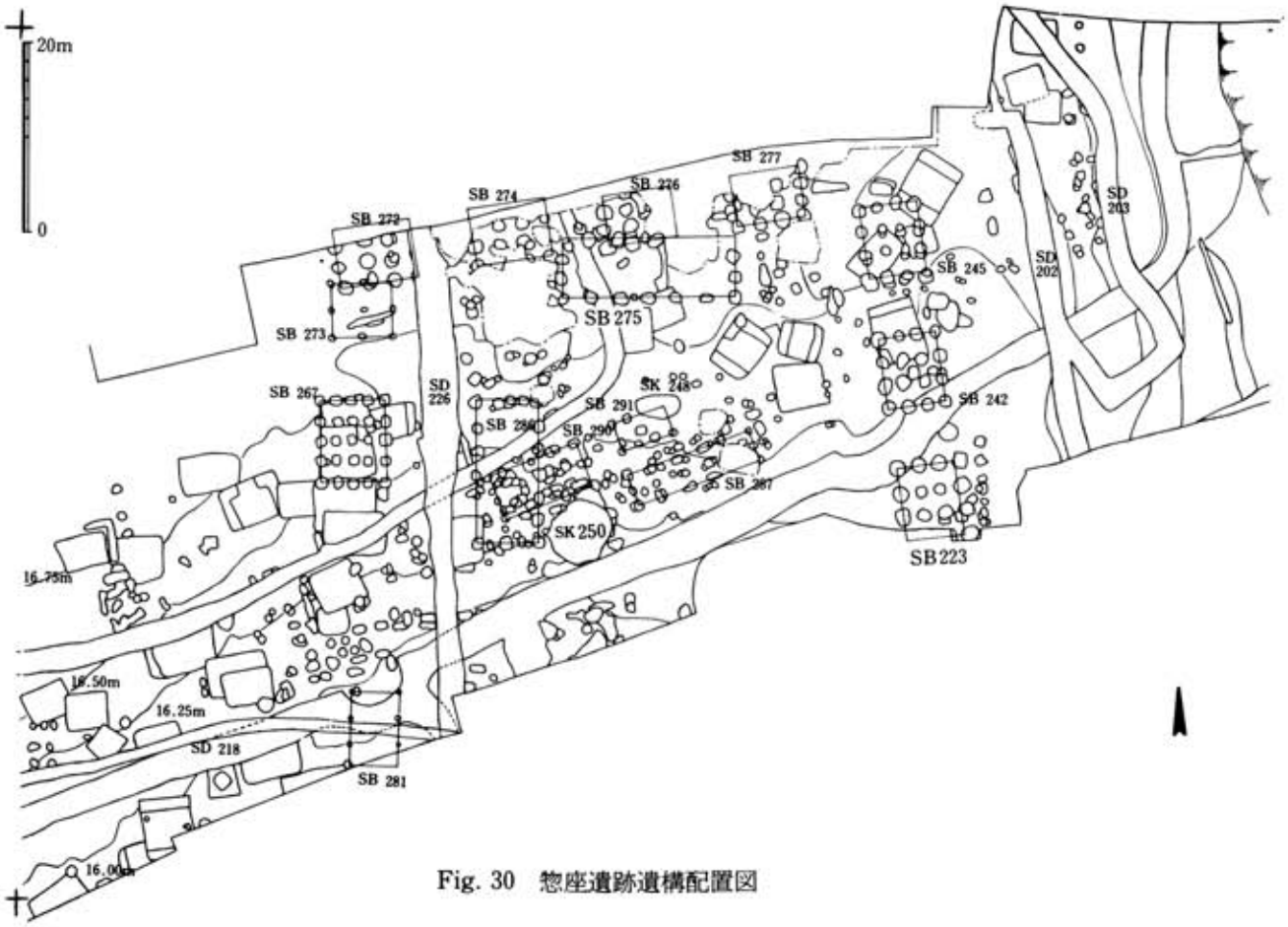


Fig. 30　惣座遺跡遺構配置図

棟の4棟とがある。方位で分けると4グループとなり，それぞれ一定の方位に従った配置を示す。

ＳＢ007建物跡は3間×5間（5.5m×8.3m）の東西棟で，掘方は一辺約0.9mの方形，柱痕径約0.25mである。建物方位は北から4°36′西傾する。昭和52年の調査でその存在が知られ，一帯を正倉地区に推定させる契機となったが，58年の調査では周囲にこれと同方位の建物はみられない。西側に嘉瀬川が接しており，同一グループの建物があるとすれば，その南側に拡がりが予想される。

ＳＢ272・ＳＢ274・ＳＢ276・ＳＢ277・ＳＢ245・ＳＢ242・ＳＢ223建物跡の7棟はいずれも3間×3間の総柱建物群で，鍵形をなして整然と配置されており，倉庫群と考えられる。久池井遺跡でも大型建物群に付随する規則的配置の倉庫群はみつかっているが，それよりはるかに規模は大きい。方位は全体が，北から約9°西傾している。

これら7棟のうち，北側の4棟はやや東西に長い矩形で，逆に東側の3棟は南北にやや長い。すなわち，いずれも3間×3間ながら梁・桁の柱間を異にする。規模はおよそ3類に分かれ，ＳＢ272・ＳＢ274建物跡が6.3m×8.1m，ＳＢ276・ＳＢ277建物跡が5.4m×7.2m，ＳＢ245・ＳＢ242・ＳＢ223建物跡が6.0m×7.5mで，それぞれ若干の大小がある。ただし，北側の4棟は南面を東西に揃えて並び，また7棟それぞれの間隔は約6.5mと等しく，一定の基準で配置されたものである点は疑いない。柱掘方は不整方形もしくは円形で，径約1m～1.5mと，かなりバラツキが目立つ。柱痕径約0.3mである。なお建て替えは，ＳＢ241のみ1回その可能性が考えられる。

これら7棟の一群の南北両側は調査区から外れるが，鍵形に囲まれた中央および西側には同一方位の建物は存在しない。東側については建物群の東辺を区画する溝とみられるＳＤ202溝がその北側で一旦折れ，再び幅を狭めて北に伸びる。ただしＳＤ202溝跡から派生して東側でU字形に曲がる不定方向の溝については性格不明である。

調査区中央部にはほぼ真北方位に従って配置されたＳＢ267・ＳＢ286・ＳＢ275建物跡の3棟が一群をなす。

ＳＢ267建物跡は4間×4間（6.7m×8.7m）の南北方向にやや長い総柱建物である。柱掘方は一辺約1mの方形，柱痕径約0.3mである。ＳＢ286建物跡2間×6間（6.5m×14.7m）の南北棟で，ＳＢ268建物跡とは北面妻を揃え，9.4m間隔をあける。柱掘方は一辺約1.2mの方形，柱痕径約0.3mである。ＳＢ275建物跡は3間×6間（6.3m×18.0m）の東西棟で，柱掘方は一辺約1.2mの不整方形，柱痕径約0.3mである。なお，このＳＢ276建物跡はＳＢ274およびＳＢ276建物跡の掘形を切っており，したがってその前後関係は，これら3棟が先の方形建物群7棟より新しい。

さらに調査区中央部には，方位が北から約21°西傾する東西棟3棟が一群をなす。ＳＢ291建物

跡は1間×3間，SB287建物跡は2間×3間総柱と考えられる。また，SB290建物跡は2間×3間と考えられるが，柱の並び等不明な点が多く残る。3棟は比較的小さな不整方形掘形で，建物規模も小さい。時期はSB290建物跡がSB286建物跡と重なるが，柱掘方の切り合いがないため，先後関係は不明である。

掘立柱建物は他にSB273建物跡が2間×2間総柱，SB281建物跡が1間×3間と推定される。ただし，この2棟は柱掘方が小形円形で，他の13棟とは差が大きい。

その他の遺構では溝と土壙とがある。溝の場合，先に述べたようにSD202溝跡はSB272建物跡他7棟の一群を区画するものと考えられる。SD226は最大幅約3.5m，深さ約1.5mの大溝で南北に通じる。方位は北から約3°30′西傾し，同調査区内ではSB007建物跡の4°36′がこれにちかい。南方約100mのDD地区07発掘区でみつかっている築地跡（SA155）の東に沿って連なる可能性はあるが，方位にやや問題がある。またSD218溝跡は東西に弧を描いて伸びた幅約1.5mの溝で，掘り込みは浅い。何らかの区画というより，単なる排水目的と考えてよいであろう。

土壙はSK250土壙が径約6m，深さ約2mと大型で，2回以上にわたって掘り込まれている。またSK248土壙は長楕円形でSB291建物跡を切る。

各建物の時期については年代を示す直接的な資料に乏しく明確さを欠くが，まずSB272建物跡ほか7棟の倉庫群は，付随するSD202溝跡埋土中の須恵器から8世紀後半～9世紀初に遡ると考えられる。またSB267建物跡ほか3棟は切り合いからみてそれより新しく，おそらく9世紀代と推定される。SB290建物跡ほか3棟の一群はそのうちSB291建物跡が10世紀の須恵器を出土したSK248土壙より古く，下限がおさえられる。総じてみれば，8世紀後半から一部10世紀に下る間に，3期以上に及ぶ建物群がつくられたことになる。

以上の調査結果からみて，当初の予想どおり本地区がある時期における肥前国府の正倉域にあたる可能性は大いに考えられる。確かに今のところ，QF地区の政庁周辺でこのような総柱建物群が集中し，かつ数時期にわたるのは本地区が唯一である。しかし，この点について結論を得るにはまだ残された問題点が多い。

まずQF地区の政庁跡との関係でみると，政庁跡の方位N6°54″Wに対し，ここではそれに最もちかい方位の建物はSB272ほか7棟の一群が約9°西に振れ，いくらか違いがある。ほぼ真北を示すSB267の一群ではさらにこの差がひらく。政庁のみ別個の条里にのっていたとする考え方もあるが，方位の点では今少し検討が必要である。

また，本遺構群の性格を正倉とは別の何らかのまとまりある官衙，あるいは国府とは別に郡衙の一部と考えることもあながち無理ではない。その点では，倉庫と長棟との構成が変る各時期の遺構について検討が必要であろうし，たしかに倉庫跡が集中する地区ではあるが，すべての時期の遺構を同一視するにはまだ問題がある。なお，肥前風土記では「郡の西に川（嘉瀬川）

あり」と記している。当時の佐嘉郡は嘉瀬川の東西両域にまたがっており，"郡"を郡衙としてその西に接して嘉瀬川がある，という解釈をとれば，本地区こそが最もその蓋然性が高いものであるといえる。

そもそも従来，国府正倉は南に下った印鑰社，納所，佐熊（"散米"に通ずるという）付近に推定するのが通例であって，本地区はむしろ総社のおかれた地区にあてられていた。まだ未調査の地区が多いだけに，他地区でも今後，同様な遺構がみつかるということも十分ありえる。

本地区で検出された遺構の性格については国府の正倉の可能性をもつものとして重要であるが，結局は他地区の調査の進展をまって考えざるをえない。

4．久池井Ｂ遺跡（Fig.31・32，ＰＬ.26）

肥前国府跡の全体的地区区分でいうＩ・Ｊ・Ｍ・Ｎ・Ｏ・Ｓ地区一帯は『佐賀県遺跡地図―佐城地区』では久池井遺跡とする。九州横断自動車道の現佐賀大和インターチェンジの大部分がこれにあたり，昭和57年度の調査で，そのうちのＮ地区において肥前国府と関連性がつよいと考えられる建物跡を中心とした一群の遺構がみつかっている[3]。

遺跡の立地は現地形では山麓にちかいほとんど平坦な緩傾斜面上，標高約16mである。周辺を含めた試掘結果から推定される旧地形では，Ｎ地区の西側でＲＦ地区からＲＥ地区にかけて南北にはしる低湿な凹地帯が認められ，また東側でもＪ・Ｉ地区の東辺に小河川の流下に伴う幅の広い南北の凹地帯がある。したがってこのような旧地形からみると，Ｎ地区の遺構群は，ＱＦ地区の政庁跡等，嘉瀬川東岸自然堤防上の遺構群とは一応切り離された別個の立地にあり，国府全体では北辺の一画を占めるものと予想される。さらにＮ地区における遺跡の拡がりを詳細にみると，今のところこの一帯ではＮＥ・ＮＦ地区のみ，国府関係のまとまった建物群の存在が確認できる。その周囲にあたるＮ地区のＡ～Ｄ・Ｆ地区およびＯ・Ｊ・Ｉ地区では，九州横断自動車道関係や圃場整備関係調査でも同時期の建物跡等の明確な遺構は知られていない。このことは，以前に実施した瓦の分布調査結果とも符合するようである。

検出された遺構は掘立柱建物跡14棟，井戸跡２基，溝跡11条，その他土壙等である。

建物跡はＩ区北辺とII区との２群に分かれるが，ことにII区のそれは全体が整然とした配置を示すものであり，Ｉ区の一部の遺構と共に同時期の，しかもほぼ完結した姿にちかい遺構群とみなされ，注目される。

まずＩ区では，北辺に小規模な掘立柱建物跡が６棟集中する。ＳＢ319建物跡は２間×３間の南北棟で，水路にかかったため完掘はしていないがＳＢ320建物跡もこれに類する南北棟と思われる。ＳＢ308とＳＢ312建物跡は２間×２間の方形総柱で，重複状況からみて建て替えの可能性がつよい。ＳＢ331建物跡も２間×２間の総柱であるが，先の２棟よりやや小型で，わずかながら南北に長い。またＳＢ307建物跡は１間×２間の東西棟で，ＳＢ331建物跡と重複する。

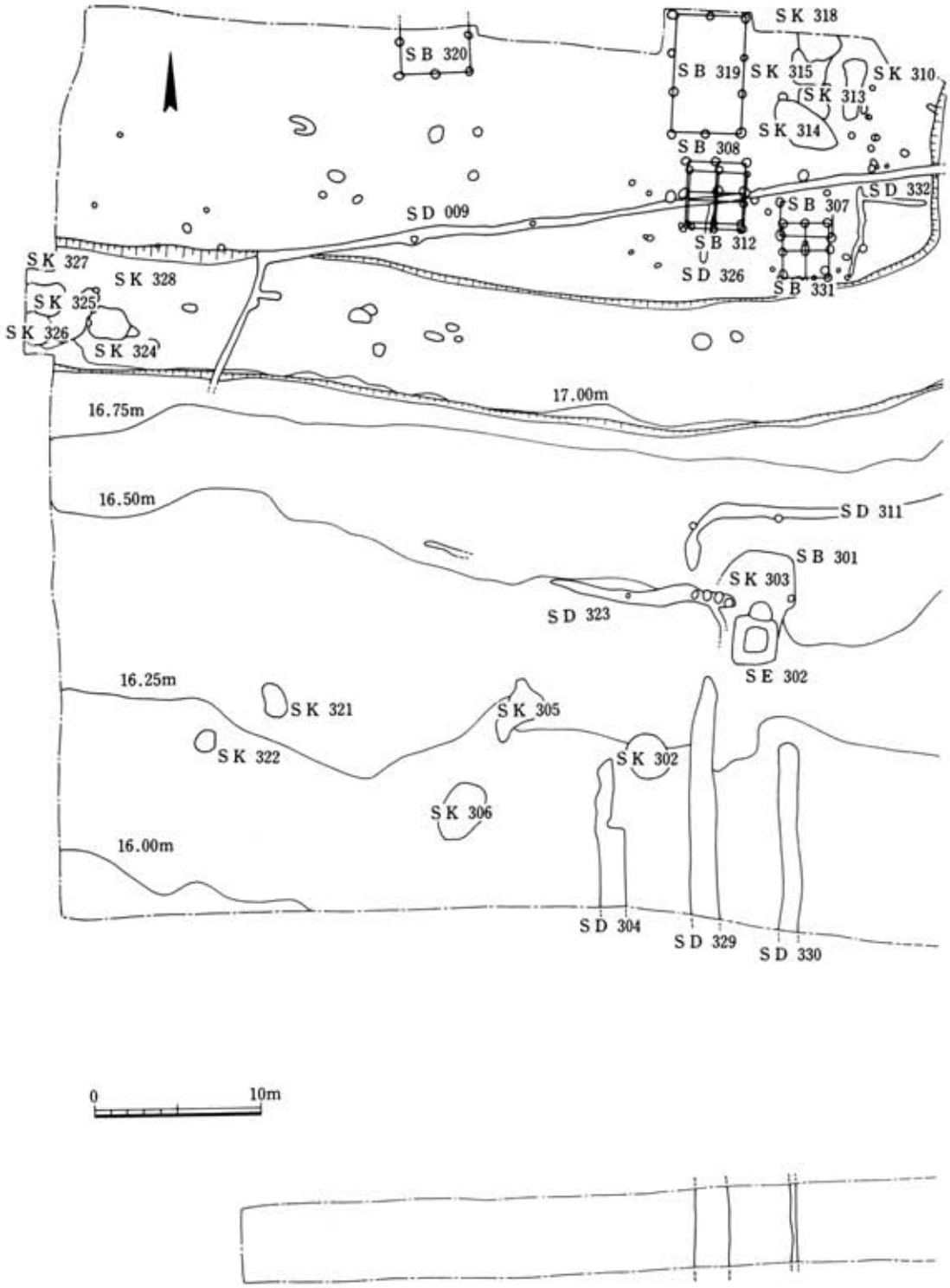


Fig. 31　久池井B遺跡Ⅰ区遺構配置図（S＝1/400）

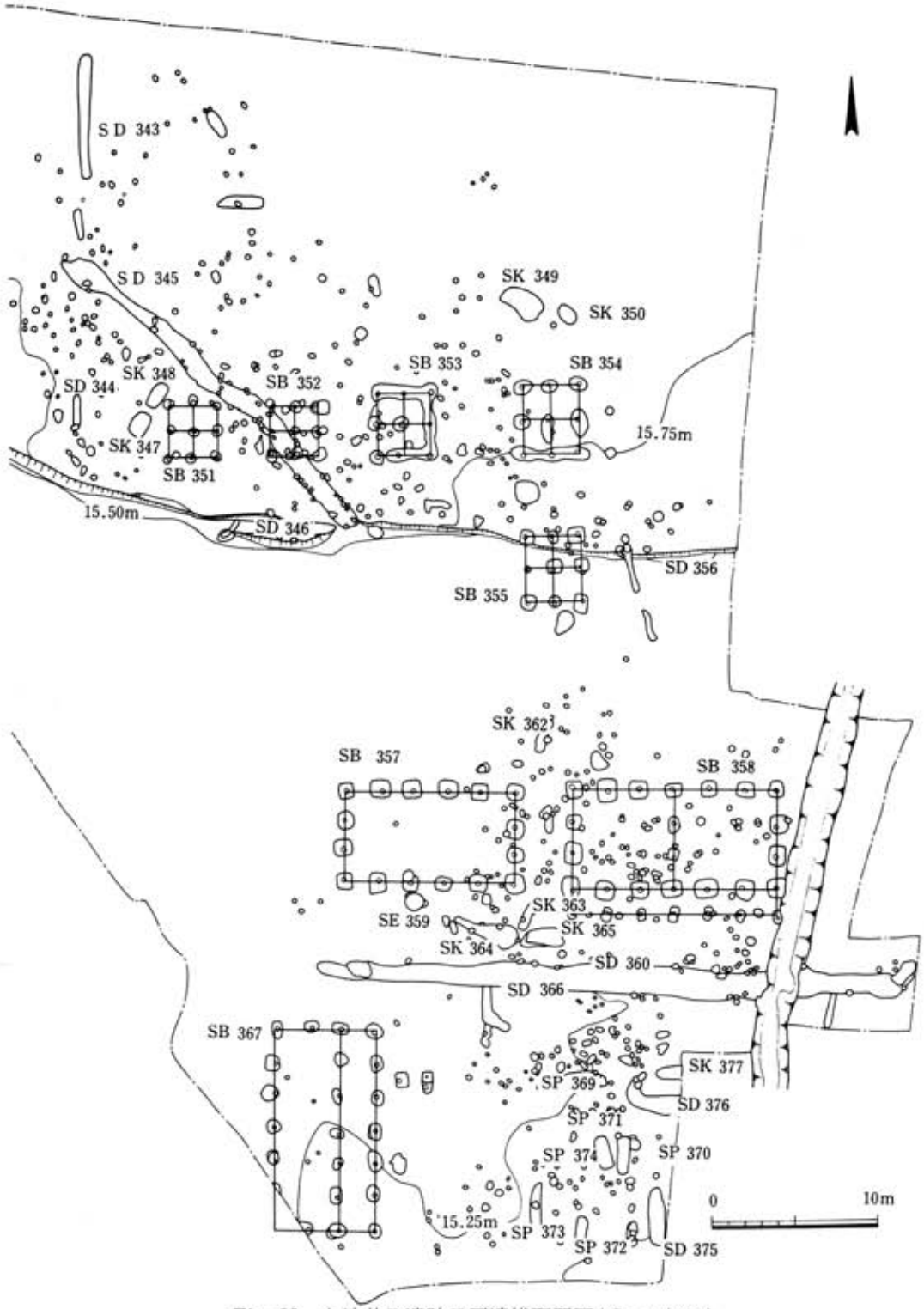


Fig. 32　久池井B遺跡II区遺構配置図（S＝1/400）

これら6棟は2時期以上に分かれることは明らかであるが，実際の区分は困難である。建物方位でいえば，ＳＢ307・ＳＢ331建物跡がほぼ真北，ＳＢ308・ＳＢ312・ＳＢ319建物跡がわずかに東に振れ，ＳＢ320建物跡は逆に約2°西傾しており，一定しない。ただ，II区の建物群との関係は，その位置および構造の類似した建物を含む点などから，あるものについては同時期の可能性は考えられる。これら一群に接して5基の土壙群があり，そのうちＳＫ314・ＳＫ315土壙から多量の須恵器片，土師器片が出土した。時期は8世紀後半～9世紀初頃である。これら建物群に関連する廃棄壙とみられ，建物群の一時期を示すものであろう。

Ｉ区東南部にはＳＥ302井戸跡がある。上面約3ｍ×3ｍ，深さ1ｍの方形掘方の中央に，さらに1ｍ×1ｍの方形掘方を約5ｍ掘り下げた2段素掘りである。底ちかくの掘方ははっきりしないが，検出面から6ｍの深さにもかかわらず，水脈の変化によるものか，湧水はなかった。埋土中遺物はその上層で須恵器片が数点出土したにすぎない。井戸枠等上部構造については，上面が削平されているため不明であるが，ＳＢ301とした浅い掘込みはその関連施設の可能性がある。また，この井戸から真南の方向には道が通じていたとみられ，幅約4.5ｍで両側にＳＤ329・ＳＤ330溝跡がある。溝はII区まで至らず消えているが，方位および位置関係からみて，この井戸がII区建物群との関係でその裏手に付設されたものである可能性がつよい。

II区では整然と配置された8棟の掘立柱建物跡がある。全体の配置はＳＢ357とＳＢ358の東西棟2棟が横に並び，その前面にＳＤ360溝をおいてＳＢ367南北棟が鍵形に位置する。さらにこれら3棟の北側には2間×2間の方形総柱建物5棟が鍵形に並んでいる。8棟はすべて方位を真北に揃えており，同時期の一群であることは明らかである。

個々の建物跡については，ＳＢ357建物跡が3間×5間（5.5ｍ×10.4ｍ）の東西棟。ＳＢ358建物跡は3間×6間の身舎に出1間の南面廂が付く4間×6間（7.5ｍ×12.4ｍ）の東西棟で，中央に間仕切をもつ。両棟の柱掘方は一辺約0.8ｍの方形を基本とし，柱径約0.3ｍであるが，ＳＢ358建物跡の廂のみ掘方一辺約0.5ｍで一回り小さく，かつ柱替が認められる。

ＳＢ367建物跡は2間×6間の身舎に出1間の東面廂が付く3間×6間（6.2ｍ×12.1ｍ）の南北棟である。柱掘方は先の2棟に比べるとやや雑な不整方形で，柱径約0.3ｍである。ＳＢ367建物跡の東側に方形の柱掘方2個があるが，性格は不明である。

これら3棟の北側に並ぶ5棟は2間×2間の総柱建物で，Ｉ区のＳＢ307建物跡等と構造，規模とも似る。ただし，ＳＢ351とＳＢ352建物跡は他3棟より一回り小型の方形で，柱掘形は円形である。ＳＢ353～ＳＢ355建物跡はやや南北に長い矩形で，柱掘方はＳＢ355建物跡が方形，ＳＢ353とＳＢ354建物跡は円形を基本とし，一部布掘りにちかい掘方がみられる。5棟のうちＳＢ351～ＳＢ354建物跡は，その前面にあたる南側を横一線に揃えている。

以上，II区の8棟は，そのうちＳＢ357・ＳＢ358・ＳＢ367建物跡が主たる建物で，裏手にあたる北側の5棟は，その構造からみて付随する倉庫群と考えられる。

時期については直接的な判断資料に乏しいが，ＳＤ360溝跡南側の土壙墓のうち，ＳＰ369土壙墓から７世紀後半の須恵器，ＳＰ370土壙墓から10世紀後半の黒色土器，土師器および方形小形鏡片が出土しており，土壙墓という性格上，建物の前面に同時に墓地が造られることは考えにくいという前提に立てば，建物の年代はその間，すなわち８～10世紀前半と推定される。ただし，そのような年代観については，墓地が建物期間の空白をおいて再度形成されることがありえるかどうか問題は残るし，建物の性格によっては時間的並存の可能性も全くないではない。

Ｉ区のＳＥ302井戸跡およびII区の一群の建物は，周囲の調査結果からみてそれ自体で完結した遺構群である可能性がつよく，その性格については国庁と関係する何らかの行政機関，上級官僚の館，あるいは郡衙等，いずれにあたるか，様々に解釈できる余地を残している。

米倉二郎氏は肥前国が中国から上国に格上げされた際，国府全体も方８町の正方位地割に改められると同時に，今日ＱＦ地区に確認されている国庁も移転したとし，本遺構群はその政庁の可能性があると考えている[4]。

しかしこれに対しては高橋誠一氏の批判[5]にもあるように，全体の配置，規模等からみて，とうてい国庁とは考えにくい。高橋氏は地理学的な地割りの検討から，ＱＦ地区にある時期の政庁の存在は認めながらも，Ｈ地区を中心とするそれとは別の正方位にもとづく方６町の国府域を考えている。高橋説に従えば，本遺構群はその北側府域外にあって，方位を一致させたもの，ということになる。

いずれにせよ，その性格付けは今後の問題であり，府域の決定，政庁の変遷等，周辺の調査の進展をまってあわせ考えなければならない。

５．東山田一本杉遺跡（Fig.33，ＰＬ.27）

遺跡は佐賀郡大和町大字東山田字一本杉に所在する。九州横断自動車道建設に伴う調査で，弥生時代後期の集落跡と重複する平安～鎌倉時代の遺構を確認しており，その中でも築地で区画され，比較的整然と並ぶ大型の掘立柱建物群の存在が注目される。昭和59年度から60年度にかけて，現在，調査を継続中である。

これまで，肥前国府跡に関する調査は嘉瀬川東岸のみ対象とし，西岸についてはほとんで注意されることはなかった。西岸における築地，掘立柱建物を中心とする大規模な遺跡の確認は本遺跡が初めての例であり，今回の調査結果から，遺構の性格によっては国府の範囲を西岸にまで拡げて問題とすべき必要がでてきたといえよう。

遺跡の立地は，嘉瀬川によって形成された扇状地で，旧地形ではすぐ東側を嘉瀬川が流れ，また西側にも遺跡を区切る形で小河川が流れていたとみられる。これまで検出された平安～鎌倉時代の遺構として，大形の柱掘方をもつ掘立柱建物跡４棟，築地と推定される遺構２条，ほかに溝跡５条，井戸跡３基，土壙数基などがある。

まずＳＢ237掘立柱建物跡は調査区西南部にあり，７間×４間（17.5m×10.8m）で東西に両面廂を持つ南北棟である。方位はほぼ真北を向く。身舎の柱の掘方は径１m前後の円形でかなりしっかりしており，柱痕径は約0.3mである。ただし廂部の柱掘方は径約0.5mの円形で，身舎と比べて一回り小さい。

ＳＢ266建物跡はＳＢ237建物跡の東側にあって，それより新しい。５間×２間（7.7m×3.7m）の東西棟で，方位はほぼ真北を向く。柱掘形は径0.8mの円形，柱痕径は約0.25mである。

ＳＢ372・ＳＢ373の２棟の掘立柱建物は，調査区東部にあって，東西の両妻を揃えて並ぶ東西棟である。２棟の方位は北から約３°西傾するようである。両棟とも柱の掘方は一辺約0.8mの方形を基調とし，柱痕径は約0.25mである。まず，北側のＳＢ372建物跡は，一部北側が流水路に切られているが，５間×４間（12.3m×7.7m）で出１間の南面廂を持つ。もう一棟南側のＳＢ373建物跡は５間×３間（12.4m×7.3m）の建物跡である。したがって両棟はほぼ同規模を示し，ＳＢ372が梁行４間で出１間の廂をもつのに対し，ＳＢ373では梁行３間という違いはあるが，梁行の長さそのものはほとんどかわらない。

以上の４棟のうち，ＳＢ266建物跡は柱穴埋土出土の青磁からみて鎌倉時代に下る。これに対し，他の３棟は平安時代に遡って同時期に存在した可能性が考えられ，同時に，これらを区画するとみられる２条の築地との関係が問題になるところである。

まず，ＳＤ374・ＳＤ375を伴う築地跡はＳＢ372・ＳＢ373建物跡の東側にあって南北に並行してはしり，現存で全長約21.5mを測る。２条の溝の間隔は約３m（10尺）で，築地の両側の溝とみられる。また，もう一方の築地はやはり幅約３m（10尺）の間隔でＳＤ158とＳＤ159溝とを伴い，ＳＢ372建物跡の西側で直角隅をなし，折れて西と南に伸びる。そして西側の築地は60m先で発掘区外に消え，南側のそれは約31m伸びたところで東に折れて終わっている。両側の溝そのものは幅約1.5m，深さ約0.8mであるが，ただし断続的に掘られており，類似する例は尼寺跡推定地でも確認されている[6]。

２本の築地は共に約Ｎ３°Ｗで真北にちかい方位をもち，先の掘立柱建物跡３棟との密接な関連が考えられる。全体の配置については昭和60年度に実施される西側の調査結果によらさるをえないが，築地全体の規模は方形としても一辺60mをこえることは確かで，今回の調査はそのうちの東北部にあたったものとみられる。ＳＤ158・ＳＤ159溝の折れ方にみる入口を思わせる構造，さらにその東側に別の築地・建物が配されるなど，いずれにせよ，全体として相当な規模の整然とした配置の遺構を予想させる。なお，これらの築地に伴う溝からは８世紀代の須恵器，土師器が出土しており，同時に３棟の建物の時期をも示すと考えられる。

これらの他に，掘立柱建物跡としては調査区西南部で６間×２間の長棟を含む数棟が一群をなす。ただし建物方位は約５°西に振れ，先の掘立柱建物や溝とは明らかに時期が異なり，また柱掘方も小形円形である。小型の掘立柱建物跡はほかにも数棟が調査区内に散在するようであ

Fig. 33　東山田一本杉遺跡遺構配置図(平板測量図)

る。その他の遺構としては井戸跡，土壙等がみられるが，特にＳＥ245井戸跡は径1.4m，深さ2.0mで鎌倉時代の石積み井戸としては珍しい。

本遺跡の所在する字名東山田の「山田」は，『肥前風土記』にも見られ奈良時代以前に地名として存在していたことが知られる。また『和名抄』には，佐嘉郡六郷の一つとして〝山田郷〟が記されており，その郷域は元々，現在の東山田やその西の西山田はもちろんのこと，嘉瀬川東岸の尼寺・国分あたりから佐賀市北西部まで拡がっていた可能性がつよい。平安時代末までのうちにこの〝山田郷〟は東西に分けられ，このうち〝山田東郷〟については，河上神社文書の承安三年（1173）の『権介清原眞人兼平謹解　質地去状案』に，その正確な四至の比定は不明ながら，「東限小津溝，西限大川，北限高瀬大路，南限府大路」と記されている(7)。本遺跡一帯が西郷・東郷のいずれに属したかは別としても，中世には河上社免田が広く〝山田郷〟に存していたことが河上神社文書から知られるところであり，河上社に近く位置する本遺跡の場合，鎌倉時代の建物遺構については河上社との関係を注意する必要があろう。

特に問題なのは築地とそれに囲まれた９世紀に遡る建物群の性格についてで，例えば国府関係の政庁一部とみれば，当時の府域区分が自然地形によらずに佐嘉郡として嘉瀬川を西にこえていたことを想定させ，新たな問題が提起されることになる。ただし平安時代における佐嘉郡を嘉瀬川以東とし，以西を小城郡とするのであれば問題は別で，『和名抄』の「小城郡乎岐国府」の記述から言われる肥前国府の小城移転説がまた浮上してでる余地はある。その他，郡衙，館，あるいは文献に現れない寺院等々，様々な検討が必要である。

いずれにせよ本遺跡は現在調査中で，全体についてはまだ明らかではない。ただ嘉瀬川西岸の地で初めて東岸の遺構群に匹敵する規画性をもつ築地・溝・掘立柱建物などの大規模な遺構群が確認されたことの意義は大きく，今後の調査に関心がもたれる。

（註）

(1) 立石泰久編『肥前国府跡Ｉ』佐賀県文化財調査報告書第39集　1978

(2) 本田秀樹「惣座遺跡」（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第７集』）　1984

(3) 田平徳栄・松尾法博「久池井Ｂ遺跡」（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第６集』）　1983

(4) 米倉二郎「国の昇格と国府の変容」（『史林』66巻１号）　1983

(5) 高橋誠一「肥前国府に関する再検討」（『人文地理』36巻１号）　1984

(6) 大和町教育委員会1983年度調査

(7) 佐賀県立図書館『佐賀県史料集成古文書編』第１巻　1955

Tab. 1　肥前国府跡周辺検出掘立柱建物跡一覧表

	遺構番号	発　掘　区	構　　造	規模　(梁×桁) m	南北主軸方位	備　　考
•	S B001	R G25	東西棟	7 × 3 間(13.3×6.3m)	N-2°27′27″-W	
	S B002	R G33	〃	2 × 1 (5.34×2.4)	N-20°22′35″-W	
	S B003	〃	〃	3 × 1 (4.5×1.5)	N-20°22′35″-W	
01	S B004	〃	南北棟	7 以上× 3 (14.7以上×6.6)	N-4°3′12″-W	
	S B005	〃	東西棟	1 × 1 (2.1×2.2)	N-11°58′33″-W	
•	S B006	R B25	(総柱)	2 × 2 (3.3×3.3)	N-11°18′35″-W	
	S B007	D D01	東西棟(総柱)	5 × 3 (8.25×5.4)	N-4°36′00″-W	
	S B008	Q C05	〃	5 × 3 (11.0×5.7)	N-5°26′25″-W	
02	S B060 II	Q F06・16	〃	2 × 7 (5.4×20.86)	N-6°54′-W	後殿(新)
	S B060 I	〃	〃	〃 (5.1？×20.86？)	〃	〃 (古)
•	S B075	Q A11	南北棟	2 × 4 以上(4.0×10.8以上)	N-1°07′-E	
	S B076	Q A13	南北棟(三面廂)	3 × 5 (廂出 1)(5.95×10.5)	N-4°5′8″-W	
	S B090	Q F17・26	東西棟(四面廂)	4 × 9 (廂出 1)(10.8×20.86)	N-6°54′-W	正殿
03	S B091	Q F17・18・26	東西棟	1 ？× 2 (3.0×5.5)	N-2°15′-W	
	S B093 II	Q F18～21	〃	2 × 7 (5.4×20.86)	N-6°54′-W	前殿(新)北へ0.5m移動
•	S B093 I	〃	〃	〃	〃	前殿(古)
	S B095 II	Q F23・44・50・60	南北棟	2 × 7 (5.3×17.5)	N-6°54′-W	西側脇殿北棟(新)
	S B095 I	〃	〃	〃	〃	〃 (古)
04	S B099	Q F28	東西棟	1 × 8 以上(2.7×21.6以上)	N-6°54′-W	西側回廊
	S B104	Q F48・58	東西棟	3 × 5 (5.6×11.8)	N-6°54′-W	
•	S B106	Q F28	南北棟？	3 × ？(8.1×？)	0°	
	S B116 III	Q E52	門(八脚門)	2 × 3 (4.9×7.2)	N-6°54′-W	南門(新)，礎石建物
	S B116 II	〃	〃	〃	〃	〃 (中)
05	S B116 I	〃	〃	〃	〃	〃 (古)
	S B125 II	Q F60	南北棟	2 × 7 (5.3×19.2)	N-6°54′-W	西側脇殿南棟(新)
•	S B125 I	〃	〃	2 × 7 (5.0×20.8)	〃	〃 (古)
	S B135	〃	南北棟	2 ？× 4 以上(4.5×8.4以上)	〃	
	S B136	〃	東西棟(総柱)	2 × 3 (3.8×5.0)	〃	
06	S B138	D B03	方形	1 × 1 ？(2.4×2.4？)	N-8°45′-W	
	S B168	C B02	東西棟	5 以上× 1 以上(12.5以上×？)	N-10°16′-W	
•	S B171	D B09	東西棟	5 以上× 1 以上(14.6以上×？)	N-2°10′-W	
	S B223	惣座遺跡	方形(総柱)	3 × 3 (6.0×7.5)	N-9°-W	
	S B242	〃	〃 (〃)	3 × 3 (6.0×7.5)	N-9°-W	
07	S B245	〃	〃 (〃)	3 × 3 (6.0×7.5)	N-9°-W	建替 1 回(新)
	S B245′	〃	〃 (〃)	〃 (〃)	〃	(古)

•

	遺構番号	発　掘　区	構　　造	規模　(梁×桁)m	南北主軸方位	備　　考
	S B267	惣座遺跡	方形(総柱)	4 × 4 (6.7×8.7)	0°	
08	S B272	〃	〃 (〃)	3 × 3 (6.3×8.1)	N-9°-W	
	S B273	〃	〃 (〃)	2 × 2 (5.7×6.3)	0°	小方形掘形
	S B274	〃	〃 (〃)	3 × 3 (6.3×8.1)	N-9°-W	
•	S B275	〃	東西棟	3 × 6 (6.3×18.0)	0°	S B276を切る
	S B276	〃	方形(総柱)	3 × 3 (5.4×7.2)	N-9°-W	S B275に切られる
09	S B277	〃	〃 (〃)	〃 (〃)	〃	
	S B281	〃	南北棟	2 × 3 以上(6.0×8.1以上)	0°	小円形掘形
	S B286	〃	〃	2 × 6 (6.5×14.7)	〃	
•	S B287	〃	東西棟(総柱)	2 × 5 (3.4×13.6)	N-21°-W	
	S B290	〃	東西棟？		〃	
10	S B291	〃	東西棟	2 × 3 (3.0×5.8)	〃	
	S B307	久池井B遺跡	方形(総柱)	2 × 2 (3.4×2.9)	0°	
	S B308	〃	〃 (〃)	2 × 2 (3.4×3.5)	わずかに東傾	
•	S B312	〃	〃 (〃)	2 × 2 (〃)	〃	
	S B319	〃	南北棟	2 × 3 (4.2×8.1)	〃	
11	S B320	〃	〃	2 × 3 ？(4.2×　)	N-2°-E	
	S B331	〃	方形(総柱)	1 × 1 (2.0×3.2)	0°	
	S B333	〃	南北棟	不　明		
•	S B351	〃	方形(総柱)	2 × 2 (2.9×2.9)	0°	
	S B352	〃	〃 (〃)	〃 (〃)	〃	
12	S B353	〃	〃 (〃)	〃 (3.8×3.2)	〃	一部布掘
	S B354	〃	〃 (〃)	〃 (4.2×3.4)	〃	〃
	S B355	〃	〃 (〃)	〃 (4.0×3.4)	〃	
•	S B357	〃	東西棟	3 × 5 (5.5×10.4)	〃	
	S B358	〃	東西棟(南面廂)	4 × 6 (7.5×12.4)	〃	間仕切
13	S B367	〃	南北棟(東面廂)	3 × 6 (6.2×12.1)	〃	
	S B237	東山田一本杉遺跡	南北棟(東西廂)	7 × 4 (10.8×17.5)	0°	
	S B266	〃	東西棟	5 × 2 (3.7×7.7)	〃	
•	S B372	〃	東西棟(南面廂)	5 × 4 (7.7×12.3)	N-3°-W	
	S B373	〃	東西棟	5 × 3 (7.3×12.4)	〃	

14　※惣座遺跡・久池井B遺跡・東山田一本杉遺跡の建物跡の法量や方位は、現在整理または調査中であるので、正確な数値をあげていない。

V 遺　　物

1．遺物の概要

10年間にわたる肥前国府跡の確認調査，あるいは久池井B遺跡，惣座遺跡など国府関連遺跡の発掘調査により出土した遺物は大量にのぼる。土器がほとんどを占めるが，他に陶磁器，土製品，石製品，金属製品がある。土器には土師器・須恵器・黒色土器が，陶磁器には緑釉陶器・灰釉陶器をはじめ越州窯青磁や他の青磁・白磁などがある。土製品としては瓦・硯・土馬・土鏡や鞴羽口・坩堝などの鋳造関係遺物，石製品としては石銙（巡方）や石仏，金属製品としては銅鏡などがある。

ここでは出土量が多い須恵器と土師器について形態分類を主にした概要を述べ，瓦や出土数が少ない遺物については，「3．瓦」，「2．土器・陶磁器」の項で述べる。

(1) 須恵器（Fig.34）

須恵器には，杯・高台付杯・皿・蓋・鉢・高杯・壺・甕があり，形態（A・B・C……）や法量（大から小へⅠ・Ⅱ・Ⅲ……）などの特徴により杯8種，高台付杯9種，皿9種，蓋12種，鉢4種，高杯1種，壺10種，甕3種に分類した。

また同一形態・法量のものの中には細部の技法が異なっているものもみうけられるが，全体を細かく観察していないので今回は細分しなかった。

杯A　たちあがりがつく杯で，器高が低く，たちあがりは短く内傾する。底部外面はヘラケズリ。口径8.3～9.2cm，器高2.5～3.1cm。

杯B　丸底気味の平底に，上部でわずかに外反する体部がつき，底部と体部との境が不明瞭である。体部外面下部から底部にかけてヘラケズリ。口径13.4～13.7cm，器高4.1～4.2cm。

杯C　径が大きい平底に，直線的にひらく体部がつくもので，体部外面下部から底部にかけてヘラケズリ。法量により**杯CⅠ**（口径21.8cm，器高3.9cm）と**杯CⅡ**（口径12.8～14.2cm，器高3.2～3.5cm）に分類される。

杯D　平底に，わずかに外反する体部が直線的にひらくもので，体部外面下部から底部にかけてヘラケズリ。口径13.0～14.1cm，器高3.8～4.2cm。

杯E　平底に，直線的にひらく体部がつき，底部と体部の境が明瞭となる。底部外面のみヘラケズリするが，後ナデ調整のものもある。口径11.6～13.0cm，器高3.4～4.5cm。

杯F　丸味をおびた平底に，大きく直線的にひらく体部がつくもので，底部外面はヘラケズリ。口径13.9cm，器高3.3cm。

杯G　丸味をおびた平底に，直線的に上方へのびる体部がつく。器高が高く，体部外反角が小さい小形の杯である。底部外面はヘラケズリ。口径7.8cm，器高4.8cm。

高台付杯A　径が大きい丸底気味の平底に，短い体部がひらいてつき，底部と体部の境より内側に短い高台がつく浅めの杯である。底部外面へラケズリ。口径16.4cm，器高3.6cm。

高台付杯B　丸底気味の平底に，わずかに内湾してひらき口縁部が小さく外反する体部がつき，外にひらく長めの高台がつく。底部は外面ナデ，内面不定方向ナデ調整。口径15.8cm，器高6.5cm。

高台付杯C　平底に，わずかに外反する比較的短い体部がつく。口径13.6～15.0cm，器高4.2～5.6cm。

高台付杯D　平底に，ゆるやかに大きくひらく体部がつき，底部と体部の境に外にひらく高台がつく。底部外面はへラケズリ後，ナデ調整のものもある。法量により**高台付杯DⅠ**（口径17.2cm，器高5.9cm）と**高台付杯DⅡ**（口径14.9～16.0cm，器高4.9～6.0cm），**高台付杯DⅢ**（口径11.6～12.2cm，器高3.4～4.5cm）に分類される。

高台付杯E　径が大きい平底に直線的にひらく体部がつき，底部と体部の境は明瞭で，境よりわずか内側に外へひらく短い高台がつく。底部外面へラケズリ後ナデ調整のものもある。法量により**高台付杯EⅠ**（口径16.0～16.2cm，器高5.2cm）と**高台付杯EⅡ**（口径12.0～13.4cm，器高3.9～5.1cm）に分類される。

皿A　丸底気味の底部から明瞭な稜をなして口縁部が外反する。底部外面へラケズリ後ナデ調整のものもある。口径16.0～16.8cm，器高2.1～3.0cm。

皿B　底部が平底で，口縁部との境がわずかに丸い。底部外面へラケズリ後ナデ調整のものもある。法量により**皿BⅠ**（口径16.2～17.4cm，器高1.8～2.3cm）と**皿BⅡ**（口径12.2～14.5cm，器高1.4～1.5cm）に分類される。

皿C　平底と口縁部の境が明瞭なもので，底部外面はへラケズリ後ナデ調整のものが多い。法量により**皿CⅠ**（口径15.0～19.0cm，器高0.95～2.7cm）と**皿CⅡ**（口径13.2～14.6cm，器高1.7～2.3cm）に分類される。

皿D　皿Cと似た形態であるが，底部と口縁部の境が丸く不明瞭なものである。技法は皿Cと同じ。法量により**皿DⅠ**（口径21.8cm，器高3.6cm）と**皿DⅡ**（口径18.5cm，器高2.9cm），**皿DⅢ**（口径15.4cm，器高2.5cm）に分類される。

皿E　平底から短い口縁部が内湾しながらひらく。小片であるが他に例がないのであげた。口径16.4cm，器高1.4cmに復元される。

蓋A　高く丸味のある天井部端を下方へのばし，そのまま口縁としたもので，杯Aと組み合って出土した。天井部外面へラケズリは½以下。口径9.6～10.2cm，器高3.0～3.7cm。

蓋B　内面にかえりがつくもので，天井部には擬宝珠様つまみがつく。**蓋BⅠ**はかえりが小さく，口径14.8cm，器高2.8cm，**蓋BⅡ**は丸味をもつ天井部下端内面に小さなかえりがつく。つまみの痕跡がある。口径12.5cm，器高2.7cm。

蓋C　やや丸味をもつ天井部の上面は平らで，下端が下方へ短く屈曲し，天井部中央には扁

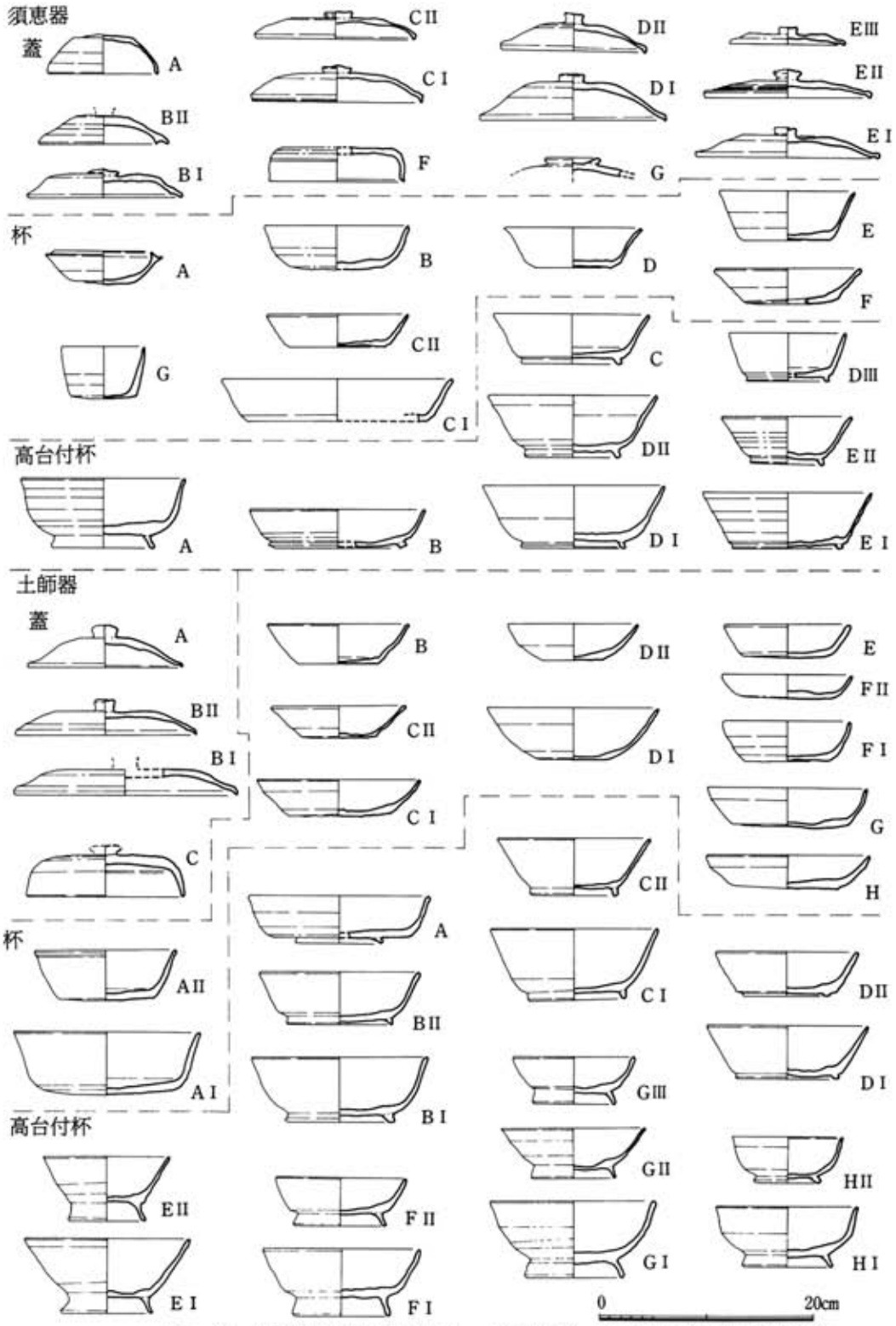


Fig. 34　肥前国府跡出土須恵器・土師器(蓋・杯・高台付杯)形態分類図

平な擬宝珠様つまみがつく。天井部外面へラケズリは½～⅓。口径13.6～16.3cm。器高の大小で**蓋CⅠ**（3.0cm前後）と**蓋CⅡ**（2.0cm前後）に分類される。

蓋D　比較的高く丸い天井部先端を外側へ短くひらき，端部が下方へわずかに屈曲したもので，天井部外面へラケズリは½以下。法量により**蓋DⅠ**（口径17.4cm，器高4.3cm）と**蓋DⅡ**（口径13.4～15.7cm，器高3.4～4.2cm）に分類される。

蓋E　扁平で低い天井部先端が外へ短くひらき，端部がわずかに下方へ屈曲したもので，やや長めの擬宝珠様つまみがつくものが多い。天井部外面へラケズリは½強のものが多いが，⅔のものもある。法量により**蓋EⅠ**（口径16.6～17.8cm，器高2.7～3.9cm）と**蓋EⅡ**（口径12.9～16.5cm，器高2.1～3.35cm），**蓋EⅢ**（口径10.6～10.8cm，器高1.6～2.9cm）に分類される。

蓋F　水平な天井部端から丸く下方へのびる口縁部がつく。つまみがつくものと思われる。口径12.8cm。

蓋G　扁平な天井部に輪状のつまみがつく。全体の形態は蓋Eに似ると思われる。つまみ径5.2cm。調整は丁寧である。

鉢A　体部が直線的に上外方へ長くのびる器高が高く体部の外反角が小さい鉢である。**鉢AⅠ**・**鉢AⅡ**に細分される。**鉢AⅠ**は内面と体部外面上半をロクロナデ，下半はタテ方向ケズリのあと回転ケズリ調整。口径24.0cm，器高17.7cm。**鉢AⅡ**は鉢AⅠに比べ器高が低く，底部と体部との境が丸い。内面と体部外面上半はロクロナデ，下半は回転へラケズリ調整。口径23.6cm，器高13.9cm。

鉢B　平底から体部が直線的に大きくひらく鉢で，片口となっている内面と体部外面上半ロクロナデ，下半回転へラケズリ調整。口径32.4cm，器高12.5cmに復元できる。

鉢C　いわゆる鉄鉢形の鉢である。復元口径18.2cm。

高杯A　直線的に大きくひらく浅い杯部にラッパ状にひらく脚部がつく。杯口縁端部，脚裾部はそれぞれ上，下に肥厚させている。ロクロナデにより成形されており，脚部上半にカキメ，下半にシボリ痕が残る。口径13.9cm，器高12.2cm。

壺A　丸底で肩のはった体部に短い口縁部がつくものである。体部はタタキにより成形され，後ロクロナデ調整。肩部径16.1cm。

壺B　肩部に稜のつく扁平な体部に高台がつく壺で，口頸部は残存しないが，ラッパ状の長いものと考えられる。ロクロにより成形されており肩部以下はへラケズリ調整している。法量により壺BⅠ・壺BⅡに分類される。**壺BⅠ**は肩部径19.2cmで，高台は長めで外へひらく。**壺BⅡ**は肩部径16.8cmで，高台は短い。

壺C　肩のはった扁平な体部に，大きく外に開く長い高台がつく壺で，口頸部を欠く。肩上部には高台状の突帯をめぐらし，その下に列点文・2条の沈線をめぐらすが本来この部分にも突帯がついていたものと考えられる。肩部径24.7cm。

壺D　壺Cの体部を長くしたような肩の張る壺である。肩は張りがつよく断面三角形となり突出する。肩上部には高台状の小さな突帯が1条めぐる。底部には小さな高台がつき，口頸部は大きくひらき端部が上へ屈曲し，幅広の口縁部となる。体部内面にはタタキ痕が残るが，ナデ消そうとしている。復元器高29.1cm，肩部径24.5cm，口径17.1cm。

壺E　卵形の体部に外反する口頸部がつくが，口頸部の先端は垂直にたちあがり，体部に耳が3個つく。体部はタタキ技法で成形され，外面は後ナデによりタタキ目を消している。体部最大径21.1cm。

壺F　体部を欠くが，壺Dに似た形態の壺と考えられる。口頸部先端は壺Dとは違い，口縁部が屈曲して幅広の凹帯となる。口径10.6cm。

壺G　内湾する体部上端に，内傾する直線的な口頸部がつく壺で，端部は丸くおさめ，体部上端に2個の耳をつける。ロクロによる成形品である。口径8.5cm。

壺H　わずかに内湾しながら上方へひらく体部の上部を内へ小さく屈曲させ，端部を上へつまみあげ口縁とする壺で，体部下端に小さな高台がつく。ロクロナデにより成形，底部外面はヘラケズリの後ナデ調整。口径9.1cm，器高7.7cm。

壺I　径が大きい平底に，わずかに内湾しながらひらく体部がつき，内傾した体部上端を小さくつまみあげ口縁としている浅い壺である。口径13.0cm，器高4.5cm。技法は壺Hと同じ。

甕A　屈曲して幅広の凹帯をなす口頸部がつくものである。口径19.2～22.0cm。

甕B　丸く肥厚させた口縁がつく口頸部がつくものである。口縁直下に1条の細かな沈線をめぐらす。口径21.6cm。

甕C　甕Aに似た口縁部がより上方へ延びたもので，口頸部は大きくひらく大形品である。口縁部直下に波状文をめぐらす。口径42.0cm。

(2)　土師器（Fig.34）

土師器には杯・高台付杯・皿・高台付皿・脚付皿・盤・蓋・鉢・高杯・甕があり，須恵器の場合と同様な基準で，杯12種，高台付杯17種，皿8種，高台付皿4種，脚付皿2種，盤1種，蓋4種，鉢2種，甕4種に分類した。

杯や高台付杯の中には椀形をなすものもあるが，ここではすべて杯・高台付杯として取扱った。また高杯は脚部の一部しか出土しておらず，全体の形態を知ることができないため掲載しなかった。「肥前国府跡Ⅰ」を参照願いたい。

杯A　径が大きい平底に，外上方へ直線的にひらく体部がつく深めの杯で，体部下部から底部はヘラケズリ。法量により**杯AⅠ**（口径15.6～17.9cm，器高4.1～5.9cm）と**杯AⅡ**（口径11.8～13.6cm，器高3.2～4.7cm）に分類されるが，杯AⅡは口径13cm，器高4cmが標準である。

杯B　平底に，直線的にひらく体部がつく。底部と体部の境は明瞭である。底部外面はヘラ切り離しで，板目痕がつくものもある。口径11.5～13.6cm，器高2.55～4.3cmであるが口径13

cm，器高3.5cmが標準である。

杯C　平底に，直線的に大きく外にひらく体部がつくもので，ヘラ切り離し後底部外面に板目痕がつくものがある。法量により**杯CⅠ**（口径14.3～15.4cm，器高2.8～3.5cm）と**杯CⅡ**（口径12.4～13.6cm，器高2.2～3.2cm）に分類される。

杯D　径が小さい平底に，わずかに内湾しながら大きくひらく長い体部がつくもので，底部外面はヘラ切り後ナデ調整。法量により**杯DⅠ**（口径15.6～16.6cm，器高3.6～4.8cm）と**杯DⅡ**（口径10.4～14.2cm，器高3.2～4.0cm）に分類される。

杯E　杯CⅠに形態が似るが，より小形で，直線的にのびる体部の長さも小さく器壁は全体に厚手である。底部と体部の境は丸味があるものが多い。底部外面はヘラ切り離しで，後ナデ調整のものが多い。口径11.3～13.9cm，器高2.6～3.2cmであるが，口径11.5cm，器高3cmが標準である。

杯F　杯Eに形態が似るが，体部は内湾気味である。器壁は厚く，技法も杯Eと同一。器高により**杯FⅠ**（口径11.2～12.8cm，器高2.9～3.8cm）と**杯FⅡ**（口径11.0～12.2cm，器高2.0～2.5cm）に分類されるが，杯FⅡは特に底部と体部の境が丸くなる。

杯G　径が大きい平底に，直線的またはやや内湾する短めの体部がつく。底部外面はヘラ切り離し後板目痕がつく。口径14.0～15.5cm，器高3.1～3.7cm。

杯H　径が大きい平底に，内湾気味の短い口縁部がつく。底部外面は糸切りの後板目痕がつく仕上げの調整がない粗雑なつくりの杯である。径15.2cm，器高3.2cm。

高台付杯A　径が大きい平底に，わずかに内湾しながらひらく比較的短い体部がつき，口縁部は小さく外反する杯で，底部と体部の境よりかなり内側に，外にひらく小さな高台がつく。底部外面ヘラケズリ，高台をつけた後高台はナデ調整。口径16.9cm，器高4.45cm。

高台付杯B　径が大きい平底に，内湾しながらひらき上部でわずかに外反するやや長めの体部がつく。底部と体部の境は丸く，境よりやや内に外にひらく高台がつく。外面高台内はヘラケズリ。法量により**高台付杯BⅠ**（口径16.7～18.3cm，器高6.0～6.3）と**高台付杯BⅡ**（口径15.1cm，器高4.9cm）に分類される。

高台付杯C　平底に，直線的にひらく長い体部がつくもので，丸くなった底部と体部の境に直立気味の高台がつく。外面高台内はヘラケズリで，板目痕がつくものもある。法量により**高台付杯CⅠ**（口径15.8～16.2cm，器高6.6～6.7cm）と**高台付杯CⅡ**（口径14.2～14.9cm，器高5.3～6.5cm）に分類される。

高台付杯D　平底に，直線的にひらくやや短い体部がつき，底部と体部の明瞭な境よりやや内に短い高台がつく。底部外面はヘラケズリの後ナデ調整のものが多い。法量により**高台付杯DⅠ**（口径15.1cm，器高5.0cm）と**高台付杯DⅡ**（口径13.4～13.7cm，器高4.2～4.6cm）に分類される。

高台付杯E　径が小さめの平底に直線的にひらく長い体部がつき，底部と体部の境には外反気味に外にひらく長く先端が丸い高台がつく。外面高台内はナデで仕上げる。法量により**高台付杯E I**（口径15.8cm，器高8.8cm）と**高台付杯E II**（口径12.0cm，器高6.1cm）に分類される。

高台付杯F　径が大きい平底に，直線的にひらく短めの体部がつき，底部と体部の境より内側に，外にひらく長めの高台がつく。外面高台内はヘラ切り痕がつくが，ナデて消したものもある。法量により**高台付杯F I**（口径14.4～15.0cm，器高6.2cm）と**高台付杯F II**（口径11.4～12.2cm，器高4.5～5.15cm）に分類される。

高台付杯G　内湾気味にひらく体部と底部の境は不明瞭で，わずかに内湾する長い高台がつく。技法は高台付杯Fと同一。法量により**高台付杯G I**（口径14.5～15.6cm，器高6.1～7.2cm）と**高台付杯G II**（口径13.6～13.9cm，器高4.7～6.2cm），**高台付杯G III**（口径11.5～12.3cm，器高4.3～5.0cm）に分類される。

高台付杯H　丸底気味の底部に，内湾しながらひらく体部がつくもので，口縁部を外反させる。底部には外にひらく先端が丸い高台がつく。外面高台内もナデ調整。法量により**高台付杯H I**（口径13.4cm，器高8.5cm）と**高台付杯H II**（口径10.4cm，器高6.3cm）に分類される。

高台付杯I　長い脚状の高台がつくものであるが体部は残存しない。高台の大小で**高台付杯I I**（裾部径15.2cm）と**高台付杯I II**（裾部径10.8cm）に分類される。

皿A　径が大きい平底に，やや外反しながら直線的にひらく短めの口縁部がつく。底部外面はヘラ切り離しで，後ナデたものが多い。法量により**皿A I**（口径19.2～19.6cm，器高1.95～2.0cm），**皿A II**（口径17.2～18.0cm，器高1.5～2.6cm），**皿A III**（口径15.5～16.8cm，器高1.6～2.6cm），**皿A IV**（口径13.5～14.8cm，器高1.7～2.35cm），**皿A V**（口径9.0～9.4cm，器高1.1～1.2cm）に分類される。

皿B　丸底気味の平底に，口縁部がつくもので，底部と口縁部の境は不明瞭である。底部外面はヘラ切り離しの後板目痕がつくものが多い。法量により**皿B I**（口径15.7cm，器高2.3cm），**皿B II**（口径9.0～10.1cm，器高1.25～1.6cm）に分類される。

皿C　平底に，わずかに内湾する短い口縁部がつくもので，底部外面は糸切り離しの後板目痕がつく。口径8.9～9.0cm，器高1.3cm。

高台付皿A　深みがなく平らな皿部に，わずかに内湾しながら外へひらく長めの高台がつく。外面高台内はヘラ切り離し後ナデたものが多い。口径10.9～13.0cm，器高1.8～3.0cm）

高台付皿B　少し深みをもつ皿部のものである。口径12.8～12.9cm，器高3.1～3.3cm。

高台付皿C　皿底部から屈曲してひらく口縁がつくもので，**高台付皿C I**（口径15.6cm，器高3.2cm）と**高台付皿C II**（口径12.8cm，器高2.7cm）に分類される。

脚付皿A　平らな皿部に3個の円錐形の脚がつくもので，脚は丁寧に面取りされている。口径13.8cm，器高2.0cm。

脚付皿B　平らな皿部に，やや外反する面取りされた3個の獣脚様の脚がつくもので，口径14.1cm，器高3.0cm。

盤A　径が大きい平底に，ゆるやかに上方へたちあがる短い口縁部がつくもので，端部は面取りされている。口縁部内外面はロクロナデの後ヘラミガキ，外面は不定方向のヘラケズリが施される。口径32.2cm，器高2.0cmに復元される。

蓋A　高めで丸い天井部先端を外へ短くひらき，端部を下方へ短く屈曲したもので，天井部には擬宝珠様つまみがつく。天井部外面のヘラケズリ幅は狭い。口径14.8cm，器高2.7～3.9cm。

蓋B　蓋Aに形態が似るが，天井部が平坦で，天井部外面のヘラケズリは½～⅔。法量により**蓋BI**（口径21.0cm）と**蓋BII**（口径17.2cm，器高3.35cm）に分類される。

蓋C　水平な天井部端から，丸く下方へのびる口縁部がつく。つまみがつくと思われる。天井部外面と天井部内面外半分はヘラケズリ。口径15.2cm。

鉢A　底部の破片である。丸底に近い底部に内湾しながら上方へのびる体部がつく。外面ヘラケズリ，内面にはハケメの痕跡が残る。底径8.5cm。

鉢B　鉢Aと似た器形の底部には高台がついていた痕跡がある。同一遺構から出土した上部は直立した体部上端をわずかに外に屈曲させ口縁部としたものがあるが，同一個体の可能性がある。底径13.5cm，口径21.4cm。

高杯　ラッパ状にひらく脚部上半が出土している。

甕A　球形に近いと考えられる体部に，わずかに外反する肥厚した口縁部がつく。口径25.0cm。口縁部内外面ヨコナデ，体部内面は上方向のヘラケズリ，外面にはタタキ痕が残る。

甕B　外への屈曲がつよい口縁部がつくものである。体部と口縁部の境内面は丸くなるものがほとんどである。口縁部ヨコナデ，体部内面ヘラケズリ，外面ハケメ調整。法量により**甕BI**（口径25.8～27.0cm），と**甕BII**（口径22.6～24.0cm），**甕BIII**（口径20.0cm）に分類される。

2．土器・陶磁器（Fig.35～49，PL.28～42）

形態分類に従って，各地区・各遺構ごとに土器・陶磁器について，そのセット関係を中心に述べてみたい。

(1)　政庁跡

QF地区06発掘区（Fig.35・36，PL.28・29）

後殿（SB060）の柱穴から切られるSD067溝跡からは，須恵器の蓋EIII，高台付杯EI・DIIが出土し，またSD068溝からは須恵器の蓋EII・DII，高台付杯C，杯CII，皿A・CIが，土師器の蓋A，杯AIIを伴って出土している。8には底部外面に「大」の墨書がある。遺構に伴わないものとして，緑釉陶器碗や，底部外面にヘラ描文字がつく土師器杯がある。前者

は軟質の白色胎に若草色に発色した緑釉を薄く施している。高台径9.0cm。

後殿に接する廃棄壙と考えられるＳＫ069土壙からは，須恵器の蓋ＥⅢ・ＥⅡ・ＤⅡ，杯Ｄ・ＣⅡ・Ｂ，皿ＢⅡ・ＣⅠ・ＣⅡ・Ｅ・ＤⅢ，甕Ａ，壺ＢⅠ，土師器の杯Ｂ・ＡⅠ・ＡⅡ，高台付杯ＤⅡ・ＤⅠ，皿ＡⅡが出土したが，灰釉陶器双耳壺も出土した。暗緑褐色に発色した灰釉が施され，内面にはロクロ目が残る。

ＱＦ地区16発掘区（Fig.37，ＰＬ.29）

後殿の柱穴を切るＳＫ080土壙も廃棄壙と考えられるが，須恵器片とともに土師器の杯Ｂ・ＣⅡ・ＡⅠ・ＤⅡ，皿ＡＶ，甕Ａなどを出土した。須恵器には硯がある。82・83は同一個体と考えられる円面硯の脚片で毛彫文様がつく。84は全体を復元しうる円面硯で，厚手のつくりである。また，ＳＫ089土壙からは土師器杯Ｂがまとまって出土している。

ＱＦ地区41発掘区（Fig.38，ＰＬ.30）

遺構に伴わず黒色土器と越州窯青磁碗が出土している。134は両面黒色で，ゆるやかに内湾しながらひらく体部の先端をわずかに外反させ口縁としており，外にひらく短い高台がつく。両面ヘラミガキであるが，内面には暗文がつく。口径15.5cm，器高5.95cm。135は越州窯青磁碗の高台部である。赤灰色の胎にオリーブ色の釉がかかる。復元高台径5.9cm。

ＱＥ地区57発掘区（Fig.39，ＰＬ.30～32）

政庁を囲む溝ＳＤ112溝跡から土師器の高台付皿Ａ，脚付皿Ｂ，杯Ｅ，高台付杯ＧⅢ・ＧⅡ・ＧⅠなどを一括して出土している。政庁の廃絶時期などとの関係で重要な一括資料である。またこのＳＤ112溝跡の西方への続きがＱＥ地区53発掘区，ＱＥ地区42発掘区でも検出され，土師器の高台付皿Ａ，脚付皿Ａ，高台付杯ＦⅡなどが出土している。

ＱＣ地区61発掘区（Fig.41，ＰＬ.33・34）

ＳＸ123遺構からは須恵器の蓋ＥⅢや壺Ｅの破片を交えて，土師器の杯Ｂ・ＡⅡ・ＤⅠ，皿ＡⅢなどが出土している。

政庁内の建物跡の時期を知る手がかりになるものに柱穴掘方内出土土器がある。106・109は前殿（ＳＢ093）柱穴出土の土師器杯Ｅ・116～119は西脇殿北棟（ＳＢ095）柱穴出土の須恵器蓋，皿，鉢Ｃ，143はＳＢ135建物跡柱穴出土の須恵器蓋ＣⅠ，197・198は南門（ＳＢ116）柱穴出土の土師器皿ＢⅡである。

(2) 久池井Ｂ遺跡（Fig.42～45，ＰＬ.34～40）

久池井Ｂ遺跡では廃棄壙と考えられる土壙からの一括出土品が多い。特にＳＫ314土壙とＳＫ

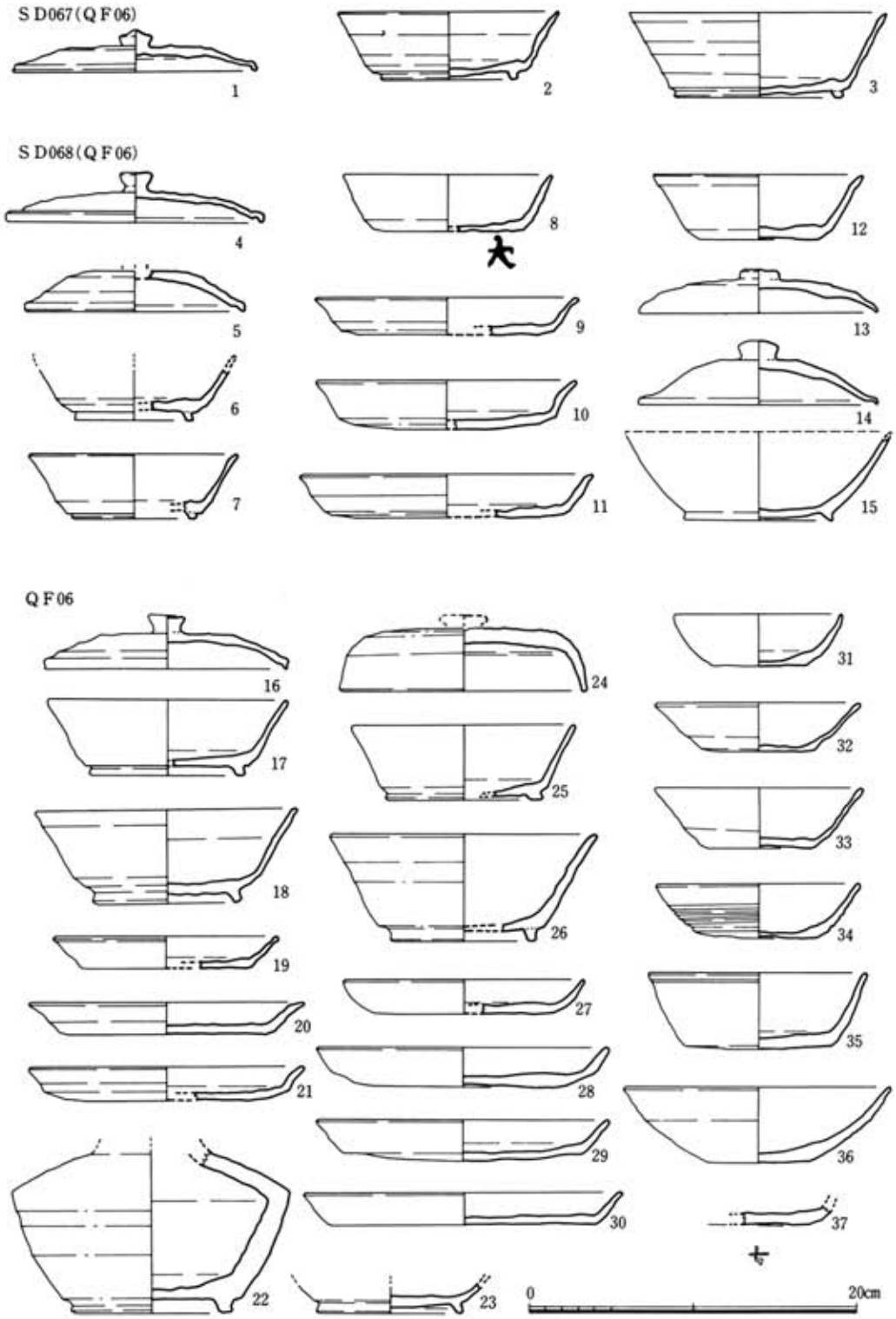


Fig. 35　土器・陶磁器実測図(1)

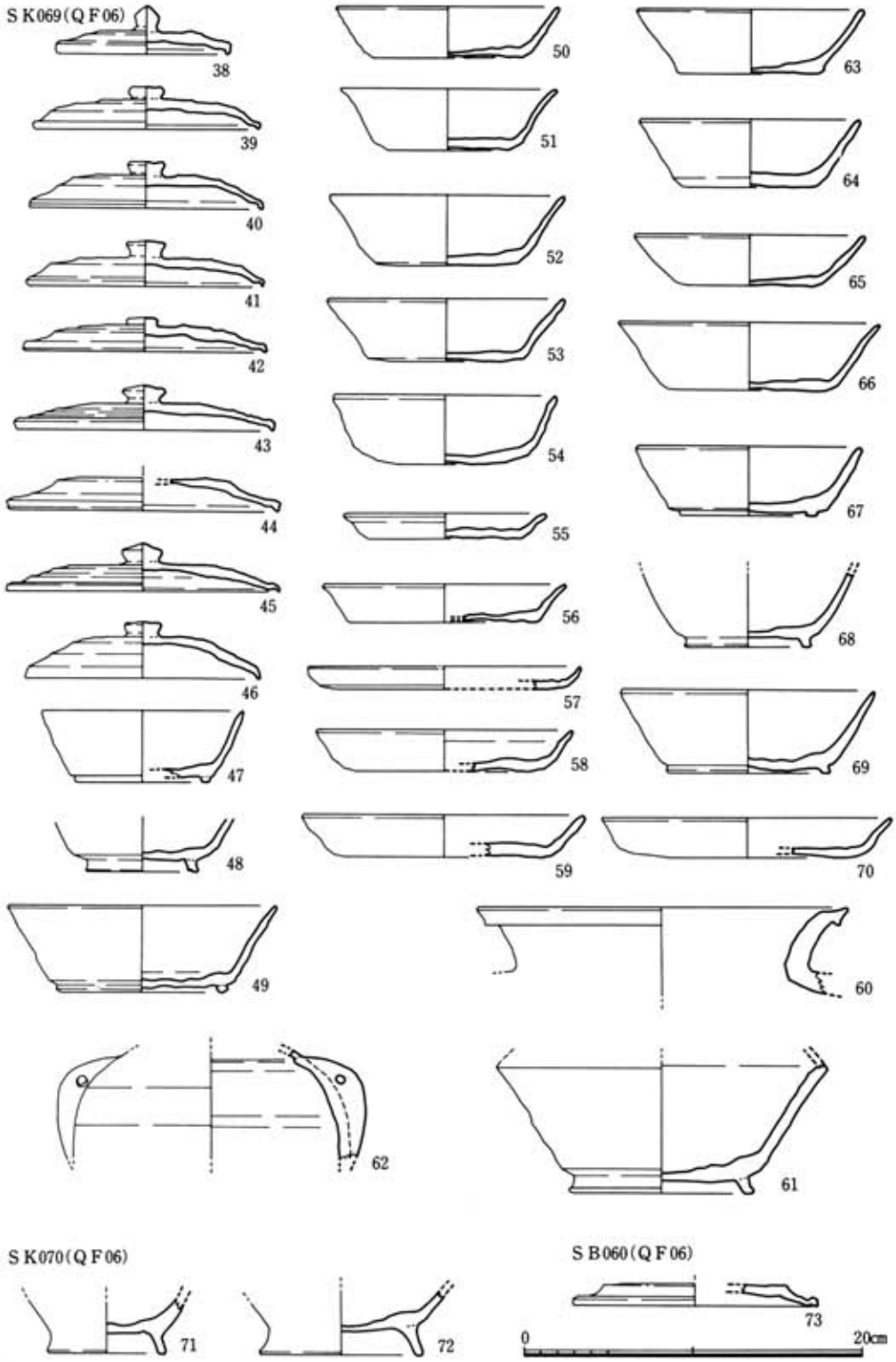


Fig. 36 土器・陶磁器実測図(2)

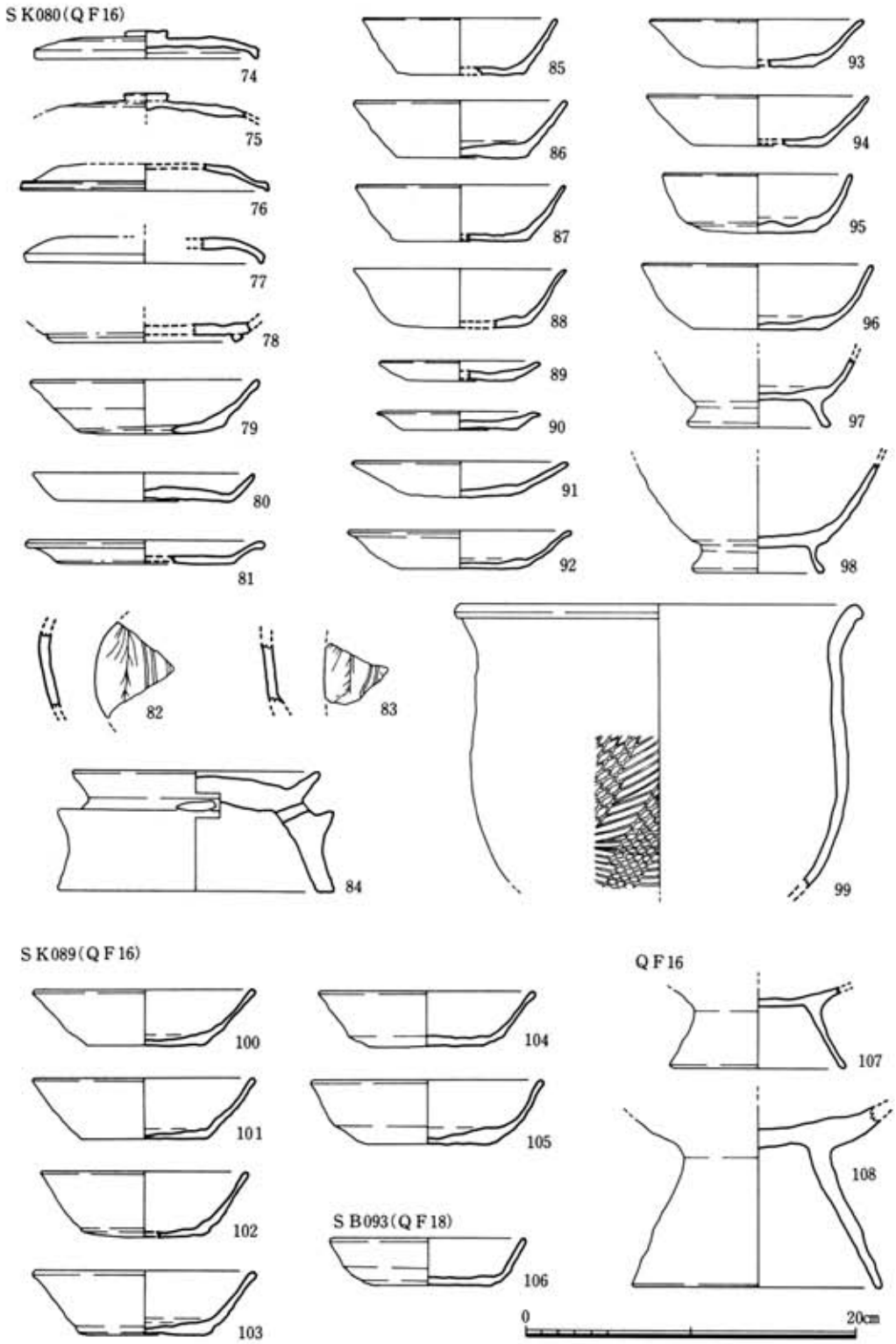


Fig. 37　土器・陶磁器実測図(3)

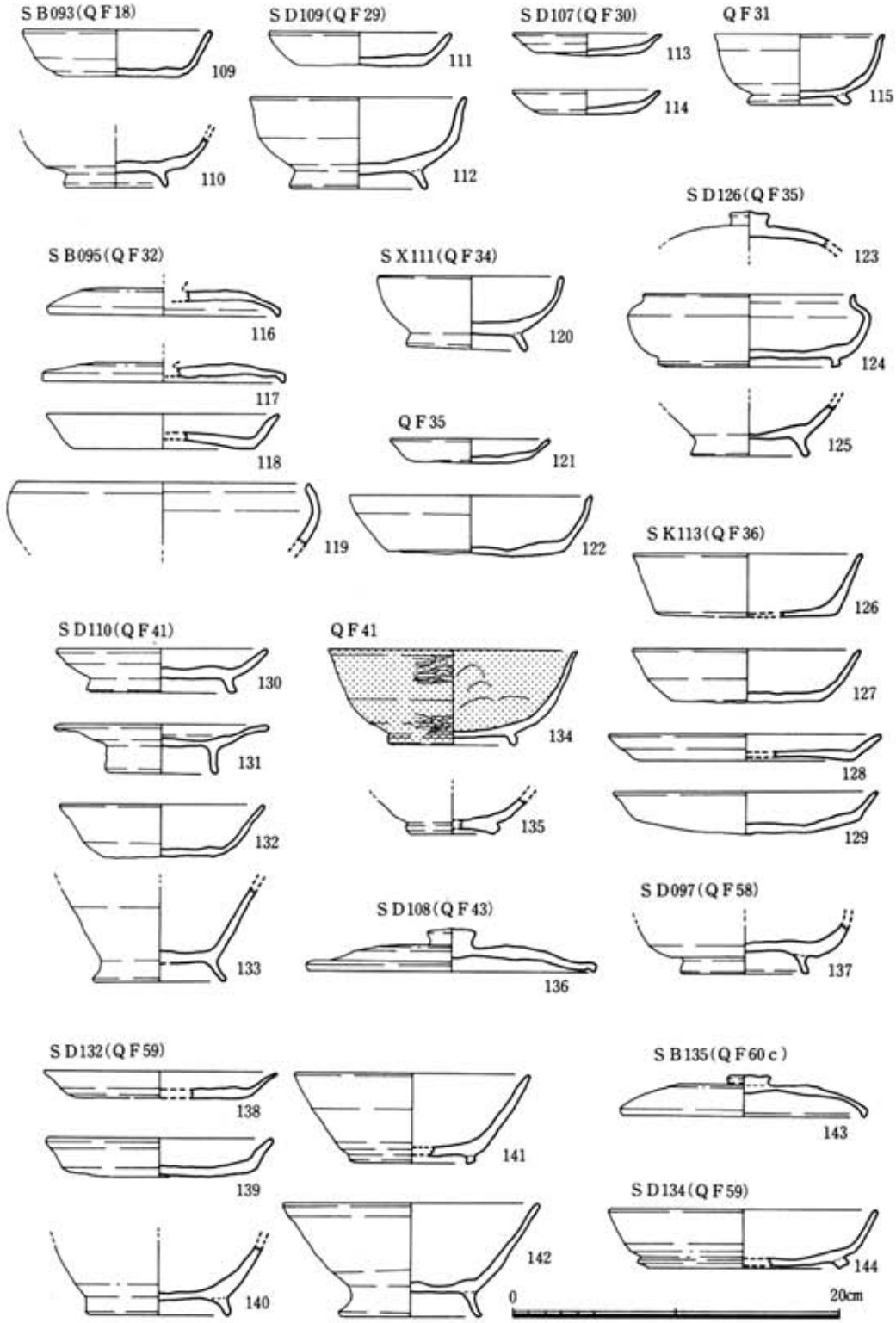


Fig. 38　土器・陶磁器実測図(4)

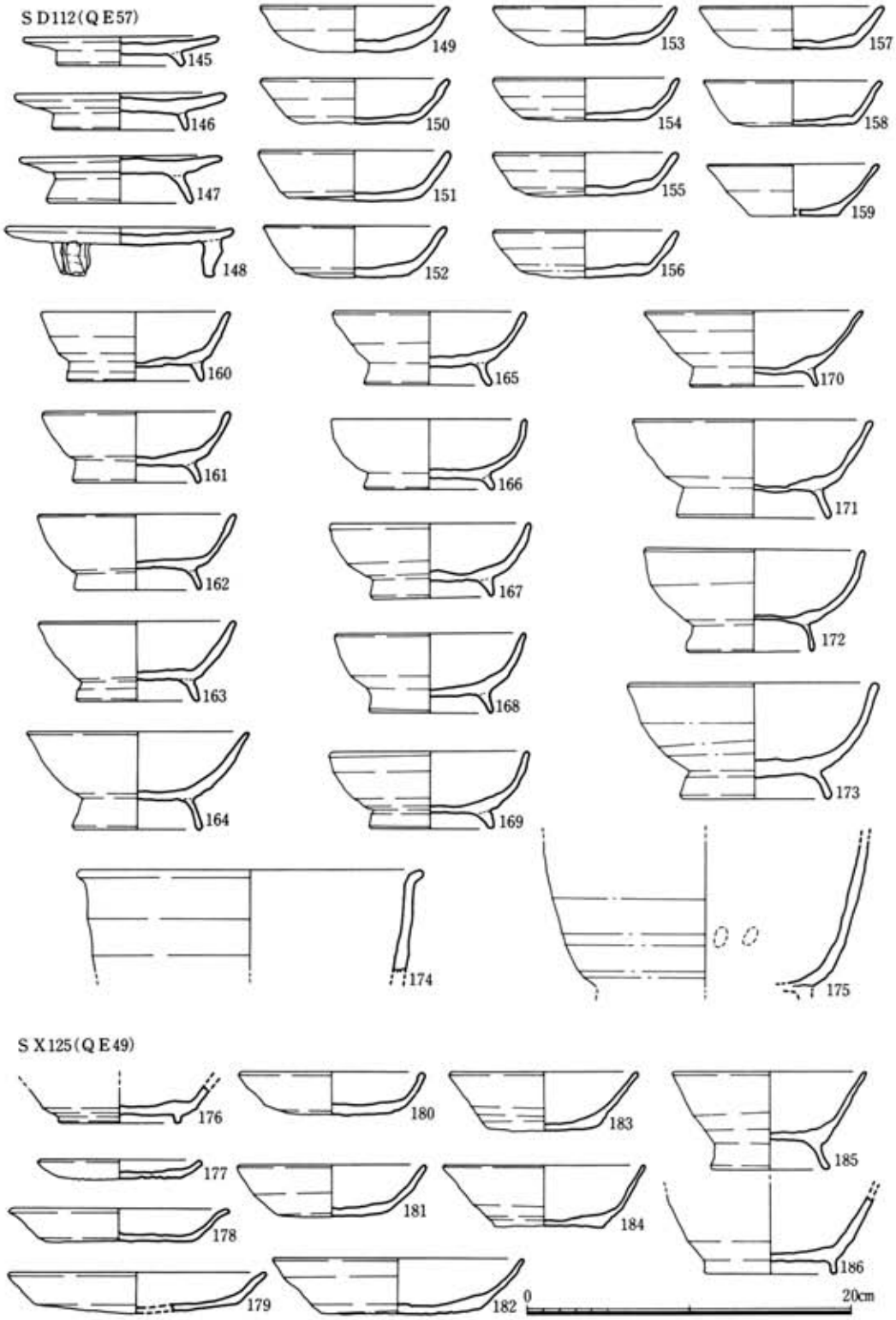


Fig. 39　土器・陶磁器実測図(5)

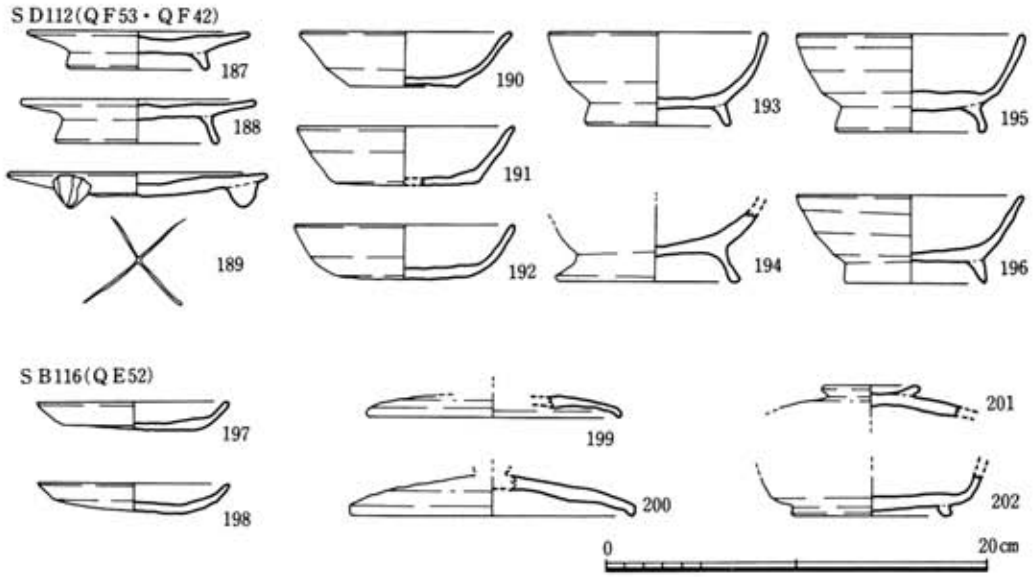


Fig. 40　土器・陶磁器実測図(6)

315土壙からは多量の土器を出土したが，ＳＫ314土壙はＳＫ313土壙を切りＳＫ315土壙はＳＫ318土壙に切られている。

ＳＫ314土壙からは須恵器の蓋ＥⅢ・ＥⅠ・ＤⅠ，杯Ｅ・Ｇ，高台付杯ＣⅢ・皿ＣⅠ・ＤⅡ，鉢ＡⅠ・Ｂ，壺Ｆと，土師器の蓋ＢⅡ・杯Ｅ・ＤⅠ・ＤⅡ・Ｂ，高台付杯ＢⅠ・ＣⅠ，皿ＡⅡ・ＡⅠ，甕Ｂを出土した。須恵器では蓋ＥⅢ，杯Ｅ，土師器では杯Ｄが占める割合いが大である。なお，この土壙に切られているＳＫ313土壙からは須恵器の高台付杯ＣⅢを出土していて，両者の土壙は近接した時期の所産と考えられる。ＳＫ315土壙からは須恵器の蓋ＤⅠ，杯Ｅ・Ｄ，高台付杯ＣⅢ，皿ＣⅠ・ＢⅠ，壺Ｈ，鉢ＡⅡとともに，土師器の杯Ｂ・ＤⅠ・ＤⅡ，皿ＡⅢ・ＡⅡ・甕ＢⅠ・ＢⅡなどを出土している。土師器杯についてみれば，ＳＫ314土壙に比べ杯Ｄが減少し，杯Ｂの占める割合いが大である。なお，この土壙を切っているＳＫ318土壙からは須恵器の蓋ＤⅡ，高台付杯ＣⅢ・ＣⅡが出土しており，これまた近接した時期の所産と考えられる。

また，久池井Ｂ遺跡からは数基の土壙墓が検出されているが，副葬品として用いられた土器を出土した。ＳＰ369土壙墓では２対の須恵器の杯蓋を出土したが，いずれも蓋Ａ，杯Ａであり，うち１対には天井部と底部に格子状のヘラ描文様がつく。ＳＰ370土壙墓からは銅鏡片や鉄製紡錘車に伴って，土師器の杯ＦⅡ・ＦⅠ，高台付皿Ａ，黒色土器を出土した。325は黒色土器で，両面黒色で形態は土師器の高台付杯ＧⅠに似るが，口縁部が短く外反する。内外面ヘラミガキで，口径15.0cm，器高6.5cm。土壙墓は大きく２時期に分けられるが，古いものが東西方向，新しいものが南北方向の墓壙をもつものと思われる。

久池井Ｂ遺跡の整然と並ぶ建物跡の南面を画するＳＤ360溝跡からは須恵器の高杯Ａが出土し，建物群の時期を知る手がかりとなる。その他のものとして，ＳＥ359井戸跡出土の329の黒

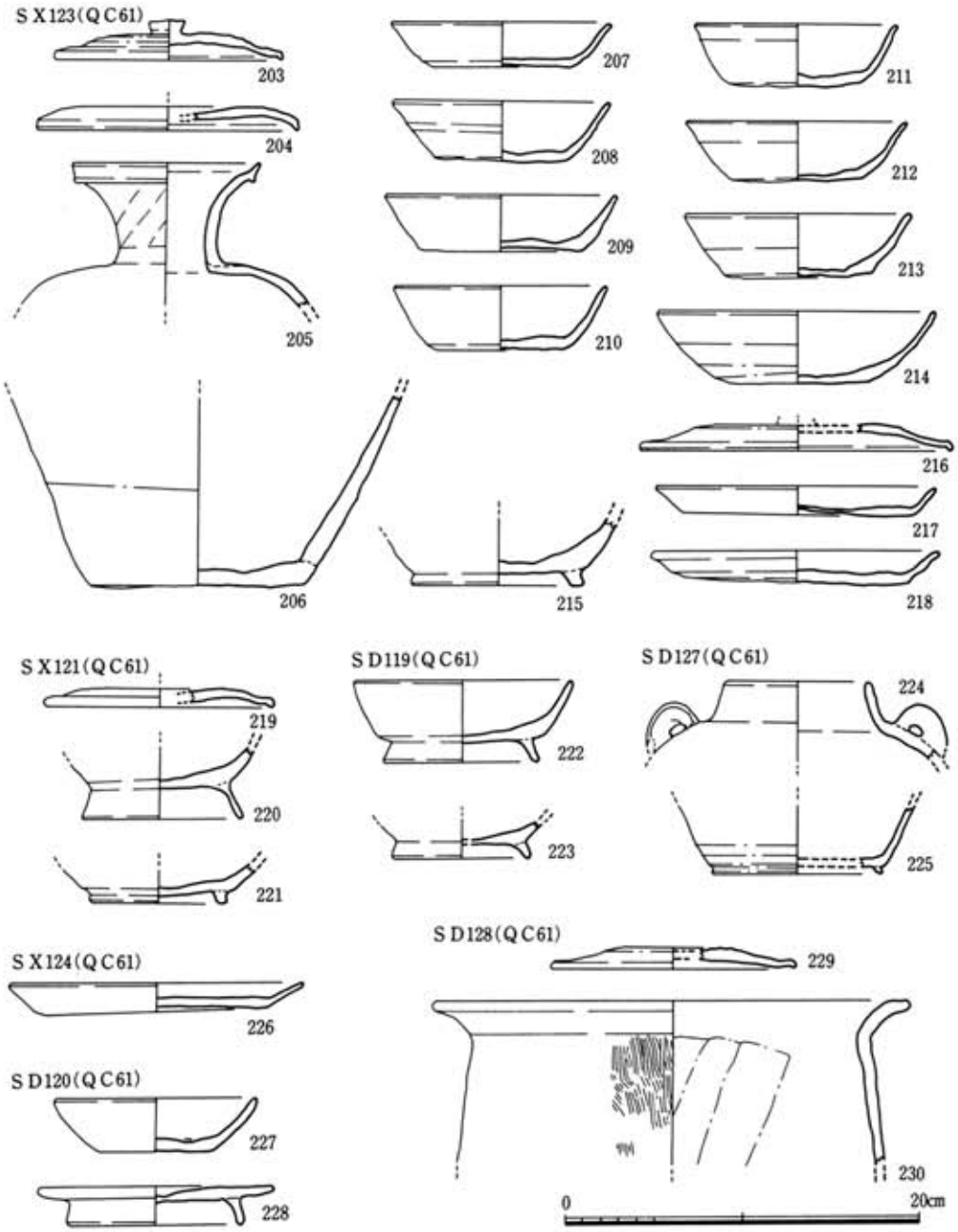


Fig. 41　土器・陶磁器実測図(7)

色土器がある。内外面へラミガキを施すが，内面のみが暗褐色となっている。口径14.5cm，器高6.8cm。土師器の高台付杯GⅠにそっくりの形態である。333は須恵器の高台付杯CⅠで，外面高台内にへラ描きの「大」字がつく。

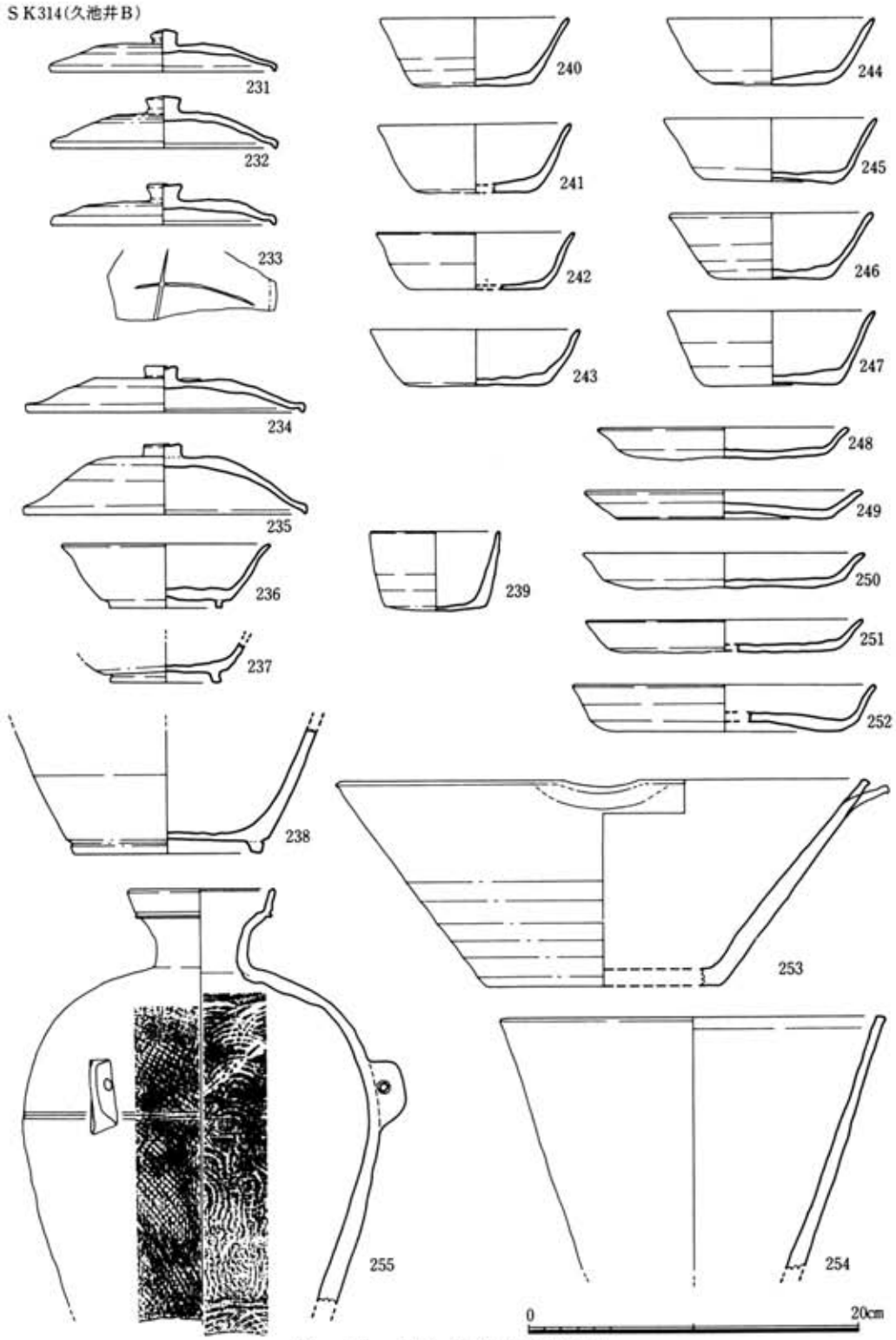


Fig. 42　土器・陶磁器実測図(8)

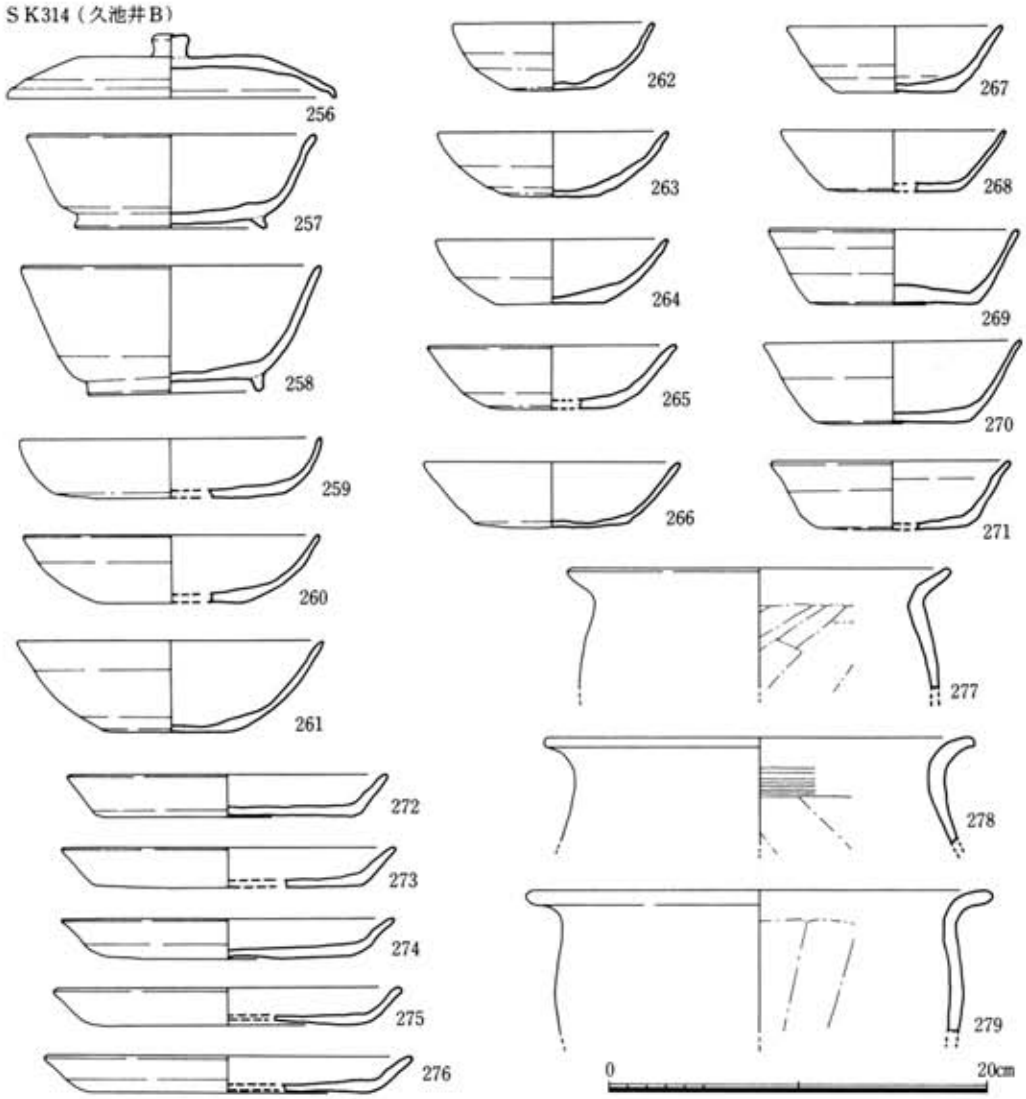


Fig. 43　土器・陶磁器実測図(9)

(3)　Q地区（政庁域外）

Q A地区10発掘区（Fig.46，P L.41）

350は須恵器の円面硯の脚部である。⅓しか残存しない。裾部は大きく外湾し，先端を下方へつまみ出している。長方形の窓が9か所つくものと思われる。裾部径18.0cm。

この発掘区では土師器が少なく，須恵器の杯B，高台付杯CⅢ・DⅢなどが出土している。

Q A地区13発掘区（Fig.46，P L.41）

遺構に伴わず，土師器の杯B，高台付杯CⅡ，皿AⅢ・AⅣが出土したが，須恵器はほとん

SK315(久池井B)

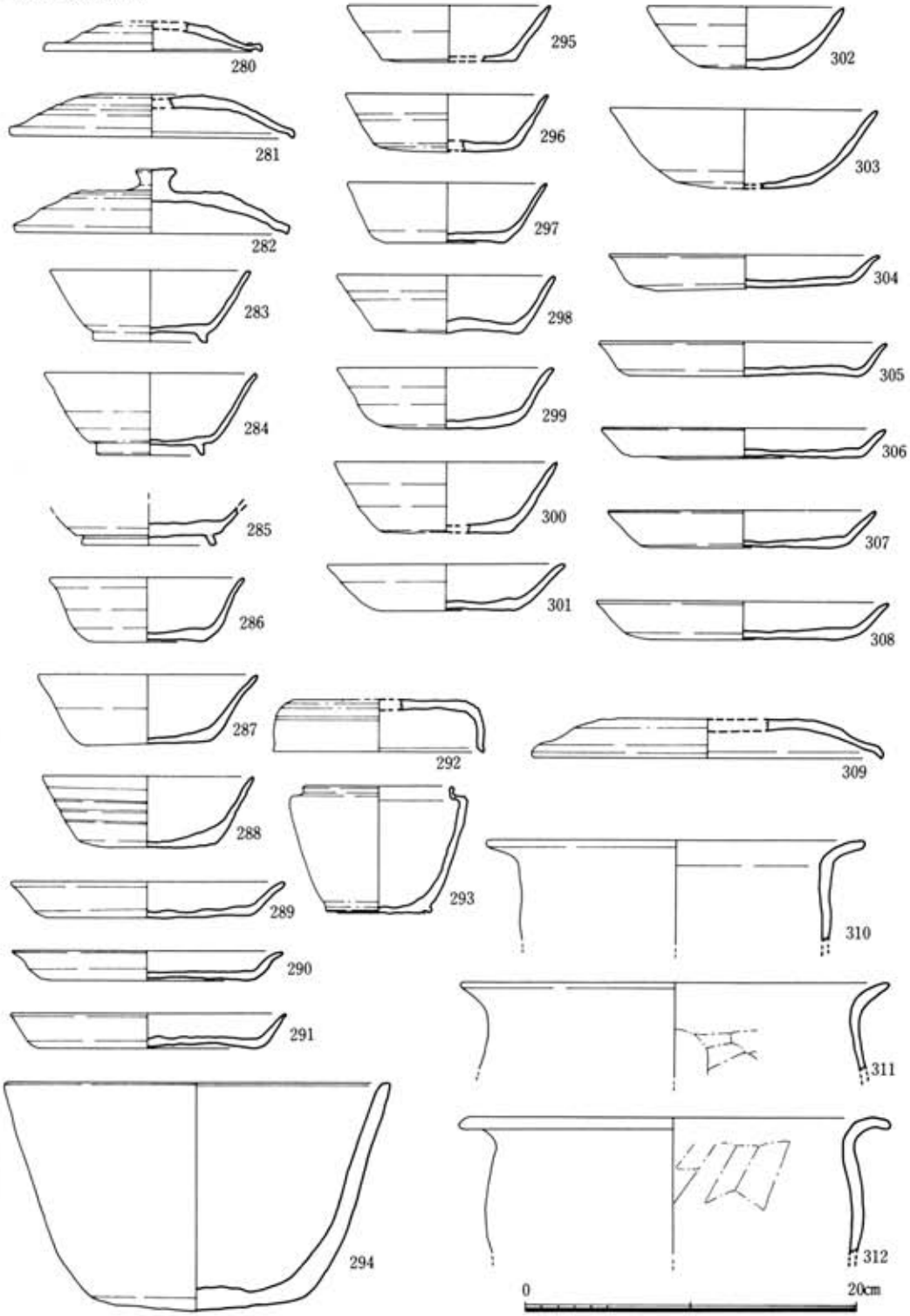


Fig. 44　土器・陶磁器実測図(10)

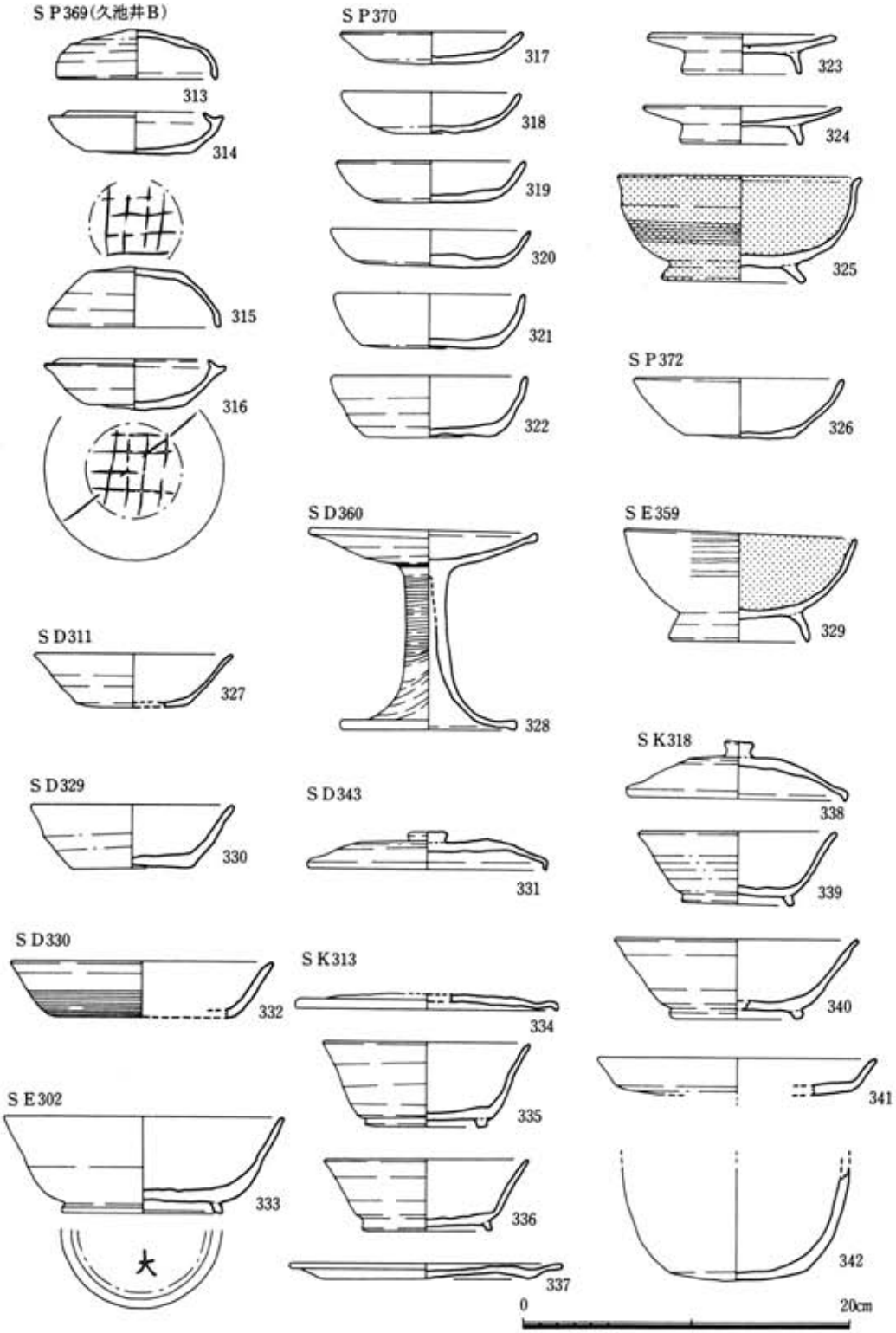


Fig. 45　土器・陶磁器実測図(11)

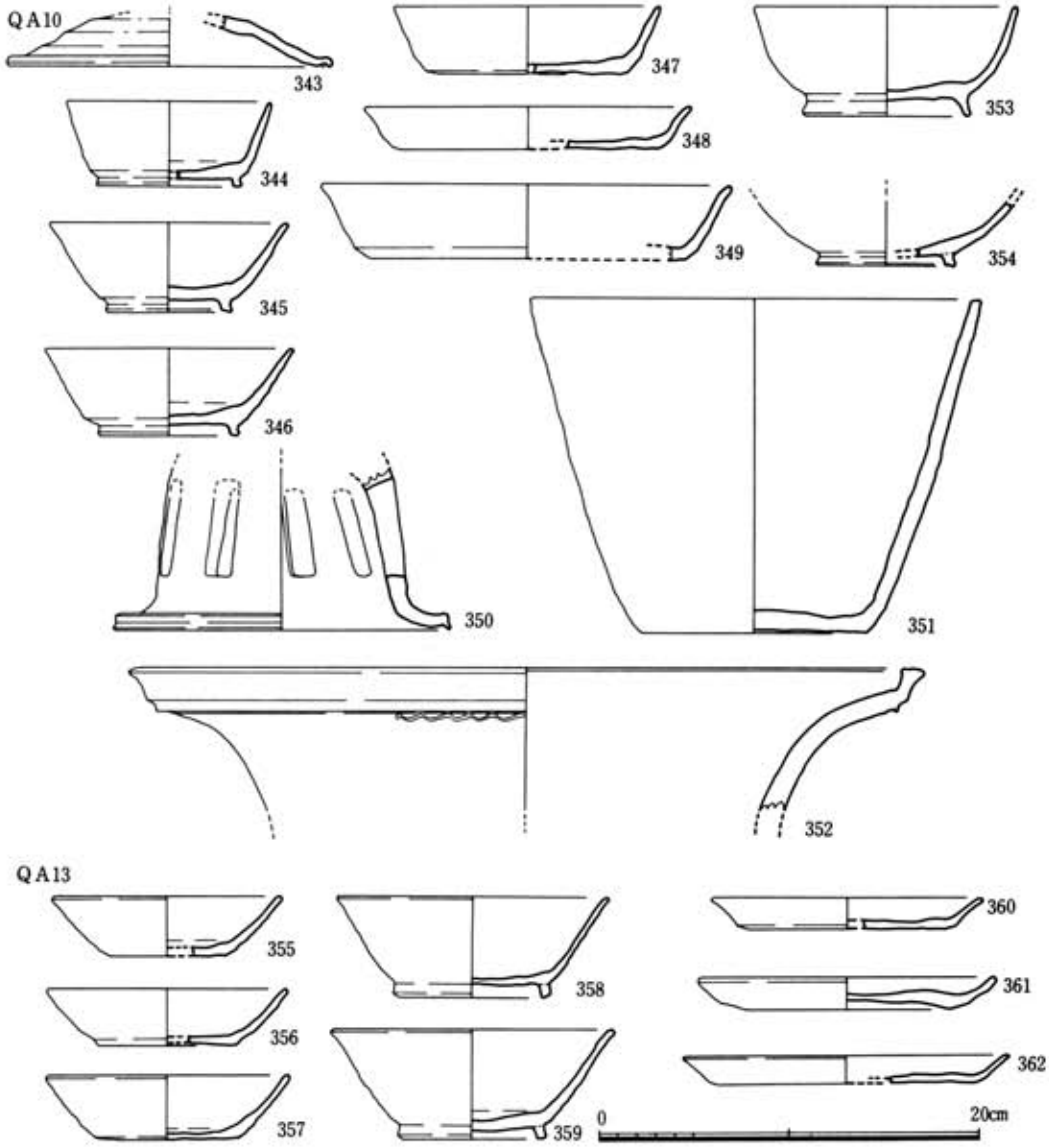


Fig. 46　土器・陶磁器実測図(12)

どない。

ＱＢ地区12発掘区（Fig.47, ＰＬ.41）

363はＳＤ074溝跡出土の須恵器蓋ＣＩ，364･369はＳＤ073溝跡出土の須恵器皿ＣＩと土師器盤Ａである。365の須恵器壺Ｃと367の土師器杯ＡＩは組み合ってＳＤ073溝跡上部から出土した。蔵骨器として使用されたものらしい。366は黒色土器のいわゆる内黒土器で高台付杯かと思われる。

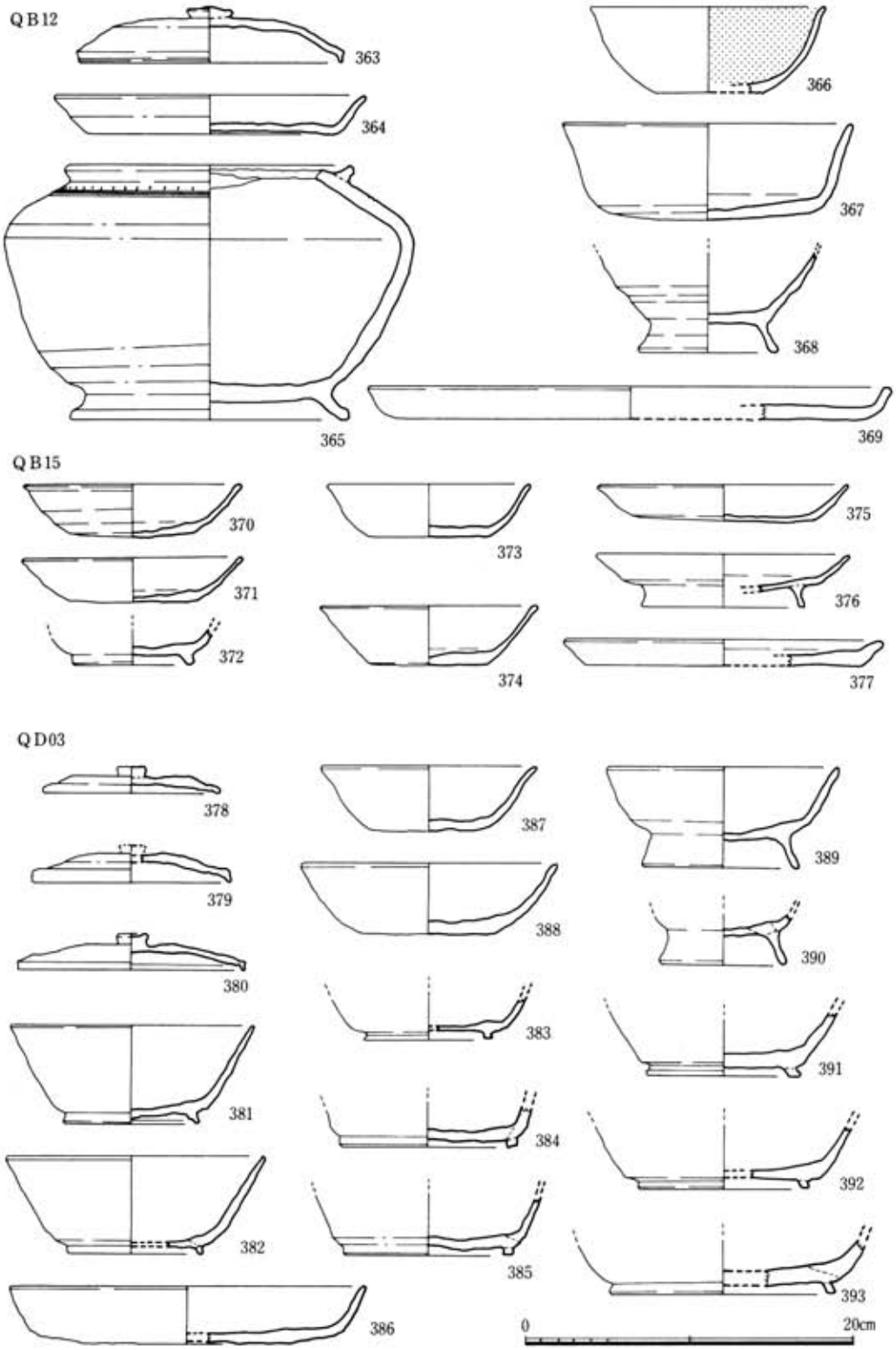


Fig. 47　土器・陶磁器実測図(13)

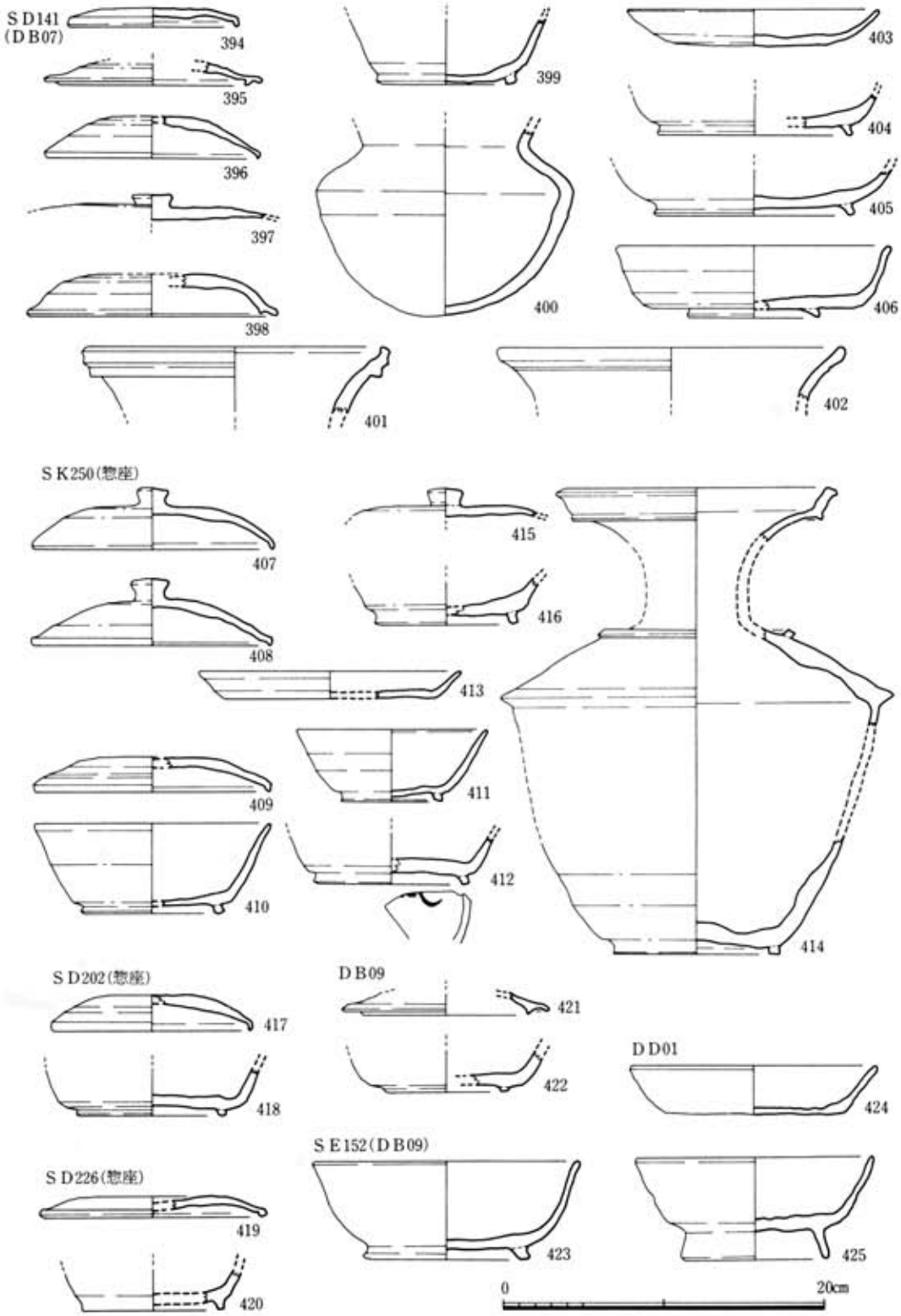


Fig. 48　土器・陶磁器実測図(14)

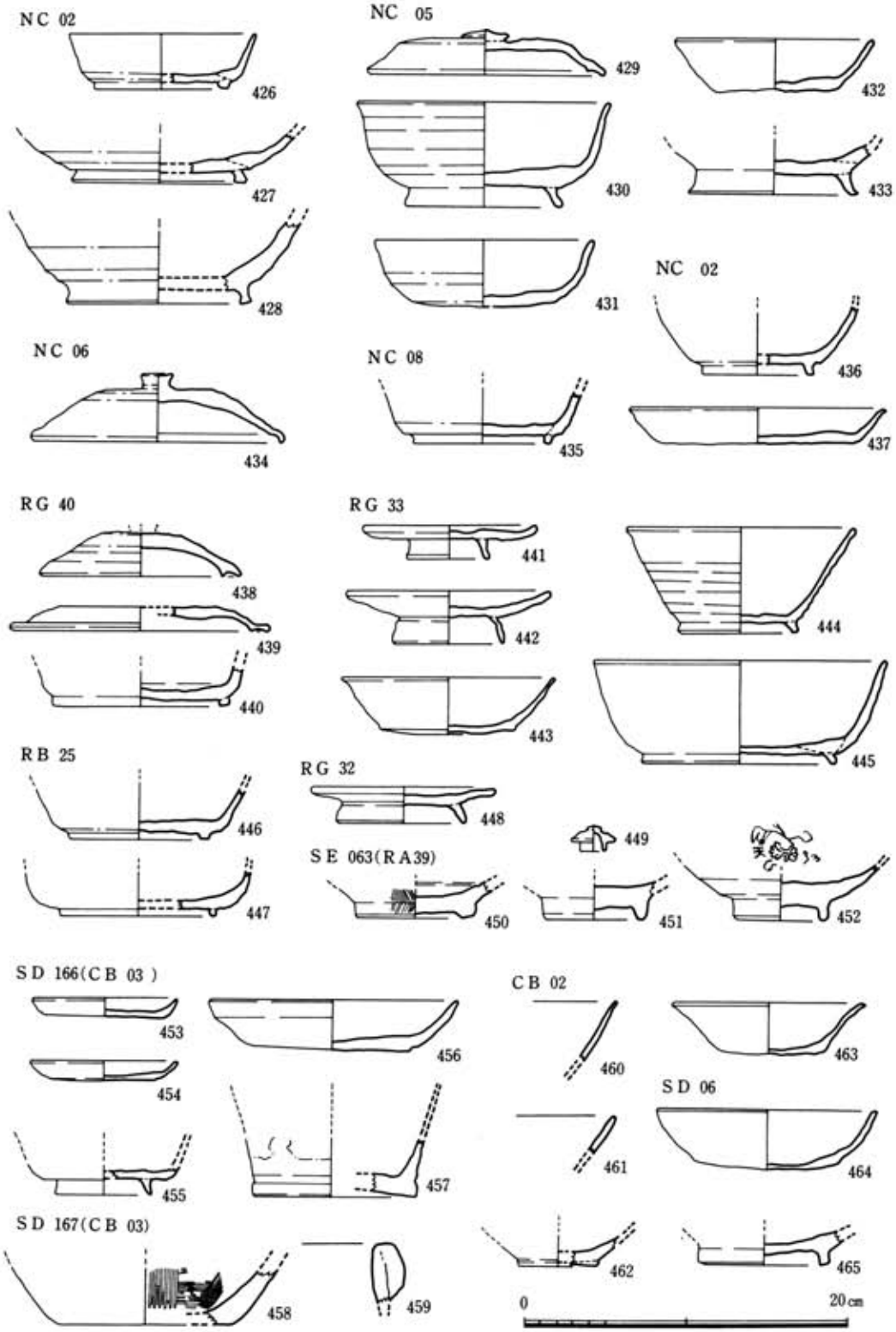


Fig. 49 土器・陶磁器実測図(15)

ＱＢ地区15発掘区（Fig.47，ＰＬ.41）

遺構に伴わず，土師器の杯ＣⅡ・Ｂとともに薄手の高台付皿ＣＩが出土した。

ＱＤ地区03発掘区（Fig.47）

遺構に伴わず，須恵器の蓋ＥⅢ，高台付杯ＤⅡ・ＥＩ・皿ＤＩと，土師器の杯ＤＩ，高台付杯ＦＩ・Ｄが出土した。大きく２時期に分かれるようである。

(4) 惣座遺跡とＤ地区（Fig.48，ＰＬ.41）

惣座遺跡

惣座遺跡ではＳＫ250土壙で一括出土した以外は少ない。ＳＫ250土壙からは，土師器の蓋，高台付杯片を交えて，須恵器の蓋ＤⅡ，高台付杯ＥⅡ・Ｃ，壺Ｄなどが出土した。409の須恵器蓋天井部と412の須恵器高台付杯外面高台内には墨書があり，前者は「田」と読める。

ＤＢ地区07・09発掘区

ＤＢ地区07発掘区のＳＤ141東西溝からは須恵器の蓋ＢＩ，壺Ａ，甕Ａ・Ｂなどとともに土師器の高台付杯Ａ，皿ＢＩなど古式のものが出土している。また，ＤＢ地区09発掘区のＳＥ152井戸跡からは土師器の高台付杯ＢＩが出土しているが，この井戸跡はＳＡ155築地跡に切られており，この土師器により築地の上限が知れる。

ＤＤ地区01発掘区

土師器の杯Ｇ，高台付杯ＦＩを出土した。

(5) Ｎ地区（Fig.49，ＰＬ.42）

Ｎ地区では遺構に伴って出土した土器はない。ＮＣ地区02発掘区では須恵器の高台付杯ＤⅢが，ＮＣ地区05発掘区では須恵器の蓋ＢＩ，杯Ｂ，高台付杯Ａが，ＮＣ地区06発掘区では須恵器蓋ＤⅡが出土しており，この地区では土師器は少ない。

(6) Ｒ地区（Fig.49，ＰＬ.42）

Ｒ地区ではＲＡ地区39発掘区のＳＥ063井戸跡から磁器を出土した以外は，すべて遺構に伴わないで出土している。

449は蓋で，内外面に淡緑黄色の釉が施される。口径1.6cm，器高1.6cm。450は白磁の碗で，低い高台がつく。高台外側から高台際にかけてカンナのトチリがみられる。見込みに沈線をめぐらす。釉は淡灰白色に発色し，残存する部分では外面露胎。高台径7.4cm。451・452は青磁の

碗で，高台はやや高い。釉は451が緑灰色，452が淡緑色に発色しており，両者とも全面施釉で高台畳付きだけ釉をかきとっている。452の見込みには草花文と「天」が裏返しに彫られている。

他にＲＧ地区40発掘区では須恵器の蓋ＢⅡが，ＲＧ地区32発掘区では土師器の高台付皿Ａ・Ｂ，杯Ｂ，高台付杯ＣⅡ・ＢⅠなどが出土している。

(7) Ｃ地区（Fig.49，ＰＬ.42）

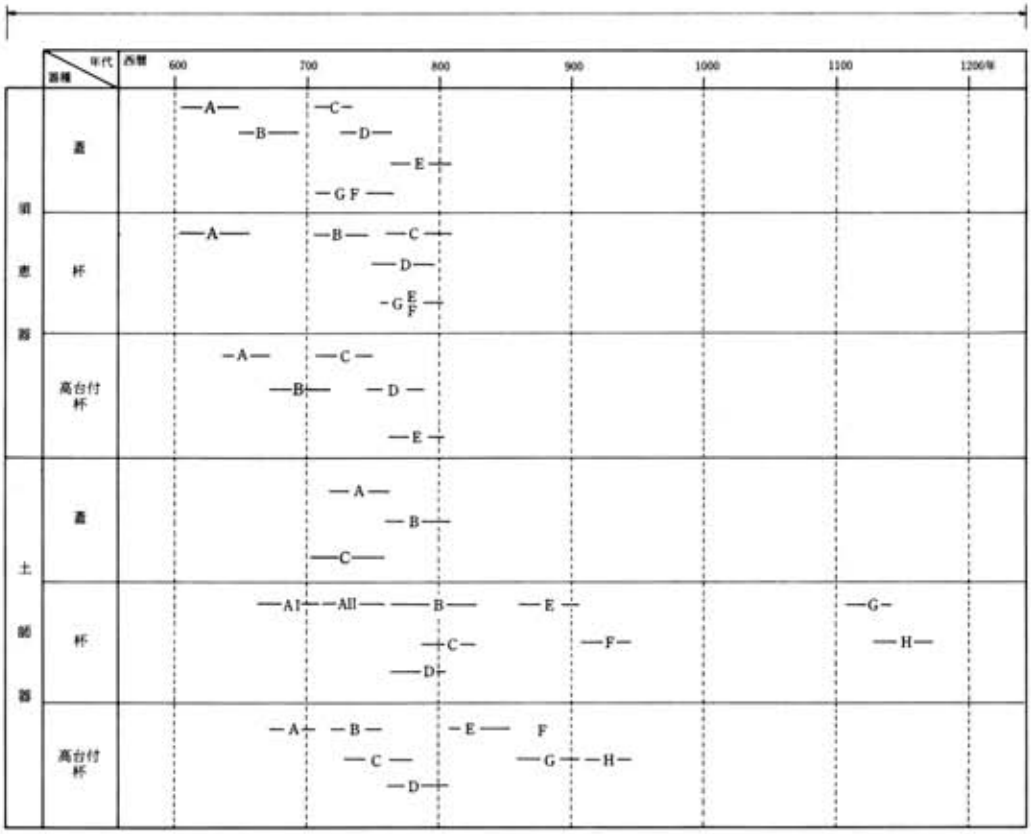
ＣＢ地区02発掘区

460は緑釉陶器の碗の口縁部で，灰色の焼き締った胎に薄く施された釉は暗緑色に発色している。461・462は越州窯青磁碗の口縁部と底部で，明灰緑色に発色した釉をかける。底部はいわゆる蛇の目高台で，復元径5.1cm。

ＣＢ地区03発掘区

ＳＤ166溝跡から土師器の皿Ｃ・杯Ｈとともに457の陶器壺が出土した。外に張り出し気味の底部は上げ底気味で，底部と体部下部および内面は露胎。釉は黒褐色の鉄釉である。復元底径10.4cm。上記の土師器はすべて糸切り離し技法でつくられたもので，遺構に伴った例としては国府調査では例がない。またＳＤ166溝跡を切って掘削されたＳＤ167溝跡からは，布目瓦の細片とともに瓦質土器の擂鉢（458）と，柿釉を施した甕と思われる陶器の口縁部（459）が出土した。

以上，肥前国政庁跡および周辺の関連遺構から出土した土器・陶磁器について，形態の特徴や各遺構，各発掘区における組み合せを主とした出土の状況について述べた。現在調査途中である東山田一本杉遺跡の遺物は掲載できなかったが，９世紀～10世紀の土師器を主体とするものらしい。また，惣座遺跡や久池井Ｂ遺跡出土の遺物も整理途中で，本報告では内容の一部変更や資料の追加がされるはずである。ここでは取敢えず出土量が多かった須恵器・土師器の蓋・杯・高台付杯についての年代を，須恵器については陶邑古窯跡群[1]や八女古窯跡群[2]，土師器については大宰府史跡[3]や御笠川南条坊遺跡[4]などの編年を参考にして，次のように考えておきたい。



このような年代観によって，検出された遺構を検討すれば，弥生時代後期から７世紀前半までの遺構はほとんど存在せず，７世紀前半に位置づけられる久池井Ｂ遺跡の土壙墓の出現をもって再び一帯に遺構が増加しはじめ，遺物の出土量も増す。

７世紀後半の遺物としては，ＤＢ地区07･08発掘区ＳＤ141溝跡やＮＣ地区05発掘区溝跡などから出土しており，政庁跡域内でも断片的に出土する。

８世紀になると遺物の量が増える。前半～中頃にかけての遺物は，久池井Ｂ遺跡のＳＫ315･318土壙からまとまって出土した他，同遺跡ＳＥ302井戸跡，惣座遺跡ＳＫ250土壙，ＤＢ地区09発掘区ＳＥ152井戸跡，ＱＡ地区10･13発掘区，ＱＤ地区03発掘区などから出土しており，政庁内においてもＱＦ地区06発掘区やＱＦ地区60発掘区ＳＢ135建物跡柱穴掘形などから出土している。

8世紀後半になると遺物の量は爆発的に増加する。ほとんどの地区から出土するが，中でも政庁跡のＱＦ地区06発掘区ＳＤ067溝跡やＳＫ069土壙，ＱＦ地区18発掘区ＳＫ080土壙，それに久池井Ｂ遺跡ＳＫ314土壙などからまとまって出土している。これらの遺構では，9世紀初頭まで下ると思われる遺物も含まれる。この8世紀後半を境に，土器の主体は土師器が須恵器にとってかわる。

9世紀も前半になると遺物の数が激減し，ＱＦ地区16発掘区ＳＫ089土壙やＱＥ地区49発掘区ＳＸ125遺構，9世紀後半～10世紀初頭ではＱＥ地区57発掘区ＳＤ112溝跡からまとまって出土した以外数が少ない。

10世紀前半～中頃では，久池井Ｂ遺跡ＳＰ370土壙墓からまとまって出土したくらいで，その後時間的空白があり，12世紀中頃のＣＢ地区03発掘区ＳＤ166溝跡出土土師器をもって，国府関連の遺物は一帯ではみあたらなくなる。

以上のように一括して出土した遺物は溝跡や建物その他を建築するための整地の際の廃棄壙と考えられる土壙からのものが多く，時期幅をもっているが，これらの土器は建物跡等の時期を知る手がかりになる。ちなみに政庁跡の四面を囲む築地跡外の溝跡からは9世紀終り～10世紀初頭の土師器を一括しており，また，後殿跡柱穴掘方を切るＳＫ080土壙では多くの鉄滓を出土すること，政庁内から9世紀全般にわたる土器が数少ないことなど，ＱＦ地区の政庁跡が，政庁として連続的に営まれたとは考え難い。

(註)

(1) 田辺昭三「陶邑古窯址群Ｉ」平安学園考古学クラブ　1966
　中村　浩『和泉陶邑窯の研究』　1981　他
(2) 小田富士雄・真野和夫他「八女古窯跡群Ⅳ」総集編　八女市教育委員会　1971
(3) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」九州歴史資料館研究論集(2)　1976
　九州歴史資料館「大宰府史跡」各年度発掘調査概報　他
(4) 前川威洋他「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第6集　1977　他

3．瓦（Fig.50～57，ＰＬ.43～45）

瓦はＮ地区，Ｑ地区（瓦塚周辺），Ｈ地区（大和町大字久池井周辺）を中心に，軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦が出土している。

(1) 軒丸瓦（Fig.50～52，ＰＬ.43・44）

軒丸瓦はＱ地区，特に瓦塚（ＱＣ地区04発掘区）周辺や，国庁建物跡と考えられる遺構が検出されたＱＦ地区からの出土が多数を占める。軒丸瓦は笵の大小はあるものの，瓦当面の文様で分類すると９種類の軒丸瓦がみられ，鴻臚館系のものが主流を占めている。ここでは代表的なものを紹介する。

466は瓦塚出土の複弁八葉蓮華文軒丸瓦で，鴻臚館式軒丸瓦の基本形となるものである。内区の中房径は5.7cmを計り，蓮子は１＋４＋８に配列されている。蓮弁は長くはないものの幾分盛り上り，外端部は反りをもつ。外区は内縁に24個の珠文を配し，外縁は若干外傾する斜縁である。全体的に瓦当文様の彫りが深く，類例は肥前国分寺跡でも発見されている。

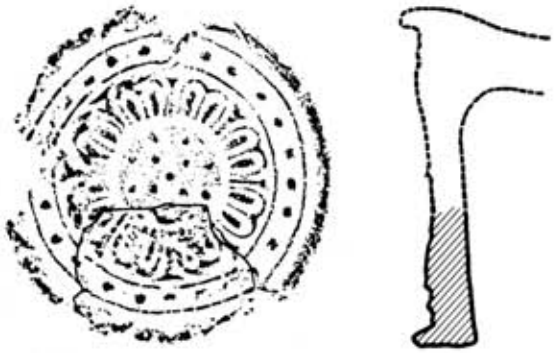
467は瓦塚出土の単弁七葉蓮華文軒丸瓦である。内区の中房は弁区よりも低く，その中に１＋５＋10の蓮子が不規則に配されている。蓮弁は大きく丸味はあるが，彫りは浅く盛り上りに欠ける。外区は内縁に簡略化した唐草文，外縁に「Ｘ」字形文をめぐらしている。類例が肥前国分寺跡で出土している。

468は瓦塚出土の単弁九葉蓮華文軒丸瓦である。中房は弁区よりも幾分突出し，ふくらみをもつ。蓮子は１＋８が直線的に配されている。蓮弁は先端がやや割れたようになっており，その中に子葉をもつものがある。各蓮弁間は界線で仕切られ区画される。外区は内縁に高く突出する20程の珠文を配し，外縁はやや外傾する。類例は少なく，肥前国分寺跡以外にはまだ見られない。

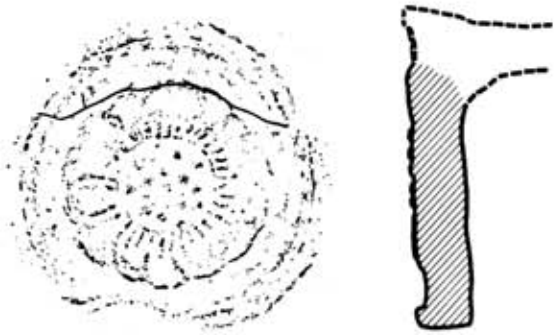
469は瓦塚出土の唐草文帯軒丸瓦である。内区の中房は径4.8cmで，その中に蓮子が不規則に配されている。蓮弁は短いながらもふくらみをみせ，まとまっている。外区は内縁に簡略化された唐草文帯をめぐらし，外縁には珠文帯が配される。

470は瓦塚出土の単弁軒丸瓦である。内区は中房径が2.1cm，蓮子数は不明。蓮弁は大きく丸味をもっているが，盛り上りはなく，界線によって形をなすのみにとどまる。これは中房も同様で，中房輪郭と蓮子を線で表したにすぎなく，貧弱な感じを受ける。さらにまた，蓮弁の配列も不規則で，間弁の位置もまちまちである。外区は内縁の周囲に一重の圏線（？）がめぐり，外縁は内傾している。全体的に造りの粗雑さは否めない。

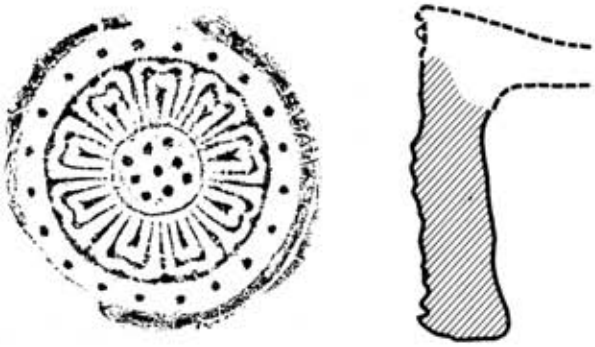
471は瓦塚出土の軒丸瓦である。瓦当面の内外区とも剝離・摩耗が著しく，明確な文様構成は把握し難い。内区の圏線をめぐらした中房径は3.9cm，蓮子数は不明。弁区には，やや彫りのある蓮華文らしき蓮弁を配している。外区には楕円形珠文がめぐる内縁と，低い外縁がある。



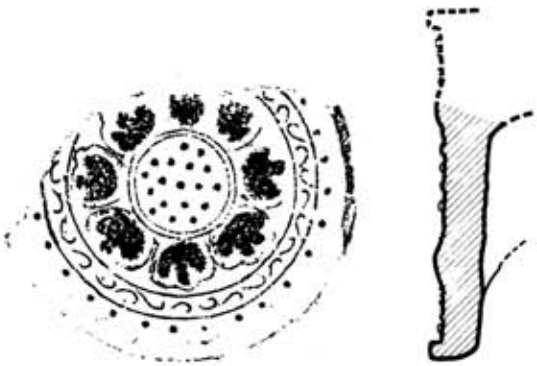
466　複弁八弁蓮華文軒丸瓦
瓦当－径19.0cm
内区－中房径5.7cm，蓮子１＋４＋８
外区－内縁幅1.5cm，珠文24
外縁幅1.5cm，外縁高1.2cm
胎土－灰褐色，砂粒やや含む



467　単弁七弁蓮華文軒丸瓦
瓦当－径16.0cm，厚2.8cm
内区－中房径5.1cm，蓮子１＋５＋10
外区－内縁幅1.2cm，唐草文
外縁幅2.0cm，外縁高0.7cm
「×」文字
胎土－灰色，砂粒含む



468　単弁九弁蓮華文軒丸瓦
瓦当－径17.2cm，厚4.0cm
内区－中房径4.9cm，蓮子１＋８
外区－内縁幅1.8cm，珠文20（？）
外縁幅1.1cm，外縁高0.5cm
胎土－黄土色，砂粒少し含む



469　唐草文帯軒丸瓦
瓦当－復元径16.2cm，厚2.8cm
内区－中房径4.8cm，蓮子不明
外区－内縁幅1.3cm，唐草文
外縁幅1.2cm，外縁高0.6cm
胎土－灰褐色，砂粒含む

Fig. 50　軒丸瓦実測図(1)

472はＱＦ地区26発掘区から出土した単弁九葉蓮華文軒丸瓦である。これは同発掘区のＳＢ090身舎柱穴の埋め土上部から出土した。内区の中房は径4.6cmで弁区よりも盛り上っており，その中に１＋８の蓮子が直線的に並ぶ。蓮弁は丸味が感じられず直線的で，弁間は界線によって仕切られている。外区は内縁に20の珠文を施し，外縁は低いが内傾する斜縁となっている。瓦当面には木型の板目を残す。全体に文様の彫りは浅く平面的で，造りの粗雑さの感はぬぐえないところがある。類例は肥前国分寺跡からも出土している。

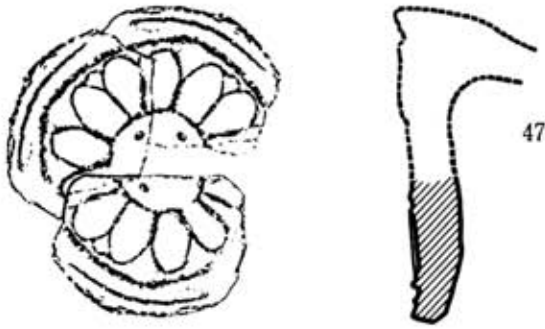
473はＱＦ地区26発掘区から出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。内区の中房は径5.4cm，高さはほとんど弁区と変わらない。蓮子は１＋５＋10で配列はバラバラになっている。蓮弁は彫りが浅く肉厚さがない。中房と共様平面的である。外区にいたっては内区よりも一段低くなっており，内縁には簡略化された唐草文が，外縁には「Ｘ」字形文が連続的にめぐっている。類例は肥前国分寺跡にもみられる。

474はＱＦ地区16発掘区のＳＫ080から出土した単弁六葉蓮華文軒丸瓦である。内区の中房は径3.8cmを計り，弁区よりも一段低くなっている。中房の中には１＋４の蓮子を配す。また，中房は二重の圏線がめぐらされ，弁区との間を隔たすようになっている。蓮弁は二重の界線によって表現されており，盛り上りがみられない。外区は内縁に24の珠文がめぐらされ，外縁は幅狭で低い。瓦当面の文様は極めて平面的で，同じ調子の点と線でのみ構成され，肉厚さはほとんど感じられない。しかも，造りは粗雑で焼成も十分ではない。

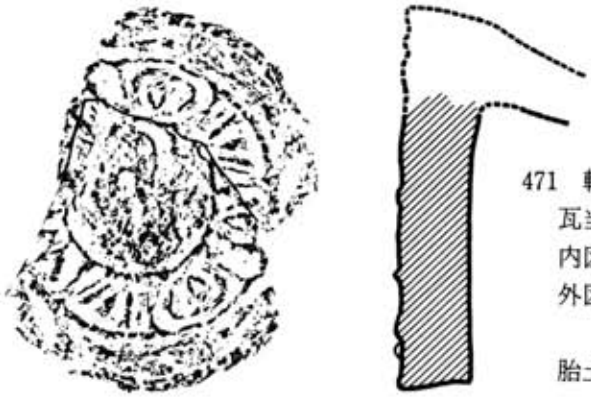
丸瓦部は玉縁付で，瓦当面との角度は約15度をなし，かなり鋭角的である。調整は瓦当下顎部下半をヘラケズリ，その上半を横ナデ。丸瓦部は外面を縦にヘラナデのあとかるく指ナデ，側面はヘラで切り離した後，さらに内側の稜をかるく削り落としている。内面には布目を明瞭に残す。ＱＦ地区16発掘区のＳＫ080から，これともう１点同形式の完形品が出土している。

475はＱＦ地区16発掘区のＳＫ080から出土した単弁八葉軒丸瓦である。内区の中房は径が7.5cm，蓮子は不明。蓮弁は肉厚さがなく，界線で形をなしているにすぎない。外区は珠文帯をめぐらした内縁と，幅狭で低い外縁からなる。基本的には474に類するものと思われるが，文様はさらに粗雑で焼成も不良である。また，平面的な彫りと点と線で構成されている瓦当文様の中でも，特に珠文は四角形を呈したまま残っており，一層退化した感じを受ける。

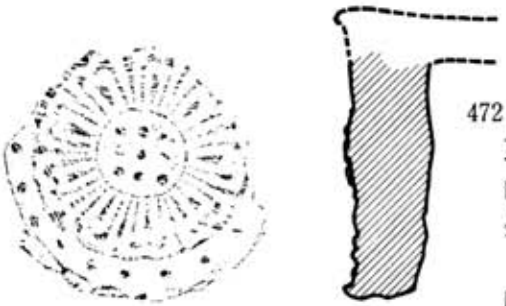
476は国道263号線バイパス関係で発掘調査した惣座遺跡から出土した単弁軒丸瓦である。全体像を想定すると，おそらく単弁八葉になると思われる。ここは国府地割によるとＱＢ地区に相当し，ＳＢ413のカマド付近の床面直上から発見された。瓦当面の⅔を欠失し，全体像や内区の中房付近は不明である。蓮弁は彫りが深く，豊満な感じをもつ。蓮弁の基部から先端にかけては大きくふくらみ，弁端の中央に至っては尖り気味になっている。また蓮弁の中央両側は凹みをもち，強い大きな反りをもつ弁端から中心に向かって稜線が形成されている。間弁は楔形を呈し，弁端に肉厚の反りをもつ短い小葉をもって配している。弁区の造りは他の瓦にみられ



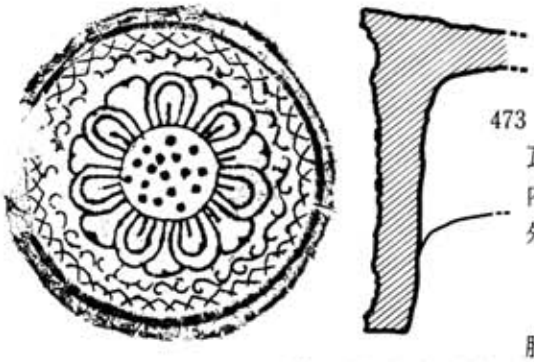
470　単弁軒丸瓦
瓦当－復元径17.0cm，厚2.4cm
内区－中房径2.1cm，蓮子不明
外区－内縁幅0.9cm
外縁幅0.9cm，外縁高0.2cm
胎土－黄土色，砂粒含む



471　軒丸瓦
瓦当－径19.4cm，厚3.9cm
内区－中房径3.9cm
外区－内縁幅1.9cm，珠文
外縁幅0.7cm，外縁高0.1cm
胎土－灰褐色，砂粒含む

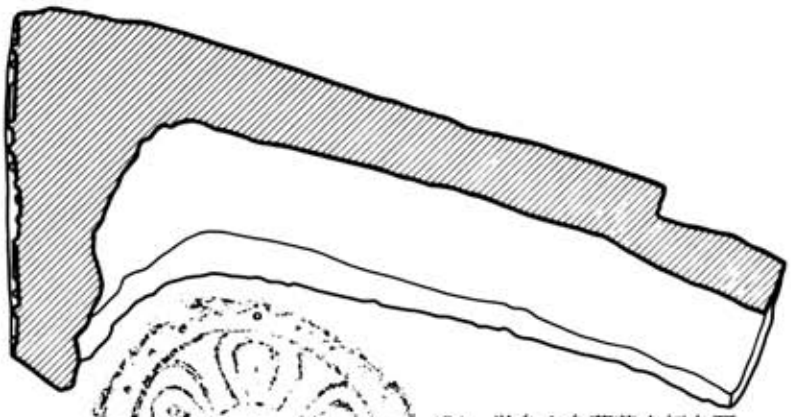


472　単弁九弁蓮華文軒丸瓦
瓦当－復元径14.7cm，厚4.0cm
内区－中房径4.6cm，蓮子１＋８
外区－内縁幅1.6cm，珠文20
外縁幅0.9cm，外縁高0.5cm
胎土－白褐色，砂粒少し含む

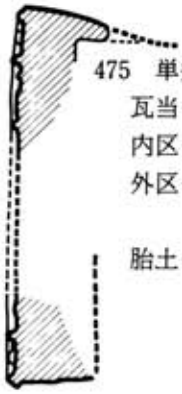


473　単弁八弁蓮華文軒丸瓦
瓦当－復元径17cm，厚2.4cm
内区－中房径5.4cm，蓮子１＋５＋10
外区－内縁幅1.3cm，唐草文
外縁幅2.0cm，外縁高0.3cm
「×」文字
胎土－明灰色，粗砂粒やや多く含む

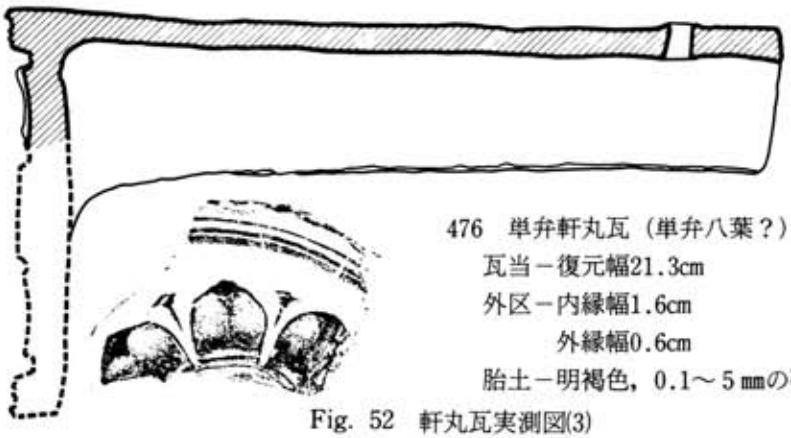
Fig. 51　軒丸瓦実測図(2)



474　単弁六弁蓮華文軒丸瓦
瓦当－径17.7cm，厚3.6cm
内区－中房径3.8cm，蓮子１＋４
外区－内縁幅1.2cm，珠文24
外縁幅0.4cm，外縁高0.2cm
丸瓦部－玉縁付，長40.0cm
胎土－淡黄褐色，粗砂粒含む



475　単弁八弁蓮華文軒丸瓦
瓦当－径19.8cm，厚不明
内区－中房径7.5cm，蓮子不明
外区－内縁幅2.0cm，珠文16
外縁幅0.7cm，外縁高0.3cm
胎土－淡黄褐色，粗砂粒含む



476　単弁軒丸瓦（単弁八葉？）
瓦当－復元幅21.3cm
外区－内縁幅1.6cm
外縁幅0.6cm
胎土－明褐色，0.1～５㎜の砂粒含む

Fig. 52　軒丸瓦実測図(3)

ないほど端正で写実性に富み，華弁の流麗さと重厚さをうまく表出している。外区は幅広で，内区からほぼ直角に高く突出した部分に二重圏線がめぐらされている。丸瓦部との接合部分は高く外縁に近いところにあり，瓦当面との角度はほぼ直角になっている。調整は瓦当裏面中央部をヘラケズリのあとナデ。丸瓦との接合部内面はナデを行っている。丸瓦部は，外面がヘラナデのあと指ナデ。内面には布目痕が明瞭に残っている。さらに，丸瓦部は端部から5.5cmのところに直径1.1cm程の穴が内側から穿かれている。

(2) 軒平瓦（Fig.53・54，ＰＬ.44）

軒平瓦は６型式出土しており，老司系のものも含まれているが主流は鴻臚館系のものが占める。以下，順に紹介していく。

477は瓦塚出土の均整唐草文軒平瓦である。瓦当面の内区は，上が三方に割れた文様を中心飾におき，その左右には８回反転する唐草文を配す。唐草文は尾部が短く肉細の感があるが，強く反転しなめらかに巻き込んでいる。上外区には21の外向陽起鋸歯文，下外区には21の珠文が配されている。脇区にも各５の珠文が施されているが，脇区の珠文の方が径が小さい。瓦当面は平面的で，顎は段顎をなす。平瓦部は両面ともナデ調整を行い，凸面には斜格子目のタタキを施す。類例は肥前国分寺跡でも出土している。

478はＱＤ地区03発掘区，ＳＫ064出土の偏行唐草文軒平瓦である。瓦当面内区の唐草文は尾部を右側に流す。蔓草は肉細で，文様の簡略化もうかがえる。唐草文の反転回数は明らかではない。上外区は高くはっきりとした珠文が，また下外区では外向陽起鋸歯文が配されている。脇区は４の外向陽起鋸歯文が施されている。顎は段顎である。平瓦部の調整は，凹面がヘラケズリ，凸面はナデを行っている。瓦側面の調整はヘラケズリである。瓦当面の半分を欠失しているため明確な全体像は捕え難いが，均整唐草文軒平瓦の可能性もある。

479はＳＤ025出土の偏行唐草文軒平瓦である。瓦当面内区は，中央を横断する波状線の上下に二個を一対とした唐草を配し，左へ流している。唐草文は肉細だが高さはある。上外区は高く盛り上った珠文を配し，下外区では外向陽起鋸歯文が配される。顎は段顎をなす。平瓦部は両面ともナデ調整が行われている。

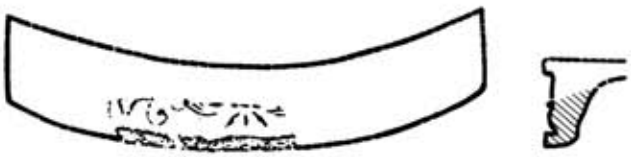
480は瓦塚出土の軒平瓦である。小破片であるため全体はわからないが，中心飾に菊花文をおき，その左右に唐草文を配する均整唐草文軒平瓦ではないかと思われる。下外区の外縁は内区よりも幾分高くなっている。顎は段顎ではあるが，顎幅は狭く，断面形は曲線を描く。

481は瓦塚出土の均整唐草文軒平瓦である。瓦当面内区は中心飾に逆「小」字形文を据え，その左右に５回反転の唐草文を配している。唐草文は大柄で強く反転しているものの，線は肉細である。上・下外区共に珠文が配されているが，下外区はやや小粒の珠文になっている。顎は段顎で，上面には布目が，下面には縄目のタタキがみられる。類例が肥前国分寺跡で出土している。

477　均整唐草文軒平瓦
瓦当－復元幅36.0cm，厚6.0cm
段顎－高6.5cm，厚0.6cm
珠文－上下外区
平瓦部－上面布目下面縄目叩
胎土－黄褐色，砂粒含む

478　均整唐草文軒平瓦
瓦当－厚4.8cm
段顎－幅8.1cm，高0.3cm
上外区－珠文
下外区－外向陽起鋸歯文
胎土－灰白色，砂粒少し含む

479　均整唐草文軒平瓦
瓦当－幅26.6cm，厚4.0cm
段顎－幅6.3cm，高0.9cm
上外区－外向陽起鋸歯文21
下外区－珠文21
脇区－珠文各５
平瓦部－下面斜格子叩目
胎土－暗灰色，砂粒少し含む



480　偏行唐草文軒平瓦
瓦当－厚5.5cm
段顎－幅7.9cm，高0.4cm
上外区－珠文
下外区－外向陽起鋸歯文
脇区－外向陽起鋸歯文４
胎土－暗灰色，砂粒含む

Fig. 53　軒平瓦実測図(1)

481　偏行唐草文軒平瓦
瓦当－厚5.0cm
段顎－幅8.7cm，高0.8cm
上外区－珠文
下外区－外向陽起鋸歯文
胎土－灰白色，砂粒含む

482　軒平瓦
段顎
内区－唐草文
中心飾－菊花文
胎土－灰褐色，細砂粒含む

483　鬼瓦
鬼面口右側部分
胎土－0.1～0.6mmの砂粒を含む
色調－明褐色

Fig. 54　軒平瓦(2)・鬼瓦実測図

482は瓦塚出土の均整唐草文軒平瓦である。瓦当面内区は中心飾に「小」字形文をおき，その左右に4回反転の唐草文を配している。文様は鴻臚館式軒平瓦のそれが全体的に大柄になったもので，文様は肉太く，唐草の巻き込みは深くなっている。上外区には楕円形珠文を，下外区には外向陽起鋸歯文を配すのが基本だが，文様のズレによってないものもある。また外区は内区よりも一段高くなっている。顎は段顎をなす。平瓦部の上面はヘラケズリを行っているが布目痕も所々にみられる。平瓦部下面はナデて調整している。この瓦の類例は肥前国分寺跡でもみつかっている。

(3) 鬼瓦（Fig.54, ＰＬ.44）

鬼瓦は２点出土している。１点は瓦塚出土のものだが『肥前国府跡Ｉ』で紹介されているためここでは省略し，新しく加わった１点を紹介するにとどめる。

483はＱＦ地区41発掘区出土の鬼瓦である。これは都府楼系の鬼面文鬼瓦と思われ，鬼面口右の部分に相当する。頬の部分は欠けているものの，大きな獅子鼻，牙を露にした口，著しい稜をもった鬚が表現されている。全体を想像するに，歯は上下４本ずつ描かれていたと考える。牙の右側には珠文をめぐらす外縁の一部が残存している。さらに，中央の歯の下には丸瓦に被せる半円形刳込みと思われる部分がある。鬼面をうかがうことはできないが，写実性は低く，

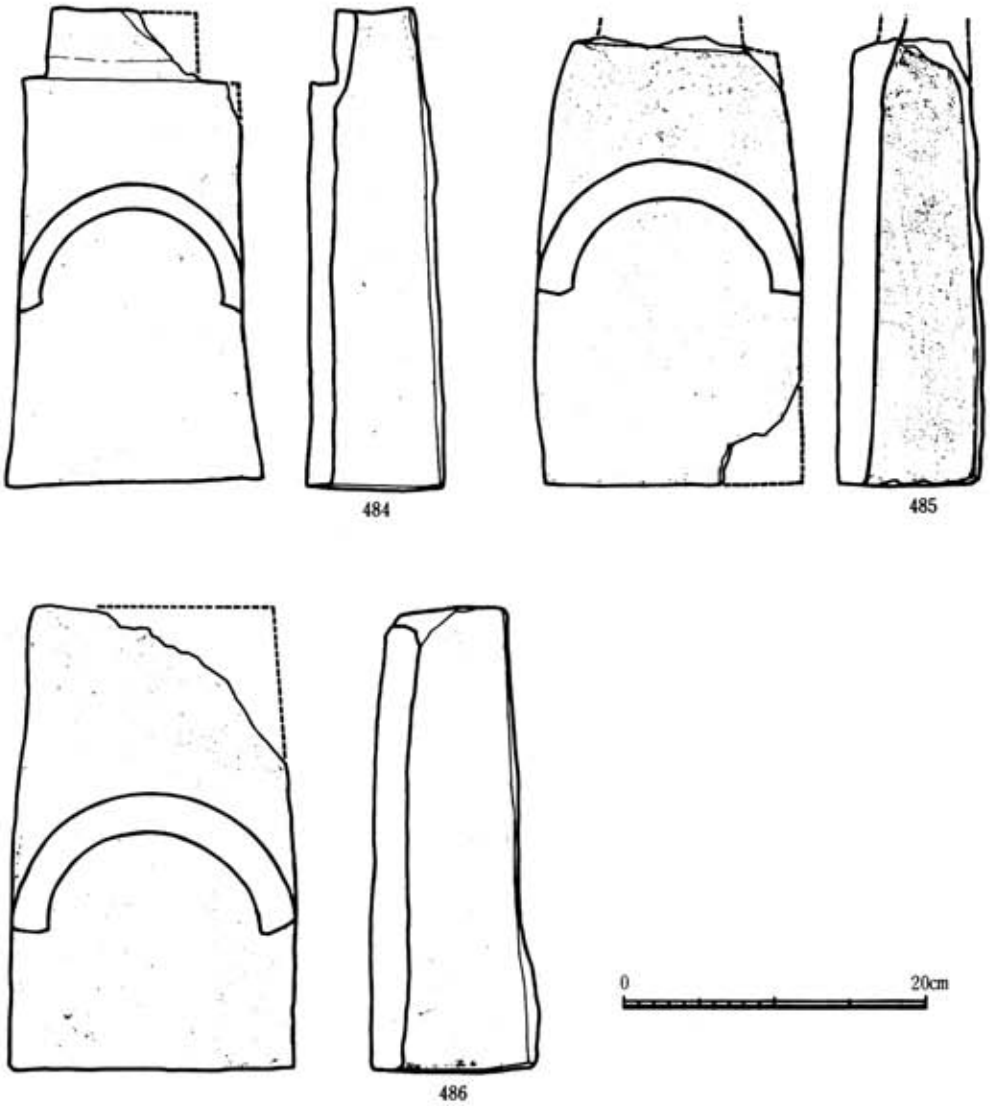


Fig. 55　丸瓦実測図

鬼瓦の基本は残しつつも細部は省略していくといった簡略化の傾向があるようだ。胎土には砂粒が含まれ，色調は明褐色を呈す。焼成は良好である。

(4) 丸瓦（Fig.55，ＰＬ.45）

玉縁付と行基式の２種類がある。タタキ目は90％が格子目で縄目のものは少なく，格子目でも，精粗差が大きい。

484はＱＦ地区18発掘区出土の玉縁付丸瓦である。玉縁部を含む全長31cm，下端幅17.2cm。側面はヘラで切り離されたままで調整はしていない。裏面には明瞭な布目痕が残存している。表面は玉縁部とその周辺を横ナデ，他は比較的彫りの浅い細かな斜格子目タタキのあと，タタキ目を残さないまで縦位にナデ消している。胎土には細かな砂粒を含み，色調は灰白色で，焼成は比較的良好である。

485はＱＦ地区18発掘区出土で，玉縁部を欠失しているが，ほぼ同工の丸瓦である。現存長26.3cm，復元下端幅17cm。側面はヘラで切り離されたままで，調整は行われていない。裏面は明瞭な布目が残る。表面は磨滅が著しいが，格子目タタキのあと，間隔をおいて縦にナデて仕上げている。このタタキ目は一つの単位が幅約５cm，長さ20cmで，文様の構成が上下で異なる叩板が用いられている。胎土は細かな砂粒を含み，色調は淡褐色を呈す。焼成はややあまい。

486はＱＦ地区18発掘区出土の行基式丸瓦である。全長30.5cm，下端幅19.2cmで，484・485と比べると一回り大きい。側面はヘラ切り離しのままで調整は施されていない。裏面には布目痕を残す。表面は比較的粗い斜格子タタキ目のあと，間隔をおいて縦にナデて仕上げている。胎土に細かな砂粒を含み，色調は淡黄褐色を呈す。焼成は普通である。

(5) 平瓦（Fig.56，ＰＬ.45）

丸瓦同様，90％は格子目タタキで，縄目のものは少ない。

487はＱＦ地区16発掘区から出土した縄目タタキの平瓦である。全長41cm，復元下端幅31cm，厚さ約2.8cmである。側面は２回のヘラケズリ，上下両端は表面側で１回ヘラケズリを行い稜を落としている。表面にはやや粗い布目を明瞭に残す。胎土は粗い砂粒を含み，色調は淡褐色を呈す。焼成はやや不良である。

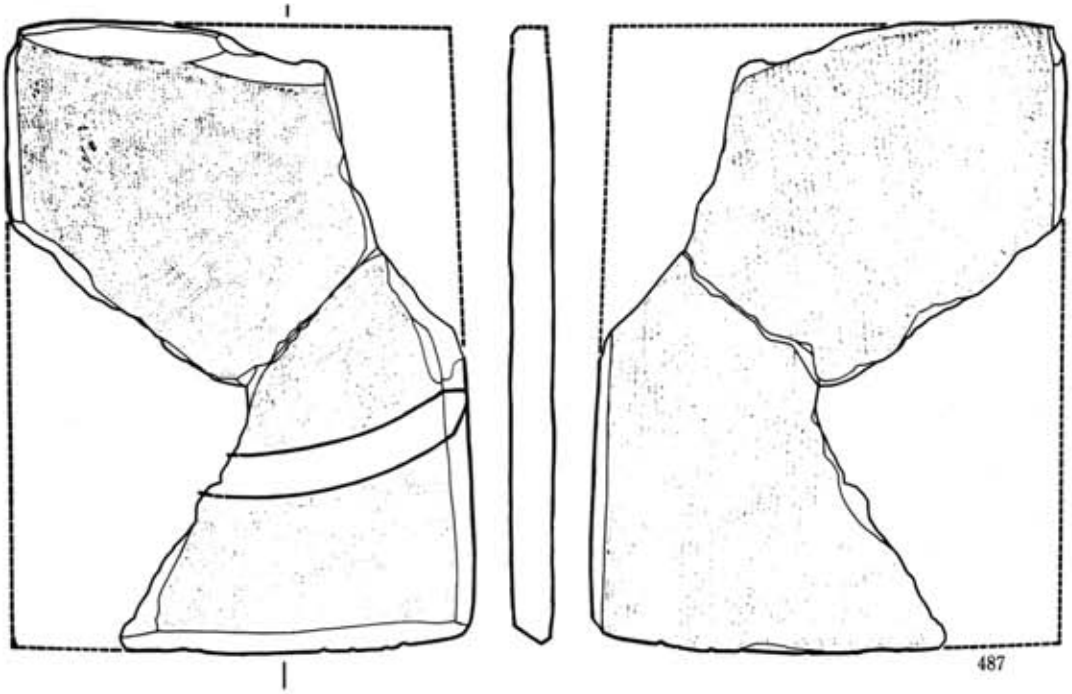
488はＱＦ地区16発掘区出土の格子目タタキの平瓦である。端幅28cm，全長は不明。側面及び下端面はヘラ切り離しのままで調整は施されていない。表面は布目をほとんど残さないまで縦位にハケ調整を行い，裏面は粗い格子目タタキのあと，下端部付近を横ナデで仕上げている。胎土は粗い砂粒を含み，色調は淡褐色を呈す。焼成は普通である。

(6) 道具瓦（Fig.57，ＰＬ.45）

熨斗瓦のみ11点出土した。ＳＢ090のような四面廂の建物跡も見つかっているので，隅切瓦等，他種の道具瓦出土の可能性もありうるが，現在のところ不明である。

熨斗瓦は幅でＡ（幅15cm前後），Ｂ（10cm前後），Ｃ（幅７cm前後）の３種に大別される。Ａ

は平瓦を半截したもので，２点とも縄目タタキをもち，片方側面に２回のヘラケズリを残している。Bは格子目タタキ，もしくは完全にタタキ目をナデ消したもので，側面の稜をかるく落としたもの１点と，ヘラ切り離しのまま調整を行っていないもの２点がある。Cは，丸瓦を利



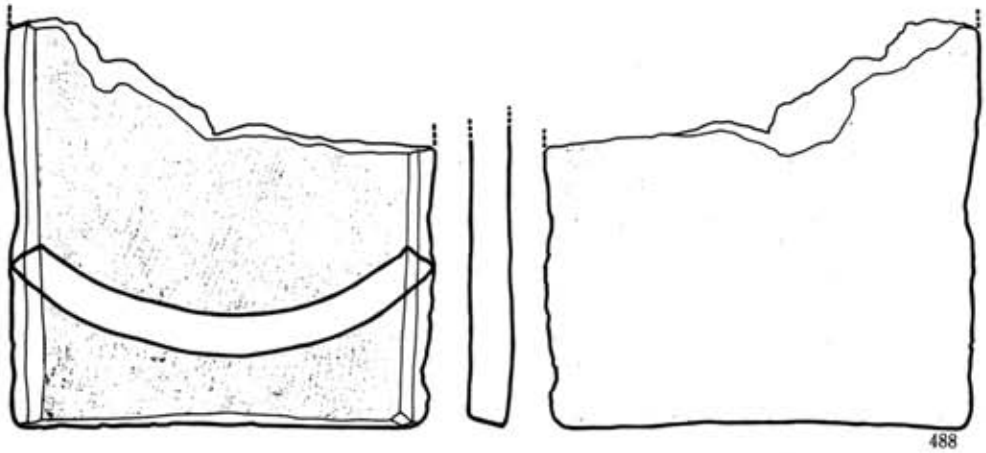


Fig. 56　平瓦実測図

0　20cm

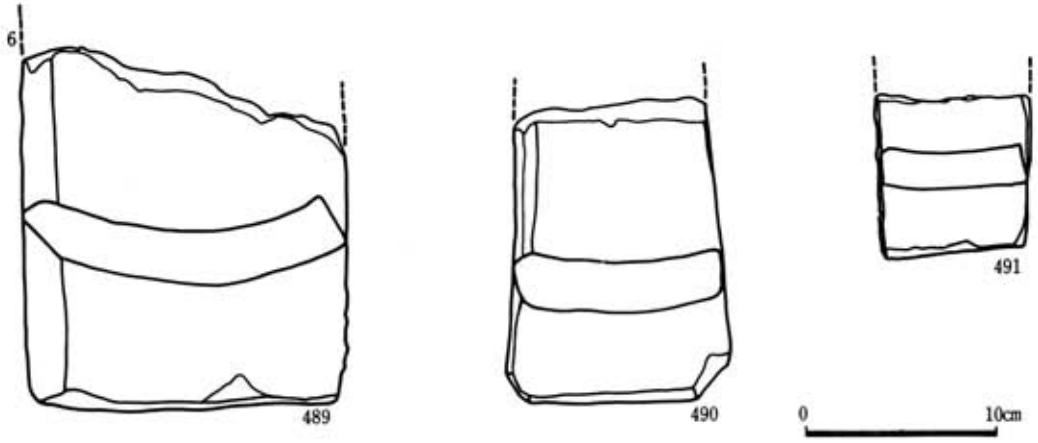


Fig. 57　道具瓦実測図

用したものも1点あるが，6点とも両側面はヘラ切り離しのままで格子目タタキないしは完全にナデて仕上げたものである。

以上のように，これまでの調査の中で幾種類かの瓦が出土したが，大宰府文化の影響が色濃く表れ，かなり浸透していることがうかがえた。

軒丸瓦では鴻臚館系軒丸瓦が主流で，複弁八葉蓮華文から単弁八葉蓮華文に至るまで，国府の変遷を物語る資料を得ることができた。さらに，この地域では最古式に位置づけられ，県内でも他には寺浦廃寺，大願寺廃寺，塔の塚廃寺，基肄城跡などでしか出土していない単弁軒丸瓦が国庁付近でも確認されたことは大きい。このことにより，それまで8世紀初頭が上限と考えられる複弁八葉蓮華文軒丸瓦と同類瓦の出土によって，国府が天平勝宝8年（756年）にまで遡りうる可能性をもっていたのが，新たにまた肥前国府の設置時期問題へ大きな波紋を投げかけることになった。

軒平瓦は鴻臚館式を主流とするが，老司系の偏行唐草文もみられる。ただ軒平瓦に比べ軒丸瓦で老司系のものがこれまで確認されていないことは疑問が残る。また軒丸瓦と軒平瓦それぞれ3種が国分寺跡でも同類例として出土していることは，国府と国分寺の関係を考える上でも注目に値する。

その他，丸瓦・平瓦等は全体的に格子目タタキが主流を占め，幾分新しい傾向を示していた。また道具瓦は出土数が少なく，格好の資料は得られなかった。今後，資料の増加を待って内容の充実を図っていきたい。

4．その他の遺物

土器・陶磁器・瓦以外の遺物としては硯・土馬・土鏡・鞴羽口・坩堝などの土製品，石銙・

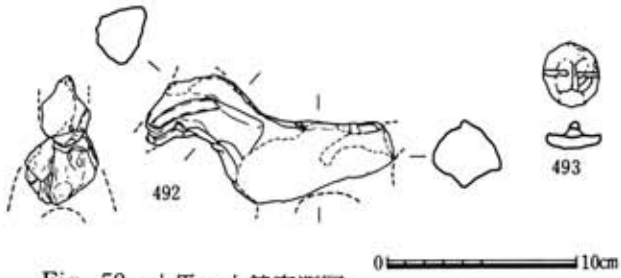


Fig. 58　土馬・土鏡実測図

石仏などの石製品，銅鏡などの金属製品がある。硯については「2．土器・陶磁器」の項で説明したので，ここでは省く。また，ＱＦ地区16発掘区ＳＫ080土壙やＤＢ地区03発掘区からは土炭や焼土に混って多量の鉄滓が出土しているが，未だ分析などを行っていないので省略する。

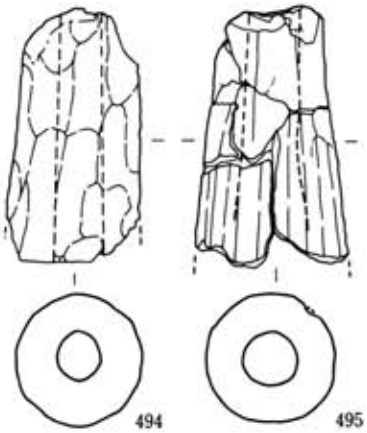
(1)　土製品

土馬（Fig.58～492，ＰＬ.46）

ＲＧ地区33発掘区出土。土製の模造馬形である。耳・尾・脚部を欠く。頬革の部分が残り，鞍がついていた痕跡もある。残存長13.2cm。明橙褐色で，胎土には砂粒をあまり含まない。

土鏡（Fig.58～493）

ＲＧ地区33発掘区出土。土製の模造鏡である。径3.0～3.4cm，厚さ0.7cmの円盤の中央をつまんで鈕としたもので，鈕孔は径約0.4cm。茶褐色で，小さな砂粒を含む。



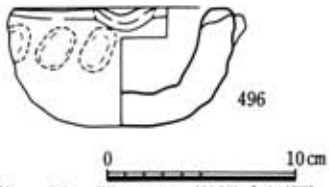


Fig. 59　鞴羽口・坩堝実測図

鞴羽口（Fig.59，ＰＬ.46）

494はＱＦ地区26発掘区出土で，先端・基部の一部を欠く。495はＱＡ地区13発掘区出土で，基部を欠く。ともに先端は二次加熱により灰色に変色し，孔周囲には鉄滓が薄く付着している。胎土には多くの砂粒を含む。494は外面ナデツケで粗雑な作りであるが，495は縦位に沈線が幾本も入っている。

坩堝（Fig.59～496）

ＱＤ地区03発掘区出土。半球形の体部上端に片口部をつけたもので，体部上部には成形時の指頭圧痕が残る。口径12.2cm，器高6.2cm，器壁は厚く約２cmある。胎土には砂粒を含み多孔質で焼けて灰色に近くなっている。

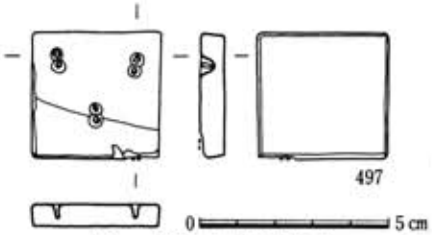


Fig. 60　石銙実測図

(2)　石製品

石銙（Fig.60～497，ＰＬ.46）

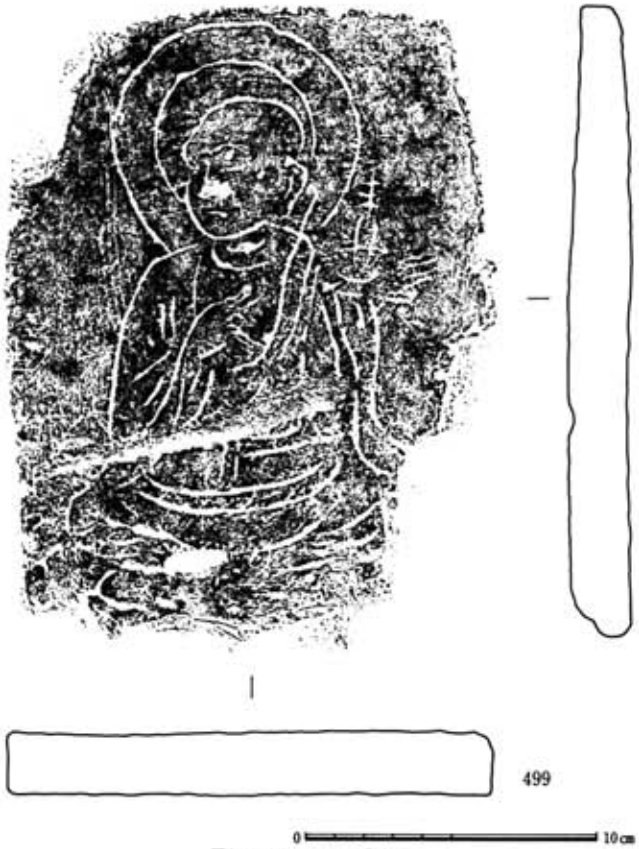


Fig. 61　石仏拓影

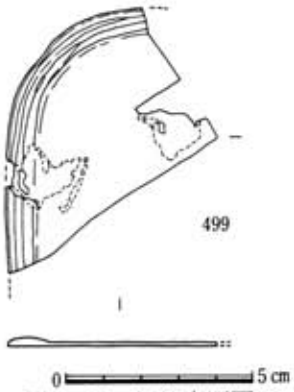


Fig. 62　銅鏡実測図

ＱＣ地区35発掘区ＳＤ128溝出土。石帯として用いられた銙の巡方である。裏面には３か所に装着のためのかがり穴を穿つ。表裏面および側面は丁寧に研磨されている優品である。表面は一部剝離している。長辺3.43cm，短辺3.29～3.32cm，厚さ0.63～0.64cm。硬玉（翡翠）製と考えられる。

石仏（Fig.61～498，ＰＬ.46）

ＤＢ地区出土。ＤＢ地区09発掘区の北方約50mの蜜柑畑から耕作中に出土したという。縦21.6cm，横16.6cm，厚さ約2.2cmの周囲を丁寧に削って面取りした滑石製石板の片面に僧形を流暢に線刻している。やや横向きの頭には円光がつき，右手は肘をまげ胸の前におき，左手掌には宝塔らしきものをもつ。足は結跏趺坐である。平安時代の作(註)と考えられる。

この石仏が出土した蜜柑園地下には礎石が数個埋没しているという土地所有者の言もあり，今後の調査が望まれる。

(3)　金属製品

金属製品としては銅鏡がある。

銅鏡（Fig.62～499，ＰＬ.46）

久池井Ｂ遺跡ＳＰ370土壙墓出土。他に破片はなく元来鏡片を副葬品としたものらしい。縁は薄い蒲鉾形で鋳出した後丁寧に研磨されており，鏡背は無文である。銅質は良く，黒色に近い緑色である。方形のいわゆる胡州鏡と思われる。縁厚0.15～0.16cm，鏡面厚0.09cm。

なお，「２．土器・陶磁器」の項で紹介した円面硯以外に，ＤＢ地区08発掘区ＳＤ141溝跡から須恵器風字硯の破片が，また，ＱＦ地区58発掘区ＳＤ097溝跡から須恵器蹄脚円面硯の破片が出土している。

（註）佐賀県立博物館志佐輝彦氏教示。

VI 総　　括

1．政庁跡について

政庁跡一帯では，7世紀後半～10世紀初頭の遺物が出土しているが，その間の政庁の建物配置はFig.63にみられるようなかたちで，一定していたのではないようである。そこで，その変遷について若干考えてみたい。

それには，検出された各建物相互の配置関係，各建物自体の新旧関係に注意する必要があろう。

配置関係をみると，まず，中央に南北に並ぶ3棟の建物，ＳＢ093前殿跡，ＳＢ090正殿跡，ＳＢ060後殿跡のあいだに強い共通性が認められる。ひとつは，共通の南北中軸線上にあること。ひとつは，正殿身舎部と前殿，後殿の妻部が揃うこと（つまり，桁行が20.86mで，同じ）である。このことから，前殿と後殿はそれぞれ1回の建て替えを行っているが，正殿は建て替えの形跡が今のところ確認できないという状況ではあるが，これら3棟は同じ期間を通じて，並存していた可能性が強い。

また，正殿の西妻部にＳＢ099回廊がとりついているが，その位置が正殿の廂よりやや内側であること，正殿同様建て替えが認められないことから，正殿と同じ時期に計画され，造られ，並置され続けたものと思まれる。

そして，この回廊が西へ延びたところ，西側築地との関係であるが，回廊の西端の柱位置が築地の基底部のちょうど東端部であり，築地を意識したものであるところから，やはり同時期と考えたい。また，東側築地は，政庁の南北中軸線からの距離が，西側築地と同じく心心距離で38.6mのところにあり，同一性をもつ。故に政庁の東西のひとつの区画は，回廊と同じ時期（正殿の時期）には，築地であったと考えられる。また，南側の築地であるが，2度の建て替えを行っている南門が，規模は時期により若干変化しているものの，ほぼ同じ場所であり，これにとりつく築地の位置も変わらないことから，政庁建設当初からのものであろう。ただ，北面の築地の区域では，他とやや様子を異にする。それは，この築地上で，政庁の南北中軸線よりやや西に検出されたＳＢ104建物跡の存在である。北面の築地より古い。そこで，初期にはこれよりさらに北にひとつの区画を示すものがあったことも考えられよう。しかし，政庁の主要建物（前殿，正殿，後殿）と関連性をもつ西側の築地が，Fig.63にみられるとおり，この位置で当初から北を区画するように，東へ折れている状況から，このＳＢ104建物跡には，そのような区画の構造（例えば，建物の西側に築地がとりつく構造……多賀城政庁跡第2期）をとることも想定される。

つぎに脇殿であるが，この調査区の状況（Fig.14）が政庁区域のなかで，もっとも複雑であ

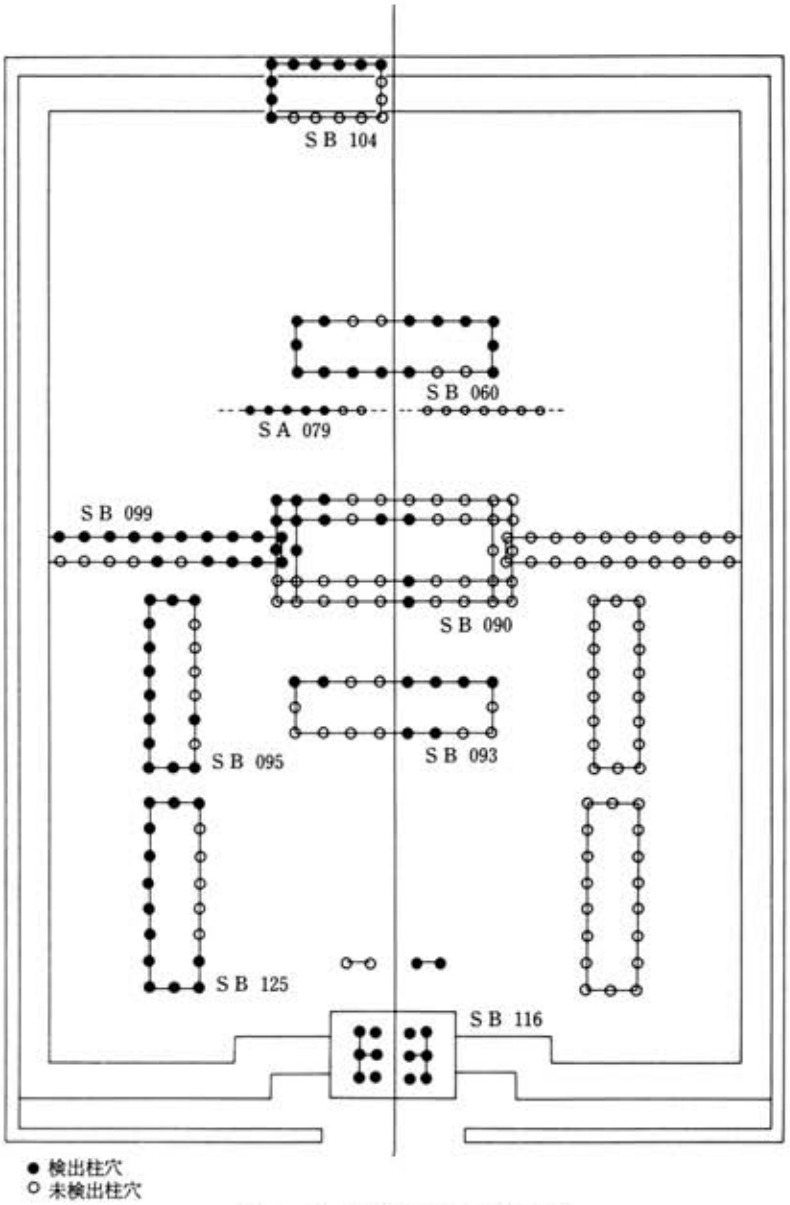


Fig. 63　肥前国政庁跡復元図

る。まず，時期としては新旧関係から4時期にわかれることが考えられるが，いわゆる長棟形式の脇殿構造をとるのは，後半の2時期であり，ＳＢ135，136建物跡の存在から，少なくとも脇殿の南棟は当初にはなかったようである。ＳＢ135建物跡は規模が不明のため，今後の調査を待つしかないが，ＳＢ136は総柱で2間×3間の小さな建物であり，政庁における「楼」のようなものであろうか。また，脇殿の南北棟を比較してみると，それぞれ1回の建て替えを行っているが，その第1期同士では，建物の東側柱列だけが揃う（これは，ＳＢ135，136建物跡についても同様であり，この東側柱列の線は，建物配置のひとつの重要な基準線か？）のに対し，第2期では西側柱列も揃えており，後期に整然とした形になる。そこで，前述のことであるが，脇殿の南北棟は当初より並立していたのかどうかという問題である。このことについては，互いの新旧の柱穴埋土の状況をみると，国庁跡ではこの両棟のみが，火災に遭っているような様子があることから，第1期においても並行していた時期があると考えられる。

政庁の建物については大概以上のように推定されるが，ではその変遷の時期をどうみるかである。これについては，鴻臚館式の瓦，ＳＢ135建物跡の柱穴から出土した土器などから少なくとも8世紀前半には政庁は建設されていたと考えられる。そして，遺物からは10世紀初頭まで続くようであるが，ひとつ注目されるのは，ＳＢ116南門跡の礎石根石付近から出土した土師器から，南門の礎石建物への変化時期は9世紀後半頃と考えられることである。

最後に今後の課題として，以下のようなことを掲げておきたい。

- 国分寺ではいくつかの建物に礎石が使われているのに対し，政庁では南門だけだったのか。
- 政庁の最小の区画は，本調査で一応確認できているが，周辺にさらに区画がありはしないか。
- 現在，周辺地域で各々まとまった建物群が検出されているが，それらとの関係はどうなのか。

などである。現状においては，Fig.63の発掘区域が示すように，広範囲の発掘調査ではなく，各遺構を把握するという調査に終っているため，推定の域を出ないものも多い。今後，発掘調査を行い，修正を重ねる必要があろう。

2．肥前国府と肥前国の動き

磐井の乱後，畿内大和政権は急速に九州に勢力を伸ばし地歩を固めてきた。まず「那津官家」を設置し，対外的には外国の使を饗すところとし，内政的には九州支配の軍事的拠点とした。その後，律令国家としての全国支配体制の整備が進み大宰府が設置される。大宰府設置の年代は明確でないが，全国に国府が設置される過程と同様の過程を経て整備されていったと考えられる。大宰府の大宰はもともと官職名であるが，浄御原令の施行後は筑紫にだけ官衙名として残り，やがて固有名詞となってしまった。律令後に大宰府は整備されるが，国郡制度のもとでは中央から国司が各国に派遣されて統轄した。

日本の勢力は六世紀以降，朝鮮半島から徐々に後退しつつあったが，天智２年（663）の白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗北し，本土に完全に撤退した。当時の政府にとっては西海道の防備が急務となり，天智３年に大宰府に水城を築き，対馬，壱岐・筑紫に烽（とぶひ）と防人を置いた。翌４年には百済からの亡命者である達率憶禮福留・同四比福夫の技術指導により大野城と基肄（椽）城を築いた。『肥前風土記』にみえる「城一所」である。基肄城は筑紫平野側山麓，現在の基山町に関屋土塁・とうれぎ土塁をもち，防備の一環としている。

最近，三養基郡上峰村の堤土塁が注目されている。水城と同様の築堤で，工法も版築工法であり古代の築造であることは間違いないが，大宰府から20数km離れた場所にあり，その存在意

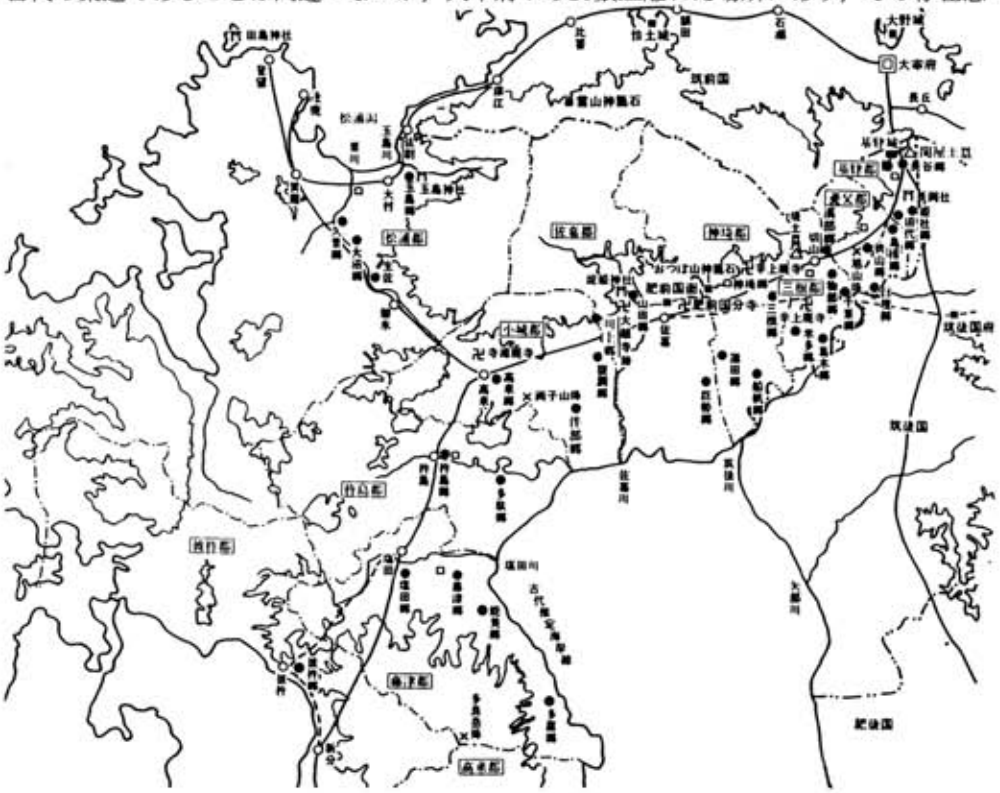


Fig. 64　古代肥前国要図（九州歴史資料館編『古代の西海道と大宰府』より）

義がよくわからない。しかし堤土塁のある佐賀平野は穀倉地帯，筑紫平野の一部であり，古代の条里制がよく残っている地域である。堤土塁の近くには「防所（ぼうじょ）」という地名があり，軍団の所在を考える人もある。肥前の軍団は３団2,500人であったが，弘仁４年（813）に1,500人に減じられている。他の２個所は杵島郡と現在の基山町にあったと考えられている。天智３年～４年に築かれた水城・大野城・基肄城は，対外的な防備としてだけではなく，穀倉地帯である筑紫平野を擁する九州の内政的な意味も考慮して築かれたと考えられる。したがって，この時期の防備施設としては各国府だけでなく，別に軍事施設がつくられた可能性がある。堤土塁はまさにそういった施設のひとつであろう。

肥前の国府の設置時期は文献上では明らかにできないが，昭和50年から進めてきた発掘調査において，大和町久池井一帯の肥前国府推定地から７世紀以降の遺物が，国府と関係すると考えられる遺構から出土しており，律令制定後、まもなくして，肥前国にも国府が設置されたと考えられる。肥前国府跡の遺構は発掘調査によって徐々に明らかにされつつある。

府域はいまだに不明であるが，政庁は南北104.5m，東西77.2mの築地と溝によって囲まれた内部にあり，正殿，前殿，後殿，脇殿，廊，南門が配されている。大宰府都府楼の建物配置に類似しており，また瓦の共通性からみても，肥前国府の建設にあたっては大宰府の規制が強く働いている。国分寺等の建立についても同様のことがいえる。

肥前国府の第Ｉ期は柱間が1.65m～2.2mの天平尺にはのらない，妻が３間の掘立柱建物が不規則に配置される。ＳＢ001建物跡（ＲＧ地区31発掘区），ＳＢ004建物跡（ＲＧ地区33発掘区），ＳＢ008建物跡（ＱＣ地区05発掘区）などがそうである。方位は一定しない。

第II期になるとＱＦ・ＱＣ地区に整然とした建物配置と区画をもった政庁が出現する。第Ｉ期が７世紀末～８世紀初めと第II期の政庁の創建が８世紀前半と早い時期と見られる。こうした傾向つまり，８世紀の律令制盛期に入った段階で，中央では平城遷都、大宰府では政庁（都府楼）が成立する時である。特に，大宰府に見られる第Ｉ期と第II期の状況にこの肥前国府は極めて近い変遷をたどっている。恐らく大宰府の整備と軌を一にして，肥前国府の整備もなされたのではないか。また，大宰府とは同形の鴻臚館式の瓦の存在，国庁内郭の建物の配置の類似性からいって，これらのことが傍証されよう。

肥前国府第II期の政庁は更にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４期の建替えが認められる。４期には南門が礎石建物となっており，他の建物もそういった状況が考えられ，政庁が順次８～９世紀にかけて整備されている。国庁内郭の周辺には，いくつかの建物が認められるが，これらの建物は溝・築地等によって区画されていると見られるが，これまでの調査では、発掘範囲が限られ判然としない。国庁内郭に近い建物は，政庁を国家的儀式を中心とした機能を持つ官衙とすると，官人等が日常政務をとる官庁建物と考えられるが，その性格については決め手がない。ＲＧ地区の建物群はそうしたものであろう。

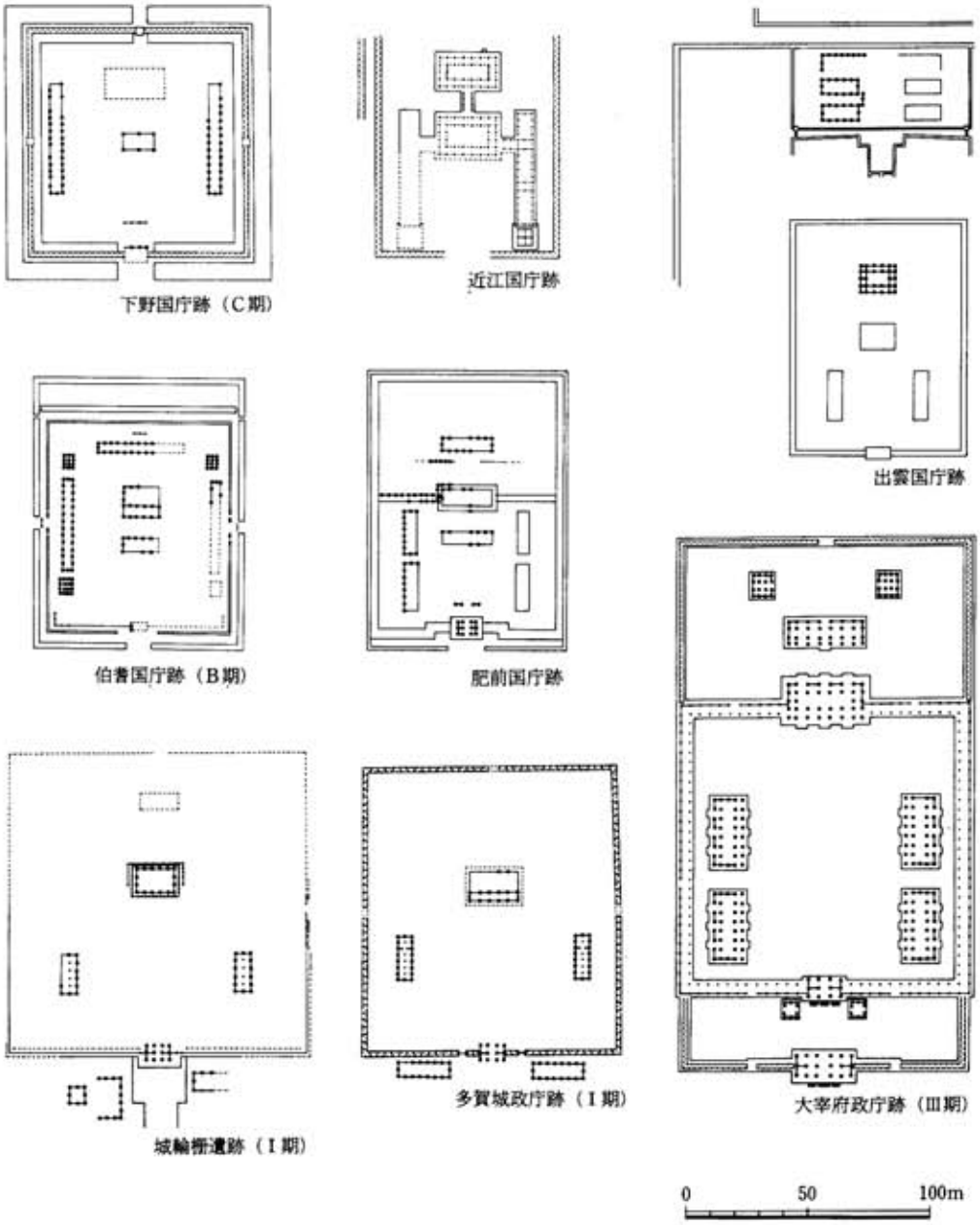


Fig. 65　諸国国府・多賀城・大宰府政庁跡平面図

久池井B遺跡の5軒の倉庫を背後に配置した，L字形の配置を持つSB057建物跡，SB058建物跡群は妻を3間とる建物で住居的色彩の強いものである。第I期の正庁的なものか，第II期以降の国司の館の可能性もある。SB057建物跡，SB054建物跡の南前面は広場となっているが9世紀後半～10世紀には土壙墓が営まれており，湖州鏡片の副葬も認められる。いつしか国府の地も私的な権利が入りこんでいったことを示している。

惣座遺跡では，3間×3間の総柱の建物が7軒以上L字形に配置されている。久池井Bの倉庫と共通する面もあり，正倉的な性格をもつのではないかと考えられる。

いずれにしても10次にわたる調査では国庁内郭が整然とした区画と建物配置が認められるほか，その周辺は一定の都市計画的な建物や区画の存在は認められない。周防国府の方8町の国府域を例外として，肥前国府においても整然とした都市計画は認められないようである。

肥前国府は西方を流れる嘉瀬川よりの扇状地からなる立地にある。国府から大宰府等への船便による交通の利便を考えて国府設置にあたったのであろう。ここは古くは佐賀の県主の本拠地であったと考えられる所である。

国司は天平勝宝年間（749～57）以降は名前がわかっている。主な国司をあげると，吉備真備が天平勝宝2年（750）に右京大夫の要職から筑前，続いて肥前に左遷されている。また天平宝字8年（764），東大寺建立に活躍し造東大寺長官の重職にあった佐伯今毛人が肥前の国司として左遷されている。吉備真備も佐伯今毛人の左遷も藤原仲麻呂の策謀によるものである。

肥前国はもともと中国であったが，天平宝字元年(757)に上国に昇格している。肥前国は『風土記』によれば11郡からなっており，基肄・養父・三根・神埼・佐嘉・小城・松浦・杵島・藤津・彼杵・高来がある。そのうち彼杵・高来と松浦の一部は現在の長崎県にあたる。また『延喜式』，『和名抄』所載の郡数も同じである。各郡の郷（里）の数は，松浦11，神埼・高来9，小城7，基肄・三根，佐嘉6，養父・杵島・藤津・彼杵4である。三根郡は神埼郡から分割されたことがわかっているので，神埼郡は15郷で大郡であり，大化時代に筑紫米多国造は神埼郡を基盤としていたと考えられ，その勢力の強大さがうかがえる。

軍団は先述のように肥前国は三軍団で2,500人であったが，弘仁4年（813）には1,000人減らして合計1,500人，団別に500人ずつに改められている。基肄の軍団は『日本紀略』弘仁4年3月辛未条にみえるが，他の2団は明らかでない。ただし，『三代実録』貞観12年（870）6月13日条に杵島郡の兵庫が震動したので兵を動員して警護させたとあるので，杵島郡に兵庫があることから推定して杵島郡に軍団が置かれていたのはほぼ間違いない。あとのひとつは，国府のある佐嘉郡か先述の上峰村坊所付近が推定される。

烽は『風土記』によれば肥前国内には20個所とある。養父郡の1個所は鳥栖市旭山，神埼郡の1個所は神埼町日の隈山，小城郡の1個所は両子山であろう。松浦郡は8個所あるが，唐津市鏡山以外は不明である。藤津の1個所は多良岳（たらだけ）と推定されているが，彼杵の3個所，高来の

5個所は不明である。

駅は『風土記』によれば18個所であるが，『延喜兵部式』では15個所に整理されている。『風土記』では基肄・三根・神埼・佐嘉・小城・杵島・藤津に各1，彼杵に2，高来に4である。『延喜兵部式』では基肄・切山・佐嘉・高来・磐氷・大村・賀周・逢鹿・登望・杵島・塩田・新分・船越・山田・野島である。路はこの各駅をぬっており，東の方から来て小城郡の高来で松浦と杵島方面に分かれている。神埼には「駅ヶ里」という地名が残っている。また，小城から現在の中原町までは幅15mの直線道路が20数km続いている。この道は「延喜道」と呼ばれており，道路・田畑の地割・切通しとなって現在も確認できる。平安時代になって新しく整備された官道であろう。

天平10年（783），藤原広嗣が大宰の少弐に任ぜられるが，中央の政界人吉備真備や僧玄昉と相入れず，天平12年（740），乱を起こして敗れ，肥前の松浦郡値嘉島で捕えられ，殺された。その後，吉備真備が肥前国守として肥前国に左遷されたのは皮肉である。

律令体制も8世紀から9世紀にかけて急速に崩壊過程に入り，調，庸など粗悪で，納入期限も遅れ，再三にわたり，国府郡家の官吏の怠慢を戒めている。肥前国の場合も，元慶5年(881)の肥前介笠宗雄の解文によれば，40年前に班田収授したまま同年に至っている。10世紀以降は，戸籍の作成，班田収授の実施もなく，公領は都・郷・保と称しながらも，荘園と同じような形態となり，郡司などの地方官は荘官の性格を帯びるようになる。国司も任期中は公領を私物化し，荘園領主的に振る舞うようになる。国府の政務は，在地豪族出身の在庁官人層が支配するようになり，国司も任命されても任地にはおもむかなかったので，国庁（衙）も留守所となっていた。肥前国の在庁官入は，「観世音寺文書」「河上神社文書」によれば，12世紀頃は酒井宿弥・船宿弥・上（毛野）宿弥・橘朝臣・源朝臣・藤原朝臣・伴朝臣・県宿弥・筑紫（宿弥）・佐伯朝臣と称する豪族からなっており，県・筑紫などの伝統的な在地豪族と，中央官人が在地豪族化した者とがおり，こうした豪族達が，事実上肥前国を分割支配するようになっていった。

Tab. 2　肥前国府跡出土土器・陶磁器一覧表

（口径・器高の単位はcm，含有砂粒の大きさの単位はmm）

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
QF06	SD067	1	須恵器	蓋EIII	15.0 2.6	内面　明灰色 外面　明灰褐色	0.5～2.0	普通	内面～天井部下半　ヨコナデ 外面天井部上半　ヘラケズリ	
		2	〃	高台杯C	13.6 4.2	暗灰色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ 外面底部に板目痕	
		3	〃	高台杯EI	16.0 5.2	灰白色	0.5	普通	内外面　ヨコナデ 外面底部　ヘラケズリ後ナデ	
	SD068	4	須恵器	蓋EII	(15.8) 3.1	暗灰色	1.0～2.0	普通	内面口縁部　ヨコナデ 外面天井部　ヘラケズリ	
		5	〃	蓋DII	(13.4)	暗青灰色	1.0～2.0	普通	内面～天井部下半　ヨコナデ 外面天井部上半　ヘラケズリ	
		6	〃	高台杯C	高台径 (7.2)	灰赤紫色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ 外面底部　ヘラケズリ後ナデ	
		7	〃	高台杯C	(12.8) 4.0	内面　明灰色 外面　灰色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ 外面底部　ヘラケズリ後ナデ	
		8	〃	杯CII	(12.8) 3.5	明灰色	0.3～3.0	良好	内外面　ヨコナデ，ナデ	底部外面に「大」墨書
		9	〃	IIIA	(16.2) 2.3	灰色	1.0以内	良好	内面～外面　ヨコナデ 外面底部　ヘラケズリ後ナデ	
		10	〃	IIIA	(16.0) 3.0	青灰色	1.0前後	普通	内面～外面　ヨコナデ 外面底部　ナデ	
		11	〃	IIICI	(18.0) 2.7	灰紫褐色	1.0前後	良好	内外面　ヨコナデ～ナデ	
		12	土師器	杯AII	(13.0) 4.0	内面　黄褐色 外面黄褐色～黒褐色	0.5	良好	内面　ヨコナデ～ナデ 外面　ヘラケズリ後ナデ	
		13	〃	蓋A	14.8 2.7	橙褐色	1.0前後	普通	調整不明 つまみ部　ヨコナデ	
		14	〃	蓋A	14.8 3.9	黄土色	1.0～2.0	普通	調整不明	
		15	〃	高台杯CII		黄褐色	0.3	普通	内外面　ヨコナデ 外面底部　ヘラケズリ後ナデ	
	埋土	16	須恵器	蓋EIII	(14.8) 3.35	明灰色	1.0	不良	内面～天井部下半　ヨコナデ 外面天井部　ヘラケズリ後ナデ	
		17	〃	高台杯C	14.6 4.7	灰色		不良	調整不明	
		18	〃	高台杯DII	16.0 5.8	灰色	0.5～2.0	やや不良	内外面　ヨコナデ	
		19	〃	IIICII	(13.7) 2.0	黒灰色		普通	内外面　ヨコナデ	
		20	〃	IIIDI	(16.8) 2.0	内面　暗褐色 外面　灰褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ 外面底部　ナデ	
		21	〃	IIIA	(16.8) 2.1	灰色	1.0	やや不良	内外面　ヨコナデ	
		22	〃	壺BII	底径 9.8	淡黄灰色	1.0～3.0	不良	外面上部　ヨコナデ 下部　ヘラケズリ	
		23	陶器	碗	高台径 9.0	黄緑色		普通		緑釉・胎は軟質
		24	土師器	蓋C	15.2	橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ～ヘラケズリ	スス付着
		25	〃	高台杯DII	(13.8) 4.6	淡褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
		26	〃	高台杯CII	(16.4) 6.6	橙～暗褐色	1.0～4.0	良好	内面～外面上部　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		27	〃	IIIAIV	(14.8) 2.1	淡褐色	1.0～3.0	不良	調整不明	
		28	〃	IIIAII	18.0 2.5	橙～黄褐色		普通	調整不明	
		29	〃	IIIAII	(18.0) 2.6	橙褐色		普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		30	〃	IIIAI	(19.6) 2.0	赤～淡褐色		普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		31	〃	杯DII	(10.4) 3.2	橙褐色	1.0～2.0	良好	内面～外面　ヨコナデ	
		32	〃	杯B	(12.8) 3.0	褐色	1.0～2.0	普通	内面～外面　ヨコナデ	
		33	〃	杯B	13.0 3.7	褐色		普通	内面～外面　ヨコナデ	
		34	〃	杯B	12.7 3.4	橙褐色		普通	内面～外面　ヨコナデ	体部外面にロクロ目がつよく残る

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
QF06	埋土	35	土師器	杯AII	(13.6) 4.7	内面　橙褐色 外面　淡褐色	2.0～4.0	普通	内面～外面　ヨコナデ	
		36	〃	杯DI	(16.6) 4.7	淡～橙褐色		普通	内面底部　ナデ(ヘラミガキ) 内面～外面　ヨコナデ	
		37	〃	杯		赤褐色		良好	内外面　ナデ	底部外面にヘラ描文字
	SK069	38	須恵器	蓋EIII	(10.6) 2.9	灰色	0.5	良好	内面　ナデ 外面　ヘラケズリ後ヨコナデ	
		39	〃	蓋EIII	(13.8) 2.5	灰色～黒灰色	1.0	良好	内面～外面下部　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ後ナデ	
		40	〃	蓋EIII	(14.2) 2.8	内面　黒褐色 外面　黒灰色	1.0～2.0	普通	内面～外面下部　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ後ヨコナデ	
		41	〃	蓋EIII	(14.4) 2.2	内面　灰～赤灰色 外面　明灰褐色	1.0	普通	内面～外面下部　ヨコナデ 天井部　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		42	〃	蓋EIII	(14.8) 2.1	明灰褐色	1.0	普通	内面～外面下部　ヨコナデ 天井部　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		43	〃	蓋EII	(15.8) 2.7	灰色	1.0	普通	内面～外面下部　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ後ナデ	
		44	〃	蓋EII？	(16.6)	内面　暗～明灰色 外面　明灰色		普通	内面～外面下部　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ後ナデ	
		45	〃	蓋EII	(16.5) 2.7	灰色	1.0	良好	内面～外面下部　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ後ナデ	
		46	〃	蓋DII	(14.2) 3.4	灰褐色	0.3	普通	内面～外面下部　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ後ナデ	
		47	〃	高台杯DIII	(12.2) 4.3	内面　明灰褐色 外面　灰色	0.5	普通	内面　ヨコナデ～ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
		48	〃	高台杯BIII	底径 7.8	暗灰色	1.0	良好	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	内面スス付着
		49	〃	高台杯EI	(16.2) 5.2	暗灰褐色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		50	〃	杯CII	(13.4) 3.1	灰白褐色	1.0～2.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ，底部　板目痕	
		51	〃	杯D	13.0 3.7	暗青灰色	1.0～2.0	普通	内面　ナデ 外面　ナデ・ヘラケズリ	底部にヘラ記号
		52	〃	杯D	底径 8.0	黒褐色	1.0～2.0	不良	調整不明	
		53	〃	杯D	(14.3) 3.8	灰白褐色	1.0～2.0	不良	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヘラケズリ後ナデ・ナデ	内面に丹塗り？
		54	〃	杯B	(13.4) 4.2	灰白褐色	1.0	不良	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ？	
		55	〃	皿BII	(12.2) 1.5	緑灰色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
		56	〃	皿CII	(14.6) 2.3	灰～黒灰色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		57	〃	皿E	(16.4) 1.4	灰色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		58	〃	皿DIII	(15.4) 2.5	暗灰色 灰白色	1.0	不良	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		59	〃	皿CI	(17.0) 2.5	黒褐色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		60	〃	甕A	(22.2)	内面　暗灰褐色 外面　黒褐色	1.0～4.0	普通	内面　ヨコナデ・タタキ 外面　ヨコナデ	外面に黒色顔料付着
		61	〃	壺BI	底径 11.0	内面　灰色 外面　明灰色・黒灰色	1.0～2.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヘラケズリ後ナデ・ヨコナデ	
		62	陶器	壺	最大径 16.1	暗緑褐色		良好	内外面　ヨコナデ	灰釉・双耳壺
		63	土師器	杯B	(13.6) 3.9	橙白色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		64	〃	杯AII	13.2 4.1	明橙褐色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ，底部　不明	外面にスス付着
		65	〃	杯B	(13.8) 3.1	淡褐色	0.1	普通	内面　不明 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
		66	〃	杯AI	(15.6) 4.1	黄土色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		67	〃	高台杯DII	(13.5) 4.2	橙褐色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヘラケズリ後ナデ	
		68	〃	高台杯DII	底径 7.6	明橙褐色	0.5	普通	不明	
		69	〃	高台杯DI	(15.1) 5.0	橙褐色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ナデ・ヘラケズリ後ナデ	

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
QF06	SK069	70	土師器	皿AII	(17.4) 2.4	橙白色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
	SK070	71	土師器	高台杯EII	底径 9.2	明橙褐色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　不明	
		72	〃	高台杯EI	底径 9.8	橙褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
	SB060	73	須恵器	蓋EII？	(14.6)	青灰色	1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ロクロナデ・ヘラケズリ	
QF16	SK080	74	須恵器	蓋CII	(13.6) 1.7	灰白色	1.0	やや不良	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヘラケズリ・ヨコナデ	
		75	〃	蓋C		灰褐色	0.1～3.0	良好	内面　ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		76	〃	蓋	(15.0)	灰色		良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		77	〃	蓋	(14.0)	灰色		良好	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		78	〃	高台杯		灰色	1.0	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		79	〃	杯CI	(13.9) 3.3				内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ	穿孔(底部)内面にスス付着
		80	〃	皿CII	(13.2) 1.7	灰色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		81	〃	皿CII		明灰褐色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ	
		82	〃	硯		暗灰色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ	円面硯・線彫文様
		83	〃	硯		暗灰色	1.0	良好	内外面ヨコナデ	円面硯・線彫文様
		84	〃	硯	(15.0) 7.3	淡黄灰色	1.0～2.0	不良	内外面　ヨコナデ	円面硯
		85	土師器	杯B	(11.6) 3.45	明灰褐色		良好	内外面　ヨコナデ	
		86	〃	杯B	13.0 3.5	淡橙褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		87	〃	杯B	(12.4) 3.4	明橙褐色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ～ナデ	
		88	〃	杯B	(12.6) 3.6	明橙褐色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ～ナデ	
		89	〃	皿AV	(9.4) 1.2	橙褐色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ～ナデ	
		90	〃	皿AV	(9.0) 1.1	明橙褐色	1.0	良好	内面　ヨコナデ・ナデ 外面ヨコナデ	
		91	〃	杯CII	(12.6) 2.2	明橙褐色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ～ナデ	
		92	〃	杯CII	(13.6) 2.3	淡橙褐色	1.0～3.0	普通	内外面　ヨコナデ	内面にスス付着
		93	〃	杯B	(12.9) 2.85	橙褐色	0.1～2.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		94	〃	杯B	(13.4) 3.0	橙褐色	2.5	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		95	〃	杯AI	11.6 3.6	橙褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		96	〃	杯DII	14.2 4.0	淡橙褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		97	〃	高台杯EI	高台径 8.8	橙～赤褐色	1.0～3.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		98	〃	高台杯EI	高台径 8.1	淡橙褐色		良好	内外面　ヨコナデ	
		99	〃	甕A	(25.0)	黄褐色	1.0～3.0	普通	内面　ヨコナデ・ヘラケズリ 外面　タタキ	内面にスス付着
	SK089	100	土師器	杯B	13.5 3.4	暗橙淡褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		101	〃	杯B	13.5 3.7	暗～橙褐色	1.0～4.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		102	〃	杯B	12.6 4.0	赤褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		103	〃	杯B	13.5 3.9	内面　淡橙褐色 外面　灰黄白色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		104	〃	杯B	13.2 3.4	淡橙褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
QF16	SK089	105	土師器	杯B	14.2 3.9	淡～黒褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
QF18	SB093	106	土師器	杯E	13.9 2.9	淡橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
QF16	埋土	107	土師器	高台杯1II	脚部径 10.8	黄褐色	1.0～2.0	普通	内面Ⅰ　不明 外面　ヨコナデ・ナデ	高台付皿か？
		108	〃	高台杯ⅠI	脚部径 15.2	橙褐色	1.0～6.0	普通	内面　不明 外面　ナデ・不明	
QF18	SB093	109	土師器	杯E	13.9 2.9	淡橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
		110	〃	高台杯HII？	高台径 6.6	淡黄褐色		普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ	
QF29	SD109	111	土師器	杯FII	11.2 2.0	乳橙褐色		普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ	
		112	〃	高台杯HII	13.4 5.7	橙褐色	0.5～2.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ	
QF30	SD107	113	土師器	皿BII	9.2 1.4	乳橙褐色		普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		114	〃	皿BII	9.0 1.5	橙褐色		普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
QF31	埋土	115	土師器	高台杯HII	10.4 4.4	灰褐色		普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ	
QF32	SB095	116	須恵器	蓋	(14.2)	暗灰色	0.5～3.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
		117	〃	蓋	(15.0)	暗灰色	0.5	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラスズリ後ナデ	
		118	〃	皿CII	(14.4)	明灰色	0.5～1.5	普通	内外面　ヨコナデ	
		119	〃	鉢C	(18.2)	明灰色		普通	内外面　ヨコナデ	
QF34	SX111	120	土師器	高台杯GIII	11.3 4.65	橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
QF35	埋土	121	土師器	皿BII	9.85 1.6	乳橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
		122	〃	杯G	14.8 3.7	乳橙褐色	0.5～1.0	普通	内外面　ヨコナデ	外面底部板目痕
	SD126	123	須恵器	蓋D		明灰色	0.5	普通	内面　ナデ 外面　ヘラケズリ	
		124	〃	壺I	12.8 4.5	明灰色	0.5	普通	内外面　ヨコナデ	
		125	土師器	高台杯EII	高台径 7.1	橙褐色		普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ	
QF36	SK113	126	土師器	杯B？	(13.8) (3.9)	乳橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
		127	〃	杯G	14.0 3.15	白橙褐色	0.5～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		128	〃	皿AIII	(16.8) (1.6)	橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
		129	〃	皿AIII	16.2 2.6	橙褐色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ	
QF41	SD110	130	土師器	高台皿CII	12.8 2.7	明褐色	0.1～5.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	一部スス付着
		131	〃	高台皿CII？	12.9 3.1	明褐色	0.1～2.5	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		132	〃	杯B	12.7 3.25	明褐色		良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	一部スス付着
		133	〃	高台杯EI	高台径 8.4	明褐色	0.1～3.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		134	黒色土器	高台杯	15.5 5.85	暗黄褐色	1.0	良好	内面　ヘラミガキ 外面　ヘラミガキ・ヨコナデ	内面に暗文あり
		135	磁器	碗	高台径 5.9	オリーブ色		良好	ヨコナデ・ヘラケズリ 内外面に釉・高台際～高台内露胎	越州窯青磁
QF43	SD108	136	須恵器	蓋EI	17.8 2.7	白灰色	0.5	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヘラケズリ・ヨコナデ	
QF58	SD097	137	土師器	高台杯FII？	高台径 7.8	内面　橙褐色 外面　橙～黒灰色		普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
QF59	SD132	138	須恵器	皿BII	(14.5) (1.65)	灰色	0.1～3.0	良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		139	土師器	皿AIV	13.8 2.35	明褐色	0.1～1.0	良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	外面一部スス

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
QF59	SD132	140	土師器	高台杯GⅠ	高台径 8.7	明褐色		良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		141	〃	高台杯CⅡ	14.5 5.6	明褐色	0.1～3.0	良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		142	〃	高台杯EⅠ	15.7 7.0	明褐色	0.1～3.5	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	外面一部スス
QF60	SB135	143	須恵器	蓋CⅠ	(14.8) 2.6	内面　灰色 外面　黄灰色		普通	内面　ヨコナデ 外面　ヘラケズリ・ヨコナデ	
QF59	SD134	144	須恵器	高台杯B	(16.4) 3.6	灰色	0.1～3.5	良好	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
QE57	SD112	145	土師器	高台皿A	(12.1) 1.8	明黄橙色		良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		146	〃	高台皿A	(13.0) 2.3	明黄褐色		良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		147	〃	高台皿A	(12.5) 3.0	明～黄褐色	1.0～3.0	良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		148	〃	脚付皿B	14.1	3.0	明褐色	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ケズリ	
		149	〃	杯E？	(11.7) 2.8	明黄褐色		普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		150	〃	杯E	11.7 2.8	明褐色	1.0～3.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	口縁端部スス付着
		151	〃	杯E	11.9 3.15	黄褐色	0.5～2.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		152	〃	杯E	11.4 3.2	明褐色	1.0～2.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		153	〃	杯FⅡ	11.4 2.45	明褐色		普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		154	〃	杯E	(11.6) 2.7	黄褐色	0.5	良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		155	〃	杯E	11.5 2.75	黄～明褐色		良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		156	〃	杯E	11.6 2.9	黄褐色		普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		157	〃	杯E	(11.6) 2.6	明褐色		普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		158	〃	杯E	(11.3) 2.9	黄褐色・黒色		良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		159	〃	杯E？	(10.8) 3.25	明黄褐色		普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		160	〃	高台杯GⅢ	(11.6) 4.3	明褐色		普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		161	〃	高台杯GⅢ	(11.6) 4.05	明黄褐色		良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		162	〃	高台杯GⅢ	(12.2) 4.7	明黄橙色	0.5～1.0	普通	不明	
		163	〃	高台杯GⅢ	(12.1) 7.4	明褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		164	〃	高台杯GⅢ	(13.6) 6.1	明褐色		普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		165	〃	高台杯GⅢ	(12.0) 4.6	黄褐色	0.5	普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		166	〃	高台杯GⅢ	(12.1) 4.4	褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		167	〃	高台杯GⅢ	12.45 4.75	明褐色		良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		168	〃	高台杯GⅢ	(11.8) 5.0	明～黄褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		169	〃	高台杯GⅢ	12.3 4.85	灰～明褐色	1.0	普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		170	〃	高台杯GⅡ	(13.6) 4.7	明褐色	0.5	良好	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		171	〃	高台杯GⅠ	(15.0) 6.1	明～暗灰褐色		普通	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		172	〃	高台杯GⅡ	13.75 6.45	明橙～黄褐色	1.0～2.0	やや不良	内外面　ナデ・ヨコナデ	
		173	〃	高台杯GⅠ	(15.7) 7.2	明黄褐色		普通	内面　ナデ・タタキ？ 外面　ヘラケズリ後ヨコナデ	
		174	〃	鉢Ⅰ？	(21.4)	明褐色	1.0～3.0	良好	内外面　ヨコナデ	175と同一個体か

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
QE57	SD112	175	土師器	鉢Ⅰ		明褐色	1.0～3.0	良好	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヘラケズリ後ナデ・ヘラケズリ	
QE49	SX125	176	須恵器	高台杯DⅢ	高台径 7.7	灰色	0.1～3.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		177	土師器	ⅢBⅡ	9.8 1.25	明白褐色		良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		178	〃	ⅢAⅣ	13.5 2.1	明褐色	0.1～1.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		179	〃	ⅢAⅢ	16.0 2.45	明褐色	0.1～3.0	良好	内面　ヘラミガキ 外面　ヘラケズリ	
		180	〃	杯FⅡ	11.2 2.7	褐色	0.1～4.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		181	〃	杯FⅠ	11.5 3.25	明褐色	0.1～1.5	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		182	〃	杯CⅠ	15.4 3.5	明褐色		良好	内外面　ヨコナデ	
		183	〃	杯B	11.6 3.6	明褐色	0.1～3.0	良好	内外面　ヨコナデ	
		184	〃	杯B	12.4 3.9	暗褐色	0.1～2.0	良好	内外面　ヨコナデ	
		185	〃	高台杯EⅡ	12.0 6.1	灰褐色		良好	内外面　ヨコナデ	
		186	〃	高台杯EⅠ？	高台径 8.2	明褐色	0.5～1.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
QE53	SD112	187	土師器	高台皿A	12.0 2.0	乳橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
		188	〃	高台皿A	12.6 2.45	橙褐色	0.5～1.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		189	〃	脚付皿A	13.8 2.0	白橙褐色	0.5～1.0	普通	内面　ヨコナデ 外面　ナデ	底部外面に「十」ヘラ記号
		190	〃	杯E？	11.2 2.9	乳橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
QE42	SD112	191	土師器	杯E	11.4 3.2	乳橙褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ	
QE53	SD112	192	土師器	杯FⅠ	11.6 2.9	乳橙褐色	1.0～2.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		193	〃	高台杯FⅡ	11.4 4.95	乳橙褐色	1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		194	〃	高台杯GⅠ？	高台径 8.6	乳橙褐色	0.1～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		195	〃	高台杯FⅡ	12.0 5.15	乳橙褐色		普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
QE42	SD112	196	土師器	高台杯FⅡ	11.9 4.6	乳橙褐色	0.1～1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
QE52	SB116	197	土師器	ⅢBⅡ	10.1 1.5	乳橙褐色	0.5～1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		198	〃	ⅢBⅡ	10.1 1.6	乳橙褐色		普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		199	〃	蓋A	(13.4)	乳橙褐色		普通	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		200	須恵器	蓋DⅡ？	(15.0)	暗灰色	0.5～1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		201	〃	蓋G	つまみ径 5.2	明白色	0.5～1.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		202	〃	高台杯D	高台径 8.2	暗灰色	0.5	普通	内外面　ヨコナデ	
QC61	SX123	203	須恵器	蓋EⅢ	12.9 2.2	内面　暗灰色 外面　明灰色	0.1～2.0	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		204	〃	蓋	(14.8)	暗灰色	0.5	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヘラケズリ後ヨコナデ・ヨコナデ	
		205	〃	壺E	10.6	暗灰色	0.5	普通	内外面　ヨコナデ	
		206	〃	鉢AⅡ？	12.1	明褐色	0.1～2.0	良好	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	外面一部スス付着
		207	土師器	杯B	(12.5) 2.55	明褐色	0.1～3.0	良好	内外面　ヨコナデ	
		208	〃	杯B	12.4 3.5	明褐色	0.1～2.0	良好	内外面　ヨコナデ	
		209	〃	杯B	13.1 3.2	明褐色	0.1～3.0	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
QC61	SX123	210	土師器	杯AII	12.05 3.6	明褐色	0.1～1.5	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		211	〃	杯AII	11.8 3.6	明褐色	0.1～2.0	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		212	〃	杯B	12.8 3.45	橙褐色	0.5	普通	内外面　ヨコナデ	
		213	〃	杯B	12.8 3.6	明褐色	0.1～2.5	良好	内外面　ヨコナデ	
		214	〃	杯DI	16.0 4.05	明褐色	0.1～1.5	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		215	〃	高台杯DI？	高台径 9.6	乳橙褐色		普通	内面　ヨコナデ 外面　ヘラケズリ・ヨコナデ	
		216	〃	蓋BII	18.0 1.5	明褐色	0.1～1.5	良好	内外面　ヨコナデ	
		217	〃	IIIAIII	16.2 1.7	明褐色	0.1～2.0	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ナデ	
		218	〃	IIIAIII	16.4 2.1	明褐色	0.1～3.0	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
	SX121	219	須恵器	蓋	(12.8)	暗灰色	0.5～1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		220	土師器	高台杯EI	高台径 8.9	乳橙褐色	0.3	普通	内外面　ヨコナデ	
		221	〃	高台杯DII？	高台径 7.3	乳橙褐色	0.3	普通	内面　ヨコナデ 外面　ナデ	
	SD119	222	土師器	高台杯FII	12.2 4.5	乳橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ	
		223	〃	高台杯FII	高台径 7.9	明褐色		良好	内面　不明 外面　ヨコナデ	
	SD127	224	須恵器	壺G	(8.0)	灰色	0.1～1.0	良好	内面　ヨコナデ 外面　カキ目調整	
		225	〃	高台杯C？	高台径 (9.8)	黄灰色～灰白色		普通	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
	SX124	226	土師器	IIIAIII	16.2 1.75	明褐色		良好	内外面　ヨコナデ	
	SD120	227	土師器	杯FI	(11.2) 3.0	明橙～明黄褐色		やや不良	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		228	〃	高台IIIA	13.0 2.1	白褐色	0.1～3.0	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
	SD128	229	須恵器	蓋EII？	(14.0)	灰紫色	0.1～3.0	良好	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヘラケズリ・ナデ	
		230	土師器	甕BI	(26.9)	内面　明褐色 外面　茶褐色	0.1～2.5	良好	内面　ヘラケズリ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ハケ目調整	
久地井B	SK314	231	須恵器	蓋EIII	(13.8) (2.55)	灰～暗灰色	0.5	良好	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ・カキ目	
		232	〃	蓋EIII	(13.8) 3.2	明褐色	1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		233	〃	蓋EIII	(13.9) 2.7	明灰色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	内面天井部に『十』ヘラ記号
		234	〃	蓋EI	16.1 2.8	白灰色	1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面口縁部　ヨコナデ・天井部　不明	
		235	〃	蓋DI	(17.4) 4.3	乳褐色～乳灰色	0.5～2.0	普通	内面～外面下部　ヨコナデ後ナデ 天井部　ヘラケズリ・つまみ　ヨコナデ	
		236	〃	高台杯EII	(12.8) 3.9	青灰色		良好	内面　ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ 外面　ヘラケズリ	
		237	〃	高台杯EII？	高台径 6.8	明灰色	1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ナデ・ヨコナデ・ヘラケズリ	
		238	〃	壺BI？	高台径 11.4	内面　黄白灰色 外面　茶灰色	0.5～1.0	普通	内面　ヨコナデ 外面　ヘラケズリ・ヨコナデ	
		239	〃	杯G	(7.8) 4.8	緑白灰色		良好	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヘラケズリ・ナデ	
		240	〃	杯E	11.6 4.1	明灰色	1.0～3.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		241	〃	杯E	(11.8) 4.15	褐灰色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		242	〃	杯E	(12.1) 3.5	黄灰色 一部黒灰色	0.5～1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		243	〃	杯E	12.8 3.4	明灰色	3.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		244	〃	杯E	(12.7) 4.05	内面　明灰色 外面　黄灰色	1.0	普通	不明	

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
久泡井B	SK314	245	須恵器	杯E	13.0 4.0	赤褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		246	〃	杯E	(12.2) 4.0	黄灰～緑灰色	0.5	普通	内面　ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ	
		247	〃	杯E	(12.7) 4.65	内面　褐灰色 外面明灰～褐灰色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		248	〃	皿CⅠ	(15.0) 2.0	黄灰～明茶灰色	0.5～1.0	普通	内面　ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ・ナデ	
		249	〃	皿CⅠ	(16.8) 1.75	灰色	0.5～2.0	良好	内面　ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ・ナデ	
		250	〃	皿CⅠ	17.2 2.15	白灰色	1.0		内外面　ヨコナデ・ナデ	
		251	〃	皿CⅠ	(17.0) 2.0	褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		252	〃	皿DⅡ	(18.5) 2.9	暗緑灰～暗灰色	0.5～2.0	良好	内外面　ヨコナデ	
		253	〃	鉢B	(32.4) 12.5	明灰色	1.0～2.0	普通	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		254	〃	鉢AⅠ	(22.6)	灰色 (一部青灰色)	0.5～2.0	良好	内外面　ヨコナデ	
		255	〃	壺F	9.05	内面　明灰色 外面　褐灰色	1.0	普通	内面 ヨコナデ・タタキ目,外面 ヨコナデ・タタキ目・タタキ後ナデ消し	三耳壺
		256	土師器	蓋BⅡ	(17.2) 3.35	明褐～明橙色	0.5～3.0	やや不良	内外面　ヨコナデ後ナデ	
		257	〃	高台杯BⅡ	(15.0) 4.95	内面　白黄色 外面　明橙褐色		やや不良	内外面　ヨコナデ後ナデ	
		258	〃	高台杯CⅠ	15.6 6.8	乳黄～乳橙色	0.5～2.0	やや不良	内外面　ナデ	
		259	〃	杯	(15.8) 3.15	白橙褐色	0.5～1.0	やや不良	内外面　ナデ	
		260	〃	杯DⅠ	(15.6) 3.6	内面　白褐色 外面　明橙褐色	0.5～1.0	やや不良	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		261	〃	杯DⅠ	16.2 4.8	乳明褐色	4.0	普通	内面　不明 外面　ヨコナデ	
		262	〃	杯DⅡ	10.6 3.5	内面　黄褐色 外面　橙褐色	0.5～1.0	普通	内面　ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
		263	〃	杯DⅡ	12.2 3.35	明褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		264	〃	杯DⅡ	(12.3) 3.4	明褐色	1.0～3.0	普通	不明	
		265	〃	杯DⅡ？	(13.0) 3.4	明褐色		普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		266	〃	杯B	13.5 3.5	明褐色	1.0	普通	不明	
		267	〃	杯B	(11.5) 3.4	内面　明褐色 外面　橙褐色	0.5～1.0	普通	内面　ナデ 外面　ナデ・ヨコナデ	
		268	〃	杯B	(12.0) 3.15	明褐色	2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		269	〃	杯AⅡ	(13.2) 3.9	明黄～明橙褐色		普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ後ナデ・ナデ	
		270	〃	杯AⅡ	(13.6) 4.25	乳橙褐色	1.0	普通	内面　ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ・ナデ	
		271	〃	杯AⅡ	(12.6) 3.5	灰褐～明黄褐色	0.1～2.0	普通	内外面　ヨコナデ後ナデ	
		272	〃	皿AⅢ	(16.6) 2.3	内面　明褐色 外面　橙褐色		やや不良	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		273	〃	皿AⅡ	(17.8) 2.1	内面　明褐色 外面　明橙褐色	0.5～1.0	普通	内面　ナデ 外面　ヨコナデ・ナデ	
		274	〃	皿AⅡ	(17.6) 2.15	白橙褐色	0.5～2.0	やや不良	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		275	〃	皿AⅡ	(18.0) 2.0	内面　褐橙色 外面　明褐色		やや不良	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ナデ	
		276	〃	皿AⅠ	(19.2) 1.95	明橙褐色	0.5～1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		277	〃	甕BⅢ	(20.0)	明黄褐色	0.5～2.0	普通	内面　ヨコナデ・ヘラケズリ 外面　ヨコナデ・ハケ目？	
		278	〃	甕BⅡ	(22.6)	内面　明黄褐色 外面　明橙褐色	0.5～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ハケ目？ 内面　ヘラケズリ	
		279	〃	甕BⅡ	(24.0)	内面　乳黄色 外面　明褐色	0.5～1.0	やや不良	内面　ヨコナデ？・ヘラケズリ 外面　ヨコナデ？・ハケ目？	

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
久池井B	SK315	280	須恵器	蓋EⅡ?	(13.4)	明灰色	0.5	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		281	〃	蓋DⅠ	(17.4)	青灰色	0.5～2.0	普通	内面 ヨコナデ 外面 ヘラケズリ・ヨコナデ	
		282	〃	蓋DⅠ	(16.6) 3.9	内面 灰色 外面 明黄灰色	0.5～4.0	普通	内面 ケズリ後ナデ 外面ヨコナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ	
		283	〃	高台杯EⅡ	12.3 4.4	白灰色		普通	内外面 ナデ・ヨコナデ	
		284	〃	高台杯EⅡ	(13.0) 5.0	青灰色	1.0～5.0	普通	内面 ヨコナデ・ナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	内面底部にヘラ記号
		285	〃	高台杯DⅡ?	高台径 8.0	青灰色	1.0～3.0	普通	内面 不明 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		286	〃	杯E	(11.8) 3.9	明橙褐色	0.5～1.0	普通	内面 ヨコナデ後ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
		287	〃	杯D	13.5 4.3	明灰色～乳灰色	1.0～3.0	普通	調整不明	
		288	〃	杯E	13.0 4.3	白灰色	0.5	普通	内面 ヨコナデ・ナデ 外面 ヨコナデ	
		289	〃	皿CⅠ	16.8 2.2	白灰色	0.5	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
		290	〃	皿BⅠ	(16.6) 1.8	明灰色	0.5～3.0	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
		291	〃	皿CⅠ	(17.0) 2.2	内面 暗灰色 外面 明黄褐色	0.5	普通	内面 ヨコナデ後ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
		292	〃	蓋F	(12.8)	明灰色	1.0	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		293	〃	壺H	(9.0) 7.7	青灰色	1.0～2.0	普通	内外面 ヨコナデ	
		294	〃	鉢AⅡ	23.6 13.9	内面 白灰色 外面 黄灰色	1.0～5.0	普通	内面 ヨコナデ 外面 ヘラケズリ?	
		295	土師器	杯B	(12.4) 3.4	褐色	1.0～2.0	普通	内外面 ナデ・ヨコナデ	
		296	〃	杯B	(12.4) 3.5	乳褐色	1.0	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		297	〃	杯B	(12.2) 3.7	明橙褐色	1.0～2.0	普通	内外面 ヨコナデ	
		298	〃	杯B	(13.3) 3.5	乳褐色	1.0	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
		299	〃	杯B	(13.2) 3.7	白褐色	1.0～5.0	普通	調整不明	
		300	〃	杯B	(13.6) 4.3	明褐色	0.5～2.0	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
		301	〃	杯CⅠ	(14.3) 2.8	乳褐色		普通	内外面 ナデ・ヨコナデ	
		302	〃	杯DⅡ	(12.0) 3.75	乳褐色	1.0～2.0	普通	調整不明	
		303	〃	杯DⅠ	(16.3) 4.8	乳褐色	1.0	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ・底部 不明	
		304	〃	皿AⅢ	(16.5) 2.2	明褐色	1.0～4.0	普通	内外面 ナデ・ヨコナデ	
		305	〃	皿AⅡ	18.0 2.1	明黄褐色	1.0～5.0	普通	内面 ヨコナデ後ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
		306	〃	皿AⅡ	17.2 1.9	白褐色	1.0～2.0	普通	内外面 ナデ	
		307	〃	皿AⅢ	16.3 2.25	乳褐色	1.0	普通	内外面 ナデ・ヨコナデ	
		308	〃	皿AⅡ	(17.8) 2.35	褐色	1.0～5.0	普通	内外面 ナデ・ヨコナデ	
		309	〃	蓋BⅠ	(21.0)	乳褐色		普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		310	〃	壺BⅡ	(22.8)	乳褐色		普通	口縁部 ヨコナデ 内面 ヘラケズリ?,外面 ハケ目?	
		311	〃	壺BⅠ	(25.8)	明黄褐色	1.0～2.0	普通	口縁部 ヨコナデ 内面 ケズリ?,外面 不明	
		312	〃	壺BⅠ	(25.9)	明褐色	1.0～2.0	普通	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ハケ目?	
	SP369	313	須恵器	蓋A	9.6 3.0	暗灰色	1.0～2.0	普通	内面 ヨコナデ後ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
		314	〃	杯A	8.3 2.5	内面 青灰色 外面 明灰色	0.5～2.0	普通	内面 ヨコナデ後ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ナデ	外面底部にヘラ記号

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
久地井B	SP369	315	須恵器	蓋A	10.2 3.7	明黄褐色		不良	内面　ヨコナデ後ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	外面天井部にヘラ記号
		316	〃	杯A	9.2 3.1	黄褐色～黄灰色	0.5～1.0	不良	内外面　ナデ・ヨコナデ	外面底部にヘラ記号
		317	土師器	杯FII	11.2 2.0	明黄褐色		不良	内外面　ナデ	
		318	〃	杯FII	11.0 2.5	明黄～明橙褐色		やや不良	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		319	〃	杯FII	11.6 2.5	内面　明黄褐色 外面　明橙褐色		やや不良	内外面　ナデ	
		320	〃	杯FII	12.2 2.3	内面　明黄褐色 外面　明褐色		やや不良	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ	底部(一部)に黒斑
		321	〃	杯FI	11.7 3.3	明黄褐色	0.5～1.0	普通	内面　ナデ 外面　ヨコナデ・ナデ	
		322	〃	杯FI	11.8 3.8	明橙～明黄褐色	1.0～2.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ナデ・板目痕あり	
		323	〃	高台皿A	11.8 2.4	内面　暗褐色 外面　黄褐色	1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		324	〃	高台皿A	12.4 2.25	明黄褐色		普通	内外面　ナデ	
		325	黒色土器	高台杯	15.0 6.5	暗茶褐色		普通	内面　ヘラミガキ，外面　ヘラミガキ，カキ目，ヘラケズリ，ナデ	
	SP372	326	土師器	杯FI	12.8 3.6	内面　明黄褐色 外面　明橙褐色		やや不良	内面　ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
	SD311	327	土師器	杯B	(12.0) (3.2)	内面　黄褐色 外面　明橙褐色	0.5	やや不良	内面　ナデ 外面　ヨコナデ・ナデ	
	SD360	328	須恵器	高杯A	13.9 12.2	内面　暗灰色 外面　灰～黄灰色		良好	杯の内外面　ナデ，ヨコナデ，カキ目 脚の内外面　カキメ，ヨコナデ，しぼり痕	
	SE359	329	黒色土器	高台杯	14.5 6.8	内面　暗褐色 外面　黄褐色	1.0～4.0	普通	内面　ヘラミガキ 外面　ヘラミガキ・ヨコナデ	
	SD329	330	須恵器	杯E	12.4 3.9	内面　灰～白灰色 外面黄灰～白灰色		普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
	SD343	331	須恵器	蓋CII	14.6 2.45	内面黄灰～茶灰色 外面紫灰～黄灰色		普通	内面　ヨコナデ後ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	
	SD330	332	須恵器	杯CII？	(16.0) 3.4	暗黄灰色	0.5～2.0	普通	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・カキ目	
	SE302	333	須恵器	高台杯DI	17.2 5.9	青灰色	1.0～3.0	普通	内外面　ヨコナデ	底部外面に「大」ヘラ描文字
	SK313	334	須恵器	蓋EII？	(16.2)	黄灰色	0.5	普通	内面　ヨコナデ後ナデ・ヘラケズリ 外面　ヘラケズリ・ナデ	
		335	〃	高台杯EII	(12.6) (5.1)	明黄灰色～白灰色	0.5～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		336	〃	高台杯EII	12.6 4.35	白灰色 鉄分付着	1.5	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		337	〃	皿CI	(16.6) 0.95	明黄灰色		普通	内外面　ヨコナデ	
	SK318	338	須恵器	蓋DII	(13.4) 3.6	内面　明青灰色 外面　青灰色	0.5～1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	
		339	〃	高台杯EII	(12.2) 4.5	明灰～白灰色		普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	
		340	〃	高台杯DII	(15.2) 4.9	白灰～黄白色		普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ナデ	
		341	〃	皿ACI	(17.2)	黄灰色	0.5～2.0	普通	内外面 ヨコナデ・ロクロナデ後ナデ	
		342	土師器	鉢II	最大径 14.1	内面　明褐色 外面明赤～茶褐色	1.0～3.0	不良	内面　ハケ目？ 外面　ヘラケズリ・ナデ？	内面一部スス付着
QA10	埋土	343	須恵器	蓋DI？	(17.4)	青灰色～灰色		不良	内面　調整不明 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		344	〃	高台杯DIII	(11.0) 4.5	暗青灰色		普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		345	〃	高台杯EII	12.8 4.7	青灰色	1.0～3.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		346	〃	高台杯EII	(13.4) 4.6	暗青灰色	0.5～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		347	〃	杯CII	(14.2) 3.5	淡褐色	1.0～3.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		348	〃	皿BI	(17.4) 2.2	灰色 (口縁部暗灰色)	1.0～2.0	やや不良	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		349	〃	杯CI	(21.8)	青灰色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	

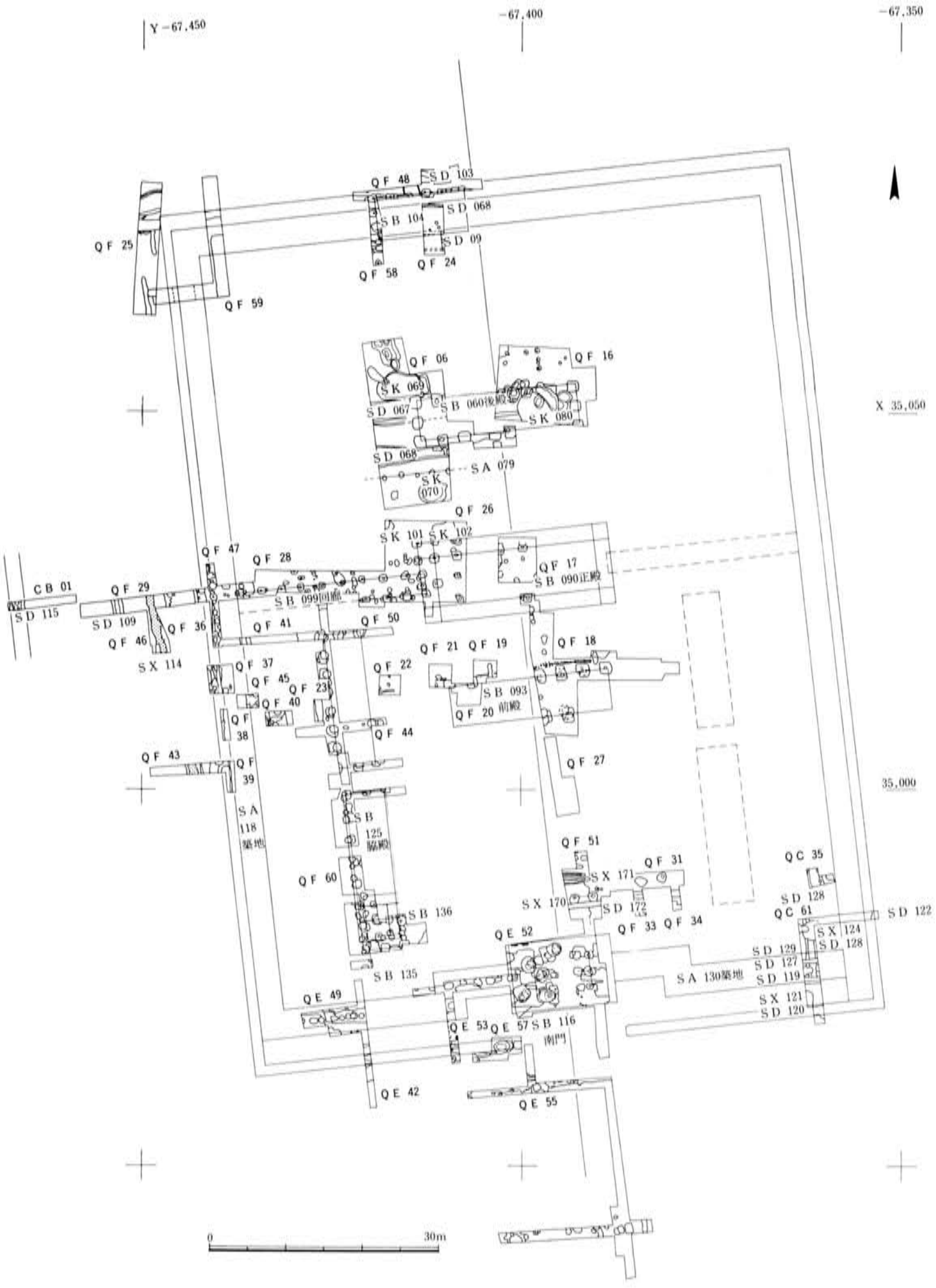
発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
QA10	埋土	350	須恵器	硯	脚部径 (18.0)	黒灰色，黒，灰色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	円面硯脚部
		351	〃	鉢AI	(24.0) 17.7	淡青灰色	1.0～3.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヘラケズリ	
		352	〃	甕C	(42.4)	灰茶色	1.0	普通	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・櫛描き波状文あり	
		353	土師器	高台杯GII	14.0 5.8	黄褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ，底部に板目痕	
		354	〃	高台杯	高台径 (7.4)	橙褐色	1.0～6.0	普通	調整不明	
QA13	埋土	355	土師器	杯B	(12.4) 3.2	橙褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		356	〃	杯B	(12.0) 3.0	橙褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		357	〃	杯B	(13.0) 3.4	淡橙褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		358	〃	高台杯CII	(14.5) 5.3	橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ・ナデ 底部に板目痕	
		359	〃	高台杯CII	(15.2) 5.8	橙褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		360	〃	皿AIV	(14.4) 1.7	淡橙褐色		普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		361	〃	皿AIII	15.8 1.7	淡褐色	1.0～4.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		362	〃	皿AIII	(17.4) 1.5	淡褐色		普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
QB12	埋土	363	須恵器	蓋CI	16.3 3.3	灰色			内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		364	〃	皿CI	19.0 2.4	灰色	1.0～2.0	やや不良	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラミガキ	
		365	〃	壺C	高台径 15.0	黄灰(青)色	1.0～2.0	不良	内面　ヨコナデ・ナデ　外面　ヨコナデ・ヘラケズリ，頸部にキザミ目	
		366	黒色土器	高台杯？	(14.5) 5.2	内面　黒色 外面　淡褐色		普通	内面　ヘラミガキ 外面ヨコナデ・ヘラケズリ	
		367	土師器	杯AI	17.9 5.9	内面　淡橙褐色 外面　淡褐色	1.0～4.0	良好	内面　ヨコナデ,ヘラケズリ後ヨコナデ 外面　ヘラケズリ後ヨコナデ	
		368	〃	高台杯EI	高台径 8.6	橙褐色		良好	内外面　ヨコナデ，底部に板目痕	
		369	〃	盤A	(32.2) (2.0)	橙褐色		良好	内面 ヘラミガキ・ヨコナデ後ヘラミガキ 外面 ヨコナデ後ヘラミガキ・ヘラケズリ	
QB15	埋土	370	土師器	杯CII	13.4 3.2	淡橙～黄褐色 黒灰色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ 底部内面　不明	
		371	〃	杯CII	12.4 2.7	灰～黄～淡橙褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ 底部に板目痕	
		372	〃	高台杯CII？	高台径 7.4	橙褐色	0.5～3.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		373	〃	杯B	(12.4) 3.2	内面　淡橙褐色 外面　黄褐色	1.0～3.0	普通	調整不明	
		374	〃	杯B	(13.3) 3.6	淡橙褐色 一部黒褐色	0.5～3.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ 底部に板目痕	
		375	〃	皿AIII	15.5 2.3	橙～淡橙褐色	1.0～2.0	普通	調整不明	
		376	〃	高台皿CI	(15.6) 3.2	淡橙褐色	0.5～2.0	普通	調整不明	
		377	〃	皿AI？	(19.7) 1.6	橙～淡褐色		普通	内外面　ヨコナデ	外面スス付着
QD03	埋土	378	須恵器	蓋EIII	(10.8) 1.6	赤褐色	1.0	良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		379	〃	蓋EIII	(12.2)	灰色	0.5～1.0	良好	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		380	〃	蓋EIII	(13.9) 2.2	灰色		良好	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		381	〃	高台杯DII	14.9 6.0	明灰色	0.5～1.0	良好	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		382	〃	高台杯DII	(15.8) 6.0	灰色		良好	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		383	〃	高台杯DIII？	高台径 7.8	青灰色	0.5～2.0	良好	内外面　ヨコナデ	
		384	〃	高台杯EI	高台径 10.9	青灰色	1.0～2.0	良好	内外面　ヨコナデ	

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
QD03	埋土	385	須恵器	高台杯EⅠ	高台径 10.3	明青灰色	1.0	良好	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		386	〃	皿DⅠ	(21.8) 3.6	灰色		良好	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		387	土師器	杯AⅡ？	13.2 4.0	黄褐色	1.0～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		388	〃	杯DⅠ	15.7 4.4	黄橙色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		389	〃	高台杯FⅠ	14.4 6.2	黄灰色	0.5～2.0	普通	内外面　ヨコナデ	
		390	〃	高台杯FⅡ？	高台径 7.9	黄褐色		普通		
		391	〃	高台杯D	高台径 9.5	黄褐色	0.5～2.0	普通	内外面　ヨコナデ・ナデ	
		392	〃	高台杯D	高台径 (10.5)	橙色		普通	内外面　ヨコナデ	
		393	〃	高台杯D	高台径 (13.9)	黄褐色	1.0～2.0	普通	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
DB07	SD141	394	須恵器	蓋	10.8 1.2	内面　灰色 外面　暗灰色	0.5～1.0	良好	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		395	〃	蓋BⅠ？	(13.8)	明青灰色	0.5～1.0	良好	内　面ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		396	〃	蓋CⅠ？	(13.6)	明灰色 (外面一部青灰色)	0.5	良好	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		397	〃	蓋		青灰色	1.0～2.0	良好	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	
		398	〃	蓋BⅠ	(15.9)	内面　暗褐色 外面　褐色	0.5	良好	内外面　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ	
		399	〃	高台杯	高台径 8.7	内面　青灰色 外面　暗灰色	0.5～2.0	良好	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ後ヨコナデ	
		400	〃	壺A	肩部径 16.1	暗黄灰色 (頸部一部暗灰色)	1.0～2.0	良好	内面　ヨコナデ・タタキ後ナデ・ナデ 外面　ヨコナデ・タタキ後ナデ・ヘラケズリ	
		401	〃	甕A	(19.3)	青灰色	0.5～2.0	良好	内外面　ヨコナデ	
		402	〃	甕B	(21.4)	暗青灰色		普通	内外面ヨコナデ	
		403	土師器	皿BⅠ	(15.7) 2.3	明黄褐色	0.～1.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ，外面ヨコナデ・ヘラケズリ，底部に板目痕	
		404	〃	高台杯BⅠ？	高台径 12.2	黄褐色 (外面一部黒色)	0.5～2.0	普通	内面　ヨコナデ，外面　ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラケズリ後ヨコナデ	高台杯Aか？
		405	〃	高台杯BⅠ？	高台径 12.6	黄褐色	0.5～1.0	普通	内面　ナデ？ 外面　ヘラケズリ・ヨコナデ？	高台杯Aか？
		406	〃	高台杯A	(16.9) 4.45	明褐色	1.0	普通	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	
整座	SK250	407	須恵器	蓋DⅡ	(15.0) 3.9	青灰色	1.0～3.0	普通	内面　ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ，外面　ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラケズリ後ヨコナデ	
		408	〃	蓋DⅡ	(14.8) 4.2	明灰色	1.0～2.8	普通	口縁部　ヨコナデ・内面　ヨコナデ後ナデ 天井部　ヘラケズリ・ヘラケズリ後ヨコナデ	
		409	〃	蓋DⅡ？	(14.6)	明灰色		普通	口縁部　ヨコナデ 内面　ヨコナデ後ナデ	天井部外面に「田」墨書
		410	〃	高台杯C	(15.0) 5.6	茶灰色	1.0～2.0	不良	内面　ナデ・ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
		411	〃	高台杯EⅡ	(12.0) 4.5	暗灰色	1.0	普通	内面　ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ	
		412	〃	高台杯C	高台径 9.8	青灰色	1.0～3.0	普通	内外面　ヨコナデ	底部外面に墨書
		413	〃	皿CⅠ	(16.5) 1.7	青灰色	1.0～2.0	普通	内面　ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ	
		414	〃	壺D	(17.6) (29.1)	青灰色	1.0～2.0	普通	内面　タタキ後ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		415	土師器	蓋		明黄褐色	1.0～2.0	普通	内面　ヨコナデ 外面　ヘラケズリ，つまみヨコナデ	
		416	〃	高台杯DⅠ？	高台径 (9.0)	橙褐色	1.0～5.0	普通	内面　ヨコナデ後ナデ 外面　ヘラケズリ・ヨコナデ	
	SD202	417	須恵器	蓋C？	(12.8) 2.2	内面　暗褐色 外面　暗灰色	1.0～3.0	普通	内面　ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		418	〃	高台杯A？	高台径 9.4	青灰色	1.0～2.0	普通	内面　ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ 外面　ヨコナデ	
	SD226	419	須恵器	蓋	(14.4)	明灰色	1.0	普通	口縁部　ヨコナデ，内面　ヨコナデ後ナデ，天井部　ヘラケズリ，ヨコナデ	

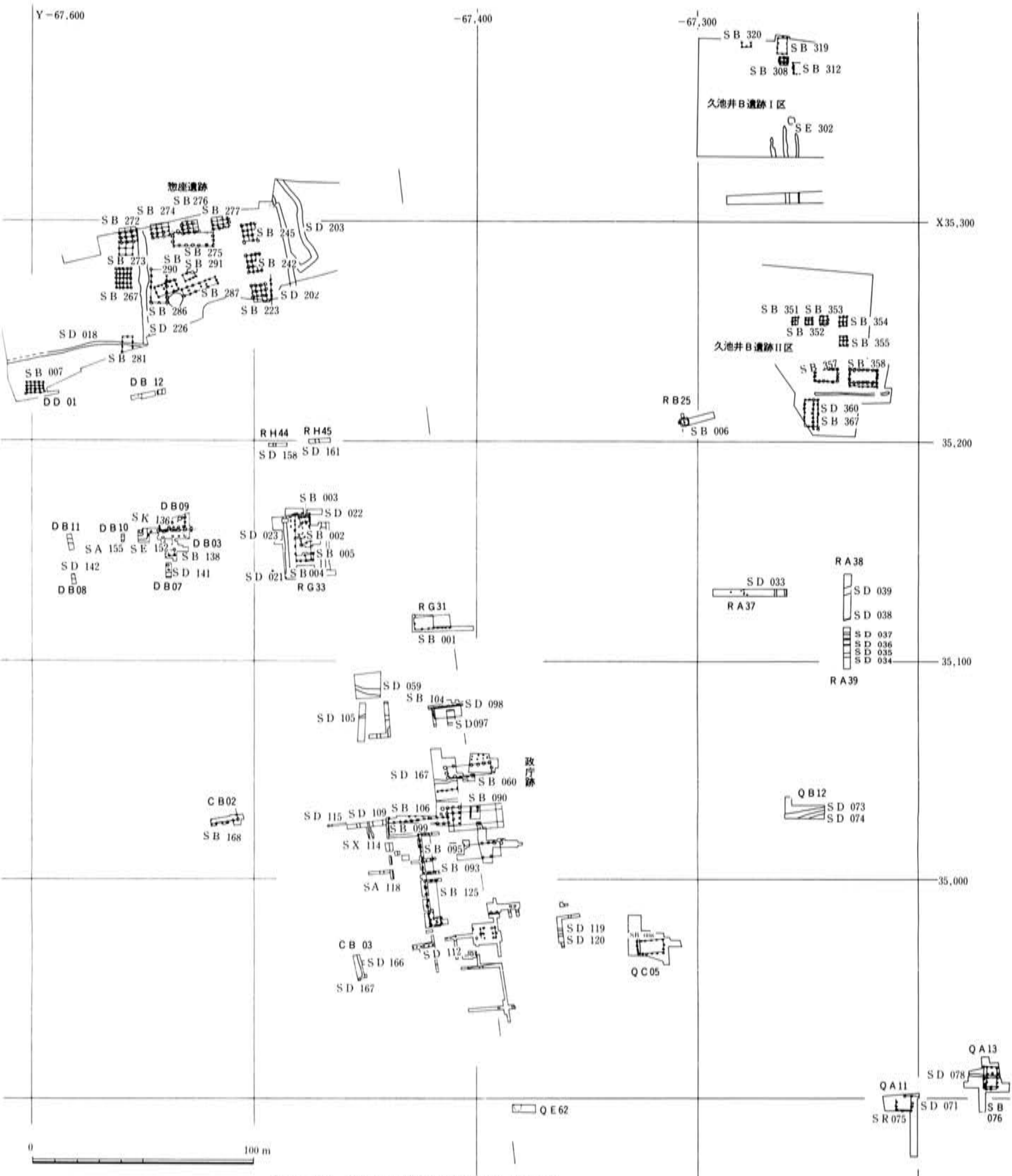
発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
整座	SD226	420	須恵器	高台杯	高台径 9.0	明灰色	1.0	普通	内外面 ヨコナデ・ナデ	
DB09	埋土	421	須恵器	蓋BII	(13.0)	灰褐色 口縁部 暗灰色	0.5～2.0	良好	内外面 ヨコナデ	
		422	〃	高台杯	高台径 (7.8)	明黄灰色		不良	内面 ヨコナデ 外面 調整不明	
	SE152	423	土師器	高台杯BI	16.8 6.1	橙褐色	1.0～2.0	普通	体部内外面 ヨコナデ？ 底部内面 ナデ 外面 ヘラケズリ？・ヨコナデ	
DD01	埋土	424	土師器	杯G	15.5 3.1	黄褐色		普通	内外面 ヨコナデ	
		425	〃	高台杯FI	15.0 6.2	橙色	1.0	普通	内外面 ヨコナデ	
NC05	埋土	426	須恵器	高台杯DIII	11.6 3.4	灰色	0.5～2.0	良好	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		427	〃	高台杯	高台径 10.8	青灰色	0.5～1.0	良好	内面 ナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		428	〃	高台杯	高台径 11.5	灰色	1.0	良好	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		429	〃	蓋BI	14.8 2.8	暗青色	1.0～2.0	不良	内面 ナデ・ヨコナデ 外面天井部 ヘラケズリ，つまみ ヨコナデ	
		430	〃	高台杯A	15.8 6.5	青灰色	1.0	良好	体部内面～高台外面までヨコナデ 底部内外面 ナデ	
		431	〃	杯B	(13.7) 4.1	灰色		良好	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		432	土師器	杯B	12.6 3.3	黄褐色	1.0	普通	内外面 ヨコナデ	
		433	〃	高台杯EI？	高台径 10.7	橙色	0.5～2.0	普通	内外面 ヨコナデ	
NC06	埋土	434	須恵器	蓋DII	15.7 4.2	灰色	1.0	良好	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	
NC08	埋土	435	須恵器	高台杯C	高台径 8.6	明青灰色	1.0	良好	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
ND02	埋土	436	土師器	高台杯B？	高台径 (7.0)	黄褐色	1.0～2.0	普通		
		437	〃	皿AIII	16.1 2.3	黄褐色	0.5～1.0	普通	内外面 ヨコナデ	
RG40	埋土	438	須恵器	蓋BII	(12.5) 2.7	明灰茶色	1.0～2.0	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		439	〃	蓋BI？	(16.1)	明青灰色	1.0～2.0	やや不良	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヘラケズリ・ヨコナデ	
RG15	埋土	440	須恵器	高台杯	高台径 11.0	灰白色	1.0	普通	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
RG33	埋土	441	土師器	高台皿A	10.9 2.0	淡赤茶色	0.5～1.0	良好	内外面 ヨコナデ	丹塗りの痕あり
		442	〃	高台皿B	12.8 3.3	灰茶色	0.5～1.0	やや不良	内外面 ヨコナデ	
		443	〃	杯B	13.3 3.5	黄・淡赤褐色	1.0	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ナデ	
	SD022	444	土師器	高台杯CII	14.4 6.6	内面 赤茶色 外面 淡赤茶色		良好	内外面 ヨコナデ	内外面丹塗りの痕あり
	SD021	445	土師器	高台杯BI	18.5 6.4	橙色	1.0	良好	内外面 ヨコナデ	底部にヘラ記号
RB25	埋土	446	須恵器	高台杯C	高台径 8.7	青灰色	0.5～1.0	良好	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	
		447	土師器	高台杯B？	高台径 9.6	黄褐色	1.0～2.0	普通	内外面 ヨコナデ	
RG32	埋土	448	土師器	高台皿A	11.4 2.2	黄褐色		普通	内外面 ヨコナデ	
RA39	SE063	449	磁器	蓋	1.6 1.6	淡緑黄色		良好	ヨコナデ	緑黄色釉
		450	〃	碗	高台径 7.4	淡灰白色		良好	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	白磁
		451	〃	碗	高台径 6.6	明灰緑色		良好	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	青磁
		452	〃	碗	高台径 6.1	淡緑色		良好	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・ヘラケズリ	青磁
CB03	SD166	453	土師器	皿C	8.9 1.3	黄褐色	0.5	普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ，底部 板目痕あり	糸切り離し
		454	〃	皿C	9.0 1.25	黄褐色		普通	内面 ナデ・ヨコナデ 外面 ヨコナデ，底部 板目痕あり	糸切り離し

発掘区	遺構	遺物番号	種別	形態分類	口径 器高	色調	含有砂粒	焼成	調整	備考
CB03	SD166	455	土師器	高台杯HII？	高台径 6.0	黄灰色		普通	内外面　ヨコナデ	
		456	〃	杯H	15.2 3.2	橙褐色 (外面底部黄褐色)	1.0～3.0	普通	内面　ヨコナデ・ナデ 外面　ヨコナデ，底部　板目痕あり	糸切り離し
		457	陶器	壺	底径 (10.4)	褐灰色 (外面底部一部赤褐色)	1.0～2.0	良好	外面体部　黒褐色の釉がかかる	鉄釉
	SD167	458	瓦質土器	鉢	底径 (10.8)	明黄褐色 (外面一部橙褐色)	1.0～3.0	普通	内面　ハケ目 外面　ナデ	擂鉢
		459	陶器	甕		褐色	0.5～2.0	普通	内外面　柿釉	
CB02	埋土	460	陶器	碗		暗緑色		良好	内外面　ヨコナデ	緑釉・胎は硬質
		461	磁器	碗		明灰黄緑色		良好	内外面　ヨコナデ	越州窯青磁
		462	〃	碗	底径 (5.1)	明灰黄緑色		良好	内外面　ヨコナデ	越州窯青磁 蛇目高台
S06	埋土	463	土師器	杯B	12.2 3.2	黄褐色	0.5～1.0	普通	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ・ヘラケズリ	
		464	〃	杯B	13.9 3.8	黄褐色	0.5～1.0	普通	内面　ヨコナデ 外面　ヨコナデ	
		465	〃	高台杯	底径 8.3	黄褐色	1.0	普通	内外面　ヨコナデ	

※ヨコナデはほとんどがロクロ挽きの痕跡である。



折り込み１．肥前国庁跡平面図（１/６００）
（佐賀県文化財調査報告書第78集「肥前国府跡Ⅲ」）



折り込み2　肥前国府跡検出遺構配置図（1/1800）
（佐賀県文化財調査報告書第78集「肥前国府跡Ⅲ」）

肥前国府跡空中写真

1．政庁跡南東隅
　ＱＣ地区61発掘区〈北から〉
2．政庁跡北西隅
　ＱＦ地区59発掘区〈北から〉

1．ＱＣ地区 61 発掘区
　ＳＡ 118 築地跡〈東から〉
2．ＱＥ地区 49 発掘区
　ＳＡ 118 築地跡〈北から〉
3．ＱＦ地区 45 発掘区
　ＳＡ 118 築地跡〈南から〉

PL. 4

1．ＱＦ地区 37 地区発掘区
　ＳＡ 118 築地跡〈南から〉
2．ＱＦ地区 59 発掘区
　ＳＡ 118 築地跡〈南から〉
3．ＱＦ地区 36・47 発掘区
　ＳＡ 118 築地跡〈北から〉
4．ＱＥ地区 52 発掘区
　ＳＡ 118 築地跡〈東から〉

1．ＱＥ地区 52 発掘区
南門跡（ＳＢ 116）〈北から〉

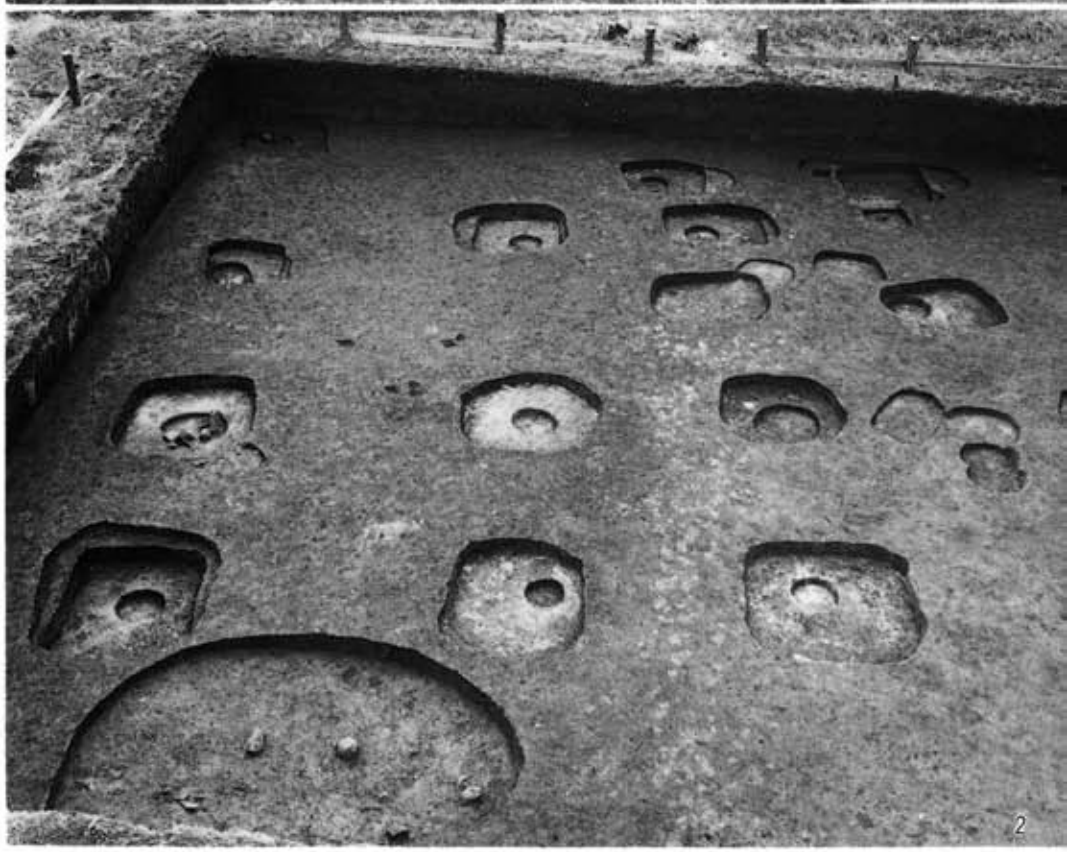
2．ＱＥ地区 52 発掘区
南門跡（ＳＢ 116）〈東から〉

3．ＱＥ地区 52 発掘区
西部礎石群〈東から〉

1．ＱＦ地区 18 発掘区
政庁前殿跡（ＳＢ 093）
〈南から〉

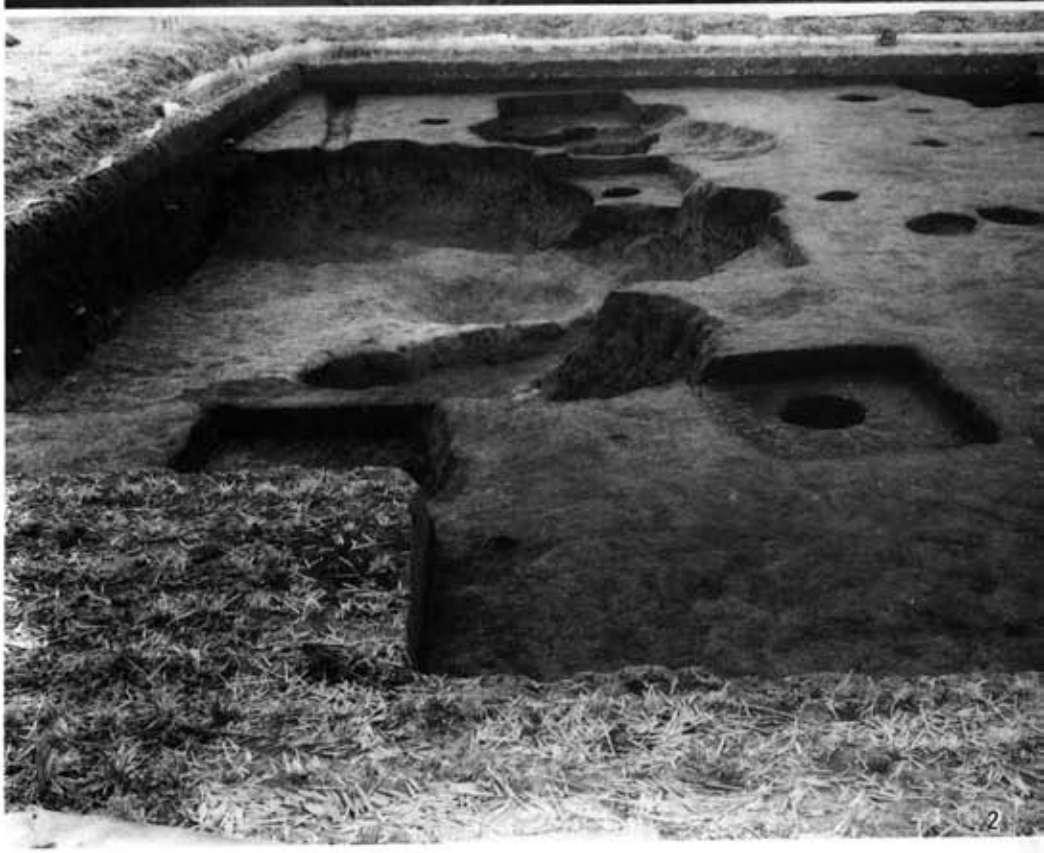
2．ＱＦ地区 18 発掘区
政庁前殿跡（ＳＢ 093）
〈西から〉

3．ＱＦ地区 19 発掘区
前殿雨落ち溝跡〈北から〉



1．ＱＦ地区 26 発掘区
政庁正殿跡（ＳＢ 090）・西側回廊跡（ＳＢ 099）〈東から〉
2．ＱＦ地区 26 発掘区
政庁正殿跡（ＳＢ 090）〈北から〉

1．ＱＦ地区 06 発掘区
　政庁後殿跡（ＳＢ 060）他〈南から〉
2．ＱＦ地区 06 発掘区
　政庁後殿跡（ＳＢ 060）〈西から〉



1．ＱＦ地区 16 発掘区
政庁後殿跡（ＳＢ 060）〈西から〉

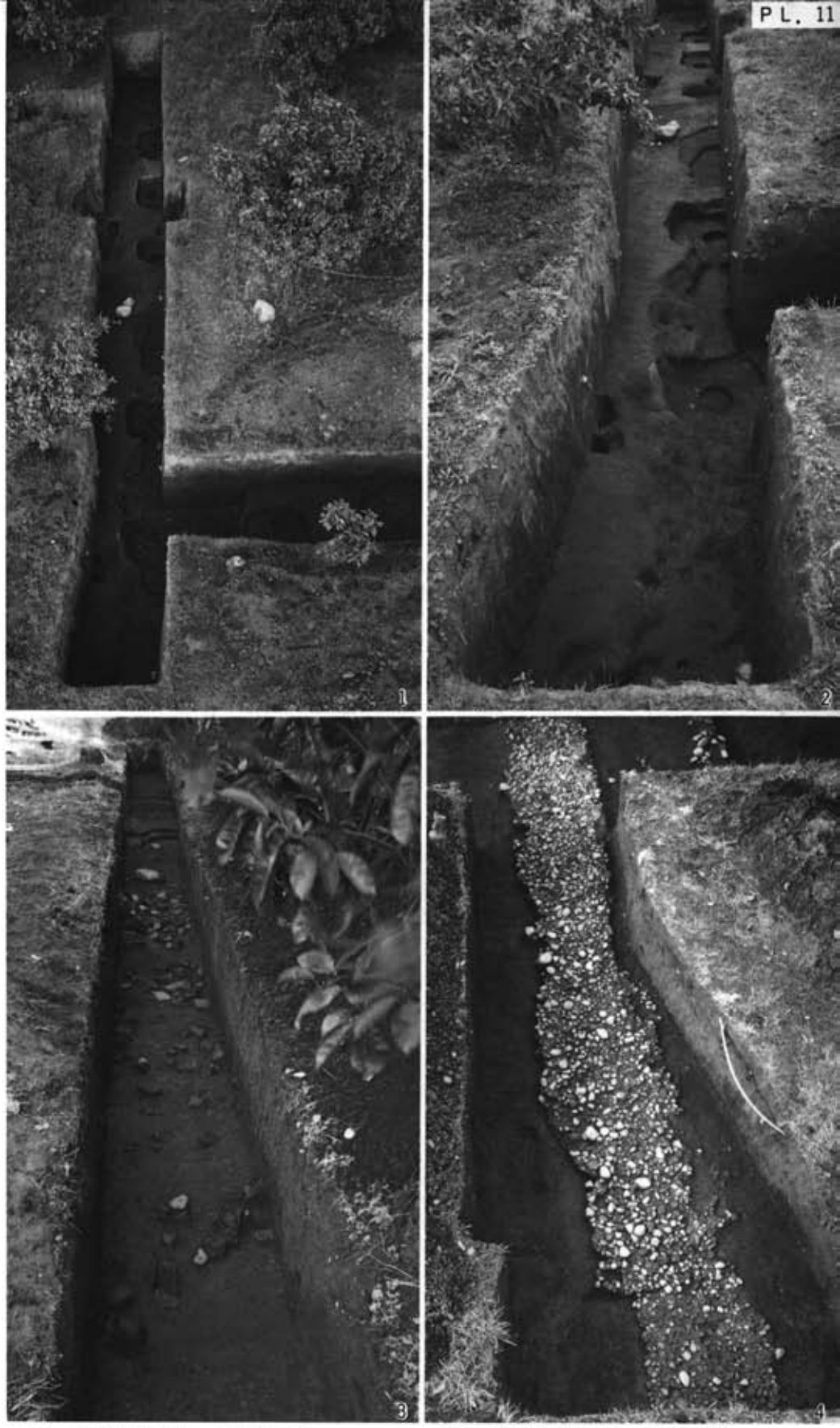
2．ＱＦ地区 16 発掘区
政庁後殿跡（ＳＢ 060）〈東から〉

1．ＱＦ地区 23 発掘区他
西側脇殿北棟（ＳＢ 095）
〈北から〉

2．ＱＦ地区 60 発掘区
西側脇殿南棟（ＳＢ 125）
〈南から〉

3．ＱＦ地区 60 発掘区
ＳＢ 125 建物跡と
ＳＢ 135・136 建物跡〈南から〉

4．ＱＦ地区 60 発掘区
ＳＢ 125 建物跡と
ＳＢ 135・136 建物跡〈西から〉



1．ＱＦ地区 48・58 発掘区
　ＳＢ 104 建物跡〈西から〉

2．ＱＦ地区 48・58 発掘区
　ＳＢ 104 建物跡〈西から〉

3．ＱＦ地区 41 発掘区〈西から〉

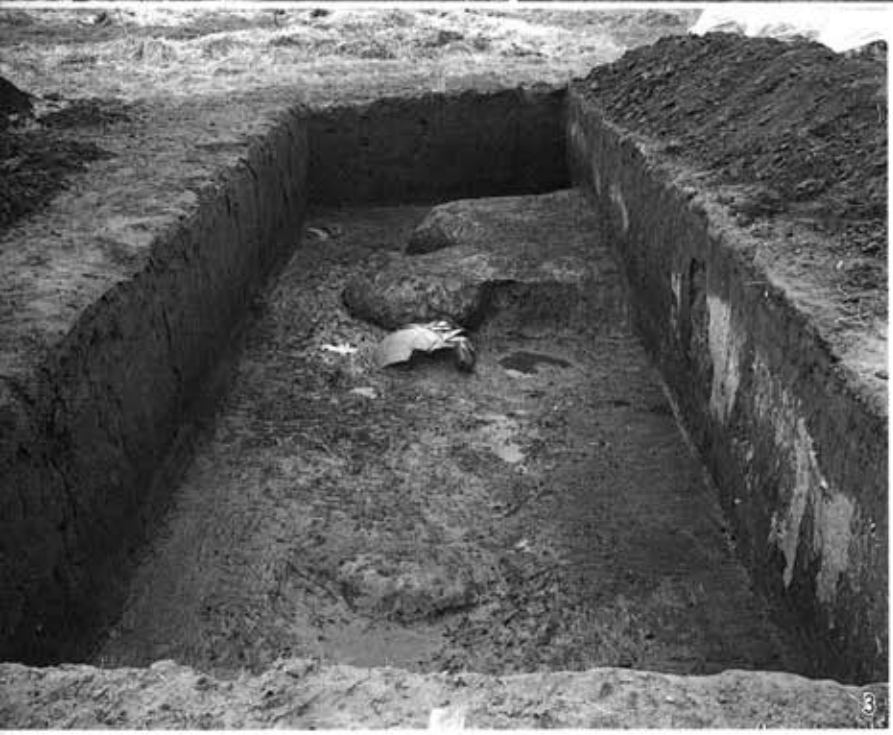
4．ＱＦ地区 46 発掘区
　ＳＸ 114 礫敷遺構〈南から〉

1．ＱＦ地区 51 発掘区
〈西から〉

2．ＱＦ地区 51 発掘区
〈北から〉

3．ＱＣ地区 04 発掘区
瓦塚〈北から〉

1．ＱＡ地区 11 発掘区
　ＳＢ 075 建物跡〈西から〉
2．ＱＡ地区 13 発掘区
　ＳＢ 076 建物跡〈北から〉



1．ＱＤ地区 01 発掘区〈北から〉
2．ＱＤ地区 03 発掘区〈南から〉
3．ＱＥ地区 63 発掘区〈東から〉

1．ＤＢ地区 09 発掘区
　ＳＢ 171 建物跡他〈東から〉
2．ＤＢ地区 09 発掘区
　ＳＢ 171 建物跡他〈南から〉
3．ＤＢ地区 09 発掘区
　ＳＡ 155 築地跡他〈西から〉

1．ＤＢ地区
03 発掘区　ＳＡ 139 柵跡
〈北から〉

2．ＤＢ地区 03 発掘区
ＳＢ 138 建物跡
〈東から〉

3．ＤＢ地区 07 発掘区
ＳＤ 141 溝跡
〈東から〉

1．DB地区 09 発掘区
SA 155 築地跡とSE 152 井戸跡
〈南から〉

2．DB地区 09 発掘区
SA 155 築地跡北断面〈南から〉

3．DB地区 12 発掘区〈東から〉

1．DD地区 01 発掘区
〈南から〉

2．DD地区 01 発掘区
SB 007 建物跡〈南から〉

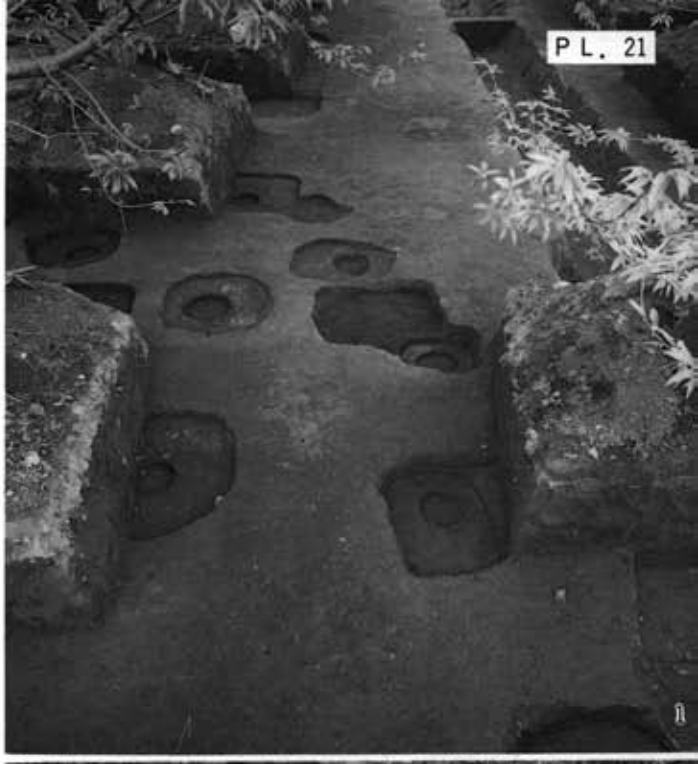
3．DD地区 01 発掘区
SB 007 建物跡〈西から〉

1．RB地区 25 発掘区
　SB 006 建物跡〈東から〉
2．RG地区 31 発掘区
　SB 001 建物跡〈西から〉
3．RG地区 31 発掘区
　SB 001 建物跡〈南から〉

1．RG地区 33 発掘区
SB 004 建物跡〈北から〉

2．RG地区 33 発掘区
北西隅柱穴群〈西から〉

3．RG地区 43・42 発掘区
SB 004 建物跡北妻柱穴
〈東から〉



1．RG地区33発掘区
　SB 004 建物跡西側柱列と
　SD 020 溝跡〈北から〉
2．RG地区33発掘区
　SD 020・021 溝跡〈南から〉
3．RG地区33発掘区
　SD 021 溝跡〈西から〉

1．RH地区 44 発掘区
〈西から〉

2．RH地区 45 発掘区
〈西から〉

3．RH地区 44 発掘区
SD 158 溝跡〈南から〉

4．RH地区 45 発掘区
SD 161 溝跡〈南から〉

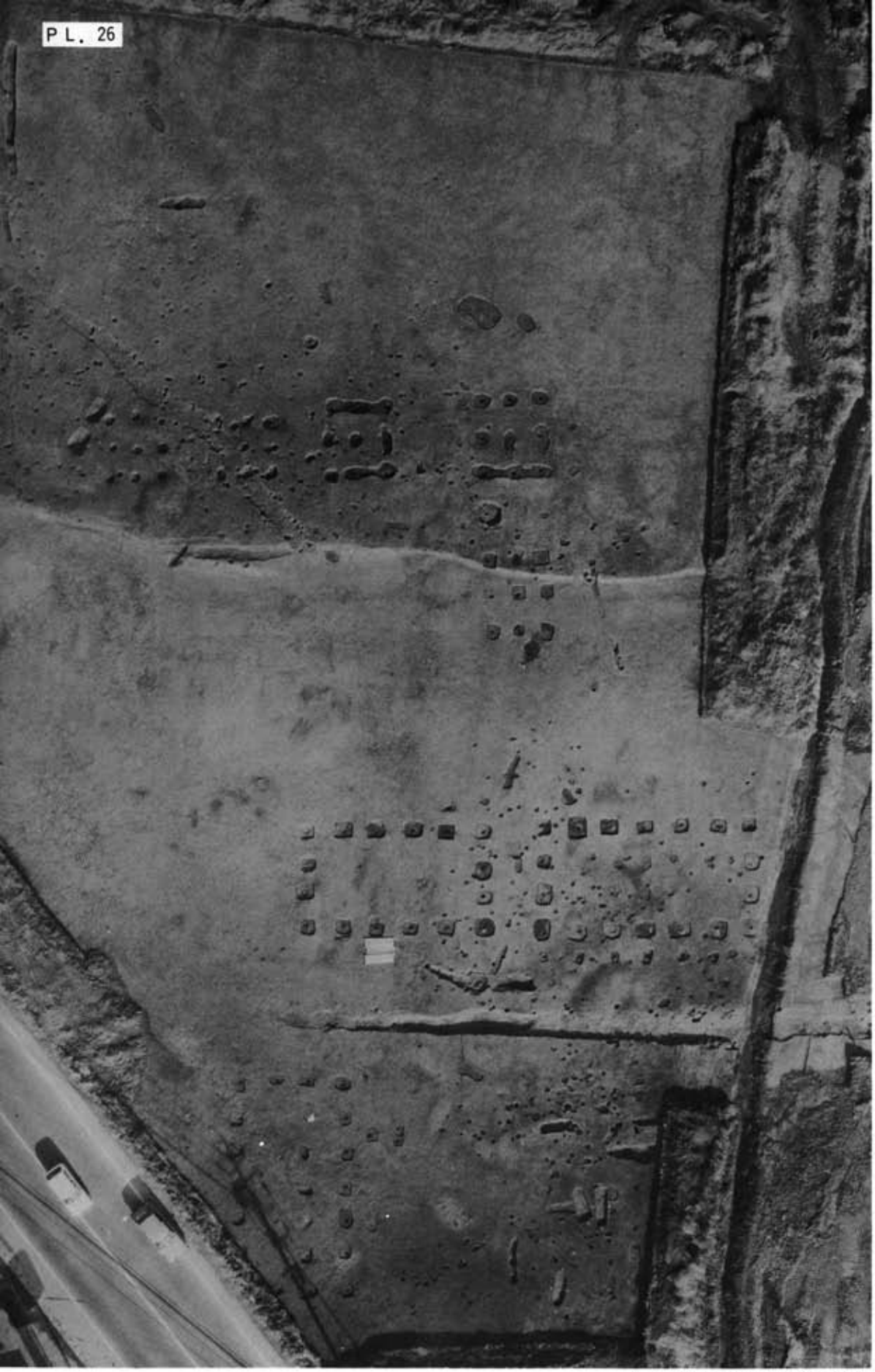
1．CB地区 02 発掘区
　SB 168 建物跡〈西から〉
2．CB地区 02 発掘区
　SB 168 建物跡〈北から〉
3．CB地区 03 発掘区
　SD 166 溝跡　〈北から〉

1．RA地区 37 発掘区　SD 003 溝跡〈東から〉

2．IF地区 07 発掘区〈東から〉

3．O地区 06～08 発掘区〈北から〉

惣座遺跡空中写真



久池井B遺跡II区空中写真

東山田一本杉遺跡空中写真

3

16

17

18

20

23

28

30

32

36

38

39

45

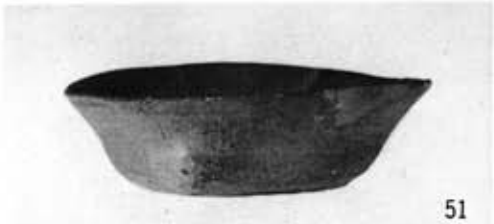
46

47

49

3.　QF 06
　　SD 067 出土
16～36.　QF 06 出土
38～49.　QF 06
　　SK 069 出土

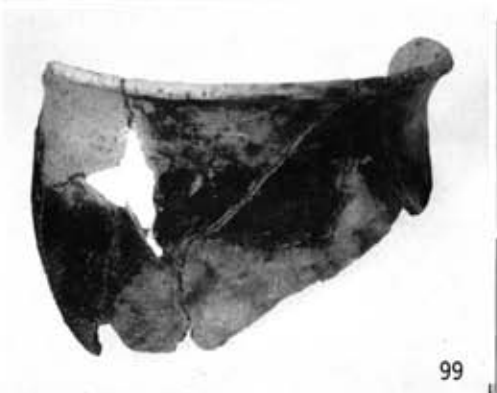
50


51

61

62

84


99

101

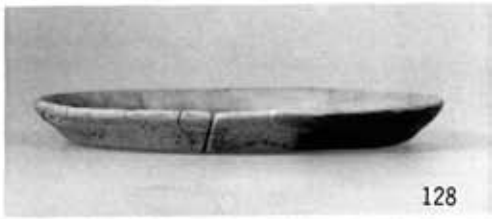
113

115

121

124

127


128

129

50～62.　Q F 06
　　S K 069出土
84・99.　Q F 16
　　S K 080出土
101.　Q F 16
　　S K 089出土
113.　Q F 30
　　S D 107出土
115.　Q F 31出土
121.　Q F 35出土
124.　Q F 35
　　S D 126出土
127～129.　Q F 36
　　S K 113出土

130

131

132

134

138

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

130～134. Q F 41
S D 110 出土

138～142. Q F 59
S D 132 出土

143. Q F 60
S B 135 出土

144. Q F 59
S D 134 出土

145～151. Q F 57
S D 112 出土

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

166

167

168

152～168. Q E 57
S D 112出土

169

170

171

173

177

178

179

180

181

182

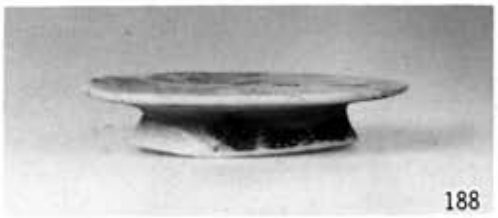
183

184

185

169～173. Q E 57
S D 112 出土
177～185. Q E 49
S X 125 出土

187


188

189

190

192

193

195

196

197

198

203

206

208

209

210

211

187～195.　Q E 53
　　S D 112 出土
196.　Q E 42
　　S D 112 出土
197・198.　Q E 52
　　S B 116 出土
203～211.　Q C 61
　　S X 123 出土

212

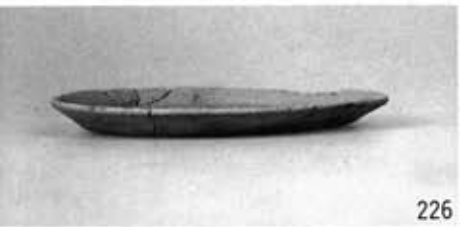
213

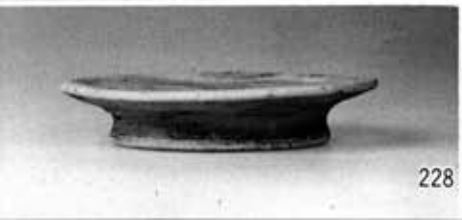
214

217

218

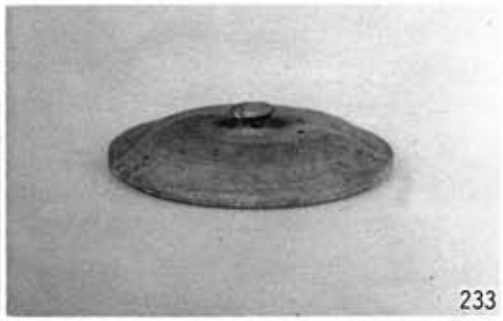
222

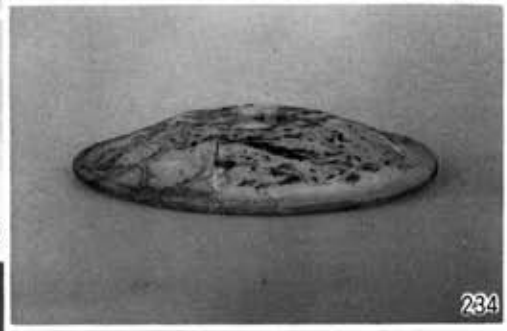

226


228

231

232


233


234

235

236

212～218. Q C 61
S X 123出土
222. Q C 61
S D 119出土
226. Q C 61
S X 124出土
228. Q C 61
S D 120出土
231～236. 久池井B
S K 314出土

239

240

241

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

239～252. 久池井B
SK 314 出土

255

257

258

261

263

264

265

266

268

271

272

274

275

276

255～276. 久池井B
SK 314 出土

282

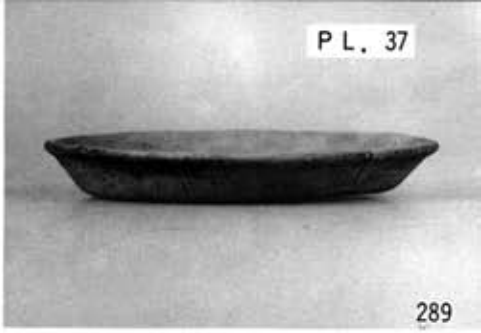
283

284

286

287

288


289

290

291

292

293

282～293. 久池井B
SK 315 出土

294

296

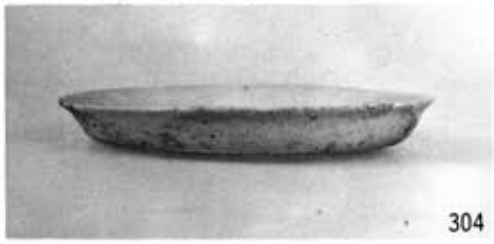
297

298

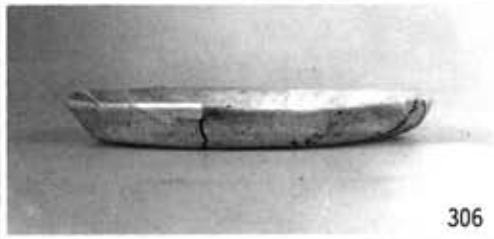
299

300

303


304

305

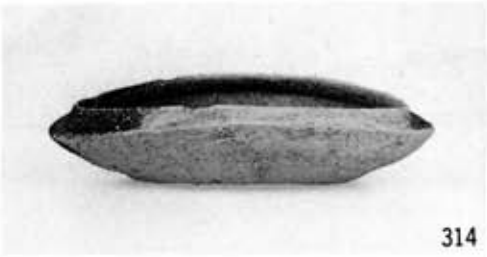

306

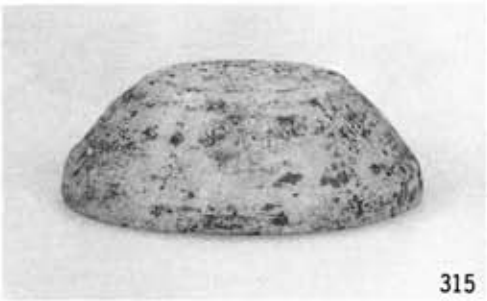
307

308

294～308．久池井B
SK 315 出土

313


314


315

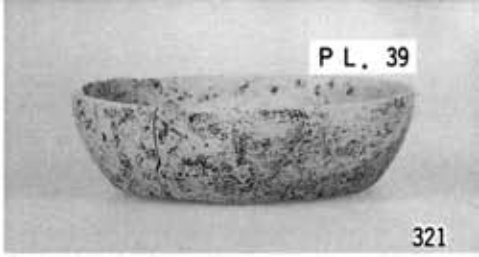
316

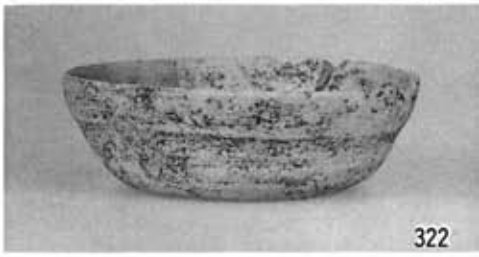
317

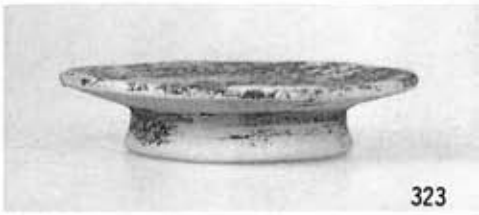
318

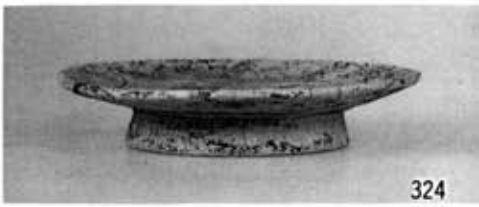
319

320

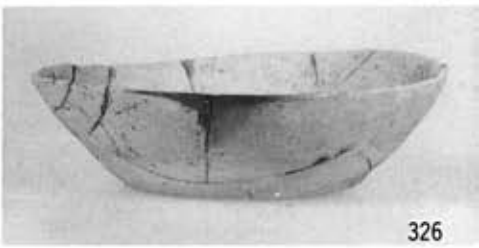

321


322


323


324

325


326

328

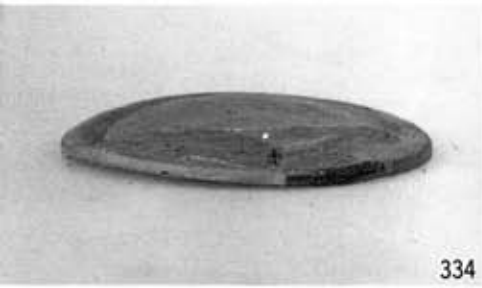
313～325. 久池井B
SP 369 出土
326. 久池井B
SP 372 出土
328. 久池井B
SD 360 出土

329

330

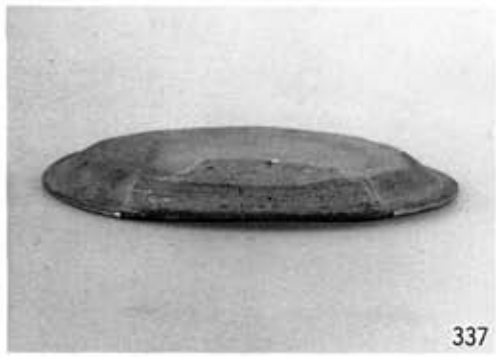
331

333


334

335

336


337

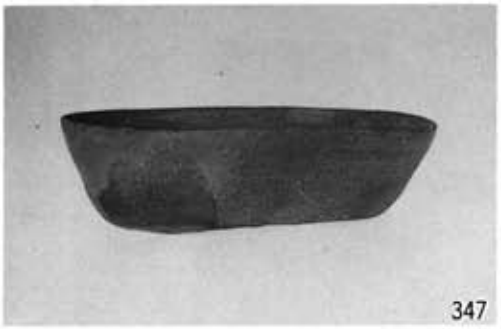
338

339

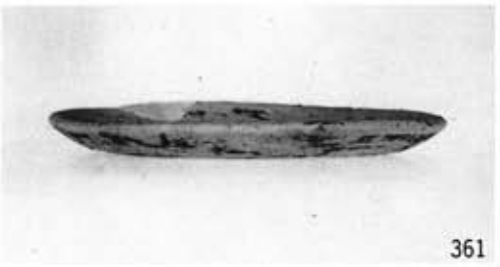
340

329.　久池井B
　　SE 359 出土
330.　久池井B
　　SD 329 出土
331.　久池井B
　　SD 343 出土
333.　久池井B
　　SE 302 出土
334～337.　久池井B
　　SK 313 出土
338～340.　久池井B
　　SK 318 出土

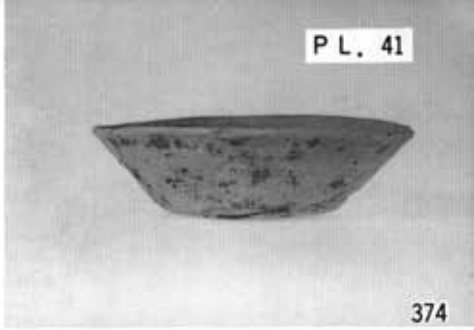
344


347

351


361

367
365


374

375

400

403

423

344～351. Q A 10 出土
361. Q A 13 出土
367・365. Q B 12 出土
374・375. Q B 15 出土
400・403. D B 07
S D 141 出土
423. D B 09
S E 152 出土

424

438

425

439

429

442

431

453

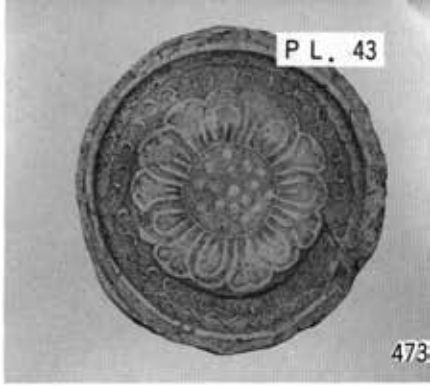
454

432

434

424・425. DD 01 出土
429～432. NC 05 出土
434. NC 06 出土
438・439. RG 40 出土
442. RG 33 出土
453・454. CB 03
SD 166 出土

468

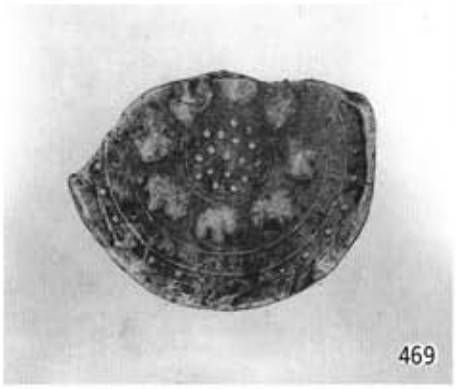

473

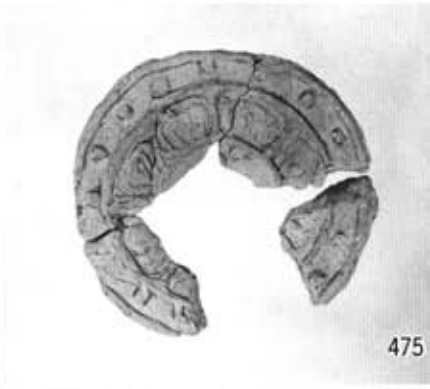
a

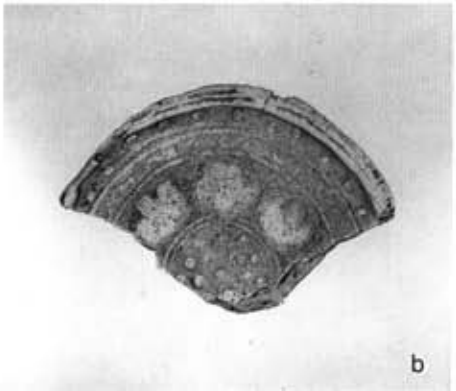
c

472

474


469


475


b

476

軒丸瓦

468（ＱＣ 61 出土）

a　（ＱＣ 04 瓦塚出土）

472（ＱＦ 26 出土）

469（ＱＣ 61，ＳＤ 119 出土）

b　（ＱＣ 61 出土）

473（ＱＣ 61 出土）

c　（ＱＣ 04 瓦塚出土）

474（ＱＦ 16，ＳＫ 080 出土）

475（ＱＦ 16 出土）

476（ＱＢ地区惣座遺跡出土）

466

478

a

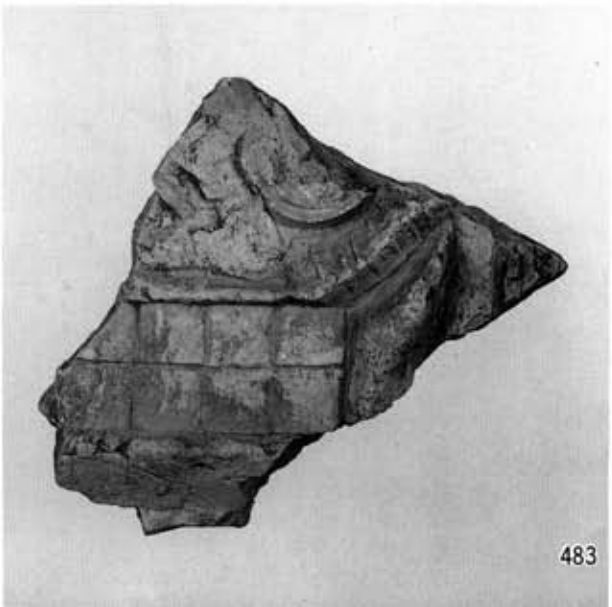
479

b

482

477

474



483

軒丸瓦

466(QC04瓦塚出土)

a (QF26出土)

b (QC04瓦塚出土)

474(QF16・SK080出土)

軒平瓦

478(QD03・SK064出土)

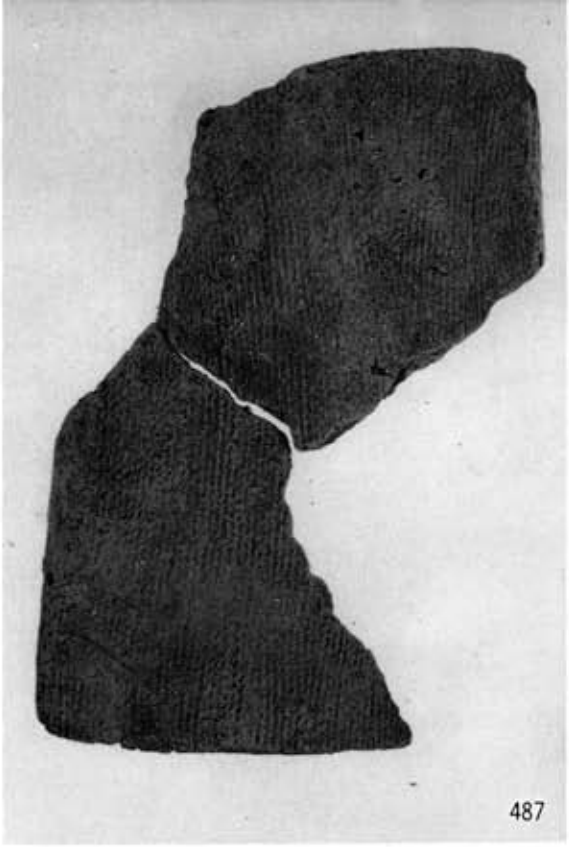
479(QC05・SD025出土)

482(QC04瓦塚出土)

477(QC04瓦塚出土)

鬼瓦

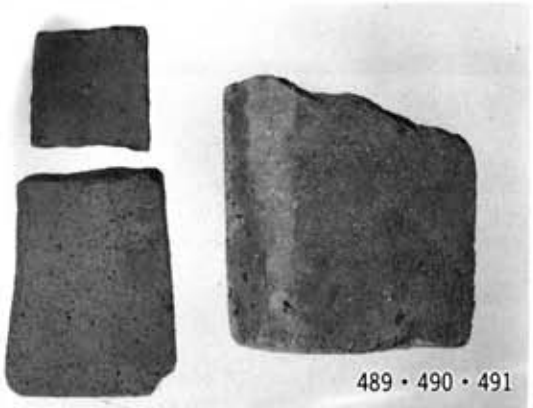
483(QF41出土)


487

484

485

488


489・490・491

486

平　瓦

487（ＱＦ16出土）

488（ＱＦ16出土）

道具瓦

489（ＱＦ16，ＳＫ080出土）

490（ＱＦ16，ＳＫ080出土）

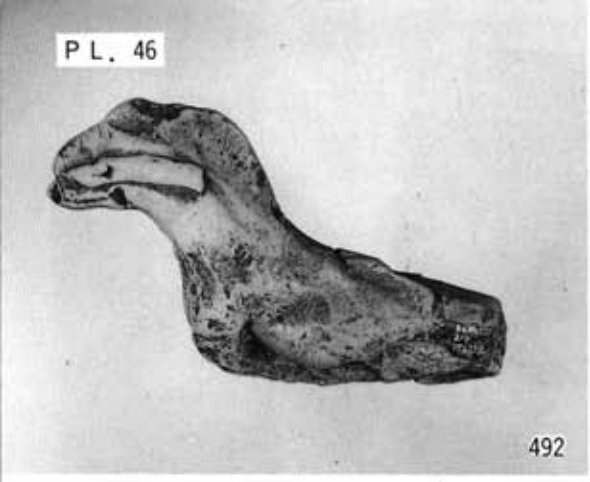
491（ＱＦ16，ＳＫ080出土）

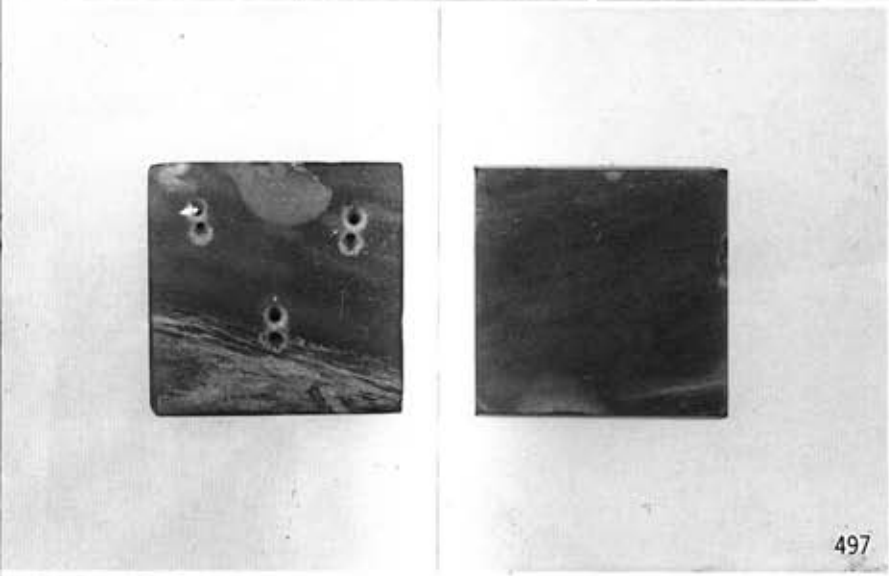
丸　瓦

484（ＱＦ18出土）

485（ＱＦ18出土）

486（ＱＦ18出土）





492. 土馬（RG 33 出土）

495. 鞴羽口（QA 13 出土）
494. 鞴羽口（QF 26 出土）
497. 石　銙（QC 35
SD　出土）

498. 石仏（DD地区出土）

499. 銅鏡（久池井B遺跡SP 370 出土）

佐賀県文化財調査報告書第78集

肥　前　国　府　跡　III

昭和60年 3 月25日　印刷
昭和60年 3 月30日　発行

発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内1丁目1番59号

印刷　株式会社 宮地印刷
佐賀市長瀬町11－20